

# 大伴遺跡発掘調査報告

1983

滋賀県教育委員会  
財團法人 滋賀県文化財保護協会

# 大伴遺跡発掘調査報告

1983

滋賀県教育委員会

財団 法人 滋賀県文化財保護協会

240.2  
M  
61

# 序

大津北郊の地は全国でも有数の遺跡密集地である。縄文時代、弥生時代、古墳時代の墓地や集落跡、白鳳～平安時代の寺院や瓦窯跡、そして、都であった大津京跡などが密集して在り、その上、現在住んでいる多くの建物とも重なり合っている。こうした所にバイパス建設が計画され、さまざまな角度からそのルートが決定されるのであるが、地下に埋もれた遺跡を完全に避けたルートを求めるることはきわめてむずかしい。

大伴遺跡は檜木原遺跡とは大川を隔てた北側にあって、現況は水田であったが檜木原遺跡の発掘調査中、この地に土器片の散布が認められ、遺跡であることが判明したものである。そして、西大津バイパス路線上に当るため現在は西南方に移転している大伴神社がその一画にあったので、これにちなんでこの遺跡を大伴遺跡と命名した。

このように本調査はルート決定後判明した遺跡で、事前に発掘調査して記録保存することになった。本報告書はその調査成果である。本調査は建設省が費用を負担し、滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会が実施した。

このような埋蔵文化財の調査は、その成果をただちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそうたやすいことではない。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによって、面的に、立体的にその地域の歴史を再構成し、広い見地から把握することによってわたしたちの祖先のこの地域における生きざまを知ることができるのである。この報告書がわたしたちの生活に何らかの役割りを果す一助となることを願ってやまない。

調査、報告書作成にあたっては、建設省滋賀国道工事事務所、(財)滋賀県文化財保護協会をはじめ、調査関係者の方々に大へんな御協力をいただいた。深謝の意を表したい。

昭和58年3月

滋賀県教育委員会文化財保護課  
課長 外池忠雄

# 目 次

序	
第1章 位置と歴史的環境	1
第2章 調査	6
1. 調査経過	6
2. 調査日誌（抄）	10
第3章 A地区	24
1. 遺構	24
(1) 上層遺構	24
(2) 下層遺構	25
2. 遺物	32
(1) 上層遺構出土遺物	32
(2) 下層遺構出土遺物	33
3. 小結	40
第4章 B地区	60
1. 遺構	60
2. 遺物	60
3. 小結	61
第5章 C地区	63
1. 遺構	63
2. 遺物	64
3. 小結	69
第6章 D地区	89
1. 遺構	89
2. 遺物	95
3. 小結	100
第7章 その他の遺物	118
1. 石製品	118
2. 金属製品	125
3. 土製品	126
4. 土馬	126
5. 伏見人形	132
第8章 結語	134

## 図版目次

1 位 置 大伴遺跡とその周辺	14 遺 構 1 SK 1
2 位 置 1 大伴遺跡遠望、前山を中心にして (東から)	2 SK 1
2 位 置 2 調査前の状況(南から)	15 遺 構 1 SK 109
3 位置遺構 1 調査前の状況(北から)	2 SK 128
3 位置遺構 2 A地区上層遺構(西から)	16 遺 構 1 SK 112
4 遺 構 1 A地区上層遺構(南から)	2 SK 112・骨出土状況
4 遺 構 2 SB 102	17 遺 構 1 C地区、SD 6 上層、SD 7 (北西から)
5 遺 構 1 A地区下層遺構(北西から)	2 C地区(西から)
5 遺 構 2 A地区下層遺構(南東から)	18 遺 構 1 C地区(東南から)
6 遺 構 1 A地区下層遺構(北から)	2 SD 6・SD 21(北から)
6 遺 構 2 A地区下層遺構(西から)	19 遺 構 1 SD 6 堰・SD 21(南から)
7 遺 構 1 SB 1	2 SD 6 堰(西から)
7 遺 構 2 SK 173屋外炉断面	20 遺 構 1 SD 21(西から)
8 遺 構 1 福王子17号墳遺物出土状況 (東から)	2 SD 21(西から)
8 遺 構 2 福王子17号墳遺物出土状況 (西から)	21 遺 構 1 SD 21(東から)
9 遺 構 1 福王子17号墳遺物出土状況 (南から)	2 SD 21・土器、石出土状況
9 遺 構 2 福王子17号墳遺物出土状況 (東から)	23 遺 構 1 SK 130・土器、石をとり除いた 状況
10. 遺 構 1 福王子17号墳床面(東から)	2 D地区上層遺構(東北から)
10. 遺 構 2 福王子17号墳床面および北側側壁 (南から)	24 遺 構 1 D地区上層遺構(南から)
11 遺 構 1 福王子17号墳側壁根石	2 SK 145・SK 146
11 遺 構 2 福王子17号墳側壁の構築状況	25 遺 構 1 D地区中層遺構(東から)
12 遺 構 1 福王子17号墳玄室杯出土状況	2 D地区中層遺構(東から)
12 遺 構 2 福王子17号墳玄室杯出土状況	26 遺 構 1 D地区下層遺構(北から)
13 遺 構 1 福王子17号墳玄室鉄器出土状況	27 遺 構 1 D地区下層遺構(北から)
13 遺 構 2 SK 113・SK 114	2 SK 157
	28 遺 構 1 SB 4 遺物出土状況

	2	SB 9・SB 155出土状況	2	土馬 (905)
	3	SB 4 遺物出土状況	43	遺 物 1 土馬 (906)
	4	SB 8・SB 150出土状況		2 土馬 (907)
	5	B地区（南西から）	44	遺 物 1 土馬 (907)・(911)
29	遺 構 1	E地区（西から）		2 土馬 (912)・(915)・(914)
	2	F地区（南東から）	45	遺 構 大伴遺跡地形図および遺構図
30	関連資料 1	大伴神社の現状	46	遺 構 遺構全体図
	2	福王子神社、本殿裏に納められた伏見人形	47	遺 構 A地区上層・D地区上層・下層実測図
31	関連資料 1	福王子神社、本殿裏に納められた伏見人形（狐）	48	遺 構 D地区中層住居跡実測図
	2	. 福王子神社、裏に納められた伏見人形（布袋）	49	遺 構 SB 1・SB 2・SB 3・SB 13実測図
32	遺 物 福王子17号墳出土遺物		50	遺 構 福王子17号墳実測図
33	遺 物 福王子17号墳出土遺物		51	遺 構 福王子17号墳遺物出土状況実測図
34	遺 物 福王子17号墳出土遺物		52	遺 構 SK 1・SK 108・SK 109・SK 112・SK 113・SK 114・SK 115・
35	遺 物 福王子17号墳出土遺物			SK 128・SK 130・SK 157実測図
	SK 128出土遺物		53	遺 構 SD 6・SD 21実測図
36	遺 物 SB 4 出土遺物		54	遺 構 SD 6 墓跡・SB 4・SB 8 遺物出土状況実測図
	SB 8 出土遺物			
37	遺 物 SB 4 出土遺物、SB 8 出土遺物、		55	遺物実測図 SB 1・福王子17号墳出土遺物
	SB 9 出土遺物		56	遺物実測図 福王子17号墳出土遺物
	SK 1 出土遺物		57	遺物実測図 福王子17号墳出土遺物
38	遺 物 SK 1 出土遺物、SK 125出土遺物、		58	遺物実測図 福王子17号墳出土遺物
	SK 116出土遺物		59	遺物実測図 SK 1・SK 101・SK 102・SK 108・SK 109 出土遺物
	SK 157出土遺物		60	遺物実測図 SK 109・SK 112・SK 113・SK 116・SK 125・SK 126・SK 128・
39	遺 物 SD 2 出土遺物、SD 7 出土遺物、			SD 1・SD 12出土遺物
	SK 157出土遺物			
	包含層出土遺物			
40	遺 物 1 石鏃		61	遺物実測図 SK 128・SK 129・SD 2・SB 2・
	2. 石匙・磨製石鏃			SK 130・SD 4 出土遺物
41	遺 物 1 石庖丁、石斧		62	遺物実測図 SK 130・SD 6 出土遺物
	2 磨製石剣、石斧、砥石		63	遺物実測図 SD 6 出土遺物
42	遺 物 1 砥石、叩石、石鎧帶		64	遺物実測図 SD 6・SD 7 出土遺物

- 65 遺物実測図 SD 7・SD 15・SD 21・SB 3  
出土遺物
- 66 遺物実測図 SB 4 出土遺物
- 67 遺物実測図 SB 4・SB 5・SB 6・SB 7・S  
B 8・SB 9出土遺物
- 68 遺物実測図 SB 8 出土遺物
- 69 遺物実測図 SB 9・SB 107・SK 143・SK 144・  
SK 145出土遺物
- 70 遺物実測図 SK 145・SK 146・SK 157・SK  
160・SK 161出土遺物
- 71 遺物実測図 包含層出土遺物
- 72 遺物実測図 包含層出土遺物
- 73 遺物実測図 石器（石匙・石鏃・叩石・石斧）
- 74 遺物実測図 石器（石斧・石劍・石庖丁）
- 75 遺物実測図 石器（砥石）
- 76 遺物実測図 土馬
- 77 遺物実測図 土馬・伏見人形

## 挿 図 目 次

1. 大伴遺跡および周辺の遺跡	2
2. 大伴遺跡地形図および地区割図	7
3. D地区(D⑩)調査状況	13
4. C地区(C⑤・⑦)調査状況	14
5. C地区調査状況	15
6. D地区調査状況	18
7. 福王子17号墳出土遺物位置図	28
8. A地区柱穴出土遺物実測図	46
9. 石製品・金属製品・土製品実測図	125
10. 土馬共伴土器実測図	130
11. 南滋賀廃寺周辺の地割と河道	135

## 表 目 次

表1 福王子17号墳出土釘計測表	37
表2 A地区ピット内出土遺物観察表	45
表3 A地区出土遺物観察表	47
表4 B地区出土遺物観察表	62
表5 C地区出土遺物観察表	71
表6 D地区出土遺物観察表・包含層出土遺物観察表	103
表7 石鏸計測表	120
表8 石斧計測表	122
表9 石庖丁計測表	123
表10 砥石計測表	124
表11 土塙計測表	139

# 例　　言

1. 本書は、建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴う大伴遺跡発掘調査報告書である。
2. 本調査は、建設省からの委託により滋賀県教育委員会および財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。
3. 本書は、昭和55年度、56年度に発掘調査を実施し、昭和56年度、57年度に整理した成果である。
4. 調査および整理・報告は文化財保護課技師・林博通が担当した。
5. 現地調査および整理・報告書作成は次の構成で実施した。

## 昭和55年度

文化財保護課技師　林　博　通

県埋蔵文化財センター技師　葛野　泰　樹

(財)滋賀県文化財保護協会嘱託調査員　山口　政　志

佛教大学学生：吉谷芳幸、岩間信幸、三宅　弘(大学院)、中江次浩、東　幸一、高田和宏、長畠恵子、井上　寛子、戸田　進、稻垣正宏、今川栄司

京都産業大学学生：山中仁志

近畿大学O.B.：北川基寛

## 昭和56年度

文化財保護課主査　林　博　通

(財)滋賀県文化財保護協会嘱託調査員　山口　政　志

佛教大学学生：吉谷芳幸、岩間信幸、三宅　弘(大学院)、中江次浩、東　幸一、高田和宏、長畠恵子、井上　寛子、戸田　進、O.B.稻垣正宏

京都産業大学O.B.：山中仁志

## 昭和56年度

文化財保護課主査　林　博　通

佛教大学学生：吉谷芳幸、岩間信幸、三宅　弘(大学院)、中江次浩、戸田　進、高田和宏、赤松寿子、服部　喜和子、森下直子、長畠恵子、山田惠津子、宮部昌代、O.B.稻垣正宏

橘女子大学学生：上田佳子

京都産業大学O.B.：山中仁志

滋賀大学学生：武田佳文

## 昭和57年度

文化財保護課主査　林　博　通

(財)滋賀県文化財保護協会技師　吉谷　芳　幸

　"　　技師　三宅　弘

　"　　嘱託調査員　田路　正　幸

　"　　嘱託調査員　仲川　靖

佛教大学学生：岩間信幸(大学院)、赤松寿子、高田和宏、森下直子、宮部昌代、O.B.稻垣正宏、服部喜和子

橋女子大学学生：上田佳子

滋賀大学O.B.：武田佳文

関西大学学生：水嶋由美

6. 本書の編集および執筆は、林博通、吉谷芳幸、三宅弘、岩間信幸が共同して当り、文章の末尾にそれぞれ執筆者名を付した。

なお、特に報告書の作成にあたっては服部喜和子、森下直子の尽力があった。

7. 本報告書で使用した方位は磁針方位に基づく。標高は東京湾の平均海面を基準としている。

8. 本事業の事務局は次のとおりである。

#### 昭和55年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	沢 悠光
" 課長補佐	古田 俊郎
" 技術補佐兼埋文係長	高橋 曾一
" 管理係長	林 健次郎

(財)滋賀県文化財保護協会

事務局長	江波弥太郎
事務職員	松本暢弘、泉 良子

#### 昭和56年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	外池 忠雄
" 課長補佐	藤本 英策
" 埋文係長	丸山 竜平
" 管理係長	林 健次郎

(財)滋賀県文化財保護協会

事務局長	江波弥太郎
事務職員	松本暢弘、泉 良子

#### 昭和57年度

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	外池 忠雄
" 課長補佐	藤本 英策
" 埋文係長	丸山 竜平
" 管理係長	林 健次郎

(財)滋賀県文化財保護協会

事務局長	江波弥太郎
事務職員	松本暢弘、泉 良子

# 第1章 位置と歴史的環境

大津市域の北方は、急峻な比叡山系から流出する大小さまざまの河川が狭隘な平地に注ぎ込んでいる。その結果、堆積された土砂が、扇状地となって各所に形成される。それらの扇状地は北方より四ツ谷川・際川（大川）・柳川等の沖積作用により形成されるが、小河川によってさらに浸食されている。その扇状地上に北から穴太・滋賀里・南滋賀・錦織の各集落が立地し、これらの小丘陵上は縄文時代から現在まで人々の生活の場であったことがうかがわれる。

大伴遺跡は南滋賀集落の西方に位置し、際川の上流である大川が形成する扇状地の扇頂部分にあたる。

調査地区は標高127mから140mを測る大川の北岸一帯であり、段々の水田として利用されていた。

調査地域は立地の相違によってA～Dの4地区に分けた。A地区は福王子17号墳を中心とし、B地区は河川跡と土塙、C地区は河川跡と住居跡、D地区は住居跡がそれぞれ中心となっている。時期は弥生時代～鎌倉時代におよんでいる。

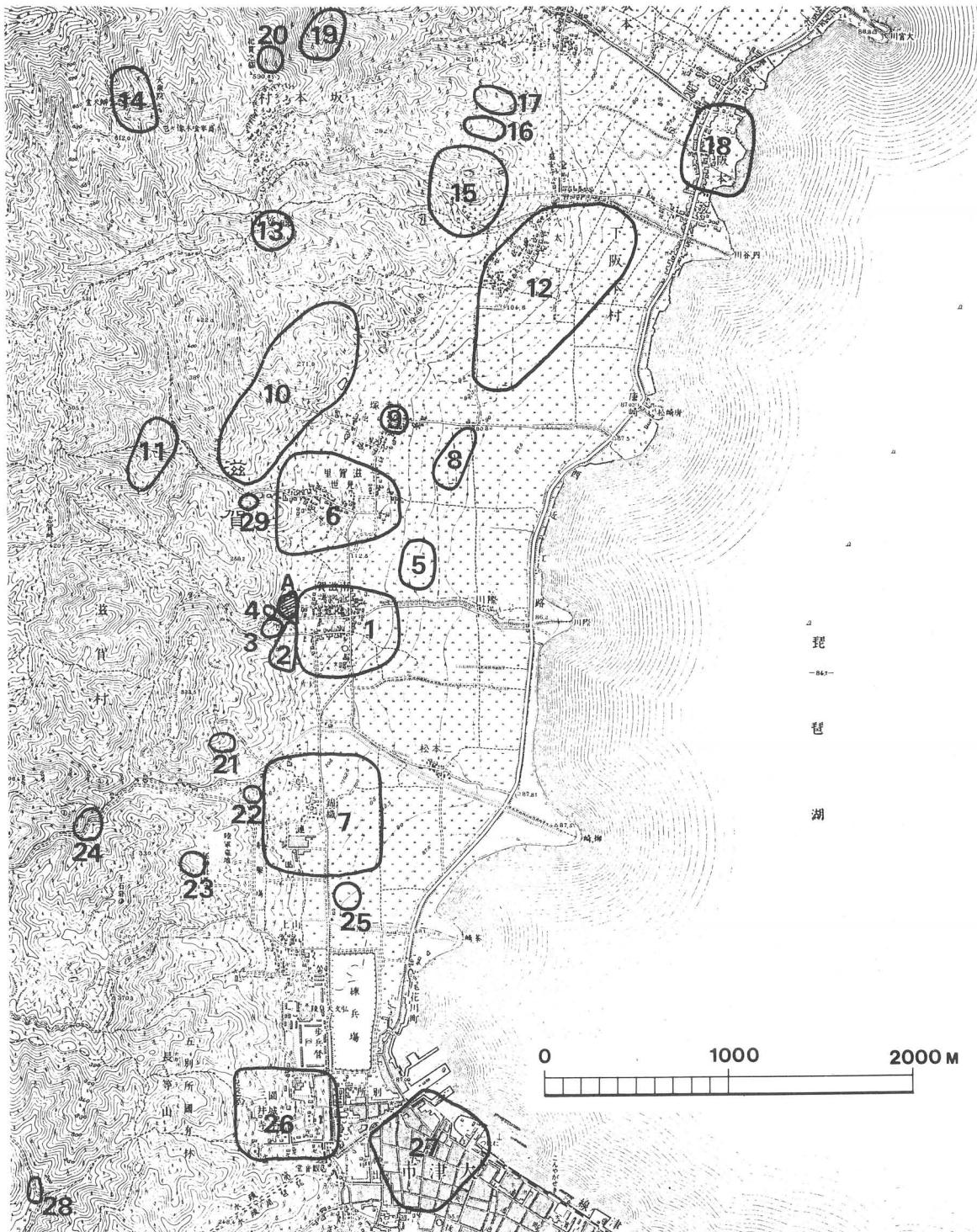
周辺の遺跡についてながめてみると、遺構は伴わないが縄文時代早期の土器が出土している北大津遺跡がある<sup>①</sup>。さらに他の場所でも縄文時代の遺物が発見されているが、いずれも偶然に発見されたものであり、遺構を伴うものは縄文時代晚期の滋賀里遺跡をまたねばならない。

滋賀里遺跡は、墓跡と貝塚が発見され、貝塚の下層より出土した多量の木器から付近に湿地を利用した原材の貯木場を想定している<sup>②</sup>。

縄文時代は以上のように発掘された遺跡数も少なく具体像を示すにはいたっていない。

弥生時代には後期の遺跡数が増加するが、前・中期の遺跡はあまり知られていない。前期の土器は、大津市錦織・皇子が丘地区の錦織遺跡・南滋賀遺跡・滋賀里遺跡などで出土している。

中期では、南滋賀遺跡があげられる。大伴遺跡の南東約300mの丘陵緩斜面に立地し、方形周溝墓や土塙墓が検出されている<sup>⑥</sup>。住居跡は発見されていないが、この付近に集落が営まれていた可能性は十分に考えられる。滋賀里遺跡や錦織遺跡などで中期～後期の土器を多量に出土していることから、弥生時代中期以降に遺跡数の増大と規模の拡大がみられる。またこの時期に近江型



- A 大伴遺跡  
 1南滋賀遺跡・南滋賀廃寺  
 2榎木原遺跡  
 3福王子群集墳  
 4大伴群集墳  
 5滋賀里遺跡B地点（縄文）  
 6滋賀里遺跡  
 7錦織遺跡（近江大津宮）  
 8滋賀里遺跡A地点（弥生～古墳）  
 9赤塚古墳

- 10滋賀里群集墳  
 11崇福寺跡  
 12穴太遺跡  
 13壺笠山城跡  
 14無動寺谷遺跡  
 15穴太群集墳  
 16塚穴群集墳  
 17天神山群集墳  
 18坂本城跡  
 19天神山遺跡

- 20裳立山遺跡  
 21宇佐山群集墳  
 22皇子山古墳群  
 23部屋ヶ谷遺跡  
 24水車谷遺跡  
 25北大津遺跡  
 26圓城寺遺跡  
 27大津城跡  
 28藤尾遺跡  
 29長尾遺跡

挿図1 大伴遺跡及び周辺の遺跡

の裏が作成され始めることから、弥生時代中期の段階に弥生文化の定着を考えてよいと思われる。

弥生時代後期になると北大津遺跡<sup>⑨</sup>、宇佐山遺跡<sup>⑩</sup>、滋賀里遺跡<sup>⑪</sup>などに遺物を伴った遺構がみられる。また、大伴遺跡の大川を挟んだ南に位置する榎木原遺跡では、弥生時代中期から古墳時代初頭にいたる住居跡が数棟検出されている<sup>⑫</sup>。この時期になると大津市北部の全域に遺跡がみられるようになる。

古墳時代に入ると、4世紀後半期の古墳とされる皇子山1号墳が錦織地区に営まれている<sup>⑬</sup>。皇子山1号墳は近江最古の古墳といわれている前方後方墳であり、弥生時代中期以降に遺跡数が増大している錦織地区では、弥生時代から地域政権が順調な発展をとげて古墳時代に移行したものと思われる。

後期群集墳では、南滋賀には福王子群集墳と大川を隔てた対岸の大伴群集墳が所在している。

福王子群集墳は榎木原遺跡の北西に隣接し、福王子神社の社地内に14基が確認されている。昭和39年にはそのうちの4基が発掘調査され、方形プランをもつ横穴式石室は持ち送り式の築造法が用いられていた。この石室築造法は滋賀里から穴太にかけてみられる石室と同型式のものであった。福王子群集墳の築造時期は6世紀中期後半頃から後期と推定されている<sup>⑭</sup>。

大伴群集墳は、現在4基が確認されている。発掘調査が行われていないので詳細はわからないが、福王子群集墳と同様、谷口に築造された古墳である。

その他には、榎木原遺跡の発掘調査時に封土を失った古墳が2基発見されている。福王子15号墳と名付けられたものは、同8号墳と同程度の規模であり、持ち送り式の築造法が用いられていた。福王子16号墳は、同6号墳に最も類似し、15号墳と同様の石室築造法がとられていた。築造時期は15号墳が6世紀後半の中葉から後葉で、追葬を6世紀第3四半期（榎木原編年のII類3段階）においている<sup>⑮</sup>。

南滋賀の地には、6世紀後半から7世紀初頭にかけて集中的に古墳が営まれ、錦織地区との地域差が明確にあらわれている。

『日本書紀』によると667年に近江遷都が行われたが、672年の壬申の乱により、大津京は滅んでしまった。そのために所在地は明らかでなく、錦織・南滋賀・滋賀里などが候補地としてあげられた。滋賀里と南滋賀は特に有力な候補地とされていたが、錦織地区で昭和49年12月に大津宮の一角と考えられる掘立柱建物跡が発見され、さらに翌々年の昭和51年以降、錦織地区の各所で大津京関係の掘立柱列が相次いで発見されるによんで、同地区に所在したと判断されるにいたった<sup>⑯</sup>。

白鳳期の寺院としては、昭和3年・4年と15年・16年に発掘調査が行われた南滋賀廃寺と崇福

寺跡があり、また、穴太には穴太廃寺がある。

白鳳時代～平安時代には、榎木原遺跡と長尾遺跡・穴太遺跡に瓦窯跡がみられる。

榎木原遺跡は、昭和49年の第1次調査において3基、昭和52年～53年の第3次調査において7基の計10基の瓦窯が発見されている。構築時期は白鳳時代～平安時代におよび、白鳳期の登窯5基、奈良時代末～平安時代の平窯が5基みられた。近くには工房跡も検出されている。南滋賀廃寺や一部は崇福寺にも瓦の供給が行われている<sup>⑯</sup>。

長尾遺跡は百穴古墳群の谷川をはさんだ真南に構築されている。丘陵の北斜面を利用した平窯が1基確認された。きわめて遺存度が高いもので、平安時代前期と考えられている。また、瓦窯と同時期の梵鐘を鋳造した遺構も検出されている<sup>⑰</sup>。

南滋賀の地には、大川を挟んで南に福王子神社、北に大伴黒主神社が鎮座している。『近江輿地志略』補注によれば、福王子神社は天慶9年（946）、大伴黒主神社は天暦元年（947）の創祀とある。<sup>㉑</sup>両社の明確な建立時期は不明であるが、当161号バイパス建設のために西南に移転した大伴黒主神社の跡地からは、弥生時代以降の祭祀的な色彩の濃い遺構や遺物が見られ、それが当遺跡の性格を知るうえで重要なことは確実である。

福王子神社は紀貫之を、大伴黒主神社は大伴黒主をそれぞれ祭神としている。両者ともに平安時代を代表する歌人であり、貫之の墓は比叡山中にある。大伴黒主は園城寺の寺主明神の神職であり、滋賀郡の大領となり、従八位上に叙せられている。

当遺跡の西の前山は、神奈備型をしており、大伴黒主神社跡地の包含層から出土した土馬の存在は神社創建以前の当地の状況を想起させるものがある。

鎌倉時代以降になると、南滋賀の地においても目立った遺構が発見されず、当遺跡でも少数の土塙と河川跡がみられるばかりである。B・C地区を流れる河川跡は鎌倉時代に埋没したもので、大川の旧流路であったと考えられるが、それについては結語にゆずりたい。

平安時代まで当地にみられた顕著な遺構は、鎌倉時代以後はほとんど姿をあらわさなくなる。それは、南滋賀廃寺の衰退と何らかの関係があるかもしれない。しかし、全く消失してしまったわけではないことは、検出された少数の遺構と包含層から出土している多量の土器が如実に示している。

（三宅 弘）

## 註

① 中西常雄『北大津の変貌』 昭和54年

② 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会 昭和48年）

③ 林博通「近江南部における前期弥生式土器」（『近江地方史研究』第2号 近江地方史研究会 昭和50年）

- ④ 田辺昭三『大津市南滋賀遺跡調査概報』（大津市教育委員会 昭和33年）
- ⑤ 註②、前掲書
- ⑥ 註④、前掲書
- ⑦ 註②、前掲書
- ⑧ 肥後和男「大津京址の研究－補遺」（『滋賀県史蹟調査報告』第3冊 昭和6年）
- ⑨ 註①、前掲書
- ⑩ 山崎秀二「宇佐山遺跡出土土器について」（『近江』第5号 近江考古学研究会 昭和49年）
- ⑪ 註②、前掲書
- ⑫ 林博通・葛野泰樹ほか『橿木原遺跡発掘調査報告III』（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 昭和56年）
- ⑬ 林紀昭ほか「皇子山古墳群」（『大津市文化財調査報告書』（2） 大津市教育委員会 昭和49年）
- ⑭ 水野正好・丸山竜平ほか『滋賀県文化財調査報告書』第4冊（滋賀県教育委員会 昭和45年）
- ⑮ 註⑭、前掲書
- ⑯ 註⑫、前掲書
- ⑰ 林博通『さざなみの都、大津京』（サンブライト出版 昭和53年）
- ⑱ 註⑫、前掲書
- ⑲ 註⑫、前掲書
- ⑳ 宇野健一編『新註近江輿地志略』全（藤本弘文堂 昭和51年）

## 第2章 調査

### 1. 調査経過

本調査地域の地区割りは、南方に大川をはさんで接する榎木原遺跡の基準・割り付け方法を踏襲する。榎木原遺跡では道路建設用の杭No.7を基準点とし、それとNo.9 + 15,982とを結んだ線を基準線として30m方眼に割りつけ大区とし、東西にアルファベットを南北に数字を付して大区をその交点で呼称した。ただし、南北の数字の付しかたについては、榎木原遺跡で大川より南へ1、2、3……とアラビア数字を使用したのに対して、当遺跡ではその1区を境に北へI、II、III、……とローマ数字を使用したが、南隅には榎木原遺跡割りつけの1区に含まれる区域がある。次に大区をさらに3m方眼に区割して小区とし、北西隅から南に平行式に番号を付した。

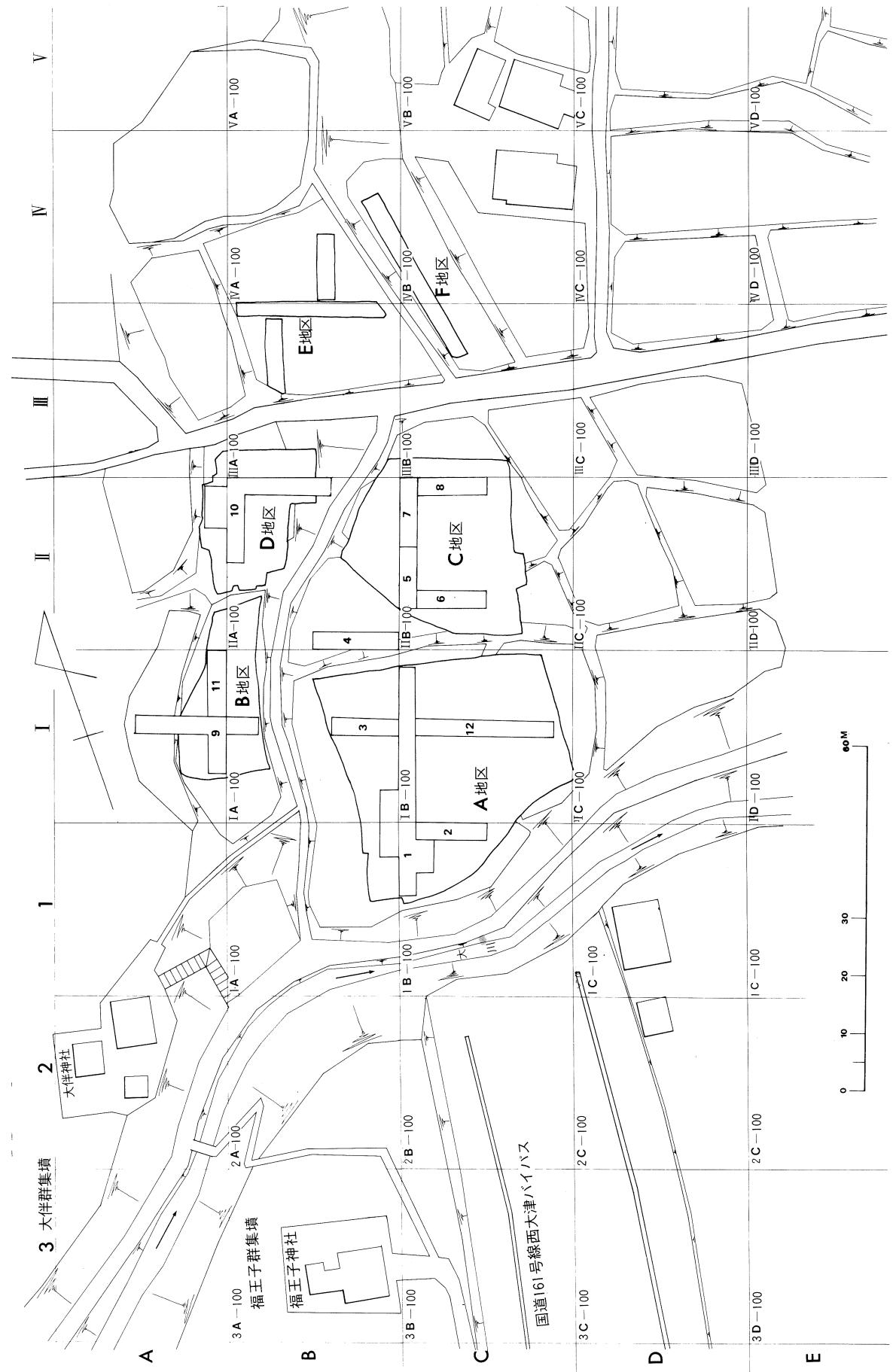
調査期間は1980年5月から翌年6月におよび、対象地域は地形の変化に応じて後に拡張され、A～D地区に呼称される。A～C地区はたがいに段差をもつ現水田であり、D地区はほぼ西半区が旧大伴神社の敷地内にあたる。

発掘調査はまず小区に相当する幅3mのトレンチを南北に、またそれに直交したトレンチを設定する試掘段階から始められ、遺構の検出状況によって隨時拡張された区域もある。最終的には、遺構の検出をみないままに地山に達したIII C区以北と、II C区の④トレンチを除いて、地形的に可能な限りの全面拡張がなされ、A～D地区の4地区の発掘区にわけられる。

地層は全般に北東に傾き、耕作土・床土下には砂礫を含む砂層および砂質土層が不安定に薄く堆積することが多く、さらに下層には安定して水平にのびる灰色の粘質土層がA～C地区に広範囲に拡がるが、これは旧水田層と思われる。本調査で確認した遺構はさらに下層に存在する。以下、全面拡張の地区ごとに調査経過を概述する。なお、調査日誌抄では、試掘トレンチを設定順に統一番号化し、頭に各々該当する全面拡張区を付して仮称した。

#### (1) A地区

当区は調査地域内の南東部にあたる。西部のB・D地区とは現大伴神社への参道にもなる農道



挿図2 大伴遺跡地形図及び地区割図

にわけられ、B地区の水田よりレベルが約5m低く、北部に隣接するC地区より全体に高い。当区自体もさらに4段にわかれる水田であるが、遺構面直上でも地層が東西に大きく段差をもって2分される。遺構は全体で掘立柱建物6棟、竪穴住居跡1棟、土塙30基、河川跡および溝7条、横穴式石室墳1基などである。西半区は2層の遺構面をもち、上層では水田床土下の砂質土層下に、表土下40~50cmで掘立柱建物2棟(SB101・102)、河川跡SD1、土塙群が検出される。掘立柱建物はともにほぼ磁北方向に主軸をもつ総柱建物で、SB101は3間×3間ですべて柱根跡が確認される。SB102は3間×5間で下層の河川跡SD2の覆土をベースにする。両遺構の覆土からは須恵器・土師器細片とともに平安時代の綠釉陶器片が出土する。SD1からは鎌倉時代の土器が出土する。土塙群はその性格を求めてくるが、SK101は平安時代、SK102は奈良時代、SK105は古墳時代、SK106は古墳時代および平安時代の土器がそれぞれ出土する。下層遺構面は地山直上の淡褐色砂質土層で、掘立柱建物4棟、河川跡SD2、溝SD3、土塙群が検出される。多数のピット群はSB103~106まで4棟にまとまり、古墳時代後期から平安時代までの土器が出土する。A地区西半区のほぼ北半近くを東西に横切って北東に注ぎこむ大河川SD2からは、6世紀中ごろの須恵器短頸壺の完形品が出土する。土塙の中でも注目されるのはSK1で、6世紀後半から7世紀前半にかけての土師器片が合せ口の状態で検出される甕棺墓である。SK109は、1辺約4mの方形状を呈し、近江型の土師器口頸片、須恵器杯身片などの6世紀代の土器が出土する。SD2の南東肩に検出されるSK128は、部分的に焼ける小石群に混って6世紀後半から7世紀前半にあたる土師器甕大形片と縄文土器片が出土し、土塙墓の可能性も考えられる。また西隅中央のSK125は、6世紀中ごろから後半ごろの須恵器提瓶の完形品が出土する。西半区の地山面は、最も高い北西隅で表土下約60cmにみえ、その地質はD地区西隅に露出していた白褐色砂質の花崗岩バイラン層と同質である。

下段にあたる東半区では、横穴式石室1基、竪穴住居跡SB1、土塙群、溝SD12がある。石室は、A地区の全面拡張時に地山面で検出され、上層の搅乱や石組の破壊状況にもかかわらず、後章で詳述されるように多量の完形副葬品の出土をみた。ところで、当区では、試掘トレンチA③にて黒灰色砂質土層が検出されており、全面拡張によってそれが中央から南に拡がり、茶褐色砂質土層と斑入する。石室はそれを切りこんで構築されており、同層は遺物が出土せず地山層と判断される。北東部に集まる土塙SK112~115は、試掘トレンチA⑫の部分拡張時に検出され、各々に古墳時代の土師器片が出土し、なかでもSK112は、骨が出土する。次に性格があきらかな遺跡に竪穴住居跡SB1がある。それは北東隅に位置し、竪穴住居跡の東半部が調査対象区外にあり、西半部のうちの北半が、段落する現水田に削平されて南西4半部のみ確認される。

柱穴1個、焼土1箇所が検出され、畿内第III～IV様式の弥生土器甕片、扁平片刃石斧が出土する。住居跡に類似するものに、支柱石状の棒石を伴う焼土をもつSK173が土塙群の西にある。SK116・117を切るSD12は、平安時代の須恵器鉢片、6世紀前半の須恵器杯身片、曲物の底板片が出土する。

### (2) B 地 区

A地区より一段高い水田で、当区は表土下約1mで灰色粘土の旧水田層が拡がり、その下層は東傾してさらに約50～100cmで遺構面に達する。西半はさらに一段高く、そこに設けたトレンチでは表土下20～30cmで青灰色砂礫層の地山に達する。遺構は河川跡SD4・5、土塙SK129のみで、河川はともに北東に流れ、SD4がSD5に先行する。SD4からは、6世紀中葉～7世紀後半までの須恵器片を出土する。SK129はD地区まで拡がり、赤色顔料が塗布された弥生土器壺、砥石、凸基有茎式石鎌が出土する。

### (3) C 地 区

当区は本調査で最も低い水田地で、さらに約1mの段差をもって南西部と北東部の上下段にわかれる。ほぼ全域に拡がる旧水田の灰色粘質土層は、上段で現水田耕作土床土直下に検出されるが、下段ではその上に砂礫を含む砂質土層が堆積し、また下の遺構面に達するまでにも同様の土層がある。上段は地山が高い所ですでに表土下80cmにて検出され、白褐色粘質でかたくしまる。地層は全体に北東に傾き、遺構は南東部に竪穴住居跡SB2、土塙SK130、当区中央を南西から北東に流れる大河川SD6、その北西に同方向に流れるSD7が検出される。SB2は長辺約5.5m、短辺3.4～4.3mのやや不整形な長方形で、四隅に柱穴が検出され、覆土より弥生土器細片が出土し、奈良時代の須恵器も流入する。SK130は埋土中に礫群とともに弥生時代後期の壺、甕、石鎌を出土する。SD6は最大幅約13mで、上流の覆土上層に礫群を用いた堰の痕跡が認められ、その下流の底には3段の石組で構成される溝SD21が検出される。SD6の覆土層3層には明確な年代差が認められず、弥生土器、須恵器、黒色土器、土師器などの磨滅した細片を多量に出土し、また陶磁器、瓦片のほかに、石庖丁、砥石、石斧、石鎌などの石製品も出土する。SD21より6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土する。SD7は幅3m前後で、北東隅でSD6を切りこむ。そのほかの出土遺物に元豊通宝（宋、1078年）がある。

## (4) D 地 区

当区北西部は旧大伴神社の敷地跡にあたり、その北西寄りは急峻な斜面となっている。その断面精査時に、すでに底に露出する白褐色砂質の花崗岩バイラン層の地山を切りこむ溝状の褐色砂質土層が確認され、また断面清掃中に弥生土器底部片が出土していたことから、以東に弥生時代の遺構の存在を期待させるものがあった。現代の狐形土製品を出土する20~30cmの整地層を除去すると、西半区に須恵器甕片を多量に出土する明褐色粘質土層が拡がり、東半区は東傾の地層を平坦化させたものと思われる現代の覆土層が堆積する。下層に全面に拡がる粘質土層は、上部が搅乱をうけ、下部も不安定な堆積を示すが、古様の土馬が出土する。遺構は地山と直上の明褐色粘質土層、暗褐色粘質土層の3層の遺構面にわかれ、合計土塙41基、掘立柱建物1棟、竪穴住居11棟が検出された。土塙は大半が遺物を出土しないが、弥生土器を出土するものが中・下層に5基ある。また古墳時代以降の土器を出土する土塙が上層に7基あり、その中でSK145・146は竪穴住居跡SB3を切りこんでいるので、古式土師器細片が多く混入する。掘立柱建物SB107は2間×2間で上層面にあり、古墳時代の須恵器を出土するが、これもSB3および中層の住居跡群直上にあって弥生後期の土器を混入する。竪穴住居跡群は、上層遺構面で庄内式に併行する古式土師器を出土するSB3があり、中・下層では東西に二群にわかれて各々重なって検出されるSB4~13がある。西部では、SB4~7は畿内第IV~V様式の弥生土器が出土する。なお、SB4はSB10の拡幅されたもの、SB5もSB11の拡幅と思われる。東部のSB8・9の弥生土器は畿内第III~IV様式のものである。

## 2. 調査日誌(抄)

5月12日 発掘調査に先立ち、建設省滋賀国道工事事務所と現地立会いを行い、調査地域と道路予定地域を確認する。境界杭が欠失しているため、それを明確にされるよう工事事務所へ要請する。

5月13日~16日 発掘調査用大区基準割り付け作業。

5月17日 割り付け完了後、調査状況の写真撮影。

5月19日~21日 調査対象地域の平板測量。スケール200分の1。

5月22日 作業員を導入し、対象地域の除草作業。

5月23日~28日 1、I、IIのそれぞれのB、C区の除草終了後、1C-1~5区、1C-2~10区にトレンチを設定(A①と仮称)し、盛土、水田耕作土層を掘り下げる。目立った遺物としては、1C-3区での丸瓦細片と、1C-4区での古墳時代後期に相当する須恵器杯蓋片があった。

6月3日 A①トレンチ、1C-8区以北に表土下40~50cmで明白褐色砂礫層を検出し、これを切っ

て南に黒褐色と淡黒褐色の粘質土の2層を確認する。1C-2区では黒褐色土層の上に直径約50cmの焼土を検出したので、この2層は重なる竪穴住居跡の覆土層の可能性あり。1C-8区以北には明白褐色砂礫層を切りこむピット（SB101の東北端ピット）を検出する。

6月4日～6日 3日に検出された黒褐色土層を追求するため、1C-11～41区にトレンチを設定（A②）して掘り下げる。明白褐色土層には丸く磨滅した遺物を含む。トレンチ東端にて、水田が大きく落ちこむ。調査区と大伴神社周辺の平板測量を並行する。

6月7日～12日 A②、1C-11～21区に南北にのびる幅50～60cmの溝2条を検出して一部を掘りさげると、深さは10cm程度で、覆土はともに淡灰色砂質で遺物にとぼしい。すでに検出されている黒褐色土層は、1C-11区で南にカーブする。その東部に検出される淡褐色砂質土層からは、古墳時代の須恵器から綠釉、灰釉の細片が出土する。A①トレンチに直交して1C-45～95区にトレンチを設定（A③）して掘り下げると、1C-55区付近より東へゆるく傾斜する褐色砂層を検出する。その上に薄く堆積した灰色細砂層からは、磨滅した土器が少量出土。IB-95区にて水田畦のため約50cm落ちこむ。II C-50～100区（④）、II C-5～8区（C⑤）を設定、掘り下げる。④では表土下約20cmに青灰色砂層を検出し、C⑤では表土下約15cmに、須恵器、土師器細片を少量含む薄い青灰色砂層と、下に明褐色細砂の固い層を検出する。遺構はなし。

6月13日 A②、表土下約60cmで灰色粘質土層を

検出し、この層は約10cmの帯状につづく。旧水田跡か。北壁の写真、断面実測作業。A③でも表土下50～60cmにてやや砂っぽい淡灰色粘質土層を検出し、A②の粘質土層に近い。④では青灰色砂層の下に灰褐色砂層を検出し、昨日設定したII C-18～48区（C⑥）でも耕作土層の下、表土下約15cmにて灰褐色砂層をみる。

6月14日～17日 A①、A②に検出されていた焼土をもつ黒褐色土層追求のため、1C-12、13区まで拡張して掘り下げていくと、その層は約10cm落ちこみ、その上に床土が堆積する。1C-1区にピットを検出する（SB101東南端のピット）。④で灰褐色砂層より須恵器、土師器、磁器の細片が多数出土し、青灰色砂層下部に石鏃のほぼ完形品が出土。IIB-100区を深掘りし、表土下95cmの灰色砂礫層から白鳳期平瓦、6世紀後半の須恵器杯身が出土した。このため上層をすべて流入土と考えて除去することにした。C⑥で灰褐色砂層の下に褐色粘質礫混層を検出し、古式土師器、須恵器、土師器の細片多く出土。さらにその下に灰色粘土層が一面に拡がる。これも旧水田層か。

6月19日～23日 A③でも灰色粘土層がトレンチ全面に拡がり、とりあえず、この面にてストップして他のトレンチとの関係をみることにする。④では表土下約50cmで暗青灰色砂層が東に傾斜し、II B-70区で灰色砂層がそれを切って東にのびる。灰色砂層では土師器皿片が出土。C⑤でも灰色粘土層が全域に拡がる。C⑤の北延長上II C-1～4区、III C-10区にトレンチ設定（⑦）、掘り下げ。耕作土内より平瓦I型式出土。1C区の平板測量並行。建設省

境界杭を図に記入する。

6月24日～25日 ④で表土下80～90cm、以前平瓦を出土した灰色砂礫層で古墳時代後期の須恵器、土師器皿など出土。湧水がはげしい。C⑦は水田層床、土排土。A①で黒褐色土層を追求するため、西へIB-98～100区、1B-91区まで拡張し、床土まで排土する。瓦片、須恵器、土師器、多数出土。平板測量はⅢB・C区、ⅣC区、V・VIのC・D区まで進行する。

6月26日～27日 A①西拡張区、床土下の淡灰褐色砂層からは古墳時代後期～平安時代の遺物を含み、平瓦、綠釉陶器などの出土を見る。表土下60cmまで深掘りを行い、IB-98区で地山。IB-100区では暗褐色粘質土層にあたり、土師器、須恵器片出土。C⑦で床土下に淡青色砂層がみられ、II C-4区で固い白褐色粘土層が抜がり、以北は砂層である。深掘りを行い、III C-10区で表土下70～80cm、II C-3区で表土下60～70cmとともに砂礫層にあたり、前者には6世紀末の須恵器の杯身、後者では古墳時代土師器片が出土する。このため、II C-4区の粘土層は北へ落ちこむもよう。砂礫層まで掘り下げる途中、黒紫色系の粘土層が10～20cm堆積し、流木、土師器片等の出土を見る。平板測量VI C・D区。

6月28日・30日 A①西拡張区の砂質土層を追求するが、遺構はなく、IB-99・100区に遺物が多い。IB-98区で表土下60cm位で地山にあたり、99区以南に暗褐色砂質土層がのび、遺物も多く、遺構の存在をおわせる。IC-8～10区で検出した黒褐色土層との関係は後日に期待する。C⑦をストップし、となりのII C-11～31区（C⑧）を設定して耕作土、

床土を掘り下げていくと、31区に暗褐色粘質土層を見る。以西は淡灰色砂層である。C⑦でII C-4区の現水田畦の石垣をとりのぞく。以南に検出する灰色粘土層は白褐色粘土層より30～50cm上層で、白褐色粘土層は北東方向へ傾斜するもよう。

7月1日～4日 A①西拡張区の黒褐色土層追求。上に白灰色砂層が約5cm堆積し、IB-98区で礫を含んで明確に遺構としがたい。1B-91区で暗褐色粘質土の遺物包含層が厚く堆積し、須恵器片を多く出土する。IB-99区とIB-91区にて覆土が灰色砂層のピットを検出（SB101の一部）。C⑧では、暗褐色粘質土層は淡灰色砂層の上に薄く堆積し、淡灰色砂層の下には白灰色砂層がある。A③の西延長上、IB-5・15区、IA-55～95区にトレンチ設定（B⑨）し、耕作土層を排除する。

7月5日・7日 B⑨、耕作土中にIA-85・95区で須恵器片多し。55・65区で表土下20～30cmにて青灰色砂礫層の地山にあたり、65区の東側は水田畦のための石垣があり、とりのぞく。75区に灰色砂層を検出するが、85以東では表土下45～50cmまで下り、その上の青灰色砂層からは6世紀中葉から平安時代にかけての須恵器、土師器片と、時期の新しい陶磁器片を多数出土する。5・15区は水田畦のために大きく落ちこみ、15区の表土下20cmで陶器鉢片を出土する暗青灰色細砂層にあたり、同じく40cmで暗青灰色砂礫層が続く。II A-81～84区、旧大伴神社敷地西壁断面の清掃。

7月8日 B⑨で、95区から5区にかけて灰色砂層の上に灰褐色砂層がのり、これより陶磁器、須恵器片が出土する。灰色砂層からは須恵器、土師器片

が出土し、層はやわらかく、遺構はなし。II A-81～85区（D地区）の西壁断面実測、スケールは20分の1。そこでは白褐色砂層（花崗岩バイラン層）の地山が底に露出し、地山を切りこむ溝状の落ちこみがある。断面清掃中、須恵器片とともに弥生土器底部出土。II B-1～10区（D⑩）、I A-91～94区（B⑪）トレンチ設定。II B-1～5区は旧大伴神社敷地内にあたる。D⑩で神社敷地面上の10～20cmの土を排除する。

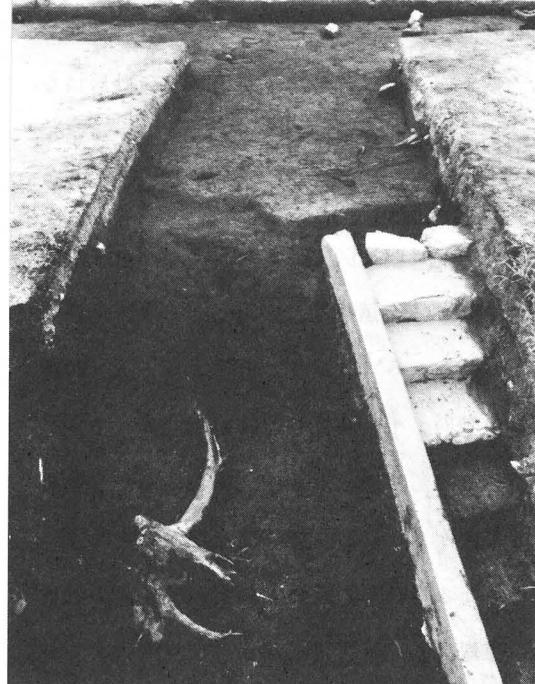
7月12日～15日 D⑩で、西半にみられる明褐色粘質土層を追求するが、2・3区付近に遺物多く出土する。東半区の黒褐色と褐色の混合層からは、プラスチックや現代の瓦などが出土し、これらは地形が東傾のために神社建設の際に埋められたものであるためとりのぞく。西半区からは須恵器甕片が多く出土。B⑨では、65区以東にみる淡灰色礫混層を追求するも、遺構は検出できず。遺物は古墳時代から平安時代にかけてのものが多く出土する。5・15区で深掘りし、礫混層の上に表土下約1mで灰色粘土層にあたる。さらにその上には暗紫色粘土層、灰褐色細砂層がある。表土下約60cmまで掘りさげていくと、層に水分が多く含まれて検出作業が困難なため、かわすことにして、I A-91～94区（B⑪）を掘ることにする。大津宮期の須恵器杯蓋出土。ほかは古墳時代のものである。

7月16日～23日 B⑪を灰色粘土層まで掘り下げると、I A-95・85区の断面に土塙状の層を確認し、IA-96区まで拡張してその面まで下げる。D⑩でII B-1～5区に暗褐色粘質土層、9区に表土下50cmで古墳時代の土師器、須恵器を多く出す溝

状の暗茶褐色粘質土層、8、10区に灰褐色砂質土層、灰褐色粘質土層を検出する。II A-92区の拡張区で茶褐色粘質土層より土馬が出土。写真撮影。II B-17～19区、II B-11～31区を各々拡張して掘り下げる。またII B-12・22拡張区では、東端に旧神社の石段の一部が表土下30cmで露出する。平板測量は、センター記入作業にはいる。

7月25日 A①と西拡張区にIB-100区よりピットを検出（SB101の一部）。灰褐色粘質土層からは須恵器甕、土師器など数片出土する。D⑩拡張のII B-12・22区をさらに52区までのばし、黒色腐植土層下に褐色粘質土層の遺物包含層を検出。

7月26日～29日 D⑩、II B-9区の溝状の暗茶褐色粘質土層を掘り下げ、土師器片を多数出土する。断面により溝ではなく、堆積層と判明。II B-5区より表土下40cmで高杯出土。1～31区の茶褐色粘質土層より多数の土師器が出土する。



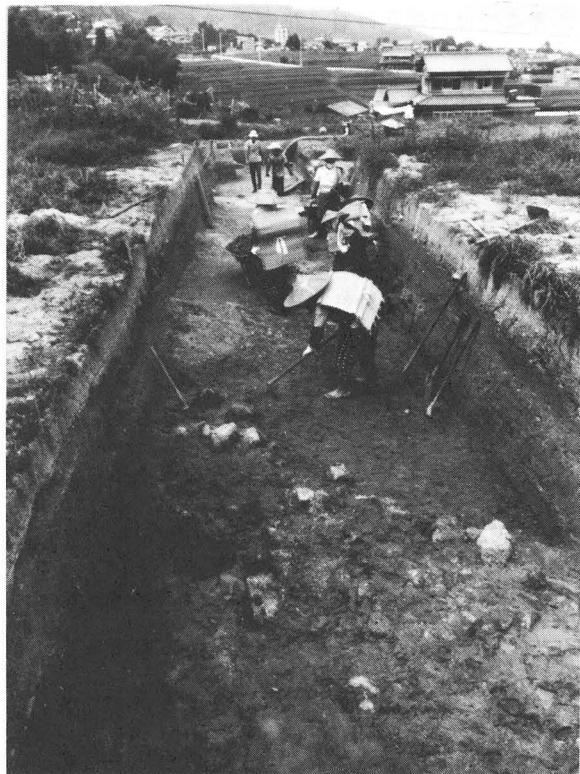
挿図3 D地区（試掘時、D⑩トレンチ）調査状況（東から）右下、旧社地石段の露出

7月30日・31日 A①、A③、D⑩、慎重に遺構検出作業を続ける。III C-3~7区トレンチ設定、掘り下げる。

8月1日~5日 D⑩でII B-8~10区(9区以南は後にD地区)、表土下70cm位にて黒褐色粘質土層を検出する。上層に北から南へ傾斜した層が堆積し、それと黒褐色層との接点に灰色粘土層がある。9区の東端径約1mの円形土塙状の土層変化(S K147)をみる。古式土師器かとみられる破片2~3片出土。1~5区、12・22区に多数のピット(一部はS B103)を検出し、写真撮影。C⑤⑦でII C-4~8区、表土下50~70cm、旧水田層の床土と思われる鉄分沈澱褐色土層をとりのぞく。中世陶磁器片3点、磨滅のはげしい須恵器、土師器片出土。約1mまで下げる、褐色砂層、黒灰色砂層、粘質土層が北東方に傾斜しながら堆積。粘質土層には、10~11世紀の土師器皿片が含まれ、流木もみられる。遺構なし。B⑪、暗灰褐色砂層には遺物、遺構なく、94区付近が北より黒褐色粘土層が南へ落ちこみ、固い青色砂層になる。遺物、遺構なし。平板測量コンター記入は現大伴神社付近、1A・B区、1A区。

8月6日~8日 C⑤⑦で表土下1~1.1mに黒灰色砂層を追求するも遺構なく、II C-4・5区東側に褐色砂層の落ちこみ(S D 6)あり。5・6区西側は固い青色砂層。平安時代の遺物出土。8区で平瓦I(格子タタキ)片出土。6区の褐色砂層からは石列らしきものがある。B⑨で以前土塙かと考えていた土層は単なる堆積層の変化と判明。85・95区の灰色砂層に須恵器片多い。古墳時代から奈良時代まで。75・85区の東傾する青灰色粘質土層の掘り下げ。II

B-5・6表土下50cmで白灰色砂質土層より土師器片多数出土するも遺構なし。平板測量II A区。



挿図4 C地区(試掘時、C⑤⑦トレンチ)調査状況  
(東から)

8月9日~19日 III C-1~41区の設定、掘り下げ。表土下1.2mで検出された、淡黒灰色粘質土層は水平にのびて、水田層かと思われる。IV B-60~56区トレンチ設定、耕作土掘り下げ。I C-5~35区トレンチ設定(A⑫)。

8月22日~28日 A⑫。耕作土の下、表土下25~30cmの明灰色砂質土層より磨滅した須恵器片が少量出土。I C-25区以東に地層が傾く。15区より瓦片3片出土し、うち1片は格子目タタキが明確にある。ほかに須恵器片多数あり。35区よりミニチュア土器出土。25区の灰褐色粘質土層より綠釉陶器片多数出土。下に暗茶褐色粘質土、茶褐色砂礫層を確認する。

9月1日~5日 IV B-60~56区、表土下1mで

水田層と思われるほぼ水平な暗灰色粘質土層を確認。遺物、遺構なし。III B-1~41区トレンチ設定。掘り下げ。表土下20cmの灰色粘質土層より磨滅のはげしい弥生土器、須恵器、土師器の断片が出土。

9月9日 III B-1~41区、何ら遺構検出できず。III C・IV C区、ユンボ導入するも、前日の雨と湧水のため作業困難となり、II B・II C区（C地区）にはいり遺物包含層面まで排土する。

9月11日 台風13号のため、不順な天候である。III B-1~81区清掃。C地区、ユンボにて遺物包含層を追求。黒褐色粘質土層に須恵器、土師器片少量出土。

9月12日~17日 III B-1~81区写真撮影。III C、IV C区の耕作土排土後、すぐに地山面があらわれる。よって以北に遺構はないと判断する（図版29・45）。III B-22~25区では黄色粘質土層の地山面の上に淡暗褐色粘質土層があり、少量の土師器細片を出す。C地区ユンボでの掘削を続行。

9月18日 III B-1~81区、22~25区、IV B-56~60区、下段部分の平板実測。スケール100分の1。C地区、黒褐色粘質土層追求。土師器多し。II C-50区付近にて銀環1個出土。

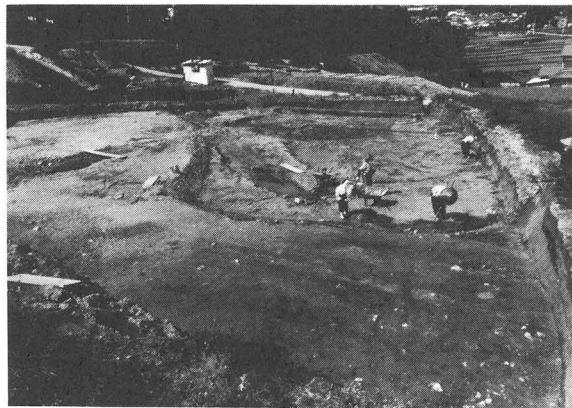
9月19日 III B-1~81区南壁断面実測作業。20分の1。C地区、II C-50~70付近、黒褐色土層が続き、68区付近にてL字状に曲る土層変化を確認（SB2）。弥生から平安時代までの土器細片をふくむ。

9月22日 C地区。前に検出した土層変化（SB2）は、48区付近までのびる。幅約5m（東西）、南北は約3m。北側は地形の傾斜のため、不鮮明。竪穴住居の様相を呈している。その中央を東西に幅

0.3mの新しい溝が走る。

9月23日~25日 C地区ユンボ掘削後、清掃。

II C区東側に一部遺構面らしき暗褐色粘質土層があり、範囲はそんなに広くない。西側には褐色砂層が拡がる。



挿図5 C地区調査状況（南から）

9月26日 C地区。II C-23・33区付近の黒褐色粘土層追求。この層は南北に幅約1.2mでのび、長さは約4mを測る浅い土壇状になる。西肩は暗渠のため不明で、南側はトレンチ壁のため未調査。そこより7世紀前半期の須恵器片や時期不明の土師器片が出土。なお、石剣片と思われる石器も出土。重機掘削中、褐色砂層からも石剣片出土する。前日検出した暗褐色粘質土層の北側は同じレベルで褐色砂層が拡がり、遺構は皆無である。それをとりのぞく。褐色砂層は約20cmの堆積で、下に紫色に近い黒灰色粘土層が面をそろえて拡がる。土師器細片、小枝が所々に含まれる。湧水多し。

9月27日・29日 C地区トレンチ拡張完了。土層をみるべくIII B-99区、IV C-9~39区トレンチ設定し、ユンボで掘削後、断面実測。

9月30日 C地区。II C-5~7区遺構検出。40

区以東は粘土っぽく、西側は砂質。1～4区、黒灰色粘土層追求。土師器細片と流木片が少量出土するのみ。

10月2日～4日 C地区。II C-38・28・19区の灰色砂層と褐色砂層は西側へ落ちこみ(S D 6)、褐色砂層が新しい。両層を掘り下げる。土師器、須恵器細片数点出土。

10月6日～9日 C地区、S D 6。II C-35～55区に北側に落ちる段あり。その肩に灰褐色砂層が堆積し、古墳時代から平安時代にかけての須恵器、土師器、瓦の細片が出土。下から検出される黒褐色粘土層は北に行くにしたがい青灰色粘土層が多くなる。S D 6の東肩は、暗褐色砂質土層が56・57区から西へのび、46・47区の西半が淡灰色砂層になる。古墳時代から平安時代の遺物出土。現調査地区100分の1概略図作成。

10月11日～14日 雨。室内にて図面整理、遺物洗浄。

10月15日 S D 6。55・56区の暗褐色砂質土層追求。56区北端以北は後の堆積である暗灰褐色砂質土層で、下に暗褐色砂質土層が検出される。人頭大の礫が出て、黒色土器が多い。

10月16日・17日 C地区。II C-66・67区に黒色粘質土層があり(S K130)、付近から弥生時代末期の土器が出る。東側が平安時代以降の搅乱をうけ、南半に褐色砂層がみられる。

10月18日～21日 S D 6 西側覆土層の暗灰色砂層除去。45・46区は固い砂礫層になり、45区北半以北は黒灰色粘質土層になる。平安時代末以降の曲物出土。下に淡緑灰色砂質層が溝状に円形ぎみにのびる。平

安時代の遺物が多い。

10月22日～27日 C地区。II C-11・12区にて地山を切りこみ北東方向へ流れる河川跡検出(S D 7)。幅は約4m。土層は黒灰色砂質層および暗灰色砂層で、磨滅する土器片少量出土。11～41区の暗灰色砂質土層を掘り下げる。21～41区にS D 6の北西肩の黒灰色粘土層を確認する。この層から曲物片1点、土師器小皿多数出土する。下の溝状の淡緑灰色砂質土層は東にゆるやかに落ちこむ。22～42区、23～53区で、円形に拡がる黒灰色粘土層は20～30cm堆積し、下に黒灰褐色粘質砂質混合層が約1m堆積し、さらに下に緑灰色細砂層および淡白褐色砂層がある。混合層より平安時代の土師器・木片多数出土する。主に小皿が多い。

10月28日・29日 C地区、S D 6。II C-33～53区で検出の淡白褐色砂層は西から東へなだらかに落ちこみ拡がる。上にのる茶褐色粘質土層は流木が多い。42区の淡白褐色砂層は池状の底のようになり、表土下80～100cmまでは褐色粘土が強く、平安時代後期の遺物多い。44・45区で北側に落ちこむ。45区北東隅で、カゴ状のクロス編みの竹あるいは板製品が出土。S D 6 南西部に堆積する青灰色砂層掘り下げ。

10月30日 C地区、S D 6。II C-41区で池状の落ちこみはなだらかに南行する。ベースは淡灰色砂層。茶黒灰色土層より土師器小皿片出土。44・45区で池の底にあたる。その付近で20～30cm大の石が数個集まる。S D 6 掘り下げ中、18・19・29区に西から東へのびる石群を確認。

10月31日 C地区、S D 6。池状落ちこみの清掃後、写真撮影と断面実測。S D 6 南西部に検出される石

群の続きは明確にならず。S D 6 覆土の淡灰褐色砂層の掘り下げ。D地区、ユンボにて掘り下げ拡張。  
II A - 81~85・91~95区、II B - 1~5・11~15  
・21~25区。

11月1日 C地区、S D 6。円形状の落ちこみは南西から北東に走るS D 6に続くことが確認された。川底は白褐色砂層と青灰色粘土が拡がる。また、II C - 7・8区の石は10cm~50cm大のさまざまな石が並ぶ堰であることを確認、平安時代の土師器片が、わずかながら出土する。

11月3日~5日 C地区トレンチ断面清掃、写真撮影。S D 6 東肩と底の検出。底は青灰色砂層で固くしまるところがある。IV C区トレンチ、重機で埋めもどし。D地区、重機掘削後清掃。II B - 2区にて須恵器甕片多数出土。試掘期出土の物と同一であろう。

11月6日~8日 C地区。S D 6 北肩、淡緑灰色砂層、黒灰色土層の掘り下げ。地山が落ちこみ、底の白褐色砂層とつながる。S B 2 の再確認。溝(S D 15)の掘り下げ。深さは5~10cm。土塙 S K 130は覆土下約20cmで小石群が落ちこむ。古墳時代の土師器甕片多数出土。

D地区。明褐色および淡黄褐色砂質土掘り下げ。部分的に腐植土や木の根がみられ、遺物の大半は陶器片である。II B - 14・24区に褐色土の土塙検出(S K 157)。直径約2m、20~30cm大の石を数個含み、弥生時代から平安時代の土器片多数出土。IV B - 10・20区で古式土師器が出土する土塙検出(S K 152)。II B - 2・3区に磨製石鎌を出土する土塙検出(S K 143)。II A - 91・92区の土塙(S K 145)の掘り下

げ。土師器、須恵器多数出土。

11月10日~13日 C地区。S B 2 を掘り下げると、覆土下10~20cmで褐色砂層の床面にあたり、4本の柱穴を確認。土師器数片出土。S K 130は、30~40cm下が灰褐色砂層の床面で、底部片、口縁部片等の多数の土師器が床面より10cm上に出土する。S D 6の南西部、緑灰色砂層の掘り下げ。

D地区。II B - 1~3・11~13・12~23区にわたり、南北8m、東西10mの住居跡状の土層変化(S B 3)があり、南・西側が明確でない。土師器台、弥生土器が出土する。II A - 91・92区の土塙(S K 146)検出。II B - 25区にても土塙(S K 137)検出。S K 143を掘り下げると、遺物は少なく、覆土は暗褐色と黄色の砂層で、深さは25~30cm。S K 157は、暗黄褐色砂層の覆土で、弥生土器を多く出土。

11月14日・15日 C地区。S D 6、堰の清掃、写真。S D 7、北、東部掘り下げ。幅約1mで東西にのびる。S B 2は、4柱穴のうち、南東隅のものは石群によって検出が困難になり、他の3個は各直径約10cmの柱痕をもつ。

D地区。S K 157は、覆土下10~20cmで20~30cm大の数個の石の間から土師器の甕・壺の口縁部が出土したため、この面でとめて写真撮影を行う。さらに掘り下げると、石群は円形状に並び、弥生後期の土器が出る。覆土が黄色砂質土および淡褐色砂質土のピットを掘り下げて並びを確認したところ、南北2間、東西2間の建物になった(S B 107)。

11月17日~19日 C地区。S D 7、II C - 1・11区付近で淡緑色砂質土層の底がみえる。淡灰褐色砂層より、須恵器の甕など、遺物多い。II C - 1~31



插図6 D地区 土塙群 調査状況(東から)

区は70cm下に完形の土師器皿出土。II C区内での最下層の灰色砂礫層が掘りあがる。II B区以西では大きく南に屈曲し、72・73区へのびる。SB 2、写真撮影後に土層断面ベルト除去。

D地区。SK 157、石群間から弥生後期の甕、高杯出土。20~30cm下げるも、底は確認できず。切り合うSK 136・137を約10cm掘り下げる。覆土は茶褐色砂質土で遺物は皆無。SK 152は、約10cmの掘り下げで弥生後期の甕、壺片出土し、覆土は暗褐色砂質でよくしまった固い層で、20cmで底がみえる。以上の土塙の断面図作成。SB 3については、十字ベルトを設定して、とりあえず東部を10cm程掘り下げてみる。弥生後期の甕、壺片がまた出土。

11月20日~22日 C地区。SD 7の南部掘り下げ後、C地区全体写真撮影と実測図用割り付け作業。SB 2・SK 130を清掃後、写真撮影。

D地区。全体清掃後、写真撮影。

A⑫をIC-85区まで延長、掘り下げ。

11月24日~26日 C地区、割り付け完了後、トレンチ東壁断面実測。SD 6石列清掃後、写真撮影。SD 7断面清掃後、写真撮影。

D地区。実測用割り付け完了後、平面実測。

A⑫掘り下げ。

11月27日~29日 C地区。トレンチ東・南壁断面実測および平面実測。

D地区。平面実測完了。

A⑫、耕作土・床土排土、75・85区にて黒褐色土層が南側に拡がり、北へ落ちこむもよう。

12月1日~3日 C地区。平面実測およびSD 6、7の断面実測。SK 130の続きを追求するため、トレンチを東部へ拡張して掘り下げると、覆土下60cmを測る楕円形の土塙となる。40cm下で7世紀初頭の完形の須恵器杯身などをはじめ、多量の土器片が出土した。

D地区。SK 157の平面実測10分の1。A⑫。表土下50~70cmで暗褐色砂質土層と黒褐色砂質土層が拡がるところでとめる。暗褐色砂質土層からは、ほぼ完形の土師器甕など、多数の須恵器、土師器片が出土。A①を1B-82区まで拡張、掘り下げ。

12月4日~6日 C地区。平面実測続行。SD 6堰付近、SK 130からは上から落ちこんだと思われる石や土師器が出土し、清掃後、写真撮影。

D地区。平面実測図レベル記入。SK 157はレベル記入後、石と土器をとりあげて写真撮影。SB 3は床面が不明確なため、掘り下げをストップする。

A⑫、断面実測。SK 112の清掃、土器出土状況写真撮影。A①トレンチ拡張。1A-82区、表土下60cmで覆土が淡暗灰色砂質土のピット2個検出。表土下20~40cmで磨滅した土師器・須恵器多数出土。

C地区。平面実測後、レベル記入。SK 130は土器、石をとりのぞき写真撮影。SD 6、II C-46区に石

列が露出し追求すると幅1.0~1.3mの石組で（S D 21）、2段目まで確認できる。中央部にも礫が多く、平安時代以前の須恵器、土師器が出土する。

12月11日・13日 C地区、平面実測図レベル記入。S D 21はII C-26~35・45区まで確認でき、以東になし。覆土の緑灰色砂層より平安時代以前の土師器、須恵器が出土。石組は35区付近で3段になる。

12月15日~17日 C地区。S D 6、7のベルト除去。須恵器、土師器片多数出土。石群断面図用割り付け。

A②、II C-74拡張区のS K112~115の平面実測10分の1。

12月20日・22日 C地区、S D 21のベルトを除去し、石組の追求。I C-18区付近に50cm大の石が2個検出され、20~30cm大の石は多数ある。

A②、S K112から覆土下20cmで骨を検出。この面はまだ褐色粘質土層である。

12月24日・25日 C地区。S D 21、S B 2の清掃後、写真撮影。C地区全体も行う。

12月26日 室内作業。

1981年、1月6日 現場始め。C地区S D 21平面実測。水3cmはる。1C区ユンボ導入。

1月7日~10日 C地区。S D 21の平面実測とレベル記入。側面断面実測。S D 6の堰状石群、縦横断面実測。東壁をユンボで深掘り。地山は青灰色砂層。

A地区ユンボによる拡張。

1月11日~12日 C地区埋めもどし。東壁掘り下げ後、断面実測図の付けたし、A地区ユンボ拡張後、清掃と掘り下げ。

1月13日 A地区。1C区に検出された石群を追求すると、石は南北に約1.2m、東西に4m以上並ぶ古墳の石室と判明。その上層は溝状に搅乱され、掘り下げると、一部石が取りのぞかれている。これは現水田下約50cmにあることから、水田耕作時に取りのぞかれたものであろう。溝内には多量の須恵器が含まれ、底から杯身が群出し、現状にのこした。古墳の床面が近いと思われ、副葬品の可能性を有する。

1月14日 A地区ユンボ掘削後の清掃。I C区に黒色を呈する土塙状のものあり。

1月16日 積雪のため、現場作業中止。

1月17日 B地区、ユンボ掘削、拡張。A地区、ユンボ掘削後の清掃。I B区に数個のピットを検出する。

1月20日~23日 A地区。I C区に淡灰色の搅乱塙を掘り下げる。下に黒褐色、暗褐色土層が拡がる。B地区。ユンボ掘削面の清掃。ピット1個検出。

1月24日 降雪。

1月26日~28日 B地区ユンボ掘削面清掃後、北東部の固い黒褐色層を掘り下げると、下に茶白色粘土が拡がる。両層とも遺物なし。淡黄色のピットを検出。

1月29日~31日 B地区。北西から南東にのびる河川跡（S D 4・5）を検出し、その上層より須恵器杯身のほぼ完形品が出土。垂直にトレンチを入れて断面観察の結果、大河川、S D 4を切りこんで覆土が茶褐色砂礫層の小河川S D 5が同方向にのびることを確認する。地山面は西から東へ傾斜する。S D 4・5、トレンチおよび断面の写真撮影。

2月2日 降雪。

2月3日・4日 B地区。黒褐色土層の掘り下げ。  
降雪で作業がしばしば中断して、はかどらず。

2月5日 B地区。全体の清掃、写真撮影。

2月6日～9日 A地区。I B区の灰褐色砂質土層および淡灰色土（旧水田層か）を掘り下げると、20～30cm下に黒褐色の固い層が拡がる。灰褐色土層から須恵器細片が若干出土するのみ。

2月10日 A地区。I B-89・90・99・100区、I B-81・82・91・92区に南北3間東西3間の掘立柱建物を検出（S B101）。覆土は淡灰褐色・淡灰色の砂質土層で、直径は30～40cm。

2月12日 A地区。I B-96区、I C-6・16区付近、6世紀の須恵器杯身、土師器甕片など、土器多数出土。I B-72区に瓦質羽釜片出土。以前出土のものと同一個体か。I B-76・86区以北に2間×4間の掘立柱建物検出（S B102）。径20cm位のピットで、覆土は暗灰褐色粘質土層。東方にピット4個が同方向に並ぶ。

2月13日 A地区。S B102 東方の4本ピット列の続きを追求するも検出できず。それとは対応しないピットを検出。古墳の掘形検出を行う。玄室部から土器細片数片と釘1片出土。掘形検出後、写真撮影し、十字ベルトでA～Dに4区割して掘り下げる。トレチ東壁断面実測。

2月14日 A地区。古墳玄室部、縦横断面実測20分の1。掘り下げていくと、玄室D区に小石がみられた。敷石であるかは不明。D区で金銅製の針状遺物、羨道中央に刀子出土。石下に破碎した横瓶があり、閉塞にともなうか。S B101掘り下げ。覆土は灰色砂

層で10～20cmの深さ。

2月17日 A地区。古墳を床面近くまで掘り下げると、6世紀後半の土器多数出土。S B101、S K101～103の掘り下げ。S B101のピットは全て柱痕を有す。

2月18日 A地区。古墳床面検出。黒灰褐色のかたくしまった砂質土である。出土遺物現状のまま清掃。玄室C区にあらたに土師器甕が出土する。石の抜きとり跡の検出。およそその玄室の範囲はつかめ、南側壁の裏込め石が4個残存している。I C区西方にピット、土塙（S K108、109）検出。

2月19日 A地区。古墳南側面の抜きとり石跡検出。清掃後写真撮影。

2月20日 A地区。古墳石室実測。基点は北側側壁より70cm南、0点は基点と奥壁との交点。古墳の北I C区の遺構検出。径10cm前後の灰褐色ピットと茶褐色砂質土に切りこむ黒褐色砂質土の長円状土塙検出。

2月21日 A地区全体写真撮影のための清掃。同時に古墳平面実測図に出土遺物のレベル記入。

2月23日・24日 降雨のため、室内で古墳副葬遺物の洗浄。

2月25日 A地区写真撮影。タワー設営。終了後、平面実測用基準割りつけ。A地区北西端下段壁ぞいに土層観察用トレチ設定、掘り下げ。

2月26日 A地区土層観察用トレチ掘り下げ続行。遺構平面実測にはいる。古墳は玄室および羨道の落下石、閉塞石を除去して床面を検出する。玄室北西隅の石除去の際、下より杯2点など計6点の土器出土。写真、実測の後とりあげる。D地区全面清

掃、南部拡張区の遺構検出。

2月27日 昨夜の積雪に続き、終日寒冷、風雪。

2月28日 A地区。平面実測図にレベル記入。古墳の写真撮影。そのための清掃とタワー設営。古墳石室の地割り。主軸はN83°00'W。羨道の中央を通る北壁より南50cmの線、O点は主軸と奥壁の交点とし、E1.0m、2.0m、W1.5mの点設定。E1.0m、2.0mの線をN-Sに振る。

3月2日 A地区。古墳石室平面・断面実測。土層観察用トレンチ掘り下げ続行。固い砂礫層のため作業はかどらず。

D地区。B地区で検出した落ちこみ(SK147)に続くと思われる土層変化をII B-7・17区で確認し掘り下げると、覆土は淡黒褐色粘質土で土師器片数点出土。II B-26区にも淡黄灰色粘質土層の落ちこみを検出し掘り下げる(SK135)。

3月3日～5日 A地区。トレンチ北西端に南北に向く河川跡を掘り下げる(SK1)。3層にわかれることが作業続行中の土層観察用トレンチからも確認できる。上層から順に暗青灰色砂質、明灰色細砂、明灰色粒砂層。とくに最下層からは土師器、須恵器の細片多く出土。古墳北方IC区のピットと土塙状の黒褐色砂質土層を掘り下げるも、ピットからは土

師器細片が少量出土するが、土塙には遺物皆無。同時に周辺の遺構検出を行い、IC-71～73区、81～83区周辺に土層変化あり。古墳は断面見透し実測。

D地区。拡張区の検出土塙の掘り下げ後、断面実測。土塙はほとんどが深さ20cm前後で、出土遺物はSK134の土師器甕片のみ。

3月6日・7日 D地区。SB3の覆土層と想定

していた暗褐色粘質土層を十字ベルトで4区割して慎重に掘り下げていくと、西部に黒褐色粘質土層が東西2m、南北7～8mの方形に拡がるのを確認する。これも古式土師器片を含む。

A地区。古墳は玄室石構築状態確認のため掘り下げた後、写真撮影。SD5は、写真撮影の後、実測とレベル記入。IC-61・71区に淡黒褐色粘質土層を掘り下げると、弥生土器を含む円形住居跡と確認する。(SB1)。土器出土状況を写真撮影。

3月10日～12日 A地区。SK1検出後、平面実測。SK109を掘り下げると、7世紀前半の須恵器杯身など、須恵器、土師器片が多数出土。

D地区。住居跡状遺構の黒褐色土層から古式土師器壺が完形で出土した。平面実測、10分の1。

3月13日・14日 A地区。IC区の土塙状の黒褐色砂質土層を掘り下げていくが、この層は明確な土塙の覆土層として切りこんでいくものもなく、土器も一片も出土せず。南方の古墳の掘形から察すれば、土塙の地山となるべき明茶褐色砂質土層と黒褐色砂質土層とに上下層の関係がないので、土塙ではないと判断する。径10cm前後のピットは列にならず、散在する。SK1・109の遺物出土状況の断面、平面実測。

D地区、暗褐色粘質土層よりあいかわらず古式土師器片が出土する。

3月16日～18日 D地区。暗褐色土層の北側をさらに慎重に薄く掘り下げていくと、暗褐色土層を切りこむ土層変化を確認する。ベルトの断面実測。

A地区。SK109のベルト除去の際、暗灰褐色砂質土層より石錐出土。IC-64区に焼土を検出する。

3月19日～21日 D地区。SB3のベルト除去の際、弥生あるいは古式土師器が群がって出土。

A地区。古墳北方の焼土を検出するIC区東部の遺構検出作業を行うが、ピットを数個検出し、土師器細片を出土するのみ。IC-42・52・43・53区に石が密集するが遺構とは確定しがたい。

3月22日～25日 A地区。古墳北方のIC区東半、検出されている焼土付近を中心に遺構検出作業を続けるも、新しく検出したピットとすでに検出ずみの散在するピットとは一つにまとまらず、出土遺物も若干の土師器細片程度で、IC-64区の焼土下にやや不整形な円形の固い暗褐色砂質土層が拡がる。床面の残存か。なお、焼土中央に露出する石の全容を知るために焼土半分を掘り下げる。石は四角柱ぎみの棒状の支柱石である。暗褐色土層の下から古様の土師器口縁部片が出土。

D地区。住居跡状遺構SB3を追う。19日以来確認されている土層変化は、重なる住居跡の覆土層変化であることを確認する。東傾の地形のため、東肩は不明であるが、最初に検出される西端の住居跡SB4は地山をほぼ垂直に切りこむ。次に西肩端の南北にそれぞれ柱穴をもつSB6が検出された。また、II B-11区に炉跡らしき焼土のひろがりを検出し、まだ住居跡の存在をうかがわれる。

3月26日 D地区。西隅の住居跡は、2条の周溝の検出によって2棟(SB4・10)を確認できた。すぐ東側には途切れた周溝の残存がみえ、もう1棟想定できそうである。以上の3棟は拡幅されたものと思われる。その共通の西南、東南の柱穴を検出。そのすぐ東方に重なり合う住居跡(SB6、7)の

真北にも拡幅したらしい周溝2条を検出(SB5・11の周溝)。また、さらに東方には重なる住居跡2棟(SB8・9)の西掘形を検出し、切り合いの新しい方からは第Ⅲ様式の凹線文のはいる土器が出土。その他、クシ描文をもつものも出た。

3月27日・28日 D地区。東隅のSB8・9を掘り下げ。SB8からは頸部に沈線のある弥生土器の壺と甕がほぼ半個体で出土。その他の断片の弥生土器にも凹線文のあるものがある。SB9からは周溝を検出する。

3月30日 D地区。SB8・9の床面精査。ピットおよび焼土を検出する。SB8から、クシ状工具による列点文のある弥生土器出土。ベルト除去。

4月1日～8日 D地区。SB8・9完掘。SB8内を斜め方向に円弧ぎみの溝(SD19)が走るのを確認。

4月9日 D地区。北壁断面実測。

4月10日～14日 D地区。住居跡群全域精査。

4月15日 A地区。IC区遺構平面実測。

4月16日～18日 D地区。全域写真撮影とその前に清掃。

4月20日～22日 A地区。IC区平面実測。トレチ東壁断面実測。D地区、東隅掘り下げ。住居跡の周溝とピット検出。土器は弥生第Ⅳ様式の凹線文の入った短頸壺。第Ⅴ様式の土器も出土。

4月23日・24日 A地区。SB1の掘り下げ。断面中にハケ目のある土師器出土。D地区。住居跡内検出ピット掘り下げ。東隅、地山面まで追求。

4月27日～30日 A地区。IC区平面実測図にレベル記入。後、その西側をユンボで掘削。

D地区。S B 8・9と南辺を遺構検出精査。

5月1日・2日 A地区。I B・C間を通過する現水田間配水ポンプ設置のためのレベル高をとる。北端の土層観察用トレンチ、 Yunpoで掘り下げて、断面実測と写真撮影。

D地区。地山面上の遺構平面図完成後、レベル記入。そしてB地区とともに埋めもどす。

5月4日・5日 A地区。S B 102のベースとなっているSD 2の掘り下げをYunpoで行い、清掃。

5月8日～11日 A地区。SD 2をYunpo掘削後、肩の追求。I C-16区より短頸壺完形で出土。

5月13日 A地区。SD 2断面清掃後、写真撮影。

5月14日 A地区。SD 2を川底まで掘り下げて追求する。

5月15日 A地区。I B区遺構検出精査。明灰褐色粘土の方形土塙(S K125)を掘り下げると、土師器、6世紀後半ごろの須恵器が出土。そのベースの灰色粘質土層からは須恵器片が出土。地山と思われる黒色砂質土と明黄褐色粘質との境界をほぼつけおわる。

5月16日～18日 A地区。SD 2西断面下にトレンチを入れる。I B-89・90区の方形土塙S K126の掘り下げを終る。

5月19日 A地区。南西部遺構検出精査。小径ピット群を検出。I B-90区、1 B-81区の暗灰色土層を検出中、須恵器・土師器片を10数点出土し、この層は方形遺構になるもよう。SD 2肩の続きを追求し、肩と思われる地点から幅約1mの小トレンチを掘る。

5月20日～23日 A地区。SD 2の肩の追求とそ

の南方の遺構検出精査および遺構の掘り下げ。SD 2からは須恵器・土師器片が多数出土するが、南方のピット群からはほとんど遺物がない。

5月25日～27日 A地区。ひき続きSD 2の肩を追求して掘り下げるかたわら、南方の検出済みピット群に掘立柱建物としてのまとまりを想定しようとするが、ピットの数が多く、困難。ただ4棟以上はまとまりそうである。SD 2掘り下げ中、I C-26・27区に石群のつまる土塙(S K128)を検出し、写真撮影。そこから6世紀後半から7世紀前半のものと思われる須恵器・土師器片が出土する。トレンチ西壁断面実測。

5月28日～30日 A地区。SD 2の肩の追求続行。暗褐色土層を掘り下げるが、遺物はほとんどない。肩に検出した土塙の掘り下げ。清掃。石群の中央に焼けあとがある。南方のピット群の検出、掘り下げも続行。

6月1日・2日 A地区。SD 2の肩を追求するかたわら、遺構平面実測用割り付け作業にはいる。

6月3日～5日 A地区。SD 2、黒灰色粘土の最終面まで掘り下げる。遺構平面実測およびレベル記入後、全体写真撮影のための清掃作業にはいる。

6月6日 A地区。全体写真撮影。

6月8日・9日 A地区。遺構の埋めもどしと並行してSD 2の平面実測。土塙らしきI B-89・90 100区の層S K125の掘り下げおよび写真撮影。

6月10日 現場作業完了し、あとは埋めもどしを残すのみ。

(岩間信幸)

# 第3章 A 地 区

## 1. 遺 構

調査対象地の南東部にあたるA地区では遺構が2層にわたって検出された。すなわち、上層遺構面はその西半部で認められ、地表から約0.4~0.5m掘り下げた面で、明白褐色砂礫層をベースとしている。下層遺構面は全面に認められ、西半部では上層遺構面から約0.5m下位にあたる地山直上の淡褐色砂質土層をベースとしている。この地山面は地形にそって東になだらかに傾斜し、北側にも傾斜している。

### (1) 上層 遺 構 (図版3・4・47)

上層では掘立柱建物2棟、土塙11基、河川ないし溝3条が検出された。

#### 1) 掘立柱建物 (図版4)

**S B 101** 南部西寄りに位置し、3間(7.45m)×3間(7.3m)でほぼ正方形を呈する南北棟の総柱建物とみられる。柱間は2.5mの等間で方位はN11°00' Eである。柱掘形は32~48cmであり、柱根跡は20cm前後でそれぞれ円形をしている。柱穴から6世紀ごろの須恵器・土師器片、平安時代の縁釉片が出土している。

**S B 102** S B 101の北側にある5間(9.05m)×3間(7.1m)の南北棟の総柱建物である。柱間は1.7~3mで、方位はN9°45' Eであった。柱掘形の直径は19~45cmでその並びも不揃いである。柱穴から6世紀ごろの須恵器・土師器が出土している。

#### 2) 土 塙 群

**S K 101** S B 101と重複し、その柱穴に北端を切り込まれた形で検出された。1.68m×1.52mの少しづがんだ方形を呈し、深さは22cmを測る。底面は平らで、覆土より平安時代と考えられる土師器杯や南北朝頃の土師器皿が出土している。

**S K 102** S K 101の東にあり、S B 101と重複する。1.06m×0.86mの方形を呈し、23cmの深さを測る。覆土から奈良時代の須恵器杯蓋が出土している。

**S K 103** S K102の北側でS B101と重複するが、切り合い関係はみられない。1.01m×0.83mの楕円形で深さは31cmである。遺物は出土していない。

**S K 104** S B101の北西、S B102との間にあり、2.96m×0.79mの長楕円形を呈する。遺物は出土していない。

**S K 105** S K104と同じくS B101と102の間にある。97cm×93cmの円形を呈し、深さは19cmを測る。古墳時代の須恵器片を出土している。

**S K 106** S B102と重複するが切り合い関係はみられない。直径65cmの円形で、深さは10cmである。遺物は古墳時代と平安時代の須恵器・土師器片を出土している。

**S K 107** S B102と重複するが切り合いはみられない。1辺90cmの正方形を呈し、13cmの深さを測る。遺物は出土していない。

**S K 110** S K108の北、S K109とS B102との間にあり、55cm×47cmの方形を呈す。深さは10cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 111** S B102の北西、S D 1 の右岸に接して、78cm×70cmの変形隅丸方形を呈する土塙が検出される。深さは14cmを測り、遺物は出土していない。

### 3) 河 川 跡

**S D 1** S B102のほぼ西側を南から北へ向って流れる形状をしている。右岸のみ検出され、左岸は農道のため未検出である。長さ13.4m以上、最大幅2.9m以上で、最深部で0.6mを測る。覆土の淡褐色砂層より鎌倉時代以降の土師器皿や古墳時代の土師器甕、弥生時代の甕が出土している。S D 1は形状からみると、B地区のS D 4の右岸となる可能性、またはC地区のS D 6に続いてゆく可能性がある。

## (2) 下 層 遺 構 (図版5・6・46)

下層では、竪穴住居1棟、掘立柱建物4棟、古墳1基、土塙17基、河川、溝4条が検出された。

### 1) 竪 穴 住 居 (図版7・49)

**S B 1** A地区北東隅、古墳の北方に位置し、南西部約 $\frac{1}{4}$ が検出される。北部は地形よりみて削平されたと考えられ、東部は未検出である。形状は方形を呈すると考えられ、規模は長さ2.9m以上×2.8m以上、深さ40cmである。周溝はなく、柱穴は隅の1箇所にみられる。掘形は35cm×30cm、柱穴は20cm×20cmの楕円形を呈し、深さは20cmを測る。覆土より畿内第III～IV様式の甕や扁平片刃石斧が出土している。

### 2) 掘 立 柱 建 物

**S B 103** 南端西寄りにある。4間(9.05m)×2間(3.35m)の南北棟建物で、柱間は1.58~3.02mとばらつきがある。柱掘形は円形もしくは楕円形を呈し、29~69cmとばらつきがある。方位は西側柱列を中心にN 3°30' Eである。柱穴から6世紀ごろの須恵器片が出土しているが、当遺構の時期を決定するものではないと考えられる。

**S B 104** S B 103の南東部と重複し、規模は5間(5.8m)×4間(5.05m)以上の建物である。南端は未検出であるが、柱間は1.11~1.61mを測る。掘形は30~80cmを測り、円形もしくは楕円形を呈する。方位は西側柱列を中心にN 11°30' Eである。柱穴から6世紀ごろの須恵器片が出土しているが、S B 103と同じく混入と考えられる。

**S B 105** S B 104の北に位置する。規模は5間(7.1m)×4間(4.7m)の東西棟の建物である。柱間は1.01~1.97mとばらつきがあり、東南部の柱穴は削平されている。掘形は24~62cmで円もしくは楕円形を呈し、並びも不揃いである。方位は北側柱列を中心にW 8°00' Nである。柱穴から平安時代の須恵器・土師器片が出土している。

**S B 106** 西半部中央S D 6とS B 105の中間に位置する。2間(4.33m)×2間(西側柱列は3.09m、東側柱列は3.55m)の東西棟の建物である。柱間は1.4~2.3mで南側柱列は特に不揃いである。柱の掘形は21~63cmとばらつきが激しく、円および楕円形を呈する。方位は北側柱列を中心にW 4°00' Nである。遺物は出土しない。

(三宅 弘)

### 3) 福王子17号墳 (図版8~13・50・51)

調査地区の東南隅で、内部主体に横穴式石室を持つ古墳が検出された。

当古墳は、調査中に発見されたもので、墳丘は削平され、内部主体の南側は溝状に搅乱を受け、基底石まで抜き取られた状態にあった。これは、地山面が現水田面下約50cm程のところにあることから、水田開墾の際に抜き取られたものと思われる。周濠は認められなかった。

**内部構造** 奥壁に向って左片袖式の横穴式石室で、主軸はN 83°00' Wを示し、ほぼ真東へ開口する。

石室の遺存度はきわめて悪く、石材はほとんど抜き取られている。北壁は玄室部・羨道部とともに基底石のみが、奥壁部は基底石と一部2段目まで遺存している。南側は、玄室部の一番奥壁寄りに1石、羨道部に1石を残すのみである。玄室部北西隅は、基底石まで抜き取られている。しかし、基底石の抜き取り跡および、基底石を設置するための掘形の一部が検出されたため、おおよその規模は把握することができた。

掘形は、地山面を切り込んでおり、幅は奥壁部で4.8m、玄門付近で3.83m、羨道部で2.24m、長さは8.3m以上、深さは奥壁側で0.55m、羨道側で0.2mを測る当初から左片袖式を意識したも

のである。

なお、羨門付近は調査地区外にあたり、明確にすることはできなかった。

石室の規模は、玄室は長さ4.1m、幅は奥壁部で2.35m、袖部で約2.25mを測り、羨道は長さ3.25m以上、幅は1.05mを測る。遺存高は、玄室部の最も高い基底石で0.79m、奥壁部の2段遺存する部分で0.72mを、羨道部基底石で0.35mを測る。玄門の床面に0.1m～0.5m程の石が、集中しており、おそらく閉塞に用いられたものであろう。

石室の用材は花崗岩の自然石である。石積みの手法は、遺存している部分に関して述べれば、玄室側壁基底石は、玄室部と羨道部境の1石を除いて縦長に置き、奥壁は南側壁と接する1石を除いて横長に置いている。羨道部は玄室部に比して小さな石を横長に置く。羨道部の用材は、羨門に近づくに従い小型化する。基底石はいずれも地山を0.1～0.2m程掘り込んだ後据える。また、0.1～0.2m角の小石を根石にして基底石を据え、高さを調節しているものもある（図版11）。南壁側においても、基底石の抜き取り跡から、基底石を安定させるためか、高さを調整するために用いられたと思われる根石が検出されている。

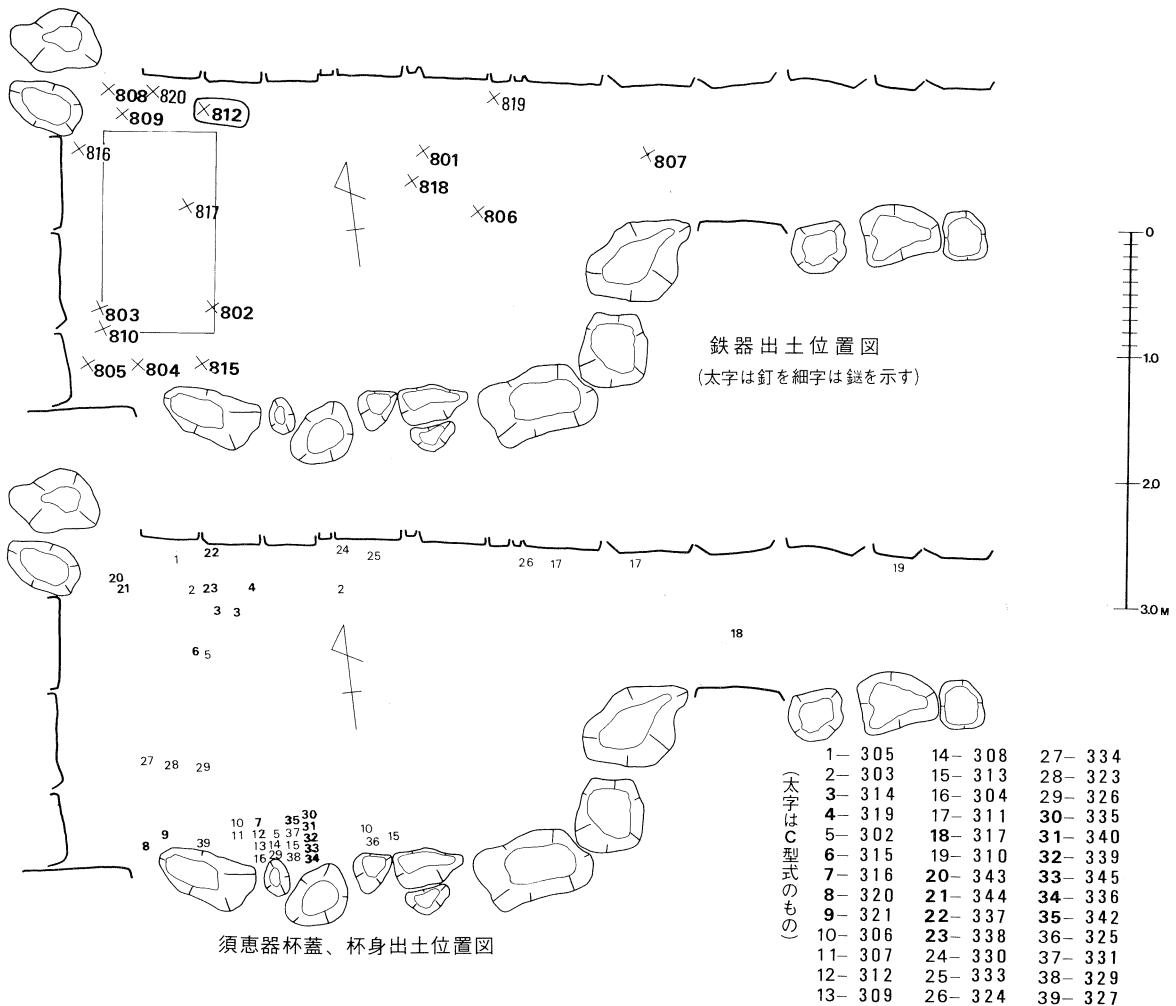
基底石より上部に関しては、奥壁部に1箇所遺存するにすぎず、石積み手法に関しては不明である。ただ、基底石と基底石の間の上部に小さな石を詰め込み隙間を埋めた1例が観察された。

袖部に関しては、抜き取り跡しか検出できなかつたため、その構造は明確にはし難いが、抜き取り跡が2個あることから、2石を並列させた形の袖部が想定されよう。このような例は、大津北郊においては、大津市南滋賀福王子2号墳、同6号墳<sup>①</sup>、16号墳<sup>②</sup>、大津市穴太飼込15号墳<sup>③</sup>などがある。うち当古墳は、福王子6号墳および飼込15号墳に近い構造が想定される。

**遺物出土状況** 当古墳の埋葬面は、黒褐色砂質土と、黄褐色砂質土の混じり合った地山面の上に、0.1m程の厚さで淡褐色砂質土を敷きつめている。この整地層は、羨道まで続くが、玄室部はほぼ平坦であるのに対して、羨道部は玄室に向ってやや傾斜し、羨門付近では玄門部に比して0.2m程高くなっている。

玄室床面中央からは0.1～0.2m角の石が南北に20cm～10cm間隔で上面をそろえて3個並んでおり、棺台として利用された可能性もある。

**土器** 出土した土器は、玄室の壁面に近い部分に集中しており、中央部からの出土は少ない。また、羨道部からも出土をみた。しかし、器台362の破片が奥壁部と羨道部に分れて出土したように、いずれの土器も原位置を留めていない可能性もある。このような状況であるが、土器の出土地点をいくつかの群に分けることができる。すなわち、玄室北西隅のA群、玄室南壁の西よりのB群、玄室東南隅のC群、羨道付近のD群の4群である。B群からは、須恵器の杯蓋および杯



挿図7 福王子17号墳出土遺物位置図

身が2～4個重なった状態でまとまって出土している（図版12）。

土器出土地点を、比較的型式変化のとらえやすい須恵器の杯蓋、杯身でみた場合、古い要素の強いB型式のものは、玄室および羨道の北壁にそった部分とB群下部に集中している。それに対し時代の降る要素を持つC型式のものは、A群、B群上部、D群から出土している。次に、B・C両型式の杯蓋、杯身を大量に出土したB群についてやや詳しく見てみると、B型式の土器はいずれも下部から出土しており、復原すれば完形になるが、破片での出土で、上から押しつぶされ

たごとき状態を示す。これに対し時代の降るC型式の土器は、上部から出土しており、破損の度合は少なく、B型式の土器の上にのせたごとき状態で出土している。

他の器種を含めて、全体の出土分布をみた場合、古い要素を持つ土器は北壁にそった部分とB群下部およびC群にはほぼ集中してみられ、新しい要素を持つ土器は、B群上部および、玄室のやや中央よりに集中する傾向があるようである。

また、玄門付近の閉塞石の残存と考えられる石群中より、B型式の杯蓋1点と、横瓶の胴部破片が出土している。この横瓶は、復原胴径約20cm、長さは30cm以上あるが、全体の約 $\frac{1}{4}$ 程しか復原できない。古墳上層が削平されたために他の部分が出土しなかったのか、他所で破碎された後、破片のみここに運ばれたためかは不明である。

**金属器** 出土した金属器のうち、出土量の多い釘の出土分布をみると、玄室西側と東側の2つの群に分けることが可能である。この西側出土の釘、鎌を点として結ぶと奥壁にそった形の230×100cmの長方形が想定される。西側から出土した釘8点のうち頭部の遺存する5点すべてがCII型式を、他2点も断面II型式を示し、断面III型式を示すのは812一点のみである。しかし、後に述べるように、当古墳出土の釘は断面II型式のものが主であり、III型式のものはきわめて少ない。さらに、頭部の型式はすべてC型式であることなどを考え合わせると、断面II型式とIII型式とが同時に使用されたと考えてもよいと思われる。したがって、この西側に想定される長方形は、棺のおよその形を示すと考えてもよかろう。東側の1群については、かなり移動を受けており、西側のものが移動したものなのか、それと同時あるいは、近接して前後する時期のものであるかを判断することは難しい。

(吉谷芳幸)

#### 4) 土 坂 墓 (図版14・52)

**S K 1** A地区のほぼ中央にあって82cm×68cmの楕円形、断面はU字状を呈し、深さは10cmを測る。土坂中央に土師器甕2個体が合わせ口の状態で検出された。長胴の甕が口縁部を南にして横位に置かれ、その口縁部内に少し入れ込む形に小形甕を置いている。土坂の肩を結んだ線より上方はいずれも欠失しており、後世の削平を受けたものと考えられる。北半部は特にそれが著しく、ために長胴甕の体部下半が欠失したのであろう。この土坂は合わせ口甕棺墓とみられる。

#### 5) 土 坂 群 (図版7・13・15・16・52)

**S K 108** S B 102の南東、当地区のほぼ中央に位置し、S B 109と接している。1.22m×0.64mの不整形を呈し、平らな底面は肩より15cmを測る。6世紀後半の土師器甕が出土し、S K 109出土のものと同一個体をなす。

**S K 109** S K 108と接してその東側に検出される。2.15m×2.05mの不整隅丸方形を呈し、19

cmの深さを測る。平らな底面よりSK108と同一個体をなす土師器甕の大きな破片が出土する。平らな底面の北寄りに5~15cmの礫がみられる。なお、当土塙の北端を切り込んだピットから平安時代以降と考えられる土師器皿が出土しており、SK109の下限を知り得る。

**SK 112** 古墳の北方に位置する。1.7m×0.94mの東西に長い楕円形を呈し、北部に浅い段を有する。深さは28cmを測り、全体に底面より5~10cm程浮いた状態で5~40cmの礫がみられる。覆土より6世紀後半の土師器甕が出土している。

**SK 113** SK112の真北にある。1.36m×0.88mの南北に長い楕円形を呈し、深さは10cmを測る。中央やや北寄りに38cm×26cmの円形の落ち込みがあり、深さ25cmを測る。土塙の中央から南寄りにかけて6世紀後半の土師器甕が押しつぶされた形でみられ、その上に1辺10cm位の平石がのっている。また、円形の落ち込み上にも5~15cmの平石と土器片がみられる。形状より土塙墓の可能性が考えられる。

**SK 114** SK112と113との中間に位置し、47cm×43cmのほぼ円形を呈す。深さは12cmを測る。覆土上層から土師器甕が出土している。

**SK 115** SK114の東にあり、68cm×49cmの楕円形を呈する。深さは7cmである。土師器甕が出土している。

**SK 116** SK113の東方に位置する。北をSD12に、東をSK117に切られているが、円形もしくは楕円形を呈すると思われる。規模は1m以上×1m以上で、深さは15cmを測る。覆土より奈良時代の土師器杯が出土している。

**SK 117** SK116の東にあり、SK116を切り込んでいる。北半はSD12に切られているが円形もしくは楕円形と考えられる。規模は1.2m×1.2mで、深さは5cmを測る。遺物は平安時代の土器が出土している。

**SK 118** 西南隅にあり、56cm×38cmの隅丸台形を呈する。深さは13cmを測る。覆土から古墳時代の須恵器片が出土している。

**SK 119** SK118の東に位置する。規模は南北に長い1.54m×0.8mの楕円形を呈するが、中央と南端をそれぞれSD13とSD14に切られている。深さは13cmを測る。遺物は出土していない。

**SK 120** SK119の北東、SB103の西に位置する。規模は1.97m×0.89mの東西に長い楕円形を呈する。深さは9cmを測る。覆土から遺物は出土していない。

**SK 121** SK104と重複するが切り合い関係はない。1.27m×0.55mの東西に長い長方形を呈し、東南部はピットによって切られている。底面には西に2箇所、東に1箇所の落ち込みがみられる。深さは12cmで、落ち込みはさらに10~30cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 122** 中央西寄りに位置し、93cm×70cmの楕円形を呈する。深さは43cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 123** S K122の東南に位置する。規模は86cm×64cmの東西に長い楕円形を呈し、西に段を有す。深さは23cmを測り、遺物の出土はみられない。

**S K 124** S K123の南東にあり、S K122から一直線状に並ぶ。92cm×58cmの菱形を呈し、東をピットに切られている。深さは24cmを測る。遺物は出土しない。

**S K 125** 西端に位置する。9.5m×4.6mの不整形を呈するが、西側は未検出である。深さは20cmである。覆土より6世紀後半の須恵器提瓶が出土している。

**S K 127** S K125の真北にあり、南端部を切られている。西半は未検出である。規模は1.4m×0.5m以上で、楕円形を呈すると考えられる。遺物は6世紀後半ごろの須恵器杯身が出土している。

**S K 128** S D 2 の南岸中位よりやや上方に1辺3.5m位の正三角形のテラスを作り、その中央に1.74m×1.3mの楕円形の土塙が掘り込まれる。深さは7cmを測る。平らな底面の南西方向に20cm以下の平石がみられ、土塙の中央からやや東南寄りに焼け石が多く存在する。石群に混じって6世紀後半の土師器甕（ほぼ完形）や縄文土器片が出土している。

**S K 173** 古墳の北方、S K112の西方3～4mに位置し、規模は2.68m×2.32mの不整楕円形を呈す。深さは10cmを測る。土塙の中央やや北西寄りに64cm×60cmの不整円形の焼土層がみられ、そのほぼ真中に支柱石らしき直方体の石が縦長に置かれている。遺物は古墳時代の土師器甕、6世紀ごろの須恵器杯蓋が出土している。

## 5 ) 河川および溝

**S D 2** 北端部を西から東へ流れる形状を示し、東端で北東に向きを変える。長さ26.4m以上、幅11.9m以上を測る。深さは最深部で2.2mである。褐色の砂礫層中より6世紀中ごろの須恵器短頸壺や杯蓋が出土している。

**S D 3** S D 2 の南肩を切り込んで南から北へほぼまっすぐに流れる形状を示す。北に向う程狭くなり、全長7.1m、幅は0.5～1.5m、深さは20cmを測る。淡褐色の砂層が堆積し、遺物はみられない。

**S D 11** 古墳の北約1.5mのところに南北流する形を呈する。全長2.6m、幅6.5m、深さは東端で23cmを測る。その東方は未検出である。遺物は出土していない。

**S D 12** 古墳の北方約12～13mに位置し、北西から南東に向って流れる形状を呈する。東端は未検出である。全長4.1m、幅1.5m、深さは東端で53cmを測る。遺物は平安時代の須恵器鉢や6

世紀前半の須恵器杯身や曲物の底が出土している。

**S D 13** 西南端に位置し、S K 119を切り込んでほぼまっすぐに東西流する形状を呈する。全長1.44m、幅は17cmで、東端で10cmの深さを測る。遺物は出土していない。

**S D 14** S D 13の南にS K 119を切り込んでほぼまっすぐに東西流する形状を呈する。全長3.37m、幅26cmで、深さは東端で12cmを測る。遺物は出土していない。 (三宅 弘)

## 2. 遺 物

当地区から出土した遺物は、福王子17号墳の一括出土遺物をはじめとして、縄文時代から近世まで広範囲かつ多種多様に及んでいる。

### (1) 上層遺構出土遺物

#### 1) 掘立柱建物跡出土土器

**S B 101** 柱穴から奈良～平安時代と考えられる緑釉の細片が出土し、他に6世紀前半頃の須恵器杯蓋が混入している。

**S B 102** 6世紀頃の須恵器杯身片が柱穴から出土している。S B 101同様、この須恵器は混入と考えられる。

#### 2) 土塙群出土土器 (図版59)

**S K 101** 覆土の暗灰色砂質土層中より南北朝頃の土師器皿と平安時代の土師器杯身11が出土している。

**S K 102** 奈良時代後半（陶邑IV-3・8世紀第3四半期）の須恵器杯蓋363が出土しているが、混入と考えられる<sup>⑤</sup>。

**S K 105** 平安時代と古墳時代の土器細片が出土している。

**S K 106** 平安時代と古墳時代の土器片が出土しているが、図示しえなかった。

#### 3) 河川跡出土土器 (図版60)

**S D 1** 弥生～鎌倉時代の土器が出土している。18は第V様式と考えられる近江型の甕Dである。19は土師器皿で、鎌倉時代以降にみられる口縁端部に特徴をもたないものであり、20は時期不明の土師器甕である。須恵器杯蓋376・377は6世紀中頃と考えられる。501は灰釉碗で平安時代、502は陶器の壺か甕の底部と考えられるが鎌倉時代以降のものであろう。

#### 4) 包含層出土土器 (図版71・72)

弥生土器187は壺の口縁部であり、188は底部である。

土師器は底部に高台の付けられた杯189・190と小形の甕191である。189は、口径12cm・器高3.4cm・高台径6.4cmで、190は、口径15cm・器高4.2cm・高台径7cmを測る。190は183と同様の形態を呈するもので、189とともに長原遺跡出土例と近似し<sup>⑥</sup>、平安時代後期と考えられる。191は口径12.9cm・器高14cmで、体部最大径は14.6cmを測る。外面体部下半にヘラケズリが施される手法で、高月町井口遺跡の奈良時代の竪穴住居跡（A T11）出土例（19）と類似している<sup>⑦</sup>。しかし、滋賀里遺跡V D区東半3号溝出土例（C 229）は6世紀後半に比定しており、両者に1世紀以上の開きがある<sup>⑧</sup>。192は口径23.6cm・器高40cmを測る長胴甕である。口縁がやや内彎ぎみになり、近江型の特徴を表わしている。滋賀里遺跡V A区18号溝の長胴甕（C 251）と同様の形態を示し、6世紀後半と考えられる<sup>⑨</sup>。

須恵器は、杯蓋が口径10cm・器高5cmを測り、6世紀後半と考えられる。杯身443・444も同時期のものであろう。447は甕の端部であり、高杯脚端部448は7世紀前後と考えられる。

陶器512は江戸時代の灯明皿である。

14世紀以降と考えられる瓦質の三脚付羽釜が2個体分出土している<sup>⑩</sup>（562・563）。

## （2）下層遺構出土遺物

### 1) 竪穴住居出土土器 （図版55）

**S B 1** (1~6) 甕の破片ばかりが一括して出土している。

甕A 1は、短かく「く」の字状に外反する口縁を有し、端部は刻目が施される。甕B 2も同じく口縁が「く」の字に外反するが、端部は凹線が巡る。どちらも長浜市長沢遺跡旧河道I出土土器（図版2の11~23）や滋賀里遺跡に出土例があり、弥生中期中頃～後半とされている。甕D 3~6は、近江型の受口状口縁をもつもので、滋賀里遺跡では中期中頃～後半に比定されている<sup>⑫</sup>。

### 2) 掘立柱建物出土土器

**S B 103** 柱穴から6世紀と考えられる土器が出土しているが混入であろう。

**S B 104** S B 103同様、柱穴から6世紀頃の土器が出土しているが、混入と考えられる。

**S B 105** 柱穴から平安時代の土師器皿が出土している。 (三宅 弘)

### 3) 福王子17号墳出土遺物 （図版32~35・55~58）

当古墳は主体部の遺存は悪いが、きわめて豊富な遺物の出土をみた。その内訳は、鉄釘14点、鉄鎌6点、鉄刀子1点、金銅製針状金属器1点、須恵器杯蓋21点、杯身23点、有蓋高杯蓋3点、無蓋高杯3点、高杯脚1点、壺5点、甕1点、横瓶1点、碌2点、器台2点、土師器壺1点、甕1点の計86点である。

なお、当古墳からは、大津北郊の古墳よりかなりの割合で出土しているミニチュアの炊飯具の出土はみられなかった。以下各遺物について述べてみたい。個々の遺物に関しては遺物観察表を参照されたい。

( a ) 須恵器 (図版32~35・55~57)

### 杯 蓋

杯蓋はA・B・C型式に分けることができ、さらにB型式は3形態に細分される。

A型式 比較的扁平な天井部を持つ。天井部と口縁部との境は1条の沈線により明瞭に画される。口縁内面には内傾する面を有し、天井部の約 $\frac{1}{3}$ に回転ヘラケズリ調整を施す。この型式は榎木原遺跡須恵器編年案(以下榎木原) II類2段階、陶邑編年<sup>⑬</sup>(以下陶邑) II型式2段階に相当する。A型式は掘形から出土した301のみであり、必ずしも古墳の年代を示すものではない。

B-1型式 扁平な天井部を持ち、天井部と口縁の境はわずかにそのカーブにより意識される。口縁内面に浅い凹線がめぐる。天井部の $\frac{2}{3}$ にていねいな回転ヘラケズリ調整を施す(302、303、304、305、306)。

B-2型式 比較的高い天井部を持つ。天井部と口縁部の境は不明瞭である。口縁内面に内傾する面を持ち、天井部の $\frac{2}{3}$ にていねいな回転ヘラケズリ調整を施す(307、308、309、310、311、312)。

B-3型式 基本的にはB-2型式と変わらないが、口縁部はやや外反する(313)。

C型式 やや小形の器形である。丸みをおびた天井部を持つ。天井部と口縁の境は不明瞭である。口縁内面には内傾する面を有し、その中央には浅い凹線がめぐる。天井部には回転ヘラキリ痕をそのまま残し、一部に極端な凹凸の凸部を荒く回転ヘラケズリで削り落すものがある他は未調整である(314、315、316、317、318、319、320、321)。

杯蓋3型式のうち直接埋葬行為に関係するのは、B・C2型式であると思われる。

B型式は3形態に細分され、型式学的には前後関係が認められるが、その時代的な差異はほとんどなく、同時代のものと考えられる。

B型式、C型式共に、榎木原II類3段階に含まれ、各々細部に陶邑II型式3・4段階の要素を持つが、B型式がやや大形で天井部 $\frac{2}{3}$ に回転ヘラケズリ調整を施すのに対して、C型式はやや小形で、天井部がほとんど未調整であることから、B型式は陶邑II型式3段階の後半に、C型式は陶邑II型式4段階の前半に比定されると考えられる。

### 杯 身

杯身もA・B・Cの3型式に分けることができ、さらにB型式は2つの形態に分けることがで

きる。

A型式 たちあがりは長くやや内傾する。受部はやや上方にのび、その上面に凹線がめぐる。底部の $\frac{2}{3}$ 以上に回転ヘラケズリ調整を施す。A型式は榎木原II類2段階、陶邑II型式2段階と同時期と考えてよいだろう。当古墳出土のA型式の杯身は322一点だけで全体の $\frac{1}{4}$ 程の破片での出土で後に流入したものである可能性が強い。

B-1型式 大型の器形で浅めの底部を持ち、たちあがりは比較的短い。底部の $\frac{2}{3}$ 以上に回転ヘラケズリ調整を施す(323、324、325、326、327、328)。

B-2型式 大型の器型でやや深めの底部を持ち、たちあがりは比較的長い。底部 $\frac{2}{3}$ 以上に回転ヘラケズリ調整を施す(329、330、331、333、334)。

C型式 やや小型の器型で、深めの底部を持ち、たちあがりは比較的長く内傾する。底部は未調整で、回転ヘラキリ痕をそのまま残す(335、336、337、338、339、340、341、342、343、344、345)。

B型式は2つの形態に分類されるが、その時代的な差異はほとんどなく、ほぼ同時代のものであると考えられる。

杯身B型式、C型式は共に榎木原II類3段階に相当するが、B型式は大形で底部調整に回転ヘラケズリを用い、たちあがりは短いのに対して、C型式は、たちあがりは長いが、小形で、底部調整を施していないなど、陶邑II型式3段階の要素と陶邑II型式4段階の要素を相方兼備えているが、B型式の方がより古い要素を多く持っていると考えられ、B型式は陶邑II型式3段階後半に、C型式は陶邑II型式4段階前半に相当すると考えられる。したがって、杯蓋B型式は杯身B型式に、杯蓋C型式は杯身C型式にそれぞれ対応させることが可能である。

## 高 杯

有蓋高杯3点、無蓋高杯3点、不明1点の計7点の出土がみられた。そのうち有蓋高杯は蓋の部分のみの出土で、杯部の出土は確認されなかった。

有蓋高杯の蓋は、つまみの形態からA・B2型式に分類される。

A型式 つまみの中央が凹み、その端部が肥厚するもの(350、351)。

B型式 つまみが小形化し、端部が薄く尖り気味に終るもの(352)。

A型式は陶邑II型式3段階に、B型式は陶邑II型式4段階に相当する。

杯部のわかる高杯は3点出土しているが、2系統に分類することができる。すなわち、杯部が蓋杯の蓋を転用したような形状を示し、脚が大きく開くI系統、杯部が楕円形を示し、円筒形の脚柱部を持つII系統である。

I系統に属するのは346・347の2点であるが、さらにこの2点はA・B2型式に分類される。

A型式 (346) 杯部底面にヘラケズリ調整を施す他に、脚端部に内傾する面を有する。陶邑II型式3段階に相当する。

B型式 (347) 杯部は小形化し、未調整である。陶邑II型式4段階に相当する。

II系統に属す348は陶邑II型式4段階に相当し、B型式の高杯と併行する。

349は裾部のみの出土で、その形状は明確ではないが、残存部外面全体にカキ目調整を施す。

### 眞

眞は2点の出土をみた。これもA・B2つの型式に分けることができる。

A型式 口頸基部が比較的太く、口縁部の短いもの (353)。

B型式 口頸基部が細く、口縁部が長く、大きくラッパ状に開くもの (354)。

A型式は陶邑II型式3段階に、B型式は陶邑II型式4段階に相当する。

### 壺

壺は5点出土しているが、その全形を知り得るのは355のみで、他は破片での出土である。

### 甕

1点だけの出土である。口縁部はラッパ状に開き、外面を波状文で飾る (360)。

### 器台

器台は床面より脚部のみ362が1点、床面よりやや浮いた状態で杯部361が1点出土している。

特に362は、破片がA群とD群から別れて出土しており、後世の移動を受けていることを示している。

### 横瓶

閉塞石の下からの出土で、体部の $\frac{1}{3}$ 程の破片である。復原最大径20cm、横幅30cm以上で、外面は平行叩きの後縦方向に荒くカキ目調整を施す。内面には同心円状叩きが残る。

(b) 土師器 (図版35・57)

須恵器に比して土師器の出土量は少なく、わずか2点の出土をみたにすぎない。

壺(7) A群からの出土である。

甕(8) D群からの出土で、いわゆる近江型の長胴甕である。

(c) 金属器 (図版58)

当古墳から出土した金属器は、緊結金具20点、刀子1点、金銅製針状金属器1点の計22点である。緊結金具には釘と鎌がみられる。釘は14点、鎌は6点出土している。

### 釘

頭部の遺存している釘は7点出土しているが、全部が頂部に手を加えず、断面長方形に仕上げてあり、福王子古墳群の分類によれば、C形態に相当する。断面の形態は、正方形(I)、長辺

表1 福王子17号墳 釘計測表

番号	全長	幅	身部断面	頭部形式	備考
8 0 1	1 8.4 cm (残存部)	0.7 cm × 1.1 cm	II	C	
8 0 2	2 4.2 cm	0.8 cm × 1.4 cm	II	C	
8 0 3	2 2.5 cm (残存部)	0.9 cm × 1.6 cm	II	C	
8 0 4	1 5.8 cm	0.6 cm × 1.1 cm	II	C	
8 0 5	1 4.3 cm (残存部)	0.5 cm × 0.95 cm	II	C	
8 0 6	6.6 cm	0.6 cm × 1.1 cm	II		
8 0 7	6.6 cm (残存部)	0.6 cm × 1.2 cm	II		
8 0 8	6.9 cm (残存部)	0.7 cm × 1.0 cm	II		
8 0 9	1 0.35 cm (残存部)	0.5 cm × 1.0 cm	II	C	
8 1 0	6.7 cm (残存部)	0.6 cm × 1.25 cm	II		
8 1 1	3.3 cm (残存部)	0.6 cm × 1.1 cm	II		
8 1 2	1 0.8 cm (残存部)	0.3 cm × 1.0 cm	III		
8 1 3	6.2 cm (残存部)	0.3 cm × 1.0 cm	III		
8 1 4	9.2 cm (残存部)	0.45 cm × 1.35 cm	III	C	

と短辺の比率が2:1以下のもの(II)、長辺と短辺の比率が2:1以上のもの(III)の3形態に分類される<sup>⑯</sup>。

頭部の遺存している釘7点のうち、6点がC-II型式で、残り1点がC-III型式である。

頭部の遺存していない残り7点については断面II型式が5点、III型式が2点である。

当古墳の場合、遺存する頭部がすべてC型式であること、断面III型式の割合が少なく、かつ、II型式と混在したことなどからC-II型式とC-III型式の間には時代差はなく、同時に使用された可能性が強い。C型式は田中彩太氏の分類によればII期に相当し<sup>⑰</sup>、6世紀後半の年代が与えられるよう。

なお、釘に付着している木質は、観察できる資料が乏しいため方向性は見い出し難いが、縦横、相方の木目の方向がみられる。

### 鎌

鎌は6点出土している。いずれも断面長方形の扁平な形状を示し、両端部とも尖らせる。

### 刀子

1点だけの出土である。鍔におおわれ、細部は不明であるが、扁平な形状を示す。

### 金銅製針状金属器

床面からの出土である。直径0.4cm、長さ6.3cm以上を測る細棒状のもので、全体に鍍金されていたと思われるが、大部分は剥落している。

(吉谷 芳幸)

### 4) 土塙墓出土土器 (図版37・38・59)

**S K 1** 小形で卵形に近い体部をもつ丸底の甕9は口径20cm・器高23.9cmを測る。ズン胴の体部をもち、頸部で「く」の字状に外傾しつつ内彎する口縁をもつ甕10は、底部が欠失している。口径24.8cm・器高27.3cmを測る。9の外面体部下間にヘラケズリが施される以外、全てハケ目により調整されている。口縁部はともに内彎し、9の内面にヘラ記号がみられる。端部は9はつまみあげており、10は平坦な面を作る。<sup>⑯</sup>10は井口遺跡で6世紀中頃の須恵器杯蓋と共に伴し、9・10ともに滋賀里遺跡で6世紀後半に比定されている<sup>⑰</sup>。

### 5) 土塙群出土土器 (図版35・38・59~61)

**S K 108** 土師器甕12は10と同様の形態を呈し、6世紀後半と考えられる。

**S K 109** 土師器甕13・14は6世紀後半と考えられる近江型の甕である。13は、12や10と類似し、14は滋賀里遺跡で同様の甕が出土している<sup>⑯</sup>。

須恵器は、底面に貼り付いた状態で6世紀前半の杯蓋364、杯身370、壺374がみられた。覆土からは6世紀前半~後半の杯蓋365~368、杯身369・371~373、壺375が出土している。

**S K 112** 土師器の長胴になると考えられる甕15が出土している。9や14と類似し、6世紀後半と考えてさしつかえないであろう。

**S K 113** 口縁部付近が残存している土師器小形甕16が出土している。口径10.8cm・器高4.7cm以上を測り、滋賀里遺跡V D区東半3号溝(C 223)、同6号溝(C 225)に類似している。C 223は6世紀後半、C 225は6世紀後半～7世紀前半に比定されており、当土器もその頃のものと思われる<sup>②</sup>。

**S K 116** 土師器椀が1点出土している(17)。内面に1段の放射状暗文が施され、口径17.2cm、器高5.2cmを測る。丸底の深い器形で、端部が巻き込む以前の形態をしている。また、口縁が奈良時代以後に普遍的にみられる外反をしていないことなどかなり古い様相を示す。しかし、内面底部にラセン状暗文がみられないことなど新しくみる要素も含んでいる。器高指数は30で、飛鳥II期の杯C類と同様の法量を示していることや、遺存が悪く磨滅が著しいことなど、詳細を述べるには不十分な点が多い。従って、ここでは7世紀中頃前後の土器である可能性を示唆しておきたい<sup>③</sup>。

**S K 117** 平安時代と考えられる土器片が出土しているが図示できなかった。

**S K 118** 古墳時代の須恵器・土師器が出土している。

**S K 125** 須恵器が1点出土している。提瓶379はほぼ完形で出土し、6世紀中頃と考えられる。

**S K 126** 6世紀後半～末の須恵器杯身380が完形で出土している。

**S K 127** 6世紀後半と考えられる土器が出土しているが図示できなかった。

**S K 128** 須恵器の杯蓋381・杯身382とともに6世紀後半頃と考えられるものである。

土師器はほぼ完形の長胴甕23が出土した。口径23.6cm・器高は底部を若干欠失しており40.5cm以上を測る。6世紀後半であろう。

当土塙には、上記の土器の他に縄文土器22が1点混入している。端部直下に突帯を貼り付け、突帯と端部に刻目を施した晩期の甕である。外面の突帯以下に横方向の巻貝条痕を施した滋賀里IV期(A 267・268)などに相当すると考えられる<sup>②</sup>。

#### 6) 河川及び溝出土土器 (図版39・60・61)

**S D 2** 須恵器を3点図示し得た。杯蓋383・384は、ともに6世紀後半のものであり、短頸壺385も同時期のものと考えられる。しかし、南肩を切り込んだ土塙から、6世紀中～後半の遺物が出土しているため、S D 2の遺物はその埋没を示すものではないかと考えられる。

**S D 12** 土師器21は近江型甕の口縁部のみの破片で、6世紀後半～7世紀前半のものと考えら

れ、須恵器杯身378は6世紀中頃のものである。S D 12は、S K 116やS K 117を切り込んでおり、これらの土器は当遺構の埋没時期を示しているとは思われない。

### 7) ピット出土土器 (挿図7、図版39、表2)

A地区の遺構中、ピット出土のもので掘立柱建物としてまとまらなかったものをここに一括して掲げた。

#### 土師器 181~186

杯身(181・182)は同様の形態をしており、法量も近似している。平安時代後期とされている長原遺跡出土例と類似している。<sup>23</sup>

椀(183)は181と共に、平安時代後期と考えられる。184は高台径10.7cmに及ぶ大形品で、底部のみのものである。内面に二重のラセン状暗文が巡らされている。藤原宮 S D 105やS D 2300に同様の椀が出土しており、飛鳥V期(6世紀末~7世紀初頭)と考えられる。<sup>24</sup>

小皿(185)は、口縁の屈曲した平安時代中期以降の土器である。口径は10cm未満である。

甕(186)は6世紀後半の近江型甕である。

#### 須恵器 436~440

杯蓋(436)は6世紀後半であり、杯身437~439は6世紀後半~末と考えられる。438・439は186と共に伴っている。

皿(440)は8世紀前半以降のものであろう。

### 8) 包含層出土土器 (図版71)

須恵器を3点図示し得た。

杯蓋(441)は口径12cm・器高4.2cmで、7世紀前半と思われる。

杯身(445)は口径13.5cm・器高4.6cmで、7世紀初頭であろう。

皿(446)は口径18.9cm・器高1.2cmを測り、440と同形態を呈する8世紀前半以降のものである。

(三宅 弘)

## 3. 小 結

A地区では、西半部の淡褐色砂質層で検出された上層遺構(掘立柱建物S B 101・102、土塙SK 101~107・110・111および河川S D 1)と地山面で検出された下層遺構(竪穴住居S B 1、掘立柱建物跡S B 103~106、古墳、土塙墓SK 1、土塙群SK 108・109・112~128・173、溝S D 11・12、河川跡S D 2)とが検出された。上層は平安時代以降、下層は弥生~平安時代の遺構面と考えら

れる。

## (1) 上層遺構面

### 1) 掘立柱建物

S B101・102ともにほぼ同一方位 (N 11°00' E と N 9°45' E) の総柱建物跡である。S B101出土の縁石は、覆土と柱根跡との区別を明確にしえなかつたため建物の時期は明確にしえない。しかし、S B101に切られている S K101が鎌倉時代の土師皿を出土していることから、S B101は少なくとも鎌倉時代以降の建物と考えられる。S B102 は柱穴から古墳時代の土器が出土しているが、これが混入と考えられ、方位も S B101とほぼ同一であることから、S B101と同時期と考えられる。

### 2) 土 坡

ある程度時期のおさえられる土坡は S K101と S K106で、いずれも平安時代のものである。性格は明らかでない。

### 3) 河 川 跡

北西端を流れる S D 1 は、覆土から鎌倉時代の土師皿などが出土しており、この時期に埋まつたものと考えられる。

## (2) 下層遺構面

### 1) 穴住居

本地区北東隅に約1/4程度検出された状態の S B 1 は、弥生時代中期(第III～第IV様式)の土器が出土し、この時期の住居であることがわかる。平面は方形を呈し、主柱を4本もつ住居とみられる。

### 2) 掘立柱建物

下層で検出された4棟のうち、正確な規模のわかつていな S B104を除くと、東西棟2、南北棟1である。柱並びは不揃いであるが、いずれも近似した方位をもち、ほぼ同時期の可能性が考えられる。S B103と S B104が重複しているが、その先後関係は明らかでない。また、どの建物跡も時期のわかつている他遺構との切り合い関係がみられないため、その時期はおさえがたい。

### 3) 福王子17号墳

(三宅 弘)

福王子17号墳は、今回の調査で発見されたもので、大伴群集墳の東北約110m、福王子群集墳東端の福王子16号墳と大川をはさんで北へ約35mの所に位置している。

大伴群集墳と福王子群集墳は大川によって分かたれているため、当古墳は大伴群集墳として把

握し得るものであるが、今回の調査の結果、現在の大川は鎌倉時代初頭頃つけ替えられたものと考えられるため、鎌倉時代以前には現在の大伴神社付近から北東方向に流れており、SD4・SD6が、その河川跡となることが判明した。したがって当古墳は、福王子群集墳の一部として考え、福王子17号墳とした。

当古墳は奥壁に向って左側に袖部を持つ左片袖式の石室を持ち、袖部は2個以上の石材によって構成される。このような様相は福王子2・6・8・16号墳、飼込15号墳にみられる。また、石室の縦横比率をみると縦横比率は1.78で縦長の長方形を示し、飼込15号墳に最も近い。福王子群集墳には縦長の玄室プランを持つものは少なく、17号墳と近似した縦横比率を示すのは、現在までに調査された中では1号墳だけで、築造年代は6世紀後葉である。また、飼込群集墳においても左片袖式を持つもののうち縦長の玄室を持つものは少なく、10号、15号の2基だけである。うち10号墳は玄室幅1.45m、玄室長2.60mと規模が小さく比較し難い。15号墳はIII期（6世紀後半後葉）に築造されたものであり、同群集墳では中期～後期にあたり、福王子1号墳・17号墳と同様に大津北郊における後期群集墳の玄室プランの縦長化の傾向を示すものである。

次に築造年代をみてみる。当古墳からは陶邑II型式2段階、II型式3段階後半、II型式4段階前半の3型式の須恵器が出土している。しかし、II型式2段階に相当するものは2点の破片だけであり、内1点は掘形からの出土であることからも古墳の築造年代を示すとは考え難い。それに対して残りの2型式の土器は出土量も多く、それぞれ蓋杯、高杯、壺、豆などがセットになって出土していることから、当古墳の築造年代を杯蓋・杯身B型式、高杯蓋A型式、高杯I系統A型式、豆A型式と併行する陶邑II型式3段階に相当する6世紀後半の中葉に置くことができると考えられる。築造年代を示す一群よりも新しい型式の土器は、陶邑II型式4段階と併行する杯蓋・杯身C型式、高杯蓋B型式、高杯I系統B型式、高杯II系統、豆B型式等の一群で、この時期に1度追葬が行なわれたと考えられる。また玄室内土器群B群において杯身ばかりが2～3個重ねられた状態で出土したことが注目される。杯身という中に物を入れて用いる機能を有する土器が重ねられた状態にあるということは、副葬品として供献された原位置を示しているとは考え難く、後に移動を受けた際に重ねられたものと考えられる。また、出土した鉄釘の分布から玄室の西側に南北に長い長方形の棺の位置が復原できるが、出土した土器は、いずれもこの棺の位置に伴うとは考え難く、むしろこの棺に伴う埋葬時に移動を受けたものと考えられる。さらに陶邑II型式4段階と併行する土器以降の土器は1点も出土していないことから、この棺に伴う埋葬には副葬品が全く伴わなかったと推定される。この棺に用いられた鉄釘はC-II型式で田中分類ではII期に相当し、6世紀後半中葉から後葉のものとすることができるところから、これらの鉄釘を当古墳

出土遺物の中では、最も新しいものとすることが可能である。したがって、当古墳は6世紀後半中葉に築造され、6世紀後半中葉から後葉にかけて1回、6世紀後半後葉に1回の少なくとも2回の追葬が行なわれたことが予想される。

当古墳の玄門付近には閉塞石が残存している。最終閉塞状況は不明であるが、この閉塞石群の中に須恵器横瓶の体部破片が混在していたことが注目される。大津北郊において閉塞石群中より大形須恵器の破片が出土した例は、福王子16号墳の甕体部の破片があるが<sup>②</sup>、横瓶の出土した例は管見に触れていない。これらの体部破片は復原しても体部の $\frac{1}{3}$ ほどしかない。このことは、ここで破碎したものが古墳削平時に失なわれたものなのか、他所で破碎した破片のみが運ばれて来たもののかは明らかにし難い。福王子16号墳の場合は、他所で意識的に破碎した後その一部を閉塞石上に安置するという送葬に関わる何らかの儀礼が行なわれたことを予想させたが、当古墳出土の横瓶もまた、何らかの送葬儀礼に関わりをもつものである可能性が大きい。（吉谷芳幸）

#### 4) 土 坂 群

土坂は地形的に古墳より下位にあるもの（SK112・113）と河川の肩にあるもの（SK1・108・109・128）とがみられる。SK1は明らかに合わせ口甕棺墓であると言える。他のSK108・109・112・113・128は明確に甕棺墓としての検出はないが、いずれも甕の破片が検出され、同様の性格が考えられる。時期はいずれも6世紀後半である。SK128には焼けた礫がかなり認められ、あるいは葬制に火を用いていた痕跡の可能性も考えられる。

#### 5) 河川および溝

SD2は、この河川が完全に埋没して、その上に鎌倉時代以降の建物等が作られていることからみれば、少なくともこの時期にはその機能はなくなっていたと判断される。その覆土の上層からは6世紀中頃の須恵器が出土しているが、この河川の肩部には6世紀中葉～6世紀後半の土坂が掘り込まれているので、この時期にはまだ、河川として存在していたとみられる。（三宅 弘）

#### 註

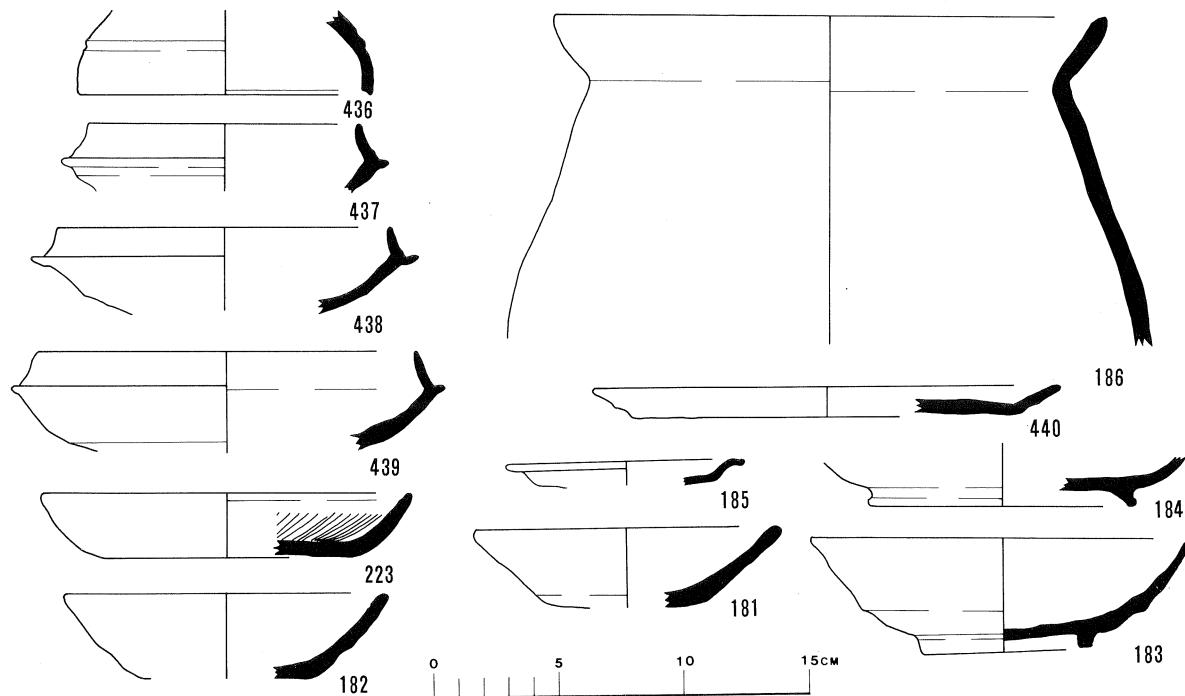
- ① 水野正好・丸山竜平ほか『滋賀県文化財調査報告書』第4冊。（滋賀県教育委員会 昭和45年）
- ② 林博通・葛野泰樹ほか『榎木原遺跡発掘調査報告III』（滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会 昭和56年）
- ③ 吉水真彦ほか『滋賀里・穴太地区遺跡群発掘調査報告書II』（『大津市埋蔵文化財調査報告書』（5）大津市教育委員会 昭和57年）
- ④ 福岡澄男「鉄釘接合木棺の復元と鉄釘について」（『滋賀県文化財調査報告書』第4冊、滋賀県教育委員会 昭和45年） 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」（『考古学研究』第25巻2号 昭和53年）
- ⑤ 中村浩『陶邑I～V』（大阪府文化財調査報告書 第28～33輯 大阪府教育委員会、昭和51年～昭和58年）

- ⑥ 井藤徹・尾谷雅彦ほか『長原』（財）大阪文化財センター 昭和53年
- ⑦ 田中勝弘・林純『埋蔵文化財発掘調査概要報告書－高月町井口遺跡－』（滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会昭和56年）
- ⑧ 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ⑨ 註⑧、前掲書
- ⑩ 泉拓良・宇野隆夫ほか『京都大学構内遺跡調査研究年報』（京都大学埋蔵文化財研究センター 昭和52年）
- ⑪ 中谷雅治ほか「長浜市長沢遺跡（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書III』滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ⑫ 註⑧、前掲書
- ⑬ 註②、前掲書
- ⑭ 註⑤、前掲書
- ⑮ 註①、前掲書
- ⑯ 註④、前掲書
- ⑰ 註⑦、前掲書
- ⑱ 註⑧、前掲書
- ⑲ 註⑧、前掲書
- ⑳ 註⑧、前掲書
- ㉑ 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告II－藤原宮西方官衙地域の調査－』 昭和53年
- ㉒ 註⑧、前掲書
- ㉓ 註⑥、前掲書
- ㉔ 註㉑、前掲書
- ㉕ 註②、前掲書

表2 A地区ピット内出土遺物観察表

遺 器 構 形	土番 器号	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	備 考
IC   74 弥生式土器	壺 180	外反しつつ上方へ伸びる頸部は境界がはっきりしないまま口縁部へ続き、口縁部も外反し水平になる。 端部は、上端がややつまみ上げられている。口縁内部には面をもつ。	剝落、磨滅が激しくわかりにくいが頸部外面に縦方向のハケ目を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 不良、1 mm以下 長石、微細雲母を多く含む。 焼成 不良、軟質
IC   18	杯 181	扁平な底部から直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	横ナデを施すが、範囲は磨滅が激しい為不明。	色調 淡赤褐色 胎土 精良、微細雲母を少し含む。 焼成 やや硬質
IC   65	土身	扁平な底部から口縁部が内弯気味に立ち上がる。 端部は、内面に内傾する面をもつ。	底部内面、口縁部内外面はナデ調整。 特に口縁部外面はナデの跡が著しく凸凹がある。 底部外面はヘラケズリ調整。	色調 黄褐色 胎土 2 mm以下 長石、微細雲母、0.5 mm以下のクサリ礫を含む。 焼成 良好、硬質
IC   18	師 183	雑な作り。 ゆがみが激しい。 浅い器形であり、内弯気味に外方に伸び 口縁端部は丸くおさめる。		色調 乳褐色 胎土 精良 焼成 軟質
IC   4	椀 184	扁平な底部から内弯気味に口縁部が上方に伸びる。 高台は、底部と口縁部の境界に付き、外 方へややふんばっている。 外面がややくぼんでいる。 はり付け高台である。	外面はナデ調整。 内面は、ナデ調整の後、底部中央部に不正な暗文がある。 底部から口縁部の境界にかけてはラセン状暗文がめぐる。	色調 外面淡黄褐色 内面黄褐色 胎土 0.5 mm以下 長石と微細雲母を含む。 焼成 良好、硬質
IC   16	皿 185	口縁は外弯して屈曲し端部手前で、上方に反り上がる。 端部は内側に折り返し気味におさめる。 全体にひずむ。		色調 淡褐色 胎土 概ね精良、金雲母粒を含む。 焼成 軟質
IC   23	甕 186	口縁は短く内弯しつつ上方へ伸びる。 口縁基部では内側はなだらかであり稜を作らない。外面は指幅のわずかな曲面を作 る。 故に頸部の断面では、下半がやや薄く、 上半は比較的厚い。 体部はなで型のやや長めの体部であろう。	口縁は内外面ともナデ調整。 体部は磨滅が激しく不明。	色調 明黄褐色 胎土 粗い、3 mm以下 長石、クサリ礫を多く含む。 焼成 不良、軟質
IC   73 須恵蓋	杯 436	口縁部は垂直に立つ。 端部内面は段をなす。 口縁部と天井部の境界は、鈍い稜をなす。 天井部は内弯気味に丸くなる。	残部はナデ調整。	色調 青灰色 胎土 0.5 mm以下 長石、クサリ礫を含む。 焼成 硬質
IC   3	器杯 身 437	立ち上がりはやや外弯し、しかもやや内 傾し、端部は丸くおさめる。	全面横ナデを施す。	色調 白青紫灰色 胎土 概ね精良

			受部は、水平につまみ出し端部は薄めである。		焼成 やや軟質	
IC   23	須 惠	杯 身	438	口縁の立ち上がりは内傾し端部は丸くおさめる。 受部は意識的に作り出されたらしく鋭く外上方に伸びる。 受部端部は鈍い陵になる。	体部内面、立ち上がり内外面、受部は、横ナデを施す。 体部外面に回転ヘラケズリの痕跡がある。 底部は未調整だが残部が少ないので、不明確。	色調 暗灰色、紫灰色 胎土 1mm以下の長石、微細雲母を含む。 焼成 良好、硬質
			439	口縁は立ち上がりは高く内傾している。 端部は丸くおさめる。 受部はほぼ水平に外方向へ伸び、端部は丸くおさめる。	底部外面にヘラケズリを施す。 他の部分は全て横ナデを施す。	色調 淡灰色、黄斑褐色 斑 (1~3mm) 多く含む。 胎土 粗い、4mm以下の長石を含む。 焼成 良好、硬質
IC   14	器	皿	440	扁平な底部から、口縁部が外反気味に上方へ伸びる。 端部は丸くおさめる。 浅い皿である。	底部内面縁辺部、口縁部は横ナデを施す。 底部内外面は未調整。 全体的に磨滅している。	色調 淡黄灰色 胎土 0.5mm以下の長石、微細雲母を多く含む。 焼成 普通、やや軟質



挿図8 A地区柱穴出土遺物実測図

表3 A地区 出土遺物観察表

遺構	器形	土番 器号	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
S B 式 土 器	弥生 甕	1	口縁は「く」の字状に屈曲する。 体部はやや内弯気味に内傾する。 端部はやや肥厚する。 外面全体にススが付着する。	口端面に刻みを入れる。 体部外面は縦方向の粗いハケ調整、他はナデ調整。	色調 内面明褐色、 外面暗灰色 胎土 0.3 mm位の長石粒を含む。 焼成 やや軟質
		2	体部はやや内弯気味に内方に伸びる。 口縁は「く」の字状に外方に屈曲する。 口縁の端面には浅い凹線がめぐる。	体部外面は平行線状の叩きの後、ハケ調整。 内面は横方向のハケ調整。	色調 明褐色 胎土 良好 焼成 硬質
	甕	3	口縁は外弯気味に伸びた後、端部を上方につまみ上げる。	口縁内面には指による凹線がめぐる。 口縁屈曲部外面、斜方にハケによる装飾を施す。 下部は縦方向の粗いハケ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5 mm位の長石粒を含む。 焼成 やや軟質
		4	口縁はラッパ状に開き、端部は上方につまみ上げる。 端部は丸くおさめる。	内面は平行方向の粗いハケ調整。 口端外面は斜方向のハケ調整。 頸部は縦方向のハケに斜方向のハケを加え、山形文風に仕上げる。	色調 暗褐色 胎土 0.5 mm位の長石粒を含む。 焼成 硬質
	甕	5	口縁はラッパ状に開いた後、上方につまみ上げる。 口端には浅い凹面がめぐる。	口縁外面屈曲部は斜方向のハケ状の文様を施す。 頸部外面は縦方向の粗いハケ調整。 内面は横方向のハケ調整。	色調 明褐色 胎土 0.3 ~ 0.5 mm位の砂粒を含む。 焼成 硬質
		6	口縁は外弯気味に伸びた後、直立し、端部に水平な面を有する。 口端内側には刻みを入れる。	口縁内面は横方向のハケ調整。 屈曲部にはハケが強く入り、断面3角形状の刻みがめぐる。 口縁外面（屈曲より上）は、斜方向の線状の文様を施す。	色調 乳褐色 胎土 0.5 ~ 1 mm位の砂粒を含む。 焼成 硬質
S K 器	土師甕	9	体部は丸底でやや卵型に近く、口縁は「く」の字状に外へ曲折してやや内弯気味に立ち上がる。 端部はほぼ水平な面をもつ。 口縁内面にヘラ状工具による記号的文様が見られる。 体部外面に指圧痕が多数見られる。器形はゆがんでいる。	内外面体部上半は、斜方向のハケ調整。 外面体部下半は、下から上へのヘラケズリ調整。 内面体部下半は縦方向のハケ調整。 内面底部は不整方向のハケ調整。	色調 淡褐色 外面底部に径60cm位の黒斑 胎土 2 ~ 3 mmの石英と1mm位の赤色粒などを多く含む。 焼成 軟質
		10	体部はずん胴で、頸部で「く」の字状に外方へおれる。 口縁は、外面のみ肥厚させつつ、やや内弯気味に立ち上がる。 端部は水平な面をもつ。	体部から頸部は内外面ともにハケ調整。 口縁部のみ外面にハケ調整。 横ナデは口縁のみに見られ、外面はハケ目のうちに施している。	色調 褐色 胎土 2 ~ 3 mmの石英、長石、雲母等を少し含む。 焼成 やや硬質
S K 101	土師器身	11	底部はほぼ水平である。 口縁は内弯気味に伸びた後、端部近くで外反する。	口縁内外及び内面全部は横ナデ調整。 底部外面は未調整。 成形は手づくね。	色調 赤褐色 胎土 おおむね精良 1 mm位の長石を数

			端部は丸くおさめる。		個含む。 焼成 硬質
SK   102	須杯 惠 器蓋	363	口縁部は外弯し、端部は下向きに屈曲する。 端部は断面三角形である。 つまみは付くと思われる。	口縁端部は横ナデ調整。	色調 暗（青）灰色 胎土 0.5 mm程の長石粒を含む。 焼成 軟質
SK   108	土甕	12	体部はナデ肩である。 頸部は内弯し、口縁部を有する。 口縁端部は内側に傾斜する面をもつ。	全部はハケ目があり、体部上方は斜方向のハケ目のち横方向のハケ調整。 ハケ目は非常に雑である。 口縁は、ナデ調整。	色調 橙褐色 胎土 1 mm位の石英、長石等を含む。 焼成 やや軟質
師 器 壺		13	口縁部は内弯しながら外上方へ伸びる。 端部内面に内傾する面を有する。	体部内外面にクシ目を施す。 口縁部はナデ調整。	色調 赤褐色 胎土 0.5 mm位の長石、石英を少し含む。 焼成 硬質
		14	口縁部は内弯気味に外方向へ伸びる。 端部は内傾する凹面を有する。	体部に縦方向のクシ目を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 1 mm位の長石、石英を多く含む。 焼成 やや硬質
SK   109	須蓋	364	口縁部はやや内弯しながら垂直に下り、端部内面に内傾する凹面を有する。 天井部と口縁部の境界には短く鋭い稜を有する。稜の直下に1条の沈線をめぐらす。	天井部全体はヘラケズリ調整。 他はナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 1 mm前後の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		365	口縁部はやや内弯しつつ垂直に下り、端部内面に内傾する凹面を有する。 稜は短く鈍い。	全体にナデ調整である。	色調 明灰色 胎土 1 mm程の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		366	口縁部は内弯気味に外下方へ下り端部は内傾する凹面を有する。 天井部は低く平らで稜は鈍い。	天井部は全体にヘラケズリ調整。 天井部内面中央部分にハケ状のもので器壁をかき削ったような痕跡がある。 他はナデ調整。	色調 青灰色 胎土 1 mm程の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		367	口縁部は内弯しながら外下方へ下り端部は内傾する凹面を有する。 稜は鈍い。	ナデ調整。	色調 明灰色 胎土 3 mm位の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		368	口縁部は内弯気味に外下方へ下り、端部は内傾する凹面を有する。 稜は短く鋭い。	ナデ調整であるが、天井部 $\frac{1}{3}$ ほど磨滅している。	色調 明灰色 胎土 3 mm前後の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
惠		369	受部は水平気味で端部は丸くおさめる。 立ち上りは内傾気味に伸び、端部は丸くおさめる。	内面は全体的に回転ナデ調整を施す。 回転ヘラキリ未調整。 受部の $\frac{1}{3}$ から口縁、内面全体にかけては横ナデ調整。	色調 明灰色 胎土 良好、1 mm程の黒色斑点を含む。 焼成 やや軟質
		370	立ち上りはやや外反しつつ内傾し、端部は丸くおさめる。	全体にナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 2 mm程の黒色

		杯	受部はほぼ水平に伸び、端部は丸くおさめる。		粒子と 0.5 mm の長石粒を少し含む。 焼成 やや硬質
器	身	371	立ち上りは、外反ぎみに内傾しながら伸び 端部は丸くおさめる。 受部は水平で短く、先端をつまみ上げ丸く おさめる。	ナデ調整。ヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 0.5 mm 程の黒色粒を少し含む。 焼成 硬質
		372	立ち上りはやや外反しながら内傾し、端部 は丸くおさめる。 受部はやや外上方に短かく伸び、端部は丸 くおさめる。	ナデ調整。 底部全面はヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 0.5 mm 程度の長石粒を少し含む 焼成 硬質
		373	立ち上りはやや外反気味に垂直に立ち上り 端部は丸くおさめる。 受部は水平に伸び、端部は丸くおさめる。	ナデ調整。 底部全面はヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 0.5 mm くらいの石英粒を少し含む。 焼成 やや硬質
		374	口縁部は外反しながら外上方へ伸び、端部 は上方へつまみ上げ、丸くおさめる。	ナデ調整。カキ目調整。	色調 明灰色 胎土 0.5 mm 程の長石粒を少し含む。 焼成 やや硬質
壺	壺	375	口縁部は外反して外上方に伸び、端部は水 平に外方へつまみ出し、先端は丸くおさめ る。	全体にナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 1 mm 程の黒色粒を少し含む。 焼成 やや軟質
SK 112	土	15	口縁は、体部より屈折して外方に開き内弯 気味に立ち上がる。 口縁上端は、内傾する狭い面をつくり、こ の面は中央部がややへこんでいる。 端部は、ほんのわずかつまみ出されている。 体部は、口縁接合部からあまり開かず、下 方へ伸びる。	口縁外面はナデの後がくっきりと残る。 体部外面は、斜位のハケ目を施す。口縁接 合部では、ナデ調整によりほとんど消えて いる。 内面は斜位のハケ目を施す。口縁接合部で はナデ調整により消され、接合部は狭い面 になっている。	色調 淡黄褐色 胎土 2 mm 以下の長石、0.5 mm 以下の雲母を含む。 焼成 やや軟質
SK 113	師	16	頸部は「く」の字状に曲折し、内弯しなが ら口縁部に至る。 端部は丸くおさめる。 胴部内面上方に段を有す。	胴部にクシ目を施す。	色調 暗褐色 胎土 0.5 mm 位の石英粒を少し含む。 焼成 やや軟質
SK 116	器 椀	17	底部は丸みを帯び内弯して立ち上がる。 口縁部はナデのため垂直気味になる。 端部はやや外方へつまみ出し気味で、内面 に段をもつ。	内面は、口縁より底部に至るまで放射状暗文 が 1 段施されている。 暗文は 8 つの単位に分かれそれぞれ約 7 ~ 16 本を数える。 見込みには多方向のナデが施される。 外面は磨滅が激しく不明である。ナデ調整。	色調 淡黄褐色と淡赤褐色が半々 胎土 2 ~ 4 mm 位の長石、石英及び雲母を多く含む。粗 い。 焼成 軟質
SK 125	須提 器 瓶	379	体部は円形を呈する。 口縁はラッパ状に開き端部は丸くおさめる。	体部は外面に格子叩き、内面に同心円文叩 きの後カキ目を施す。 口縁接合部内側に指圧痕有り。	色調 明灰色 胎土 精良 焼成 硬質

SK 126	杯身	380	体部から底部にかけてはゆるやかに曲線を描き底部は平らである。 受部は外方へ伸び端部は丸くおさめる。 立ち上りは内傾し端部は丸くおさめる。	内面と外面の一部にヘラケズリ調整を施すが、ほとんどナデ調整である。 内面の底部に輪積痕が残っている。 外面の底部は未調整。	色調 暗青灰色 胎土 黒色粒子を含む。 焼成 硬質
縄文式土器	甕	22	口縁は内傾しながら伸び端部に刻み目を施す。	端部直下に刻み目のある突帯をはりつける それ以下は、ヘラケズリ風の調整を施す。 内面は不定方向のナデ調整。	色調 暗褐色 胎土 0.5 mm位の長石粒を全体に含む。 焼成 堅緻
SK 128	土師器	23	最大腹径は器高のほぼ中心にある。 口縁は、長楕円の体部にはぼまっすぐに開く。 口縁端部は丸くおさめる。 全体に器面が荒れている。	口縁は横ナデ調整。 体部上方に横及び斜位のハケ目の後少し削り跡を有する。 体部中心から下方にかけて、縦の密なハケ目を有する。 底部は、横位のハケ調整。	色調 明褐色 胎土 下半、炭素付着 1 mm位の石英、長石粒などを含む。 焼成 やや軟質
須恵器	杯蓋	381	天井部と口縁部の境は明瞭である。 口縁内面に内傾する面を有する。		色調 暗青灰褐色 胎土 精良 焼成 硬質
	杯身	382	やや深い器形である。 立ち上りは広く内傾する。 受部はやや上方に短く伸びる。 端部はいずれも丸くおさめる。	ナデ調整、及びヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 0.3 mm程の長石を多く含む。 焼成 軟質
弥生式土器	甕	18	二重口縁部であるが端部が外反しない形である。	端部に沈線が1条めぐる。 口縁2段目に3点の刺突列点文がめぐる。	色調 内面暗灰褐色 外面淡褐色 胎土 1 mm位の石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 やや軟質
SD 1	土師器	19	底部と口縁部との境が明瞭に区別できる。 端部は、やや尖りぎみであるが丸くおさめる。 若干、外反気味に立ち上がり、端部は少し上に向く。	ナデは2層に分けられているようである。 横ナデ調整であるが、磨滅が激しく不明である。	色調 淡褐色 胎土 1 mm以内の石英、長石、雲母を多く含む。 焼成 やや硬質
	壺	20	口頸部は、やや内弯しながら「く」の字状に開き端部は丸くおさめる。		色調 明黄灰色 胎土 1~2 mmの長石、石英粒を少し含む。 焼成 やや軟質
須恵器	杯蓋	376	天井部と口縁部の境に、やや鈍い稜線が走る。 口縁はやや内弯気味に伸び、端部は丸くおさめる。 端部内面に斜めの面を有し、その中央に浅い凹線をめぐらす。 全体に丸味を帯びて、シャープさに欠ける。	天井部の約1/2にヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 0.5 mm程の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		377		ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 粗雑 長石粒

SD 1	灰釉陶器	碗	501	口縁部は、内傾気味に立ち上り、端部付近でわずかに外反し、端部は丸くおさめる。	全体を横ナデ調整し、最後に口縁部を再調整している。	を含む。 焼成 やや軟質 色調 淡黄緑色 胎土 長石粒を少し含む。 焼成 硬質
	陶器	壺	502			色調 内、外面暗茶褐色 胎土 1～2mm程の石英、長石粒を多く含む。 焼成 硬質
SD 2	須	杯	383	天井部からほぼ垂直に下がり端部は内面に1条の沈線がめぐる。 天井部と口縁部の境は明瞭な段をもつ。 口縁部外面にヘラ状工具で描かれた沈線が2条めぐる。	天井部下端付近に回転ナデ調整にはば直角の形でナデ調整がみられる。	色調 青灰色 胎土 1～3mmの石英、長石等を多く含む。 焼成 硬質
	蓋		384	天井部を欠くが、口縁部は明瞭な段を有さずにはば垂直に伸びる。 端部は内面に段を有しやや外反気味となる。 器壁は薄い。	ヘラケズリ調整、横ナデ調整。	色調 外面茶灰褐色 内面暗灰褐色 胎土 1～2mmの石英、長石等を多く含む。 焼成 硬質
	器短頸壺		385	ほぼ平坦な底部より内弯しながら体部が上り口縁部に至る。口縁は短く上方につまみ上げ端部は丸くおさめる。 最大径は中央より上位にあり肩を形成する。 肩の上部に浅い凹線がめぐる。 底部に自然釉が付着する。	横ナデ調整、ヘラケズリ調整、ナデ調整。	色調 明灰色 胎土 精良 焼成 硬質
SD 12	土師鉢器		21	口縁部に向かって内弯気味に外反する。 口縁に水平な面を有する。	表面は斜位のハケ調整。 裏面は横方向のハケ調整。	色調 淡赤黃灰色 胎土 長石、石英粒を含む。 焼成 やや軟質
	須杯		378	口縁部、内傾外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。 受部は水平に伸び、端部は丸くおさめる。 扁平な底部より、体部は角度をもって立ち上がる。	ナデ調整及びヘラケズリ調整。 底部全面にヘラケズリ調整。	色調 青灰色 胎土 長石粒等を多く含む（2mmくらい）。 焼成 硬質

A地区 福王子17号墳 出土遺物観察表

器形	細分類	土番 器号	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
杯蓋	A	301	天井部は扁平で内弯気味に降る。 口縁内面に内傾する面を有する。 天井部と口縁の境に1条の凹線がめぐりその境を画す。	天井部の1/2に荒いヘラケズリ調整。	色調 外面黒灰色 内面暗灰色 胎土 0.3mm程の長石粒を少し含む。 焼成 良好
		302	天井部は扁平でやや内弯気味に降る。 口縁内面に浅い凹線がめぐる。 端部は丸くおさめる。	天井部の1/2に回転ヘラケズリ調整。	色調 淡灰色 A群出土 胎土 良好 外面に5mm大の長石有 内面に長石粒多い 焼成 良好
		303	天井部はやや丸みを帯び、やや内弯気味に降る。 302に同じ。	302に同じ。	色調 明紫灰色 A群出土 胎土 精良 焼成 良好
	B I	304	天井部は扁平で、なだらかに降った後、口縁は下方に伸びる。 天井部と口縁の境は明瞭である。 口縁内面に内傾する面を有する。	天井部の3/4に回転ヘラケズリ調整。	色調 明灰色 B群出土 胎土 0.5mm程の長石粒を少し含む。 焼成 良好
		305	やや平坦な天井部を有する。 口縁はなだらかに降る。 端部は丸くおさめる。	マキアゲミズビキ成形 天井部の約1/2に回転ヘラケズリ。 天井部内面に同心円叩痕が残る。他は回転ナデ調整。	色調 明灰色 A群出土 胎土 1mm角程の長石粒を全体に含む。 焼成 良好、堅い
	B II	306	扁平な天井部。 なだらかに降り口縁に至り下方に曲り口縁と天井の境を意識する。 口縁内面に内傾する面を有する。 端部は丸くおさめる。	天井部の1/2以上に回転ヘラケズリ調整。	色調 青灰色 B群出土 胎土 良好(長石、石英多少含む) 焼成 堅緻
		307	口縁は内弯気味に降る。 口縁内面に内傾する面を有する。	不明	色調 明灰色 B群出土 胎土 0.3mm程の長石粒を少し含む。 焼成 やや不良
		308	307に同じ。	306に同じ。	色調 暗灰色 B群出土 胎土 0.3mm程の長石粒を少し含む。 焼成 良好
		309	口縁は内弯する。	306に同じ。	色調 明灰色

				B群出土 胎土 0.5 mm程の長石粒を少し含む。 焼成 良好
杯	B 1	310	天井部は平坦に近い。 口縁端部は、やや尖り気味で内面に内傾する面を有する。	マキアゲミズビキ成形 天井部の約3/4回転ヘラケズリ調整。 他は内外面とも回転ナデ調整。 回転ヘラケズリ調整。
		311	天井部は丸みを帯び、なだらかに降る。	マキアゲミズビキ成形 天井部の1/3に回転ヘラケズリ調整。
		312	やや丸みを帯びた天井部。 口縁は内弯気味に降る。 口縁内面に内傾する面を有する。	302に同じ。
蓋	B 1 3	313	天井部はやや丸みを帯び、なだらかに降る。 302に同じ。	色調 黒灰色 B群出土 胎土 良好 (2.3 mm大の長石多く含む) 焼成 やや柔らかい
		314	天井部は平坦で急に曲り口縁に至る。 端部内面に内傾する面を有する。	天井部回転ヘラ切り跡をそのまま残す。 天井部の1/3をナデのはげしい凹凸の上面のみヘラで削る。
		315	天井部はやや丸みを帯びる。 天井部と口縁の境は、わずかにそれとわかるようなナデの線がめぐる。	天井部に回転ヘラカリ跡を残す。
C		316	天井部は平坦でなだらかに口縁に至る。 口縁内部に内傾する段を有する。	315に同じ。

杯 蓋	C	317	やや高めの天井部。 口縁内面に内傾する面を有する。 天井部と口縁の境は不明瞭。	315 に同じ。	色調 淡灰色 D群出土 胎土 良好 焼成 良好
		318	天井部は比較的高い。 口縁内面に内傾する面を有する。 天井部と口縁の境は不明瞭。	315 に同じ。 天井部を荒いヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 0.3 mm角程の 長石粒を少し含む 焼成 良好
		319	比較的高い天井部より口縁はなだらかに降 る。 口縁内部に内傾する面を有する。	315 に同じ。	色調 明灰色 A群出土 胎土 良好 焼成 ややあまい
		320	天井部はやや扁平で口縁はなだらかに降る。 口縁内面に内傾する面を有する。	315 に同じ。	色調 灰色 B群出土 胎土 良好（外面に 2~5 mm大の長石 を多く含む） 焼成
		321	320 に同じ。	315 に同じ。	色調 暗灰色 B群出土 胎土 良好（白色砂 礫を含む） 焼成 良好
		A	322 323	丸味を帯びた底部。 立ち上りは長く上方に伸びる。 受部中央に段を有する。 いずれも端部は丸くおさめる。  扁平な底部。 立ち上りは短く、内傾する。 受部はやや上方に向く。 いずれも端部は丸くおさめる。	底部 $\frac{1}{2}$ 以上にヘラケズリ調整。  底部 $\frac{1}{2}$ に雑な回転ヘラケズリ調整。
杯 身	B I 1	324	扁平な器形。 立ち上りはやや長めで上方に伸びる。 受部は水平に近い。 いずれも端部は丸くおさめる。	底部の $\frac{2}{3}$ に回転ヘラケズリ調整。	色調 外面青灰色と 暗灰色が半々、内 面暗青灰色 D群出土 胎土 1~2 mmの石 英粒、長石粒を含 む。 焼成 やや堅い
		325	扁平な底部。 立ち上りは短く内傾する。 受部は水平。 いずれも端部は丸くおさめる。	324 に同じ。	色調 明灰色 B群出土 胎土 0.3 mm程の長 石粒を含む。

			焼成 良好
杯	B	326 扁平な底部。 立ち上りは短く、垂直に近く上方に伸びる。 端部は丸くおさめる。	324 に同じ。  色調 外面暗紫色 内面暗灰色 B群出土 胎土 精良 焼成 良好、堅い
		1 327 底部は扁平で、立ち上り短くやや上方に伸びる。 受部は水平に近い。 端部は丸くおさめる。	底部 $\frac{1}{2}$ に回転ヘラケズリ調整。  色調 灰青色 B群出土 胎土 長石粒含む がおむね良好 焼成 堅緻
		328 扁平な底部。 立ち上りはやや長めで受部はやや上方に伸びる。 いずれも端部は丸くおさめる。	324 に同じ。  色調 明紫灰色 胎土 精良 焼成 良好
	I	329 扁平な底部。 立ち上りは長く、内傾した後上方に伸び、 端部は丸くおさめる。 受部は水平。	327 に同じ。  色調 黒灰褐色 B群出土 胎土 砂礫を多少含むが良好 焼成 良好
		330 扁平な底部。 立ち上りは短めで内傾する。 受部は短く、やや上方に伸びる。 いずれも端部は丸くおさめる。	324 に同じ。  色調 暗青灰色 部分的に淡灰色 A群出土 胎土 1～2 mmの長石等を含む 焼成 良好
	身	B I 2 331 扁平な底部。 立ち上りはやや長めで内傾する。 受部はやや上方に伸びる。	底部回転ヘラ切り跡を残す。 その上方を回転ヘラケズリ調整。  色調 暗灰色 B群出土 胎土 良好だが1 mm大の白色砂礫を多少含む。 焼成 良好
		333 やや浅めの器形。 立ち上りは短めで内傾する。 受部はやや上方に伸びる。 端部は丸くおさめる。	324 に同じ。  色調 外面 $\frac{1}{2}$ 黒灰色 $\frac{1}{2}$ 灰色内面青灰色 A群出土 胎土 良好 焼成 堅緻
		334 丸味を帯びた底部。 立ち上りはやや短めで内傾し、端部は丸くおさめる。 受け部はやや上方に向く。 口径はやや大きめである。	底部の $\frac{2}{3}$ に回転ヘラケズリ調整。 内面に巻き上げ痕を明瞭に残す。  色調 外面黒灰色 $\frac{1}{2}$ に自然釉付着 内面淡青灰色 B群出土 胎土 良好（内面に長石粒非常に多い） 焼成 堅緻

杯 身	C	335	やや深く、丸味を帯びた底部。 立ち上りはやや長めで内傾する。 受部はやや上方に伸びる。 いずれも端部は丸くおさめる。	底部に回転ヘラ切り跡をそのまま残す。	色調 青灰色 B群出土 胎土 わずかに長石粒を含む。 焼成 堅緻
		336	丸味を帯びた底部。 立ち上りはやや長めであるが内傾する。	335に同じ。	色調 外面暗青灰色 内面青灰色 B群出土 胎土 良好だが2.3mm大の長石を多く含む。 焼成 良好
		337	やや小型。 扁平な底部。 立ち上りは長めで内傾する。 受部は水平に近く、いずれも端部は丸くおさめる。	323に同じ。	色調 淡灰色 A群出土 胎土 良好 焼成 良好
		338	扁平な底部。 立ち上りはやや長めで受部はやや上方に伸びる。	335に同じ。	色調 暗灰色 A群出土 胎土 1~3mmの砂礫を多少含む。 焼成 良好
		339	底部は平坦に近い。 立ち上りはやや長めで、内傾した後上方に伸びる。 受部はやや上方に向って伸びる。 いずれも端部は丸くおさめる。	底部は回転ヘラ切り跡を残し、その上部をわずかに回転ヘラケズリ調整。	色調 青灰色 B群出土 胎土 良好 焼成 良好
		340	やや深めの器形。 立ち上りは長めで内傾する。 受部は水平に伸びる。 いずれも端部は丸くおさめる。	335に同じ。	色調 暗青灰色 B群出土 胎土 長石粒含む 焼成 堅緻
		341	底部は丸みを帯び、やや深い。 立ち上りは比較的長く内傾する。 受部は水平に近い。	335に同じ。	色調 黒灰色 胎土 1~3mm大の白色砂礫を多少含むが良好 焼成 良好
		342	丸味を帯びた底部。 立ち上りはやや長め。 受部は丸くおさめる。	335に同じ。	色調 暗灰色(やや青味を帯びる) B群出土 胎土 1~3mmの石英粒、長石粒等を含む。 焼成 良好
		343	底部は丸みを帯びる。 立ち上りは長めで、やや上方に伸びる。	335に同じ。	色調 暗灰青色 A群出土

杯 身	C	受部は短めで水平に伸びる。 いずれも端部は丸い。		胎土 長石粒を含む が概ね良好 焼成 堅緻
		344 底部は扁平な形状を示す。 立ち上りは長めで直線的に内方に伸びる。 受部は短めでやや上方に伸びる。 いずれも端部は丸くおさめる。	331 に同じ。	色調 青灰色 A群出土 胎土 長石粒わずか に含む。 焼成 堅緻
		345 底部は丸みを帯びやや深い。 立ち上りはやや短かめで内傾し、端部は丸 くおさめる。 受部は水平に外方に伸びる。	底部外面は、未調整で回転ヘラ切り跡をそ のまま残す。	色調 青灰色 B群出土 胎土 長石粒を含む が概ね良好 焼成 堅緻
高 杯 (無 蓋)	A	346 杯部、浅めの器形。 端部は丸くおさめる。 脚部、脚基部は比較的太く外反気味に降る。 脚柱部に1段の長方形3方スカシを杯部と の接着後穿つ。	杯部底部 $\frac{1}{2}$ に回転ヘラケズリ調整。 杯部底部外面にヘラ状工具による沈線が4 条つけられる。 他の部分はナデ調整。	色調 暗青灰色 A群出土 胎土 1～5mm位の 石英、長石等を多 く含む。 焼成 良好（やや甘 いか？）
	B	347 杯部 体部は内弯気味に伸びた後、口縁に 至りやや外反する。 端部は丸くおさめる。 脚部 脚柱部は垂直に降った後、裾部はな だらかに開いた後、端部内面に段を 生ずる。	3方にスカシを有するが、上半分は内側が 閉じている。 他の部分はナデ調整。	色調 暗灰色、淡灰 色 A群出土 胎土 良好 焼成 堅緻
	II	348 杯部 口径小さく口縁はやや内弯し、端部 は丸くおさめる。 脚部 脚柱は長い円筒状を呈す。 脚端は、外反気味に伸び端部は丸く おさめる。	杯部 壊部中央より下位に連点文を施す。 脚部 脚柱部をカキ目で調整した後、スカ シを3方に穿つが、孔にまで至らず 溝状の切り込みで終わる。	色調 明灰褐色、内 面および脚部外面、 壊部の一部に黒緑 褐色自然釉付着 A群出土 胎土 良好均質 焼成 良好で堅い
		349 脚部 裾部はやや外反ぎみに降る。 端部はほぼ水平な面をなす。	全体をカキ目調整。	色調 黒灰色 胎土 良好、白色砂 粒を少し含む。 焼成 良好
高 杯 蓋	A	350 扁平な天井部。 天井部と口縁の境は不明瞭。 口縁内面に内傾する面を有する。 天井部中央に、中央の凹んだつまみがつく。	天井部の $\frac{2}{3}$ に回転ヘラケズリ調整。	色調 黒灰色 胎土 良好だが長石 粒が非常に多い。 焼成 堅緻
		351 天井部のみ残存。 ツマミの中央は大きく凹む。	天井部は回転ヘラケズリ調整。	色調 暗灰色 胎土 1mm程の長石 粒を全体に含む。 焼成 良好

高 杯 蓋	B	352	天井部はやや丸味を帯びる。 口縁内面に内傾する面を有する。 天井部中央に、中央の凹んだつまみがつく。	天井部 $\frac{1}{2}$ に回転ヘラケズリ調整。	色調 暗灰色 D群出土 胎土 1mm程の長石粒を多く含む。 焼成 良好、堅い
	A	353	体部 ほぼ球形を呈する。 肩部に円孔を穿つ。 口頸 基部は比較的太く、大きくラッパ状に開く。 口縁端部はほぼ水平で、その中央に浅い凹線がめぐる。	口頸部上位と体部中央に浅い凹線がめぐる。 口頸部には3段にわたって雑な波状文を施す。 体部肩部に刺突文をめぐらす。 他の部分はナデ調整。	色調 体部明灰色 口縁部黒灰色 一部に黒色自然釉付着。 C群出土 胎土 精良 焼成 良好、堅い
甌	B	354	体部 やや平らな肩と、球形に近い底部を有する。 口頸 基部は細く体部から大きくラッパ状に開く。 口縁は一坦水平に外方に伸びた後、再び外上方に伸び、端部はつまみ出し気味に丸くおさめる。	口縁部下部、頸部中央、体部中央に1条ずつ凹線がめぐる。 口縁部はカキ目で調整した後、波状文を施す。 頸部は凹線より上位は、カキ目で調整した後に波状文を施す。下位はカキ目調整のまま。 体部はカキ目で調整した後、中央に刺突文を施し、その後穿孔する。他の部分はナデ調整。	色調 暗灰色、黒褐色自然釉一部付着 ( $\frac{1}{3}$ ) A群出土 胎土 均一良好 焼成 堅く良好
		355	体部 ほぼ球形に近い。 口縁 「く」の字状に屈曲し、端部を内側につまみ出し、内面に内傾する面をつくる。	体部は外面下位に格子叩き、上位にカキ目調整、内面は同心円文叩き。 他の部分はナデ調整。	色調 外面明灰色 内面黒灰色 C群出土 胎土 1mm程の長石粒を全体に含む。 焼成 良好、堅い
		356	体部 ほぼ球形を呈す。 口縁 やや外反気味に外上方に伸び、端部をやや肥厚させ、内方につまみ出す。	体部外面、下位に平行叩き、中位より上はカキ目調整。 内面底部に円弧叩きがわずかに認められる。 他はナデ調整。	色調 淡青灰色 A群出土 胎土 精良（細砂わずかに含むのみ） 焼成 堅緻
壺		357	口縁は外反気味に広がった後、端部を細め丸くおさめる。 口縁内面に、内傾する段を有す。	ナデ調整。	色調 明紫灰色 胎土 1mm程の長石を少し含む。 焼成 良好
		358	口頸部はやや内弯気味に伸びた後、端部は丸くおさめる。	357に同じ。	色調 暗灰色 胎土 0.2mm程の長石を全体に含む。 焼成 良好
		359	やや肩がはる器形。	357に同じ。	色調 暗灰色一部淡灰色 胎土 白色砂礫を少し含む。

				焼成 良好	
甕	360	口頸部は外反気味に伸び、口縁端部を上方につまみ上げ、やや尖り気味におさめる。	頸部外面は波状文を施した後上位に1条、下位に2条凹線をめぐらす。 他はナデ調整。	色調 外面暗青灰色 内面黒灰色 C群出土 胎土 良好（長石がやや多い） 焼成 堅緻	
器	361	体部 直線的に上方に伸びた後、口端をやや外反させ丸くおさめる。 内面に内傾する面を有する。	口縁 内面上位に1条凹線がめぐる。 外面下位に3条の凹線がめぐる。 口縁上位はカキ目調整。 他の部分はナデ調整。	色調 暗灰色 胎土 1mm程の長石粒を少し含む。 焼成 良好 口縁外部がややただれておりその部分に砂が溶着している。	
台	362	脚部 中位よりやや下方でやや内弯した後端部を外方につまみ出す。 脚端内面には内傾する面を有し、その中央に浅い凹線がめぐる。	残存部はそれぞれ2条ずつの凹線により3帯に区分される。 下位2帯にはヘラでひっかいた平行線状の文様を施す。 上位2帯にはそれぞれ3方スカシを穿つ。 手法順序は、凹線で画した後施文し、その後スカシを穿つ。	色調 明灰色 A群 羨道出土 胎土 精良 焼成 良好	
壺	7	体部はほぼ球形を呈する。 口縁部は短く、やや内弯気味に伸び、端部は丸くおさめる。	体部内面タテ方向のハケ調整の後、タテ方向のヘラケズリ調整、外面上位タテ方向のハケ調整、下位斜方向のハケ調整を加える。	色調 明褐色、一部黒褐色 胎土 0.3mm程の砂をわずかに含む。 焼成 良好	
師	甕	8	楕円形の体部に、頸部で曲折し、内弯気味に立ち上る口縁をもつ。 端部は内側に面をもち、丸くおさめる。	体部外面下位及び底部付近は、不整方向のハケ調整、上位は斜方向のハケ調整。 体部内面下位及び底部付近は下→上へのヘラケズリ調整、上位は縦方向、頸部付近は斜めのハケ調整。 口縁部は内外面ともに横ナデ調整。	色調 黄褐色 体部中央に15cm×7cmの楕円形の黒斑が見られる。 いわゆる近江型の土器である。 胎土 体部内面下位には2~3mmの石英粒他、その他には1~2mmの石英粒、雲母等を多く含む。 焼成 やや堅い
器					

# 第4章 B 地区

## 1. 遺構 (図版28・46)

B地区は調査対象地域の南西部に位置し、東南方へゆるやかに傾斜するため、平坦部は見られない。旧水田面下50cm～110cmのところで、褐色砂礫層を切り込む遺構がみられた。遺構は土塙1基・河川跡2条が検出された。

### (1) 土塙

**SK 129** 北端東寄りに位置し、一部D地区にまたがる。規模は13m以上×7m以上の橢円形を呈し、40cmの深さを測る。当地区からは、西南部約 $\frac{1}{4}$ のみ検出され、東部は未検出である。覆土より、弥生土器と思われる赤色顔料の塗布された装飾壺や砥石、凸基有茎式石鏸などが出土している。

### (2) 河川跡

**SD 4** 南西から北東へ向って流れる形状を示し、北岸のみ検出された。全長23.8m以上、最大幅14.1m以上、深さは最高で1.8mを測る。遺物は6世紀中～後半の須恵器杯身や7世紀後半の須恵器杯蓋が出土している。

**SD 5** SD 4 を切り込みながら南西から北東に向って流れる形状を示す。全長16.9m以上、幅2m～2.95mを測る。深さは30cm前後である。遺物は出土していない。

## 2. 遺物

### (1) 土塙出土土器 (図版61)

**SK 129** 口縁端部に竹管文と刻目付き棒状浮文を施した装飾壺24が出土している。頸部以下を欠失し、口径13.6cm・器高1.9cm以上を測る。端面を除く内外面に赤色顔料が塗布されている。

弥生時代後期～庄内式併行期のものであろうと考えられる。

### (2) 河川跡出土土器 (図版61)

**S D 4** 須恵器を3点図示し得た。

杯蓋388は、天井部外面中央に宝珠様つまみの付けられるもので、7世紀第3四半期である。

口径16.6cm・器高は天井部まで2.1cm、つまみは1cmの高さを測る。

杯身386は、口径11.6cm・器高3.8cm、387は、口径12.6cm・器高5cmを測る。ともに6世紀後半と考えられる。

### (3) 包含層出土土器 (図版39・72)

S K129の直上、暗褐色砂質土層から完形の土師器甕192が出土している。口径23.6cm・器高40.1cmを測る。長胴で口縁を除く内・外面にハケ目調整を施している。6世紀後半頃と考えられ、S K129の下限の一端が知り得る資料である。

## 3. 小 結

B地区で検出された遺構はS K129・S D 4・S D 5である。S K129は弥生時代後期～庄内式併行期の土器を出土し、その時期のものであるが性格は不明である。このS K129を切ってS D 4が存在する。このS D 4はC地区のS D 6に通ずるものと考えられ、6世紀～7世紀の土器が包含されているが、埋没時期は後述するように平安～鎌倉時代の時期と考えられる。

このS D 4の埋没ののち、S D 5が流れた状態であった。したがってこれは、平安時代末～鎌倉時代以降のものであるが、覆土に遺物がないため、埋没時期については不明である。

(三宅 弘)

表4 B地区 出土遺物観察表

遺構	器形	土番 器号	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SK 129	土師壺 器	24	口縁は外弯気味に伸び端面に垂直に近い面を有する。	外面に竹管文及び縦の突帯をつける。 全面に朱と思われる暗赤褐色の残存が見られる。	色調 明赤褐色 胎土 0.3 ~ 0.5 mm位の長石粒を全体に含む。 焼成 やや軟質
SD 4	須恵器	386		石粒が多いため、ヘラケズリ調整の面は凹凸が著しい。 立ち上り内面端部にナデ調整のための浅い沈線が1条めぐる。 内面底部は乱ナデ調整。 他は横ナデ調整。	色調 外面暗灰色 内面淡青灰色 胎土 1 ~ 4 mmの石英、長石、その他の石粒を多く含む。 焼成 やや硬質
	杯蓋	387		ヘラケズリ調整は3回に分けて行われている。（中央→周辺） 横ナデ調整の後、内面底部を乱ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 2 ~ 3 mmの石英、長石等を多く含む。 焼成 やや硬質
	杯	388	やや高い宝珠形のツマミが付く。 口縁内面に明晰な外弯する返りをもつ。ていねいなつくりである。	天井部の1/3をヘラケズリ調整 他はナデ調整。	色調 明灰色 胎土 0.5 mm程の砂粒を多く含む。 焼成 硬質

# 第5章 C 地区

## 1. 遺構 (図版17・18・46)

A地区の北方、調査地域の中央東半に位置し、北～北東に向けて大きく傾斜する。当地区はA～D地区のうちで最も低地にある。旧水田層を約0.6m～3.4m掘り下げるとき褐色砂質土層が露出する。この層を切り込んで黒褐色の遺構がみられる。遺構は竪穴住居1棟、土塙2基、河川及び溝4条が検出された。

### (1) 竪穴住居 (図版21・22・49)

**S B 2** 南東隅の1段高い所にあり、5.4m×3.4m～4.3mの平面台形状を呈する。周溝はみられず深さ20cmを測り4隅に柱穴が認められる。掘形は50cm～60cmの円形で、深さは10cm、柱根跡は10cm～30cmの円形で、深さは10cm～20cmを測る。覆土から弥生～古式土師器の細片と奈良時代の土器が出土しているが、奈良時代の土器は後世何等かの形で混入したものと考えられる。

### (2) 土塙 (図版22・23・52)

**S K 130** S B 2の北東の1段低いところで、S D 6南岸にある。規模は3.74m×2.41mの楕円形で、深さは30cmを測る。土塙内にはほぼ床に接して数cm～40cmの不整形な礫が認められた。その北寄りと西寄りには土器がまばらにみられる。遺物は弥生中期の壺・甕などのほか、石鏃が出土している。

**S K 131** C地区北西端、S D 7を切り込んで直径2.5mの円形土塙がみられる。北西端は未検出で、深さは22cmを測る。遺物は出土していない。

### (3) 河川跡及び溝 (図版18～21・53・54)

**S D 6** 南西から北東へほぼ一直線に流れる河川跡である。両端は未検出であるが、長さ25.2m以上、幅7.2m～13.9m、平面形より大中小の3段階に分けられ、最深部で2m前後を測る。上

流と下流の高低差は約1.5mであった。上流近くの河川の幅が最も狭い場所に堰が設けられている。長さ4.5m・幅0.5m～1.5m、高さ0.8mの土堤が両岸を結び、それを覆うようにこぶし大の礫群がみられる。礫の一部は下方へ転落しており堰が崩壊した様子がうかがえる。本河川は上記の3段階に従って3層に区別し得た。上層は黒灰褐色粘質土層、中層は灰褐色砂層、下層は淡黒褐色粘質土層に分けられ、それぞれから弥生式土器、須恵器、黑色土器、土師器、陶器、磁器、瓦の他、石包丁、砥石、石斧、石鎌などが出土している。3層の出土遺物に時期的な差異は認められず、最も新しい時期である鎌倉時代に本河川は埋没したものと考えられる。

**S D 7** S D 6 の北側を同方向に流れ、その中ほどより東へ向きを変える。北東端（下流）でS D 6 を切り込んで流れる形状を呈す。長さは23.5m、幅は1.5m～4.7m以上を測る。深さは最も深い所で45cmであった。埋土中より土師器皿、青磁、須恵器、瓦、元豊通宝（宋、1078年初鑄）が出土している。

**S D 15** C 地区東南を S B 2 を切り込んで東西に流れる形状を示す。東端は未検出であるが、長さ7.2m、幅0.5mで、30cm～40cmの深さを測る。覆土より平安時代の須恵器瓶子が出土している。

**S D 21** S D 6 の下層、中ほどの東南寄りに両肩を石組で構築した長さ4.5m～8m、石組内の幅0.5m～1mの溝がみられる。石組の高さは40cm～70cmで、10cmから60cmまでの自然石を1～3段に積み上げている。この溝内に堆積した緑灰色砂層より6世紀末～7世紀初頭の須恵器が出土している。その直上の S D 21を覆った S D 6 最下層より平安～鎌倉時代の土師器皿、青磁碗、瓦が出土した。

## 2. 遺 物

当地区は、遺構の数は少ないが多量の遺物が出土している。特に S D 6 は、図示し得た遺物だけでも100点近く数えられる。またその時期も多様であり、縄文時代から鎌倉時代に及んでいる。

### (1) 土 器

#### 1) 穴住居跡出土土器 (図版61)

**S B 2** 土師器杯身（223）は、口径14.8cm・器高2.6cmを測り、口縁部内面は1段の放射線状暗文、底部内面には幅広いラセン状暗文を施している。平城京 S K 219出土土器と同様の形態を示していることから、8世紀後半（765年頃）に比定しうる<sup>①</sup>。

須恵器杯身（389）は底部のみであるが、223と同時期のものであろうと思われる。いずれの土器も混入と考えられ、この時期のものとはみなしがたい。

## 2) 土塙群出土土器 (図版61・62)

**S K 130** 弥生時代中期の土器ばかり20点出土した。25~44。

細頸壺（28）は、頸部以上が残存している。口縁上端部で内傾し、その外側にはヘラ状工具による斜線文が施されている。頸部の付け根の外面は、列点文を施した突帯が巡る。口径8.6cm・器高7.3cm以上・頸部径は5.9cmを測る。類例は、施文が異なっているが、同形態のものが長浜市鴨田遺跡から出土している。第IV様式と考えられる<sup>②</sup>。

甕B（25~27・29）は、口縁が「く」の字状に外反し、その端部が肥厚して平面をもつか（27・29）、凹面になるか（凹線様、25・26）するもので、中期における畿内型の代表的な甕である。どちらにも、端面に刺突列点文が施される場合がある。内外面の調整はハケ目が主であるが、26は内面下半部に縦方向のヘラケズリを施しており、畿内や近江では類例の少ないものである。また26は滋賀里遺跡IV B区11号方形周溝墓出土の甕Aと同様のもので、<sup>③</sup>第IV様式と考えられている。

甕Bは、長浜市長沢遺跡<sup>④</sup>・同市鴨田遺跡<sup>⑤</sup>にも同様のものがみられる。

甕C（30・31）は器形の大小の差だけで同形態を呈していると思われる。縦長の体部をもち、口縁は「く」の字状に外反している。調整は内外面ともに縦方向のハケ目が施されている。

類例がないが、1との中間形態のものが滋賀里遺跡などでみられ、弥生時代中期中頃～後半と考えて差しつかえないであろう<sup>⑥</sup>。

甕D（32~38）は受け口状口縁をもつ近江型の甕である。33~38は滋賀里遺跡<sup>⑦</sup>・長浜市鴨田遺跡<sup>⑧</sup>などでみられ、本遺跡でも149・155・200などが出土している。いずれも弥生時代中期中半～後半に比定されている。また、野洲町五之里遺跡では同様の甕を第IV様式終末から第V様式初めの間に位置付けている。

## 3) 河川跡及び溝出土土器 (図版39・62~65)

**S D 6** 上中下の3層に区分できるので、土器もそれに従って述べてゆく。

a) 上層（黒灰褐色粘質土層）

**弥生土器** (61~64)

全て壺か甕の底部である。

**土師器** (65~89)

全て皿である。a類(65~70・80)は口縁部が屈曲外反する形態である。b類(71~79・81~84)は内彎する口縁を有する。C類(86~88)は外反する口縁をもち、d類(85)はほぼ直線的にのび、e類(89)は内側へ折り込んだ口縁部を有する。a類は口径9.8cm~11.6cm、b類は口径8.2cm~12cm、C類は口径7.8cm~16.8cm、d類は口径9.2cm、e類は口径8.6cmを測る。a類は65を除いて口径10cm以上、b類は79を除いて10cm以下であった。a類は平安時代中期~後期、他は平安時代後期~鎌倉時代に比定されるものと思われる。

#### 須 恵 器 (391~414)

杯蓋(391)は、つまみだけである。

杯身(392~394、403~405)は、前者が6世紀後半、後者が奈良~平安時代頃のものである。

壺(395~399、402・406~410)は、広口壺399・402を除いて全て瓶子と呼ばれる細頸壺である。

口縁部だけの出土である395・406・407を除いて全て糸切り痕をもつ底部であった。平安時代のものと思われる。

甕(400、411~414)は、全てが口縁の細片であった。

鉢(401)は、口縁部がやや内彎し、端部を丸く肥厚させるものである。

#### 灰釉・陶器 (507~510)

灰釉(507~509)はいずれも底部のみで、507・508は断面三角形の高台をもち、508は糸切り痕を残している。509は高台が丸味のある台形となる。

陶器(510)は、口径16.6cmに及び、口端部のみの細片である。器形は不明である。

#### 黒色土器 (557~561)

皿(557)は口径10.4cmを測り、内面底部と外面口縁下間にヘラミガキが施されている。

椀は、内面口縁端部下に沈線もしくは段をもつ形態で口縁のみ(558・560)と底部のみ(559・561)にわかれ。前者は口径17.6cm~18cm、後者は高台径7.3cm~7.6cmを測る。皿・椀ともにA類であった。

#### 磁 器 (602)

青磁碗の底部の破片である。断面方形の高台が付く。底径(高台径)は8cmを測る。

b) 中層(灰褐色砂層)

#### 弥生土器 (45)

受口状口縁を有する近江型甕の口縁の破片である。SK130出土の甕Dと同様の形態を呈し、第IV様式と考えられる特徴を持っている。

#### 土師器 (46~60)

全て皿である。a類（46～49）は口径9cm～11.2cm、b類（50～58・60）は口径8.8cm～21.8cm、c類（59）は口径18.4cmを測る。上層同様、小片が多いが、口径におけるまとまりはみられなかった。時期も上層と同じと考えられる。

### 須 恵 器（390）

高杯の脚部上半である。長方形の透し孔が三方に穿たれる。

### 綠釉・陶器（505・506）

綠釉（505）の口縁部の破片が1点出土している。口径16.6cmを測る。陶器（506）は、内面はたちあがり状の突帯が巡る。D地区の包含層にも数点出土しており、灯明皿と考えられる。口径は6.2cm、器高は0.9cmを測る。506は江戸時代の土器であり、後世の混入と考えられる。

### 黒色土器（551～556）

全て椀と考えられ、551～555は口縁部の破片である。口径13.8cm～16cmを測り、内面口縁端部付近に沈線が巡る。556は底部のみで、断面台形の高台が外方にふんばって貼付される。底径（高台径）は7cmを測る。内面に密なヘラミガキが施される。全てA類である。

### 磁 器（601）

白磁の小椀の口縁部片である。上端で外反し、先端は施釉されない。

#### c) 下層（淡黒褐色粘質土層）

灰釉椀（503）口縁上部のみで、口径17cmを測る。全面に釉が施されている。

陶器壺（504）底部の破片である。断面不整五角形の高台が貼り付けられ、底径8.6cmを測る。

S D 6 の出土土器は、層ごとに取り上げられたが時期的な変化はとらえられなかった。弥生時代～鎌倉時代に至る土器の多くは平安時代～鎌倉時代に集中しており、その意味においては鎌倉時代に急激に埋まったと考えていいだろう。

## S D 7

### 土 師 器（90～97）

全て皿である。a類（90）は、口径11.8cm、b類（91～96）は口径8.2cm～12.8cmのものと、口径16.3cmの大型のもの（96）が出土している。

### 須 恵 器（415～419）

杯蓋（415）は口径13.8cmを測り、口縁部のみの破片である。

杯身（416）も同様に口縁部のみの破片で、口径14cmを測る。

甕（417・418）は、口縁部の破片で、口径16.6cm～20cmを測る。

鉢（419）は口径17.4cmを測る。

### 灰釉・青白磁（511・603）

灰釉（511）は碗の底部が出土している。青白磁（603）は器形不明である。

**S D 15** 平安時代の須恵器瓶子が1点出土している。口縁の破片で、口径は4.6cmを測る。

**S D 21** 石組内の緑灰色砂層から出土した須恵器（421～427）とその直上層のS D 6 最下層と考えられる灰色砂層から土師器他、多くの土器が出土した。

### 須 恵 器（421～427）

杯蓋（421）は口径10.3cm・器高3.5cmの比較的小型品で、6世紀後半（陶邑II-3）<sup>⑩</sup>に、422は口径15.8cmの口縁のみの破片で、6世紀後半～末（陶邑II-3～4）<sup>⑪</sup>に比定できる。

杯身（423）は口径12cmの破片、424は口径13.6cm、器高4.4cmを測る。425は口径12.6cm、426は口径12.2cmで、いずれも口縁のみの破片である。いずれも陶邑II-3～4に相当する。

壺の底部427は底径9.2cmを測る。

### 土 師 器（98～102）

全て皿である。b類のみで、口径9.4cm～15.4cmを測る。いずれも平安末～鎌倉時代に相当すると考えられる。

### 青磁・白磁（604・605）

青磁（604）は底部のみ、白磁（605）は底部を欠失した破片である。604は底径8cm、605は口径16cmを測る。

S D 6 最下層の土器群は、本来S D 6 の項で述べるべきであるが、S D 21の埋没後の年代観を明確にするためにあえてここに掲載した。

## 4 ) 包含層出土土器（図版71・72）

### 弥 生 土 器（209・210）

ともに甕か壺の底部である。

### 土 師 器（211～222）

ほとんどが、平安～鎌倉時代の皿である。a類（211～213）は口径9.6cm～10.6cm、b類（214～221）は口径8.6cm～19.6cmを測る。他には、羽釜の口縁222が出土している。口径19.8cm、器高3.9cmを測る。

### 須 恵 器（453～461）

杯身（453・454）は6世紀後半のもので、454～459は奈良～平安時代の時期のものである。壺460は、瓶子の底部で、糸切り痕を残している。鉢461も底部のみのものである。

### 白 磁 (621)

口縁部の破片で口径19.4cm、器高4cmを測る。全面に施釉がみられる。

### 黒色土器 (564)

底部のみの破片で、高台径6.4cmを測る。A類である。

## (2) 瓦

### S D 6

#### a) 上層（黒灰褐色粘質土層）

##### 瓦 (654~662)

方形平瓦(656)は0.7cm~1cmの格子目タタキを施し、榎木原分類のII A Cに相当する<sup>⑫</sup>。

軒平瓦(657)・丸瓦(662)を除いた瓦は全て平瓦である。格子状のタタキ目をもつものは1点(654)で、他は全て繩目のタタキ目であった。

#### b) 中層（灰褐色砂層）

##### 瓦 (651~653)

平瓦(651)は凸面に1辺4mmの格子目タタキ、凹面は布目痕を施す。榎木原分類I A aに当する。

方形平瓦(652)は、側面の断片で、凸面はヘラケズリ、凹面は布目痕を残す。653も、側面の断片であり、凸面は格子目タタキ、凹面はナデ調整を施している。端面にも1辺5mmの格子目タタキが施され、凸面の端面付近は削られている。榎木原分類のII A aに相当する。

### S D 7

##### 瓦 (663~666)

平瓦(663~665)3点と丸瓦(666)1点がともに小片で出土している。

### S D 21

##### 瓦 (667・668)

いずれも小片で、667は軒平瓦、668は丸瓦と思われるが、詳細は不明である。

## 3. 小 結

S B 2の覆土からは弥生土器とみられる細片と奈良時代の遺物が出土しているが、周辺の遺構との関連からみて、弥生時代の住居と考えたい。これは、平安時代の溝(S D 15)に切られている。

S D 6・S D 21は同一河川の流路である。6世紀末~7世紀初頭以前からの流路がいくたびか埋ったり削られたりしながら存続し、平安末~鎌倉時代初頭には完全に埋められ廃絶している。人

為的に両側辺に石積をほどこした S D 21 の覆土下半からは、6世紀末～7世紀初頭の土器が出土していて、その頃築かれたものであろう。

S D 21 の覆土の上半からは平安時代の土器が出土しており、一部平安時代にも流路であったことがわかる。S D 21 の埋没後流路となった S D 6 からは、弥生時代中期とみられる土器や縄文時代の石器も出土しており、この一連の河川はすでに縄文時代から存在していたものであろう。

この廃絶した流路は、この調査地のすぐ南側を東流する大川にとって代わられたものかと思われる。この大川は、ほぼ東西の方向に流れるもので、人為的に造られた可能性があり、その時期が鎌倉時代初頭頃と推察される。

S D 7 は幅のせまい流路で、S D 6 を切っているが、時期としては S D 6 とほぼ同時期とみられ、B 地区の S D 5 に通ずる流路である。

(三宅 弘)

## 註

- ① 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査II』昭和55年（重版）
- ② 中谷雅治ほか「長浜市鴨田遺跡」（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書II』滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ③ 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ④ 中谷雅治ほか「長浜市長沢遺跡」（『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書III』滋賀県教育委員会 昭和48年）
- ⑤ 註②、前掲書
- ⑥ 註③、前掲書
- ⑦ 註③、前掲書
- ⑧ 註③、前掲書
- ⑨ 丸山竜平・勢田広行ほか「野洲郡野洲町五之里遺跡発掘調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度 滋賀県教育委員会）
- ⑩ 中村浩『陶邑I～V』大阪府教育委員会 昭和51～58年）
- ⑪ 註⑩、前掲書
- ⑫ 林博通・葛野泰樹ほか『榎木原遺跡発掘調査報告III』（滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 昭和56年）

表5 C地区 出土遺物観察表

遺構	器形	土番 器号	形態上の特徴	手法上の特徴	備考
SB   2	土師皿 器	223	平らな底部より内弯気味に口縁が立ち上がる。 内面の端部付近に段をもつ。 端部は丸くおさめる。	横ナデ調整の後、斜め方向の暗文を施す。 内面はやや磨滅のため、暗文は一部明瞭でないところがある。 底部は不定方向のナデ調整。 内面は横ナデの後、内面底部に「の」の字方向のラセン状の暗文をなす。	色調 橙褐色 胎土 精良 焼成 硬質
	須杯 惠身 器	389	底部は平底で底部と体部の境で稜を施す。 底部と体部の境界よりやや内側に高台を付す。 高台底面は段を有して外傾し、内方端面で接地する。	ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 0.3 mm程の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
SK   130	弥生式 のか壺 の土底 器部	40 41	やや凹む平底より直線的に伸びる。  平らな底部より体部に直線的に外反気味に伸びる。	磨滅のため調整不明。  内面は横斜方向のハケ調整。 外面は縦のハケ調整。	色調 明褐色 胎土 0.3 mm位の長石粒を含む。 焼成 軟質  色調 外面暗褐色 内面明褐色 胎土 0.5 ~ 1 mm位の長



				石粒を含む。 焼成 軟質
SK 130 弥生式土器 甕	42	平底から直接的に伸びる。	内面はナデ調整。 外面は荒い縦方向のハケ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5 mm位の石英、 長石粒を多く含む。 焼成 軟質
		ほぼ平底の底部より体部は直線的に外方に伸びる。	調整は剥落のため不明。	色調 明褐色 胎土 0.5 ~ 1 mm位の長石粒を全体に含む。 焼成 軟質 表面剥落
	44	底部は平底。 体部は直線的に外方に伸びる。 器壁は薄い。	体部外面に縦方向のハケ調整。 他はナデ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5 mm位の石英、 長石粒を多く含む。 焼成 軟質
	25	口縁は「く」の字状に外方に屈曲し、端部は肥厚する。 口縁端部は、わずかに上方につまみ上げる。	端部外面には面を有し、そこに列点文を施す。 体部内面には不定方向のハケ調整。	色調 乳褐色 胎土 0.5 mm位の長石粒を全体に含む。 焼成 やや軟質
	26	頸部は「く」の字状にやや段をもって屈曲し、端部は上と下方向につまみ出す。	端部は強いナデ調整。 体部上方より口縁部にかけてはナデ調整。 体部上方より中ほどにかけて、縦方向と横方向のハケ目調整。 底部の一部にハケ目調整。	色調 淡褐色（内面底部は暗褐色） 胎土 0.5 mm位以下の石英、金雲母片を含む。 焼成 硬質
	27	ほぼ直立する体部より口縁は大きく外反し、端部を上方につまみ上げ丸くおさめる。	体部外面は斜位及び縦方向のハケ目調整。 屈曲部外面に列点文を施す。 他はナデ調整。	色調 暗褐色 胎土 精良 焼成 堅緻
	28	口縁は、一度ラッパ状に開いた後、内面に屈曲する。 端部には平らな面を有する。	口縁上部には斜に平行線上の文様を施す。 口縁と肩の接点には列点を施した突帯がめぐる。	色調 明褐色 胎土 良好 焼成 堅緻
	29	口縁は直線的に伸びた体部より外反し、端部に平坦な面を有し終わる	体部の内外面は、ハケ調整。 口縁はナデ調整。	色調 暗褐色 胎土 0.3 mm位の長石粒を含む。 焼成 堅緻
	30	きわめて小型の器形である。 やや中央の凹む平底の底部より体部はわずかに立ち上がり、口縁に至り外反する。 最大径は中央附近にある。 外面に炭化物の付着が認められる。	内外面とも縦方向のハケ調整。	色調 外面暗灰褐色 内面明褐色 胎土 0.3 mm位の長石粒を含む。 焼成 堅緻
	31	体部は、やや内弯気味に直立に近く伸び上がる。 口縁は短く大きく外反する。 口縁端部は、やや肥厚気味に端部は丸くおさめる。 外面に炭化物の付着が認められる。	外面は縦方向のハケ目調整。 内面は縦及び横の荒いハケ目調整。	色調 明赤褐色 胎土 0.3 mm位の長石粒を少し含む。 焼成 堅緻
		口縁は大きく外方に伸びた後、端部を上	内面は荒い平行のハケ調整。	色調 黒褐色

弥生式甕	SK 土器 130	32	方につまみ上げて丸くおさめる。	口縁外面は斜方向のハケ調整。 頸外面は縦方向のハケ調整。 頸と口縁の境に刻みをめぐらす。	胎土 0.3mm位の砂粒を 多く含む。 焼成 軟質
		33	頸部は外反する。 口縁はやや内側に屈曲する。	頸部内面は平行線状のハケ調整。 頸部外面は斜方向のハケ調整。 他はナデ調整。	色調 外面明褐色 内面暗褐色 胎土 0.3mm位の長石粒 を含む。 焼成 硬質
		34	口縁は大きく外反した後、上方に屈曲し 端部は丸くおさめる。	頸部内面は荒い平行のハケ調整 頸部外面は荒い縦方向のハケ調整。 口縁外面は斜方向のハケ調整。	色調 外面桃色 内面暗褐色 胎土 0.3mm位の長石粒 を少し含む。 焼成 硬質
		35	口縁は直立した後、大きく外反し、端部 を上方に折り曲げ、端部はやや尖り気味 におさめる。	内面は、横方向の荒いハケ調整。 外面の口縁の屈曲部は斜方向のハケ調整。 上部は縦方向の荒いハケ調整。 下部は刺突文を施す。	色調 暗灰褐色 胎土 0.3mm位の砂粒を 少し含む。 焼成 硬質
		36	頸部は直立に近く、口縁は上方につまみ 上げ、やや尖り気味におさめる。	口縁内面は平行線上のハケ調整。 外面は斜方向のハケ調整。 外面下部は縦方向のハケ調整、その下を 斜方向の列点文がめぐる。	色調 暗褐色 胎土 0.5～1mm位の長 石粒を含む。 焼成 硬質
		37	口縁は大きく外反後上方へ直立し、端面 を水平におさめる。	内面は水平のハケ調整。 口縁は水平の荒いハケ調整、口縁外面斜 方向のハケ調整。 頸部外面は縦方向の荒いハケ調整。 水平面に列点文を施す。	色調 明褐色 胎土 0.3mm位の長石粒 を含む。 焼成 硬質
		38	口縁は大きくラッパ状に開き、端部を上 方につまみ上げる。	磨滅が激しく調整は不明であるが、すべ てナデ調整の可能性が強い。	色調 明褐色 胎土 0.5～1mm位の長 石粒を少し含む。 焼成 軟質
		39	受部は直線的に伸び、口縁は垂下する。	口縁には、5条の浅い凹線をめぐらし列 点文を矢羽形を3段配す。 途中に2個1対の突堤を1対以上はりつ ける。 受部内外面ともヘラミガキ。	色調 明赤褐色 胎土 精良 焼成 硬質
		45	口縁部は大きく外反し、頸を作ってほぼ 垂直に立ち上る。 端部は丸くおさめる。	口縁部外面は縦方向のハケ目調整。 頸の部分はナデ調整。 頸より上部は斜め方向の沈線（連続） 内面はナデ調整。	色調 外面、内面端部付 近は灰褐色 他は黄褐色 胎土 0.5～1mmの石英、 長石粒を含む。微細な 石英、長石、雲母を多 く含む。 焼成 やや硬質
	弥生式甕 SD 土器 6	46	口縁部が屈曲外反し、端部をつまみ上げ る。	内面底部中央は乱ナデ調整。 内面底部外周及び内外面口縁部はナデ調	色調 白褐色 胎土 1mm位の石英、長

		底部は丸くおさめる。	整。	石粒等を少し含む。 焼成 やや硬質
土 SD 皿 師 器	47	やや上げ底ぎみの底部から屈曲外反し、端部はつまみ上げる。	外面底部中央に調整の際の爪の痕跡かと思われる凹みがある。 内面底部は乱ナデ調整。 内、外面口縁部はナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 1mm以下の石英、長石粒等を少し含む。 焼成 やや軟質
	48	口縁部は屈曲外反する。 端部はつまみ上げる。	内面白口縁部及び外面口縁部上半は横ナデ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 精良、微細な雲母片が多く見られる。 焼成 堅緻
	49	扁平な底部より屈曲外反する口縁をもち 端部は上方へつまむ。 口縁の屈曲は強すぎて下方へ向く。	内面及び外面口縁部は横ナデ調整。	色調 淡赤褐色と淡褐色が半々 胎土 1mm位の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
	50	底部は平らである。 口縁は内弯している。 端部は丸くおさめる。	49と同じ。	色調 暗灰褐色 胎土 精良 焼成 硬質
	51	底部は平らである。 口縁は内弯し肥厚する。 端部は丸くおさめる。	内面白口縁部は乱ナデ調整。 48と同じ。	色調 外面灰褐色 内面淡灰褐色 1/3淡褐色 胎土 1mm位の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
	52	底部は平らである。 口縁は底部との境を明瞭にして内弯する。 端部は丸くおさめる。	内面と外面底部の一部分まではナデ調整。	色調 外面暗灰色 内面淡黄褐色 胎土 微細な雲母片を含む。 焼成 硬質
	53	底部はややもち上がり気味である。 口縁部は内弯気味である。 端部は丸くおさめる。	底部外面は未調整、底部内面はナデ調整。 口縁部は内外面ともナデ調整。 成形は手づくね。	色調 暗灰色 胎土 5mm位の長石が混入。微細な雲母も多く混入。 焼成 良い、やや硬い。
	54	底部は平底である。 口縁部は内弯している。	内面白口縁部は乱ナデを施す。 内、外面口縁部はナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 微細な石粒を少し含む。 焼成 やや硬質
	55	口縁は内弯している。 端部はやや尖りぎみであるが、丸くおさめる。	49と同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1mm以下の石英、長石を少し含む。精良 焼成 硬質
	56	口縁部下半は内弯し、上半は外反ぎみである。 端部は外傾する面をもち、先端は尖り気	ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 1mm以内の石英、長石、雲母を少し含む。

			味である。		焼成 軟質
			扁平な底部より上外方へほぼ直線的に伸びる。 57 端部は若干つまみ上げ気味である。	4 8に同じ。	色調 暗灰褐色 胎土 1~2 mm位の石英、長石や微細雲母を少し含む。 焼成 やや硬質
	土師皿		口縁部は内弯気味である。 端部は外傾する面を有する。 58	4 8に同じ。	色調 淡褐色 胎土 1 mm位の石英、長石粒を少し含む。 焼成 硬質
	器		底部はやや上げ底の傾向である。 口縁は外反する。 端部は外方へ尖る。 59	内、外面の口縁部はナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 1 mm位の石英、長石粒等を少し含む。 焼成 硬質
			底部は欠損している。 口縁は内弯する。 端部は丸くおさめる。 60	内面、底部付近は乱ナデ調整。 4 8に同じ。	色調 暗灰色 胎土 0.2 mm位の長石粒を含む。 焼成 硬質
SD			底部のみ。 平底で中央が少し凹む。 外上方へ直線的に伸びる。 61	内外面共ナデ調整。 外面底部は未調整。	色調 外面淡黄褐色 内面淡灰褐色 胎土 不良、3 mm以下の長石、雲母粒を多く含む。 焼成 硬質
6	弥甕		底部のみ。 やや中央が凹む平底を呈し、少し高台風に上がった所より外上方へ直線的に伸びる。 62	内面は縦方向のハケ目調整。 外面は中央の凹みを除いてナデ調整。	色調 暗灰褐色 胎土 1~2 mm石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 やや硬質
	生				
	か式		底部のみ、底部は平底である。 底部との境を明瞭にして若干外反気味に伸び、途中より内弯傾向を見せる。 底部外周寄りはかなり肥厚気味である。 63	全面磨滅のため不明。	色調 外面褐灰色(ススの付着) 内面灰色 胎土 0.5~1.5 の長石、石英を含む。他に雲母も多く含む。 焼成 硬質
	土壺				
	器		底部のみ。 平底で、底部の体部下端との境を明確にし、外周付近が肥厚する。 64	内面はナデ調整。 外面体部下半に縦方向のハケ目調整。 他は未調整。	色調 外面淡黄褐色 内面暗灰色 胎土 0.5 mm以下の長石、雲母片を含む。 焼成 硬質
	土師皿		底部は平らである。 口縁部は屈曲し強く外反する。 端部は巻き込む様子あり。 65	4 9に同じ。	色調 外面淡茶褐色の灰褐色、内面淡茶褐色 胎土 1 mm以下の石英、長石粒等を少し含む。 焼成 硬質
			底部は丸くおさめる。	4 9に同じ。	色調 淡褐色

SD Ⅰ 6 師 皿	土 器	66	口縁部は屈曲外反する。 端部はつまみ上げている。		胎土 2 mm位の長石粒、 1 mm以下の石英粒を少 し含む。 焼成 硬質
		67	底部は欠損している。 口縁部は屈曲外反する。 端部はつまみ上げ、外端面に段をなす。	49と同じ。	色調 淡褐色 胎土 1 mm以下の石英、 長石粒等を含む。 焼成 硬質
		68	平底はわずかに丸味を帯びる。 口縁部は屈曲外反する。 端部はつまみ上げ気味である。	49と同じ。	色調 淡褐色 胎土 1 mm以下の石英、 長石粒を多く含む。 焼成 やや硬質
		69	底部はやや丸味を帯びる。 口縁部は屈曲外反する。 端部はつまみ上げる。	49と同じ。 外面底部に台の圧痕らしきものあり。	色調 淡褐色（外面一部 は暗褐色） 胎土 1 mm位の石英、長 石粒等を多く含む。 焼成 硬質
		70	底部は平らに近い。 口縁部は内弯する。 端部は丸くおさめる。	内面と外面口縁部 $\frac{2}{3}$ は横ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 1 mm以下の石英、 長石粒等を少し含む。 焼成 硬質
		71	丸味のある底部より内弯気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。	49と同じ。	色調 淡赤褐色 胎土 1 mm位の長石粒等 を少し含む。 焼成 硬質
		72	底部は平らで若干持ち上がり気味。 口縁部は底部との境明確にして内弯する。 端部は丸くおさめる。	49と同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1 mm以下の石粒を 少し含む。精良 焼成 硬質
		73	底部中央が持ち上がる。 口縁部は内弯する。 端部は丸くおさめる。	内面と外面口縁部上半は横ナデ調整。	色調 外面赤褐色 $\frac{2}{3}$ 淡赤褐色 $\frac{1}{3}$ 内面淡褐色 胎土 微細な雲母等を少 し含む。 焼成 硬質
		74	底部は平らである。 口縁部は直線的に伸びる。 端部は丸くおさめる。	49と同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1 mm以内の石英、 長石、雲母を含む。
		75	底部及び口縁部の境を不明確にして内弯 する。 端部は丸くおさめる。	49と同じ。	色調 淡赤褐色 胎土 1 mm位の長石、く さり礫等を多く含む。

			浅い器形である。		焼成 やや硬質
SD Ⅰ 6 土 師 皿 器	76	底部は平らである。 口縁部は肥厚しつつ内弯する。 端部は丸くおさめる。 底部と口縁部の境は明瞭である。	4 9に同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 石英、雲母等の微細砂粒を少し含む。 焼成 やや硬質	
		底部を欠く。 底部と口縁との境は明瞭である。 口縁部は内弯する。 端部は丸くおさめる。	内面と外面のほとんど(約2/3)にナデ調整。	色調 外面暗灰褐色 内面淡灰褐色 胎土 1 mm位の石英、長石、微細雲母を多く含む。 焼成 やや硬質	
	78	底部は中央を欠くが平らに近い。 口縁部は底部との境を比較的明確にして内弯する。 端部は上方へ尖りぎみにおわる。 外面はナデ調整のため、口縁部と底部の境に段をなす。	4 9に同じ。	色調 灰褐色 胎土 1 mm以下の長石、くさり礫を少し含む。 焼成 硬質	
		底部は欠損しているが、平らである。 口縁部は内弯気味。 端部はつまみ上げる。	7 3に同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1 mm位の長石、1 mm以下の石英、長石、雲母を少し含む。	
	80	扁平な底部より口縁は屈曲外反し、端部はつまみ上げる。	4 9に同じ。	色調 淡赤褐色 胎土 1 mm位の石英、長石粒を少し含む。 焼成 やや硬質	
		底部は丸い。 口縁は外反する。 端部は丸くおさめる。	4 9に同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1 mm以下の石英、長石、雲母等を少し含む。 焼成 硬質	
	82	底部は平らである。 口縁は内弯している。 端部は外方へつまみ上げた後、水平につまみ出す。	4 9に同じ。	色調 暗灰色 胎土 良好 焼成 硬質	
		底部中央を欠損するが丸いと思われる。 口縁は内弯気味。 端部は丸くおさめる。	4 9に同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1 mm以内の石英等を多く含む。 焼成 軟質	
	84	底部は丸い。中央付近に穿孔らしきものが見られる（焼成後のもの）。	4 9に同じ。	色調 淡褐色 胎土 1 mm以下の長石等を少し含む。 焼成 硬質	
		底部は欠損する。 口縁はほぼまっすぐに伸びる。 端部は丸くおさめる。	内面及び外面口縁上半(約1/3)にナデ調整。	色調 淡黄褐色 胎土 1 mm以下の長石、雲母を含む。	

				焼成 硬質		
SD — 6	土 師 器	86	扁平な底部より外反する口縁部が伸び、端部は丸くおさめる。	内面底部 $\frac{2}{3}$ は乱ナデ調整。 あとの内面、外面口縁部はナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 1 mm位の石英、長石、雲母等を少し含む。 焼成 やや硬質	
		87	底部は平らである。 口縁は外反しつつ肥厚する。 端部は丸くおさめる。	49に同じ。	色調 暗茶褐色（スス付着） 胎土 微細な石粒を少し含む。 焼成 硬質	
		88	底部は欠損している。 口縁下半は内弯ぎみにまっすぐ伸びるが、上半は外反する。 端部は丸くおさめる。	73に同じ。	色調 淡褐色 胎土 5 mmの石英、1 mm以下の長石、石英、雲母を含む。 焼成 やや軟質	
	高 杯	390	杯部は残部から判断すると上方へ内弯しつつ立ち上がると思われる。 脚部は一部しかないが、スカシは3か所あったことがわかる。 スカシ方向は外方から内方へ。長方形スカシ。	杯部内面はナデ調整（一部乱ナデがある） 外面、脚部接続部もナデ調整。 杯底外面のスカンに接する部分に自然釉（深緑色）が付着している。	色調 杯部内面灰色 ” 外面白紫色 脚部内外暗灰色 胎土 2 mm以下の長石、微細な雲母を含む。 焼成 硬質	
			中央がツマミのみ凹んだやや扁平な擬宝珠様を呈す。	全面ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 良、微細な雲母、長石を含む。 焼成 硬質	
	恵 器	杯	392	底部は丸い。 口縁は内弯する。 受部はほぼ水平に外方へのびる。端部は丸くおさめる。 立ち上がりはほぼすっすぐに内傾する。 高い。端部はやや尖りぎみ。	底部内面 $\frac{2}{3}$ に回転ヘラケズリ（左） 他は左方向の横ナデ調整。	色調 暗青灰色 胎土 1 ~ 2 mmの石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 硬質
			393	底部欠損。 口縁は内弯ぎみにまっすぐのびる。 受部は短く外上方へのびる。端部は丸い。 立ち上がりは比較的短く内傾しつつ外反する。端部は丸い。	外面の約 $\frac{1}{2}$ 以上を回転ヘラケズリ。 他は横ナデ調整。	色調 明灰褐色 胎土 1 mm位の長石粒を少し含む。 焼成 やや良好
		394	底体は平らに近く、境を比較的明瞭にして内弯ぎみ。 受部は短く外上方にのび内面が沈線様に凹む。端部は丸くおさめる。	外面底体部の約 $\frac{1}{3}$ はヘラ切り未調整で約 $\frac{1}{4}$ は粗い回転ヘラケズリを左回転で施す。 他は横ナデ調整（左回転）	色調 灰褐色、外面 $\frac{1}{2}$ は暗灰褐色 胎土 1 ~ 2 mmの石英、長石等を少し含む。	

			立ち上がりは短く内傾しつつ外反する。 端部は丸くおさめる。		焼成 やや軟質
SD — 6 恵	壺	395	口頭部以下欠損。 口頸は下半直立ぎみで徐々に外反し、端部付近に至って強く反る。（ラッパ状） 端部は上方へつまみあげる。先端は尖りぎみ。	全面横ナデ調整。	色調 明灰色 胎土 精良 焼成 硬質
			体部下半以下残存。 底部はやや持ち上がる平底。外周はわずかに平面で接地する。 体部は外上方へ直線的にのびる。	底部に糸切り痕。 他は横ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 2mm位の長石を少し含む。 焼成 堅緻
	瓶 須子	396	体部上半を欠く。 底部は持ち上がり外周が外下方へ断面三角形状に飛び出す。接地面は5mmくらいある。 体部はほぼ直線的に立ち上がる。	外面底部に糸切り痕。 他は横ナデ。	色調 内面 淡灰色 外側 暗灰色 胎土 精良 焼成 堅緻
			体部上半を欠く。 底部は持ち上がり、外周付近で断面横長の台形様の高台状を呈す。（隠し高台風となる） 体部は底部外周より少し内に入ったところよりやや内弯ぎみに立ち上がる。	底部外面糸切り痕。 他は横ナデ調整。	色調 淡青灰色、底部 1/3は暗青灰色 胎土 1~2mmの石英等を少し含む。 焼成 硬質
	広 口	399	口頸部上半以上と体部下半以下を欠損。 肩部は外方へ張り出し、体部との境を明瞭にする。体部との境に沈線を1条巡らせる。	全面横ナデ調整（右回転）。	色調 内面 青灰色 外側 灰色 胎土 1mm位の石英、長石などを少し含む。
			口頸部は「く」の字状に明確に外上方へ立ち上がる。		焼成 堅緻
	甕	400	体部以下欠損。 口縁は外反する。 端部は内上方に少しつまみ上げ、外側面を口縁上端より肥厚させる。 端部は面を持つ。	全面横ナデ調整。	色調 内面 灰色 外側 暗青灰色 胎土 2mm位の石英、長石等を多く含む。 焼成 硬質
			口縁以下欠損。 端部付近は内弯ぎみにのびる。 端部は丸く肥厚して細かく面をもつ。	全面横ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 1mm以下の長石等を少し含む。 焼成 堅緻
	鉢	401	口縁部下半ゆるく外反し、上端に至って強く反る。 端部は外方斜の下につまみ出したため外端は凹面を呈す。少し上方にもつまみ上げている。 口縁以下欠損。	全面横ナデ調整。	色調 内外面1/3は淡灰色 内面1/3は灰色 他は両色混合 胎土 1mm位の長石を少し含む。 焼成 やや軟質
			底部のみ。 平底。	全面横ナデ調整。	色調 淡灰褐色 胎土 1~2mmの石英、

		高台は底部外周より若干中寄りに断面台形で内端部分がより下方へのびた形で接地して付される。		長石を多く含む。 焼成 硬質
SD 1 6	須 恵 器 子	404 底部及び体部下半のみ残存。 やや持ち上がり気味の底部の外周に断面長方形の高台が平面を接地させて貼り付く。	全面横ナデ調整。	色調 淡灰色 胎土 3 mm以下のくさり 礫、1 mm以下の長石、 微細な雲母を含む。 焼成 軟質
		405 底部のみ。 平らな底部の外周端に低い断面横長の長方形の高台が平面を接地させて貼り付けられる。 体部へ続くところは内湾ぎみにのびる。	全面横ナデ調整（左方向）	色調 淡青灰色 胎土 1 mm以下の石英等 を少し含む。 焼成 硬質
		406 口縁下半以下欠失。 口縁上半は強く外反し、外面に段を持って斜め外上方へまっすぐに立ち上がる。 端部は丸くおさめる。（肥大する）	全面横ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 硬質
		407 口縁大きくラッパ状に開き、端部をやや上方につまみ上げる。 端部は丸くおさめる。全体に厚い。		色調 暗灰色 胎土 0.5 mm位の長石を 少し含む。 焼成 硬質
		408 体部上半以上欠損。 底部平ら、中央付近が厚くなる。 体部下半、底部外周端より少し内に入った所から外上方へ内湾ぎみにのびる。	底部糸切り痕。 他は横ナデ調整。 ロクロ使用の為内面に1本ビキの跡（左回転）を残す。 体部外面に自然釉。	色調 暗青灰色、外面 1/4は緑灰色（自然 釉） 胎土 1～2 mmの石英 等を含む。 焼成 堅緻
		409 体部上半欠失。 底部中央を欠くが平底と思われる。 体部下半は底部外周上から垂直に短かく立ち上がり内湾ぎみに上方へのびていく。	内外面ともに横ナデ調整。特に内面は1本ビキの痕跡を残す。	色調 明青灰色 胎土 精良 焼成 硬質
		410 底部のみ。 平底で外周より少し内に入ったところより外反ぎみに外上方に体部のがびてゆくと考えられる。 底部外周は外方へつまみ出した形跡があるため尖る。	内面及び外面底部外周以上を横ナデ調整 (ロクロ回転右) 外面底部は糸切り痕が残る（未調整）	色調 淡灰色 胎土 0.5 mm位の石英等 を少し含む。 焼成 堅緻
		411 口縁のみ。 口縁は外反ぎみにのび、やや肥厚する。 端部は外面を下方へ（斜めに）肥厚させるため、先端が隅丸三角を呈す。	全面横ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 1～3 mm位石英、 長石等を少し含む。 焼成 硬質
		412 口縁部は少し外反し、外面が肥厚して端部に至る。 端部は内上方へつまみあげる。	全面ナデ調整。	色調 内面、淡青灰色 外面、青灰色 胎土 1～3 mmの石英、

			外面口縁にヘラ描き沈線が斜め方向に1条走る。		長石を含む。 焼成 堅緻
須 惠 器 甕	414		口縁上半のみ残存。 口縁は外反し、端部付近で一層強く外方へ曲がる。その曲折部より外面が斜め外下方に肥厚する。（断面3角形の突帯状） 端部は平面を持つが先端がやや肥厚する。 端部付近の断面は長方形に近い形状を呈する。	全面横ナデ調整。	色調 内面 暗灰色 外面 淡黒灰色 胎土 1mm位の長石、石英等少し含む。 焼成 堅緻
灰 釉 陶 器	503		口縁上半は外上方へまっすぐに開がる。 端部付近で外反し、先端は丸くおさめる。		色調 淡黄緑色 胎土 1mm程の石英粒等を少し含む。 焼成 堅緻
陶 器	504		底部は平らで、外端部に断面五角形の低い高台が外周を接地させて貼り付く。 体部下半はやや内弯気味に外上方へ伸びる。	底部外面に糸切り痕あり。 他は横ナデ調整。	色調 内面、外面底部は淡灰色、外面体部は暗褐色 胎土 1mm以下の石英、長石等を少し含む。 精良 焼成 堅緻
SD	綠 釉 陶 器	505	底部、体部を欠く。 口縁は内弯気味。 端部で外上方へつまみ出し、先端は狭い平面をもつ。	横ナデ調整の後、全面に施釉。	色調 黄緑色 胎土 精良 焼成 硬質
6	灯 陶 明 器 皿	506	底部はやや持ち上げる。 口縁部は内弯気味に外上方に伸び、端部は外傾する面を有す。 立ち上りは断面三角形を呈し、短い。	内面と外面端部付近は施釉。 未施釉部分は、回転ヘラケズリ調整及びナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 1mm以下の石英粒を少し含む。 焼成 硬質
		507	平たい底部のみ。 高台は断面三角を呈し高い（外方へふんばる）。	全面横ナデ調整。	色調 明灰褐色 胎土 0.5mm程の長石粒を含む。 焼成 硬質
	灰 釉 陶 器	508	底部のみ。 平底の厚い底部に断面台形の少し高い高台が貼り付けられる。（少し外方へふんばかり、平面で接地） 内弯しつつ底部に比して薄い体部下半へと続く。	外面底部、高台より内に回転糸切り痕（一部ナデ調整により消失）が見える。 他は全面横ナデ調整。	色調 淡緑色（自然釉？） 胎土 1mm程の石英、長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		509	底部と体部下半のみ。 丸底風の底部の外周（体部との境不明瞭）寄りに断面砲弾形の比較的高くしっかりとした高台が外下方にふんばった状態で貼り付く。 体部下半は内弯気味である。		色調 明灰色 胎土 精良 焼成 硬質
			端部付近のみ。	全面施釉。	色調 暗茶褐色

陶器	黒色土器A	510	外上方に伸びる口縁上端から、内外方へ肥厚する。		胎土 1mm位の長石粒等を少し含む。 焼成 硬質
		551	底部欠損。 内弯気味の体部から口縁部は少し外反し端部は丸くおさめる。 内面端部下約1～2mmに幅1～2mmの沈線が1条走る。	内面はヘラミガキ調整。 内面沈線より上、外面、口縁部にナデ調整。 他は未調整。 外面端部まで黒色化。	色調 内面、淡灰褐色 内外面端部黒色 胎土 1mm程の長石、石英粒等を少し含む。 焼成 硬質
		552	体部より口縁部にかけて、内弯気味に外上方へ開く。 端部は、内側に段を有す。	内面全体にヘラミガキ調整。 端部内面より外面口縁部にかけて横ナデ調整。	色調 内面及び外面端部付近は黒色、他は淡褐色 胎土 1mm程の石英、長石粒等を多く含む。 焼成 硬質
SD   6	黒色土碗器B	553	体部から口縁部にかけて内弯気味に伸びる。 口縁部上半は外反する。 端部は丸く、内面下に巾2mm位の沈線が1条走る。	内面沈線以下全面にヘラミガキ調整。 沈線より外面口縁部にかけて横ナデ調整。	色調 内面 暗茶褐色 外面 淡茶褐色 胎土 2～3mmの石英、長石粒を多く含む。 焼成 やや硬質
		554	口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は丸くおさめる。 内面端部下1～2mmの沈線が1条めぐる。 幅0.5mm位の細いヘラ状工具での2度にわたる線引きか先端が2又状の工具での線引きが考えられ、2条の沈線が底面に見られる。		色調 淡褐色、黒色化部分は暗褐色～黒褐色 胎土 2mm程の石英、長石粒を少し含む。 焼成 硬質
黒色土器	A	555	口縁部は内弯気味に外上方へ伸びる。 端部は丸味を帯び、内面側に巾2mm位の沈線が1条走る。	口縁部内面にヘラミガキ調整。 内面端部付近より外面口縁部上半に横ナデ調整。	色調 内面及び外面端部は黒色、他は淡褐色。 胎土 1mm程の石英、長石粒を少し含む。 焼成 硬質
		556	底面部はやや内弯しつつ上方へ伸び、体部に続く。 底部の外側へふんばった断面がゆがんだ台形の高台がつく。 高台は平面で接地する。	底部外面は未調整。 内面は炭素を吸着させた上を横方向にヘラミガキ調整。	色調 外面 淡灰褐色 内面 黒色 胎土 1mm以下の長石粒 微細な雲母を含む。 焼成 硬質
黒色土器	III	557	底部欠損（丸底か） 口縁部は外上方へまっすぐ伸びる。 端部は面をもつ。	内面底部に密、外面口縁部下半に粗なヘラミガキ調整。 内外面口縁部に横ナデ調整。	色調 暗灰色～黒色 口縁1/8は褐色 胎土 1mm以内の石英粒等を少し含む。 焼成 やや軟質
黒色土碗器A	A	558	口縁部下半以下欠損。 口縁上半は内弯気味に伸び、端部付近で外面に横ナデ調整による段をもつ。 端部は丸く、内面に幅1mm位の沈線が1	内面上部を横方向に、下部は方向不明であるが、ヘラミガキ調整。 外面段以上に横ナデ調整、他は未調整。 黒色化は外面段付近まで。	色調 内面及び外面の段以上は淡黒色、他は淡褐色 胎土 1mm程の石英、長

			条めぐる。		石粒を少し含む。 焼成 やや硬質
SD   6	黒 椀 色	559	高台付き底部のみ残存。 断面台形の比較的しっかりした高台が外方へふんばり、内端で接地する。 底部中央は丸底と思われる。	全面横ナデ調整。	色調 高台部分黒色 他は暗褐色 胎土 1 mm程の石英粒を 少し含む。 焼成 硬質
		560	口縁端部内面下 1 ~ 2 mm のところに幅 1 mm 位の沈線が 1 条めぐる。 口縁部はやや外反させる。 黒色化は断面にまで侵透せず。	手づくね。 ナデ調整。 内面体部はヘラミガキ調整により平滑に仕上げる。	色調 暗灰色 口縁内面 黒色 体部外面、淡褐色 胎土 1 mm 程の長石粒等 を少し含む。 焼成 硬質
	A	561	底部高台付近のみ残存。 外周端に断面方形の低い高台がほぼ垂直に貼り付き、平面で接地する。	内面は平滑に仕上げる。 内面のみ黒色化している。	色調 内面 黒色 外側 褐色 胎土 2 mm 程の石英を少 し含む。 焼成 硬質
SD   6	白小 磁 椀	601	体部はわずかに内弯する。 口縁部は外反する。 端部は外傾する平面をもつ。	端部付近を除いて施釉。	色調 灰白色 胎土 精良 焼成 硬質
	青 椀 磁	602	やや丸味を帯びた底部に断面不正五角形（外側の角を欠いた台形）のしっかりした高台が貼り付く。 高台は、ほぼ垂直に伸び、内側の平面で接地する。 体部下半は内弯気味に伸びる。	全面横ナデ調整。	色調 淡緑褐色 胎土 精良 焼成 堅緻
	瓦	650	凸面の縄目は、全体の 2/3 がくずれている。	凸面は縄目。 端面はヘラケズリ調整。 凹面は布目。 成形は桶巻き。	色調 淡灰褐色 胎土 5 mm 程の長石少し 2 mm 程の石英、長石、 雲母を含む。 焼成 やや硬質
	平 瓦	651		方 4 mm の格子目叩き。 端面ヘラケズリ調整。 成形は桶巻き。	色調 凸面 灰褐色、暗 灰褐色 凹面 灰褐色 胎土 4 mm 程の長石を少 し含む。 焼成 やや硬質
方形 平 瓦	652	断面凹字形の方形平瓦の袖部分。	外面と端面及び内面の端面付近をヘラケズリ調整。 他の内面は、細かい縄目を施す。	色調 黄褐色 胎土 2 mm 以下の石英、 長石、雲母、チャート を多く含む。 焼成 軟質	
	653		叩き目の単位が凸面に明瞭に認められる。	色調 淡黄褐色 胎土 2 ~ 5 mm の長石を 少し含む。 焼成 軟質	

SD   6	平	654	凹面は未調整（布目痕）。 端面及び側面は細かい格子目叩き調整。	色調 暗灰色 胎土 0.5 mm以下の長石粒を多く含む。 焼成 硬質
		655	凸面は細かい格子目叩き調整。ナデ調整により大部分消失。 凹面は粗い縄目。 端面はヘラケズリ調整。	色調 凸面 黒色 凹面 灰褐色 胎土 2 mm以下の長石、0.5 mm以下の雲母を含む。 焼成 硬質
	方形平瓦	656	袖部分。 凸面 0.7 ~ 1 cmの格子目叩き調整。 端面 0.2 ~ 0.3 • 0.4 ~ 0.5 cmの長方形格子目叩き調整。 側面と端面の凹面側を斜めにヘラケズリ調整。	色調 灰褐色 胎土 4 ~ 10 mm程の長石粒等を含む。 焼成 やや軟質
	軒平瓦	657	端面を5面、面取りする。 凸面は、叩き目をナデ調整によって消し、平滑に仕上げる。 端面の面取りは、ヘラケズリによって行なう。 凹面は、布の圧痕（布目痕）が残る。	色調 淡灰色 胎土 1 mm程の長石粒等を少し含む。 焼成 硬質
	平	659	凸面は縄目。 凹面は布目。 端面はヘラケズリ調整。 成形は桶巻き。	色調 灰褐色 胎土 6 mm程の長石、2 mm程の石英、長石、雲母を多く含む。 焼成 やや硬質
		660	凸面は縄目。 凹面及び端面は布目でかなりくずれてい る。 ヘラケズリ調整。	色調 淡灰褐色 胎土 4 mm程の長石 1コ 1 ~ 2 mmの石英、長石ほか多く含む。 焼成 やや硬質
	瓦	661	凸面は縄目。 凹面は布目で、端部と凹面の端から 1.3 cmはヘラケズリ調整。 成形は桶巻き。	色調 淡灰褐色 胎土 2 mm程の長石、石英や微細な雲母など多く含む。 焼成 やや硬質
	丸瓦	662	両側面が欠損している。 調整は磨滅して不明。	色調 淡褐色 胎土 2 ~ 3 mmの石英、長石を少し含む。 焼成 軟質
	土師器	90	内弯気味に伸びた口縁が屈曲外反して端部をつまみ上げる。 ナデ調整。	色調 灰褐色 胎土 1 mm位の石英、長石粒を少し含む。 焼成 やや硬質
		91	扁平な底部から1度外反し、次に内弯する、いわゆる3の字状の口縁をもち、 90に同じ。	色調 淡褐色 胎土 1 mm位の石英、長

			端部は丸くおさめる。		石等を少し含む。 焼成 硬質
		92	2度以上のナデにより、少し角度をもつた内弯気味の口縁を有し、端部は丸くおさめる。	90に同じ。	色調 淡褐色 胎土 1mm以下の石英を少し含む。 焼成 やや硬質
		93	口縁は内弯気味に伸び端部は丸くおさめる。	口縁内面及び外部の底部あたりまではナデ調整。 底部内面はナデ調整。 底部外面は未調整。 成形は手づくね。	色調 淡黄褐色 胎土 良、微細な長石、雲母を含む。 焼成 硬質
	土師皿	94	口縁は内弯する。 端部は面をもちつつ、内面寄りをつまみ上げ気味になだため、凹状を呈する。	90に同じ。	色調 淡灰褐色 胎土 1mm以下の石粒、雲母等を少し含む。 焼成 堅質
	器	95	口縁はやや内弯気味に伸び、端部は丸くおさめる。 底部と立ち上がり部分の境に沈線をめぐらす。		色調 淡黄灰褐色 胎土 焼成 やや硬質
SD		96	口縁はやや内弯気味に伸び、端部はやや外反しながら丸くおさめる。 端部内面に斜めの面を有する。		色調 明茶褐色 胎土 1mm位の石英粒を少し含む。 焼成 やや軟質
		97	底部は平底である。 口縁端部は、やや外反気味に伸び、肥厚させて、先端を丸くおさめる。	口縁の内外面はナデ調整である。 外面のそれ以外は未調整であり、内面は暗文が施されている。	色調 淡灰褐色 胎土 1mm以下の石英、長石粒など多く含む。 焼成 やや硬質
7		415	天井部はなく口縁は境付近より外下方へ斜めにのびる。 端部は丸くおさめ、端部より内側2mm位の所に幅約2mmの沈線が1条走る。	横ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 1~2mmの長石を少し含む。 焼成 硬質
	須杯	416	やや浅い器形である。 立ち上がり外弯ぎみにのびる。端部は丸くおさめる。	立ち上がり横ナデ調整。 残存部のヘラケズリは認められない。 ロクロ回転右。	色調 淡灰色 胎土 良、砂粒混入 (雲母片、長石片1~2mmのものを含む) 焼成 硬質
	身		受け部は直線的に上外方にのびる。端部は短く、丸くおさめる。		
	惠甕	417	口縁の外側は外に広がりながら丸くおさまる。 口縁端部は水平に面を持ち、端部に幅1mm位の沈線様のものが2条みられる。 口縁の内側は3mm位下ったところで少し内側に凹む。	磨滅して不明であるが内面の一部にナデの痕跡がみられる。	色調 淡灰褐色 胎土 1~2mmの石英、長石を含む。 焼成 軟質
	器	418	太い頸部からゆるやかに外反し、端部は屈曲するように外斜め下方へのびる。	横ナデ調整。	色調 内面 淡青灰色 外面 暗青灰色 胎土 1mm位の石英等を

				少し含む。 焼成 堅緻	
須 恵 器 鉢		419	内湾ぎみに口縁がのび、端部は外方に肥厚し、上端は丸い。	横ナデ調整。  色調 淡紫灰色 胎土 1~4 mmの石英、長石等を少し含む。 焼成 堅緻	
灰 釉 陶 器 椀		511	扁平な底部の外周付近に断面長方形の高台が付く。	釉は内面のみに施される。 横ナデ調整。  色調 淡緑褐色 胎土 1 mm以下の石英、長石粒等を少し含む。 焼成 堅緻	
青 白 磁		603	扁平な底部の外周寄りに断面長方形の高台がほぼ垂直に付けられる。体部は内傾しつつ外反する。	  色調 淡緑色 胎土 良好 焼成 堅緻	
SD   7	平 瓦	663	上端面の角を削りとて面取りしている。	上面に方 5 mmの格子叩きをなでて消しているのが見られる。  色調 暗灰色と灰色が半々。 胎土 1~2 mmの石英、長石等を少し含む。 焼成 硬質	
		664		繩目叩き。  色調 灰色 胎土 1~2 mm石英、長石等を多く含む。 焼成 良好、硬質	
		665		表面には方 3~4 mmの格子目叩き、裏面は布目痕が残る。	色調 灰色 焼成 硬質
		666		残部がほとんどなでられているように見えるがこれは磨滅の可能性もある。 凸面はナデ調整、凹面は未調整か? 端面は叩きなし。ほとんど平坦でなでられて仕上げられているように見える。	色調 黄褐色(明るいレンガ色) 胎土 良、0.5 mm以下の雲母長石を含む。2 mm以下のクサリ碌を含む。 焼成 軟質
SD   15	須 恵 器 瓶 子	420	頸部より上残存。 口縁は外反、頸を作って上方へ立ち上がる。 少し尖りぎみ。	横ナデ調整。  色調 淡灰色 胎土 焼成 硬質	
SD   21	土 師 器 皿	98	底部は平らである。 口縁は内湾ぎみにまっすぐ伸びる。 端部は少しつまみ上がっている。	4 9と同じ。 成形は手づくね。  色調 淡赤褐色 胎土 1 mm以下の石英を少し含む。 焼成 硬質	
		99	内湾気味に口縁が伸び、端部は丸くおさめる。	外面未調整部分に布状の圧痕らしきものがみえる。 4 9と同じ。  色調 淡褐色 胎土 0.5 mm以下の長石、雲母等を少し含む。 焼成 硬質	
		100	口縁は内湾する。 端部を内側に少し折り曲げている。	4 9と同じ。  色調 淡褐色 胎土 1 mm位の長石を少し含む。	

				1.~1.5 mmの雲母と思われるものが見える。 焼成 やや軟質
土師器	102	底部より内弯気味に伸び、途中で段を作るように外反する。 端部は外方へ水平気味に出かかるが丸くおさめる。	4.9に同じ。 内面以下は乱ナデ調整。	色調 暗灰褐色 胎土 1 mm位の石英、長石、雲母を少し含む。 焼成 硬質
須	421	口縁部下半がやや外反する。 端部は丸くおさめる。 天井部は平ら。 稜は不明確。	横ナデ調整。 まき上げ。 回転右回り。 天井部の%以上が未調整。	色調 淡灰色 胎土 1 mm以下の石英、長石を含む。 焼成 やや軟質
SD   惠 21	422	天井部途中よりゆるやかに外下方にのび口縁との境を明瞭にせず、斜め外下方にのびる。 端部は丸くおさめる。	横ナデ（所々に強いナデ）調整。 回転逆にして左方向。 外面天井部に強いナデの為凹線状を呈する所がある。	色調 青灰色 胎土 1~2 mm位の長石を少し含む。 焼成 硬質
	423	やや浅い器形で立ち上がりは短く内傾し端部は丸くおさめる。 受部は直線的に上外方にのびる。	残存部にヘラの使用は認められない。 回転右。	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬質
杯身	424	やや浅い器形で立ち上がりは長く、やや外弯ぎみにのび端部はまるくおさめる。 受部は丸く厚い。	体部の約1/2ヘラケズリ。 回転右。	色調 明灰色 胎土 0.5~1 mm位の長石を含む。 焼成 やや硬質
	425	立ち上がり部分は徐々に内部に向いながら端部付近でいく分反りぎみにおさまる。 受部は約4 mmから成っており比較的水平のまま丸くおさまる。	外面底部の%をヘラケズリ。 他は横ナデ調整。	色調 明灰色 胎土 0.8~2 mm位の長石を多く含む。 焼成 硬質
器	426	立ち上がり部分は外反しつつ内傾し、端部は丸くおさめる。 受部は外方へ少し上がりぎみにのび、端部は丸くおさめる。	横ナデ調整。	色調 内面 淡青灰色 外側 淡赤灰褐色 胎土 1~3 mm位の石英、長石等を多く含む。 焼成 硬質
	427		内、外側ともに横ナデ調整。 ロクロ回転右。	色調 暗灰色 胎土 0.5 mm位の長石を少し含む。 焼成 硬質
青碗	604	厚い底部の外周よりに断面台形の高台が内端面を接地させてつく。	全面に横ナデ調整。	色調 淡青灰色 胎土 精良 焼成 堅緻、やや焼きむら有り。
磁				

	白 椀 磁	605	底部を欠くが、内湾氣味に伸びた口縁部は端部で外方へ肥厚し、先端は丸くおさめる。 平滑な内面に比べて外面は凹凸が目立つ。	横ナデ調整。	色調 白灰色 胎土 1 mm以下の微細な石英粒等を少し含む。 焼成 堅緻
SD   21	軒 平 瓦	667			色調 淡灰褐色 素地表面寄りは緑青灰色 胎土 1 mm位の石英、長石等を多く含む。 焼成 硬質
	丸 瓦	668		かなり磨滅しているが凸面は綱目、凹面は布目の痕跡がつく。	色調 外面 暗灰色、他は淡灰色 胎土 1 mm位の石英等を少し含む。 焼成 やや軟質



# 第6章 D 地区

## 1. 遺構 (図版23~27・46・47)

C地区の西方、調査地区の中央西半の旧大伴神社社地跡を中心とし、東方に向って大きく傾斜している。試掘時には旧大伴神社移転に伴って埋められた石段が露出していた。また、大伴神社跡地上層の整地層からは神社存在時に用いられた伏見人形の狐形土製品が多量に出土した。整地層および包含層から土馬も出土している。当地は、旧水田層から20~80cm掘り下げた黄褐色粘質土層（花崗岩バイラン層）を切り込んで遺構が検出された。遺構面は3層に分かれ、上層が古墳時代以降、中層が弥生時代中期後半～後期、下層が弥生時代中期中頃以前として把握できた。

### (1) 上層 遺構 (図版23・24・47)

上層の遺構は竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土塙20基が検出された。

#### 1) 竪穴住居 (図版49)

**S B 3** D地区中央北寄りに位置し、南北6m×東西4m以上の平面方形を呈すると思われるが、SK145・146などの多くの多くの遺構に切られて存在する。周溝はなく、20cmの深さを測るが東半は削平されており、確認できなかった。また柱穴も検出できなかった。遺物は、暗褐色砂質土の覆土より庄内式併行期の土器が出土している。

#### 2) 掘立柱建物

**S B 107** S B 3と重複するかたちで、2間(7m)×2間(4.4m)の南北棟の建物がみられる。柱間は2m~3.8mの不規則な並びである。柱掘形は40cm~74cmのほぼ円形を呈す。方位は西側柱列を中心にN18°00' Eであった。柱穴より古墳時代の須恵器片や弥生土器が出土した。

#### 3) 土塙群 (24)

**S K 132** 南西端に位置し、西半は未検出である。80cm×35cm以上の方形を呈し、中程に段を有する。深さは20cmを測る。遺物は出土しない。

**S K 133** S K132の真北にあり、西半は未検出である。現状は三角形であるが、2m×1.1m以上の楕円形を呈すと考えられ、中に段を有し、またピット状の落ち込みがみられる。深さは37cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 134** S K133の西方にあり、2.55m×1.15mの楕円形を呈す。中に段とピット状の落ち込みを有するが、最深部で48cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 135** 東南端に位置し、北部でS K136・137を切り込み、南部および東部は未検出である。平面形は楕円形と考えられる。規模は2m以上×2m以上で、深さは54cmであった。遺物は出土していない。

**S K 136** S K135から北方を切り込まれ、S K137にも東方から切り込まれている。3.2m×2.2mの楕円形を呈すると考えられ、西端にピット状の落ち込みを有す。深さ54cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 137** S K136の東にある。東端は未検出であるため、規模は1.2m以上、1.0m以上を呈すと考えられる。深さは10cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 138** S K134の真北に位置する。1.28m×1.04mの円形を呈し、深さは31cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 139** S B 3・107の南西にあり、S K140に東部を切り込まれている。1.52m×1.17mの三角形を呈する。深さは14cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 140** S K139の東部を切り、またS K141に北部を切り込まれている。1.32m×0.9mの楕円形を呈し、深さは32cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 141** S K140の北部を切り込んで、S B 3の南東端やS B 107の西側柱列上と接する。95cm×72cmの円形を呈し、深さは35cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 142** S B 3の東南端を切り込むようであり、S B 107と重複する。94cm×46cmの楕円形を呈し、23cmの深さを測る。遺物は出土していない。

**S K 143** S B 3の東南に切り込むようにあり、S B 107と重複する。3.4m×1.54mの南北に長い楕円形を呈し、深さは41cmを測る。覆土中より奈良時代の広口壺、短頸壺が出土している。

**S K 144** 北西端にあり80cm×75cmの円形を呈す。深さは42cmを測る。江戸時代と考えられる土師器皿が出土している。

**S K 145** S B 3の北西肩を切り込む形で検出された。2.74m×1.44mのやや角ばった楕円形

で、37cmの深さを測る。遺物は奈良時代の須恵器・土師器や弥生時代後期の土器が出土している。

**S K 146** S K145の東に、S K145に切られて重複する形で検出された。S B 3 の北肩を切り込んでおり、S B 107の柱穴に切り込まれている。平面形は $2.78\text{m} \times 0.4\text{m}$ 以上の長方形を呈する。深さは18cmを測る。遺物は、弥生時代後期の土器が出土しているが、S K146がS B 3 を切り込んでいることより、混入と考えられる。

**S K 147** S B 3 の北肩を切り込んで作られている。60cm×50cmの円形を呈し、30cmの深さを測る。覆土より古墳時代の須恵器と土師器が出土している。

**S K 148** S B 3 の北にあり、S K149を切り込んで作られている。規模は $1.3\text{m} \times 0.9\text{m}$ の楕円形を呈し、深さは30cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 149** S K148に切りこまれて検出された。82cm×65cm以上の楕円形を呈し、22cmの深さを測る。鎌倉時代の土師器皿、白磁、古墳時代の土器が出土している。

**S K 150** S K149の東に、S K149に切り込まれた形で検出された。 $1.56\text{m} \times 1.2\text{m}$ の楕円形を呈し、深さは25cmを測る。遺物は鎌倉時代の土師器皿や古墳時代の土器が出土している。

**S K 151** S K148の真北にあり、北部は未検出である。平面形弧形を呈する $1.47\text{m} \times 0.56\text{m}$ の土塙で、深さは48cmを測る。

## (2) 中層遺構 (図版25・26・46)

中層の遺構は、竪穴住居9棟、土塙10基が検出された。

### 1) 竪穴住居 (図版28・48)

**S B 4** 北半部に集中した住居跡群の最西端に位置する。住居跡は東傾する斜面に構築されているため地山をL字状に造築し床面としている。このため、東半部は盛土されていたと考えられるが、流出により明らかにしがたい。規模南北7m、東西2.3m以上で、周壁の深さは西側で30cmを測る。周溝は西側の中ほどが切れており、幅10cm～20cm、深さ5cmのものが東側を除く3方で確認された。また、柱穴は北東を除く3隅にあり、直径20cm～50cmの円形を呈し、深さ10cm～40cmを測る。覆土より弥生時代後期の遺物が出土している。

**S B 10** S B 4 の下層で検出された住居跡はS B 4 に拡張される前のものだと考えられる。そのため周壁は確認されず、S B 4 のわずか内側に周溝がみられるだけであった。周溝は、数箇所で切れており、規模は南北6.3m、東西1.8m以上を測り、幅は10cm、深さは5cmである。柱穴は確認できなかったが、S B 4 拡張時に同じ柱穴を利用したと考えられる。

**S B 5** S B 4 の北東に一部重複して検出された。南周壁は S B 7 に切られ、北部は未検出であり、東半部は東傾する斜面上に構築されたとみられるため、削平されている。規模は南北4.7m以上、東西1.4m以上で、周壁は西側で20cmを測る。周溝は西・南の2方向にみられ、幅15cm～20cm、深さ5cmであった。柱穴は南西隅に1箇所認められ、直径30cm、深さ20cmを測る。また、住居跡の中央と考えられる位置に不整形の焼土が確認されている。暗褐色砂質土層の覆土中より、弥生時代後期の土器が出土している。

**S B 11** S B 5 の下層から発見された。そのため周壁はみられず S B 5 の周溝のわずか内側に同様の周溝が検出されただけであった。周溝は、西側北部で切れており、規模は南北3.8m以上、東西1.1m以上、幅10cm～20cm、深さは10cmを測る。S B 11は S B 5 の拡張前のものと考えられる。

**S B 6** S B 4 の南西に重複して検出され、東半部は S B 7 によって切り込まれている。規模は南北4.7m、東西1.3m以上で、周壁は西側で15cmを測る。周溝は見られず、柱穴が住居跡の4隅とみられる位置に検出された。柱穴は、直径40cm～50cmの円形で、深さは20cm～25cmを測る。柱穴の位置より推定4.7mの正方形と考えられる。覆土から弥生時代後期の土器が出土している。

**S B 7** S B 6 の東側を切り込んで検出された。北端部は S B 5 の周壁を切り込んでおり、東部は削平されていた。規模は南北4.4m、東西は南壁で6m以上、周壁は西側で15cmを測る。周溝、柱穴は明確にしえなかった。遺物は弥生時代後期の土器が出土している。

**S B 8** 以上の住居跡を一群とするならば、それらとの切り合い関係を不明瞭にした一群がこの地区の東端に存在している。S B 8 はそれらの中で最大規模を誇る。S B 9 に重複して切り込まれ、南端で S B 12 を切り込んでいる。規模は南北5m、東西3.4m以上で、周壁は35cmを測る。周溝および柱穴は確認しえなかったが、床面の中央と思われるところに直径60cm程の円形の焼土がみられる。炉跡であろうか。遺物は弥生時代中期の土器が出土している。

**S B 9** S B 8 と重複し、S B 8 を切り込んで検出された。規模は南北3.7m、東西2.9m以上で、東端は2.9mあり、削平や樹木の根による搅乱を受けているが、周壁がわずかに残存していた。平面形は、南北に長い台形を呈する。周壁は35cmを測る。周溝は東側を除く3方に確認され、西側北寄りはピットに切られている。幅10cm～25cm、深さは20cmを測る。柱穴は明らかにしえず、床面中央やや東寄りのところに30cm～40cmの円形の焼土がみられた。遺物は弥生時代中期の土器が出土している。

**S B 12** S B 8 に北部を切り込まれ、東部は未検出であった。規模は南北1.2m以上、東西1.8m以上、周壁は西側で40cmを測る。出土した弥生時代中期の甕が、S B 8 のものと同一個体であることが判明した。

## 2) 土 坂 群 (図版27・52)

**S K 152** 中央南寄りに位置し、 $1.1\text{m} \times 0.82\text{m}$  の不整合形を呈す。深さは10cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 153** S K152の東にあり、規模は $2.55\text{m} \times 1.4\text{m}$  の長方形を呈し、深さは29cmを測る。底面に10cm～30cmの礫が散在し、それらに混じって弥生時代後期の土器が出土している。

**S K 154** S K153の北にあり、 $64\text{cm} \times 50\text{cm}$  の楕円形を呈し、深さは20cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 155** S K153の北に位置し、 $2.55\text{m} \times 0.97\text{m}$  の長方形を呈し、深さは23cmを測る。覆土より弥生時代後期の土器が出土する。

**S K 156** S K153の東、D地区南東隅に位置する。 $68\text{cm} \times 52\text{cm}$  の楕円形を呈し、31cmの深さがある。中央部のみ $40\text{cm} \times 20\text{cm}$  の楕円形にさらに深く掘り込まれる。遺物は出土しない。

**S K 157** S K156の北にあり、 $3\text{m} \times 2.18\text{m}$  の楕円形を呈す。深さは35cmを測る平らな底面の中央付近に三角形状に10cm～40cmの礫がみられ、その北端に土器が集中的に出土している。土器は弥生時代後期のものである。

**S K 158** 北部西半、S B 4 の西側に位置し、西部は未検出である。 $2.15\text{m}$  以上 $\times 2.10\text{m}$  の不整合形を呈し、30cmの深さを測る。遺物の出土はみられなかった。

**S K 159** S B 4 の西肩を切り込んで形成され、 $58\text{cm} \times 52\text{cm}$  の円形を呈す。深さは16cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 160** 北端に位置し、S B 5 と重複している。北側は未検出であったが、 $2.22\text{m} \times 1.02\text{m}$  以上の東西に長い楕円形で、深さは53cmを測る。覆土から弥生時代中期の土器が出土している。

**S K 161** 住居跡群の中央、S B 4 とS B 5 の中間に位置している。直径45cmの不整円形を呈し、西寄りで $20\text{cm} \times 20\text{cm}$  の円形に落ち込む。深さは中段で14cm、下段ではさらに8cm下がる。弥生時代後期の土器が出土している。

## (3) 下 層 遺 構 (図版47)

下層は、D地区の東半部を地山まで掘り下げた時に検出された遺構群である。下層の遺構は、竪穴住居1棟、土塙11基、溝4条である。

### 1) 竪 穴 住 居 (図版49)

**S B 13** 北東寄りに位置し、中層の S B 8 と重複する。平面形は円形を呈しているが、全周の約 $\frac{1}{4}$ 程が検出された。周壁は、西側で30cmを測り、周溝は幅10cm～15cm、深さ5cmを測る。柱穴と遺物は確認できなかった。

## 2) 土 塚 群

**S K 162** 南半部にあり、東の一部を S K 163 に切り込まれている。規模は、2m×1.8m、深さ30cmの隅丸三角形を呈する。遺物は出土していない。

**S K 163** S K 162を切って東～北東にのびる細長い形状を呈す。規模は2.3m×0.9mで深さは19cmであった。遺物は出土していない。

**S K 164** S K 162の北方に位置し、1.2m×1mの楕円形を呈す。深さは28cmあり、遺物は出土していない。

**S K 165** S K 164の東南、D地区の東端南寄りに位置する。直径1.2mの円形を呈し、深さは55cmを測る。深さ14cmのところで直径90cmの段をもつ。遺物は出土していない。

**S K 166** 中央東端にあり、東半部は未検出である。直径1mの円形と考えられ、深さは18cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 167** 南端は S K 166 に切り込まれ、東半部は未検出であった。直径2.9mの円形と考えられ、深さは56cmを測る。内側に、ピット1と段を3方にもつ。段までの深さは28cmである。遺物の出土はない。

**S K 168** 中央西端に位置し、1.3m×0.7mの楕円形を呈す。深さは49cmを測る。遺物は出土していない。

**S K 169** S K 168とS K 167の中間にあり、1.68m×1.3mの楕円形を呈す。深さは40cmを測る。遺物の出土はない。

**S K 170** S K 168の北にあり、直径98cmの円形を呈す。深さは17cmを測るが遺物は出土していない。

**S K 171** S K 169の北にあり、直径86cmの円形を呈す。深さは21cmを測り、南端に段がある。段の深さは10cmであった。遺物は出土していない。

**S K 172** 中央北寄りに位置し、東半部は S B 13 に切られている。直径98cmの円形と考えられ、深さは14cmを測る。遺物の出土はない。

## 3) 溝

**S D 16** S K 159とS K 161との間にあり、東から西へ流れる形状を呈す。規模は長さ1.7m、幅20cm、深さ5cmである。遺物はみられない。

**S D 17** S K 161の西から北東方向へ、さらに途中で南東方向へと向きを変えて流れる形状を呈す。長さ3.7m、幅20cm、深さ8cmを測る。遺物は出土していない。

**S D 18** S K 161に南端を切られて北へ、途中でS D 17を切り込みつつ、「く」の字状に北西に向いて流れる形状を呈す。長さは1.2m、幅12cm、深さは11cmを測る。遺物はみられなかった。

**S D 19** S B 13の周溝の南端から北東方向にのびる。規模は長さ2.6m以上、幅20cm、深さ4cmを測る。遺物は出土していない。

## 2. 遺 物

北半の住居跡群から弥生時代中期～古式土師器に至る多くの一括遺物が出土している。周囲の土塙群からも同時期の土器を出土するものがあり、両者の共存関係が注目されるところである。確認した3時期の遺構面から出土した土器を、上層より順次掲げていく。

### (1) 上層遺物出土土器

#### 1) 穫穴住居跡出土土器 (図版65)

**S B 3** 瓢の口縁が7点(106～112)、甕か壺の底部が1点(115)、高杯および器台が4点(120・122～124)出土した。

瓢E(106)は、口縁が斜め上方にまっすぐ立ち上がるるものである。口径10cmを測る。

瓢D(107～112)は弥生時代中期中頃から庄内式併行期と考えられ、107・111が当住居跡の時期を代表するものであると思われる。

112は第IV様式のもので、口径23.8cmを測る。頸から上が直立する形態である。

第V様式の土器は(108～110)であり、頸から上がり外傾もしくは端部を外方につまみ出す形態を呈する。

庄内式併行期(107・111)に至ると、それまで口縁部外面の頸から上に施されていた刺突列点文が頸にかかったりかなり横にねかされるようになっていく。また、口縁端部が途中から外反するようになる。

底部(115)は、外面に右上りのタタキ目がみられるもので、底部中央が少し凹む。

高杯(123・124)はともに筒部が中空で、123はエンタシス形にふくらむ。裾部との境に3～4個の透し孔を穿つ。

器台（120・122）は受部のみのものと脚部のみのものとにわかれ。120は口縁がやや外反ぎみにのび、端部は肥厚して垂下させ、端面下半には2条の沈線が巡る。122は、エンタシス形の筒部をもつもので、受部が水平に近く開いてゆくものである。どちらも榎木原遺跡に類例があり<sup>①</sup>、庄内式併行期のものと思われる。

## 2) 掘立柱建物跡出土土器 (図版69)

**S B 107** 弥生土器の底部（157）が出土している。他に、古墳時代の須恵器が出土しているが、いずれも混入と考えられる。

## 3) 土塙群出土土器 (図版69・70)

**S K 143** 弥生土器（158）は、壺の口縁部と思われるが、時期不明である。

須恵器は2点出土している。短頸壺（428）は肩部以上が残存し、口縁がほぼ垂直に立つ。広口壺（429）は底部が欠失しているが、張り出した肩の上下に1条づつ沈線が施される。頸部径は底部径とはほぼ同じで、大きく外反する口縁へとつづく。端部はほぼ水平になり、つまみ上げられる。いずれも奈良時代後半（8世紀後半）のものと考えられる。

**S K 144** 土師器皿（159）は底部が欠失し、口径10.8cmを測るが江戸時代のものと考えていいと思われる。

須恵器杯身（430）は底部のみの破片である。奈良時代後期に位置付けられる。

**S K 145** 弥生土器は3点出土している。底部（160）と高杯の脚部（161・162）である。

土師器杯身（163）は、内面の口縁下半に1段の放射線状暗文、見込みにラセン状暗文が施されている。平城宮S K 219出土の杯身よりやや古く、同S K 820出土の杯身よりやや新しい様相を呈しており<sup>②</sup>、8世紀中頃～後半にかけてのものと思われる。

須恵器の長頸壺（431）は、体部以下が残存しており、丸い体部と高く外方へふんばった高台が底部外周付近に付けられ、奈良時代後半のものであろう。そのほか、古墳時代の壺（432）甕（434）と器台（433）が混入している。

**S K 146** 弥生土器が4点出土している。

甕D（164）は第V様式と考えられる口縁のみの土器である。

他に底部の破片が3点出土している（165～167）。

**S K 147** 古墳時代の須恵器・土師器片が出土している。

**S K 149** 鎌倉時代の土師器皿と古墳時代の土器が混在して出土した。

**S K 150** S K149と同じく鎌倉時代の土師器皿と古墳時代の土器片が出土している。

## (2) 中層遺構出土土器

### 1) 竪穴住居跡出土土器 (図版36・37・66~69)

**S B 4** 第V様式の特徴をもつ弥生土器が一括して出土している。

細頸壺(102・103)は、小さな平底のつくそろばん状の体部から逆八の字状に口縁がのびるものである。体部下半を縦位に、その少し上を横位にヘラミガキが行われるもの(102)もある。唐古遺跡の13号地点に隣接する第V様式竪穴内出土土器(518)に近似している。<sup>③</sup>

壺(104・105)は、平底もしくは少しきぼんだ底部から大きなほぼ球形の体部に至る。口縁は104が途中を欠失しているが外反するものと思われる。105は体部外面にヘラミガキが施される。野洲町五之里遺跡<sup>④</sup>、奈良県唐古遺跡第45地点<sup>⑤</sup>(506~508)、榎木原遺跡<sup>⑥</sup>などに類例がみられる。

手焙?(125)は、体部上半が欠失しているが、小さな平底を有している。内外面は小単位のハケ目が施され、内面に煤の付着がみられる。榎木原遺跡にも1点出土しているが、あまり似ていないう<sup>⑦</sup>。小形甕は(126)は、平底を有する丸い体部に外反し、端部が内側へ巻き込む様な口縁をもつ。外面肩部に少しきずれた波状文が施される。

甕D(127・128)はともに口縁部のみであるが、127が少し古く、第IV様式に遡る可能性がある。

底部(113・114・116・129~131)は113のみ外面に叩き目が施される。

高杯(117・132・133)は2点出土している。117は欠山式と呼ばれるもので、八字状に開く脚部から外方へ水平にのび、角を有して内彎する口縁がみられる。杯部外面はヘラミガキが施される。長浜市鴨田遺跡に同様の高杯が出土している<sup>⑧</sup>。

132・133は筒部のみで詳細はわからない。

高杯形器台(118・119)は、八の字状に開く脚部に外上方へ浅く開く受部がほぼまっすぐにのびてゆく。119は受部端が下方に垂下肥厚し、端面に棒状浮文が3個一組で付けられる。118は榎木原遺跡<sup>⑨</sup>・長浜市鴨田遺跡<sup>⑩</sup>などに類例がみられる。

器台脚部(121)と脚端部(134)は、121が八の字状に開き、上下2段の円孔が四方に穿たれ、134は先端が凹線状にくぼんでいる。

**S B 5** 第IV~第V様式の土器が出土している。

台付無頸壺(135)は、内彎する口縁の端部付近に2個一対の穿孔がみられ、その下方に2条の凹線が巡る。第IV様式の特徴を備えている。

甕D(136~139)139が第IV様式に、136・137が第V様式に相当する。137は、大津市北大津遺跡<sup>⑪</sup>

や榎木原遺跡などに顯著な出土例がみられる西ノ辻E・D式併行期の土器である。<sup>⑫</sup>

底部（140・141）は平底を有し、140は内外面にハケ目がみられる。

**S B 6** 第V様式の弥生土器が2点出土している。

甕D（142）受け口の口縁部外面に刺突列点文が施されている。

高杯（143）は口縁のみの破片である。口縁がやや外方へ開く形態をとり、外面の上半部にヘラミガキが施される。

**S B 7** 第V様式と考えられる土器が3点出土している。

壺（144）は大きく開いた口縁の端部下端が断面三角形に肥厚し、その外面下端に刺突文が施される。<sup>⑬</sup>長浜市鴨田遺跡に類例が出土している。

甕D（145）は口縁が短く立ち上がり、端部が外反する。

高杯（146）は、杯部の底部と筒部の上半部が残存している破片で、杯部外面底部にヘラミガキが施される。

**S B 8** 第III～IV様式の弥生土器が多数出土した。

短頸壺（147）は体部最大径以下が欠失しているが、算盤玉状の体部をもつと考えられる。口縁部も完周しておらず、詳細は不明であるが、第IV様式の水差形土器と類似した形態を呈する。しかし口縁中位に大小の穿孔がみられることから明確に水差形土器との断定はできない。

壺（148）は、短く直立する頸部から受口状に口縁が広がる形態の壺と思われる。奈良県唐古遺跡北方砂層に、滋賀県下では長浜市鴨田遺跡に同様な壺が出土している。<sup>⑭</sup>口縁を巡る凹線より第IV様式と考えられる。

壺（150）は小さな平底から体部が算盤玉状を呈する大形品である。頸部下端（つけ根）に断面三角形の貼り付け突帯がみられ、体部上半には櫛描の直線文と波状文を交互に施している。口縁は欠失しているが、外反してラッパ状に広がり端部を上下につまみ出した形態を呈すると考えられる。大阪府和泉市池上遺跡に同様な頸部を有する広口壺がみられる。<sup>⑮</sup>第III様式であろう。

甕D（149）口縁端部が垂直に立ち上がる形態のもので、口縁内面に鋸歯状の列点文、頸部から体部上半の外面に刺突列点文と櫛描直線文が施されている。第IV様式であると思われる。野洲町五之里遺跡や滋賀里遺跡で類例がみられる。<sup>⑯</sup><sup>⑰</sup>

壺か甕の底部（151）は大型品の底部であろう。外面にたてにハケ目が施される。

**S B 9** 第III～IV様式と考えられる弥生土器が出土している。

小形壺（152）は口縁が「く」の字に近い形で外反し、端部は上下につまみ出している。体部外面に櫛描直線文と波状文（連弧文）を交互に巡らせている。第III様式のものであろうか。

甕B（153）は胴の張った体部に「く」の字状に短く外反する口縁を有する。口縁端部は凹線状にくぼんでいる。いわゆる畿内型の甕であり、SK130出土の同形態の甕と同様、長浜市長沢遺跡、同鴨田遺跡<sup>19</sup>、大津市滋賀里遺跡などでみられる。

甕D（154～156）はともに口縁端部が垂直、あるいはやや内傾して立ち上がる形態を呈している。内外に刺突列点文・櫛描文等を配しているが、155は特に入念に文様を施している。

この形態の土器は滋賀県下各所でみられるが、野洲町五之里遺跡出土例は特に155と類似している。第IV様式の土器である。

## 2) 土塙群出土土器（図版38・39・70）

**SK 153** 弥生時代後期の土器底部破片が出土している。

**SK 155** 弥生時代後期の土器が出土している。

**SK 157** 弥生時代後期と考えられる土器が5点出土した。

壺（168・169）は168がほぼ完形で、扁球形の体部をもち、口縁がラッパ状に開く。口縁上半部に垂直方向に2個一組の円孔が穿たれる。和泉市池上遺跡で土器が出土している。<sup>20</sup> 169は球形と考えられる体部の下半を欠失しており、口縁は外反する。

底部（170）は内外面にハケ目が施されている。大きな壺か甕の底部であろう。

高杯の脚部（171）は中空で裾がラッパ状に開く。筒部と裾部の境付近に3方向に円孔が穿たれる。

器台（172）は完形品で脚部はラッパ状に開き、筒部下半に上下2個一対の円孔が3方向に穿たれる。受部はほぼまっすぐに外上方にのび、端部で肥厚させ面を作る。端面に1条の凹線と棒状浮文がみられる。長浜市鴨田遺跡に同様の土器が多く出土している。<sup>21</sup>

**SK 160** 覆土から弥生時代中期後半の土器が出土した。

壺（173）はラッパ状に開いた口縁が端部付近で垂直方向にたち上がり、その外面に2条の凹線と円形浮文を貼り付けている。長浜市鴨田遺跡に類似のものが出土している。<sup>22</sup>

甕（174）はカーブを描いて外反する口縁の先端に凹線、上下端に押型文が施される。外面口縁以下は刺突列点文と櫛描直線文が交互にくり返されている。内面には端部付近に櫛描波状文が施される。

高杯および器台の脚柱部（175～177）はいずれも筒部のみの残存で、円孔が穿たれている。

**SK 161** 弥生土器の壺か甕の底部が出土している。第V様式であろうと思われる（178）。

## （3）包含層出土土器（図版39・71・72）

遺構にともなわず、すべて包含層から出土している。

**弥生土器** 蔷D（199・200）はともに第IV様式と考えられ、199は外面に刺突列点文を施している。

壺・甕の底部（193～197・209）193は小形甕であろうか。他は不明である。

甕（198）は底部のみの破片であり、中心を少し外れて1孔を穿っている。

高杯脚部（207・208）207は筒部は中空で、裾部がラッパ状に開く。ヘラミガキが外面全体に施されており、内外面ハケ目の208と対照的である。

**土師器** 蔷D（201～206）は口縁端部が外反するS字状口縁と呼ばれるものであり、庄内式併行期と考えられる。

**須恵器** 杯蓋（449）、杯身（450）は6世紀中葉のものであろう。杯身（451）は奈良時代と考えられる。

甕（452）は体部下半が欠失している。古墳時代と考えられる。

**縁釉**（513）椀の底部の破片である。外方へ向いた低い高台が貼り付けられ、施釉は全面にみられる。

**陶器**（514～520）全て京焼きの灯明皿と考えられる。近世のものであろう。

a類（514・515）は、口縁が内彎し、端部が丸く収まるものである。内面から外面端部まで施釉されている。515は内外面に煤の付着がみられる。

b類（516～518）は、内面の約2分の1のところに断面三角形の突帯が巡る形態を呈する。突帯の一端を欠いて灯芯台を作っている。施釉方法はa類と同様である。

c類（519・520）は、底部からほぼ垂直に立ち上がった口縁が外方へ曲折する形態を呈している。いずれも端部は曲折点より低い位置にある。施釉方法は口縁端部まで行われている。

### 3. 小 結

#### （1）上層遺構群

明確な時期の判明する遺構はSB3とSK143～145で、SB3は庄内式併行期、SK143・145は奈良時代（8世紀後半）、SK144は鎌倉時代である。他の遺構については、土器の出土がほとんどないため、年代はおさえがたい。しかし、SB107はSB3を切っていて、近くに奈良時代のSK143・145などが存在することから、それらと同時代の可能性も考えられる。また、包含層からは弥生時代中期以降の土器も出土しており、この遺構面で多く検出される土塙は、それらに対応する年代幅をもつものであるかもしれない。

## (2) 中層遺構群

検出された9棟の方形堅穴住居跡は、各々他の数棟と重複している。その中で、SB4とSB10、SB5とSB11とは拡張による重複である。

住居跡相互の切り合い関係は遺構の章でそれぞれについて述べた。それを今ここで図式的に、記号が〔新〕〔旧〕と表わすと仮定すれば、拡張は時間的に連結していると考えられるので、SB>SB5、SB7>SB6、SB9>SB8>SB12となる。

次に出土遺物からみると、SB7・SB5は西ノ辻E・D式併行期の土器が出土し、SB6・SB4は西ノ辻I式併行期の土器を出す。<sup>25</sup> SB8、SB9は第IV様式の土器が出土している。

これを上記の切り合い関係と照合すると、SB7>SB5>SB6>SB9がいえる。

これらの重複関係を整理すれば、SB12・SB8・SB9・SB6・SB5・SB7の順に構築されたことが明らかになる。SB12は遺物の出土をみないが、第III～IV様式の土器を出土し、第IV様式の住居跡と考えられるSB8より一時期古い段階の住居跡と考えてよい。またSB7は第V様式の土器が出土していることから、この時期の住居跡と思われる。したがって、中層の住居跡群は弥生時代中期中頃～後半から、後期にかけて構築されたと考えてよいといえるだろう。

土塙群で時期の判別しうるものはSK153・155・156・160・161の5基を数える。このうち、SK160が弥生時代中期であるのを除いて他の4基はすべて後期の土塙である。特にSK157のごときは、掘形内に5～40cm位の自然石が多数みられ、それらの間に土器が散在している。土器には高杯・器台など祭祀を思わせるものもあるが、土塙墓と断定できる資料はみつからない。他の土塙もまたこれと同じ状況である。

## (3) 下層遺構群

下層の遺構からは全く出土遺物がないために、中層遺構群より古い遺構としかいいようがない。

このように、住居を構築するには立地条件の悪い傾斜面のほぼ同じ位置に、集中的に何世代も建て替えがなされている状況が判明した。これは、この地が何か特別な意味をもつことを暗示しているのかもしれない。

(三宅 弘)

### 註

① 林博通・葛野泰樹ほか『橿木原遺跡発掘調査報告III』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 昭和56年)

② 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告II』 昭和55年(重版)

③ 末永雅雄・小林行雄ほか「大和唐古弥生式遺跡の研究」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第16冊 昭和16～17年)

- ④ 丸山竜平・勢田広行ほか「野洲郡野洲町五之里遺跡発掘調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』 昭和51年度 滋賀県教育委員会)
- ⑤ 註③、前掲書
- ⑥ 註①、前掲書
- ⑦ 註①、前掲書
- ⑧ 中谷雅治ほか「長浜市鴨田遺跡」(『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書II』 滋賀県教育委員会 昭和48年)
- ⑨ 林博通・葛野泰樹ほか『檜木原遺跡発掘調査報告II』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 昭和51年)
- ⑩ 註⑧、前掲書
- ⑪ 中西常雄『北大津の変貌』 昭和54年
- ⑫ 林博通・葛野泰樹ほか『檜木原遺跡発掘調査報告—南滋賀廃寺瓦窯一』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 昭和50年) 註①、前掲書
- ⑬ 註⑧、前掲書
- ⑭ 註⑧、前掲書
- ⑮ 井藤暁子ほか『池上遺跡』土器編((財)大阪文化財センター 昭和54年)
- ⑯ 註④、前掲書
- ⑰ 田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会 昭和48年)
- ⑱ 中谷雅治ほか「長浜市長沢遺跡」(『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書III』 滋賀県教育委員会 昭和48年)
- ⑲ 註⑧、前掲書
- ⑳ 註⑯、前掲書
- ㉑ 註⑯、前掲書
- ㉒ 註⑯、前掲書
- ㉓ 註⑧、前掲書
- ㉔ 註⑧、前掲書
- ㉕ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」『弥生式土器集成』資料編1 昭和33年

表6 D地区 出土土器観察表

遺 器 構 形	土 番 器 号	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	備 考
弥 生 式 土 器	106	口縁はやや開き気味に立ち上り、端部は丸くおさめる。 口縁外部に炭化物付着。	口縁と体部の境はハケ調整、他はナデ調整。	色調 明赤褐色 胎土 0.5 mm程の長石を含む。 焼成 硬質
土 師 器	107	口縁部は端部をややつまみ出し気味にもち上げ、S字状に近い形をつくる。	2個ずつの刺突列点文が外面の頸にめぐる。 口縁部は横ナデ、くぼみから下の部分にタテ方向のハケ目を施す。	色調 淡褐色(若干乳白色を帯びる) 胎土 1~2 mmの石英、長石等を多く含む。 焼成 やや軟質
SB 3 弥 龍	108	口縁部は端部に面をもち、やや外方へ開き気味のところはS字状になる手前の状況を示していると思われる。	口縁部若干下まで横ナデ調整、体部外面はタテ方向のハケ目。 体部内面に斜め(右下り)のハケ目がある。	色調 淡褐色 胎土 1~2 mmの石英、長石、雲母等を多量に含む。 焼成 やや硬質
弥 生 式 土 器	109	口縁は体部より外方に屈曲した後、再び外上方へのび、端部は丸くおさめる。いわゆるS字状口縁に近い。	口縁部外面に右上りの列点文を施し、体部上方にはクシ描き文(平行7条以上)を施す。 他はナデ調整。	色調 明乳褐色 胎土 0.5 mm程の長石を全体に含む。 焼成 硬質
	110	口縁部、外面がやや「く」の字状に外へ開き、S字状になる一番手前の状態と考えられる。	全面横ナデ調整。	色調 淡黄褐色、断面および外面の一部は淡黒褐色 胎土 1 mm位の長石、石英等をかなり多く含む。 焼成 やや硬質
土 師 器	111	内弯気味の肩部から、口縁部が急に外反し、すぐ上方へ屈曲し端部は外方へつま	口縁部外面ナデ調整の後、下部には傾斜の緩い、粗いクシ描列点文を施す。	色調 淡黄褐色 断面黒色



		み出される。 口縁部はS字状である。 口縁部外面の幅は小さい。	内面ナデ調整。 肩部外面ナデ調整の後、ハケ目（右から左）を施す。（一部残存）	胎土 1mm位の長石、石英等をかなり多く含む。 焼成 やや硬質
SB   3	壺 弥 甕	112 外反気味の頸部は外面に頸をつくり、垂直に立ち上がる。端部内面には内傾する面をもつ。	頸部内面は横ナデ調整の後、横ハケを施す。端部内面は横ナデ調整のみ。 端部外面は横ナデ調整の後、クシ描と列点文を施す。一部頸にかかる。 頸部外面は横ナデ調整の後、不整なタテハケを施す。	色調 暗灰色（頸部はやや白っぽい）断面黄灰色 胎土 粗い2mm以下の長石を多量に含む。 焼成 軟質
		115 体部はやや内弯気味に立ち上る。 底部中央はやや凹む。	外面 右上りの叩き。 内面 ナデ調整。	色調 暗紫褐色 外面 スス付着。 胎土 0.5～1mm程の砂粒を含む。 焼成 硬質
		120 口縁部、ゆるやかに外方へ向って開く。 端部は肥厚（垂下？）し、下方に2条の沈線がめぐっている。	端部肥厚垂下の部分にナデ調整。その他の内外面にはかなり密なタテ方向のヘラミガキを施す。 端部に2条の沈線をめぐらす。	色調 内面 淡赤褐色 外面 淡赤黄褐色 断面中央、暗黄褐色 胎土 1～2mmの石英、長石、雲母等をかなり含む。 焼成 やや軟質
	器 台 土 器	122 円筒状の脚部に真横やや上方に開く。 杯部を接合する。	杯部は、剝離のため不明。 脚部外面は、杯部との境よりヘラミガキ調整。 脚部内面はナデ調整。 境付近にわずかにしづらの痕跡を残す。	色調 赤褐色 胎土 概ね精良 焼成 やや軟質
		123 脚は円筒形である。 脚から裾へ急に開く。その屈曲部の3方にスカシを穿つ。	外部はヘラミガキ調整。 内部は脚部にしづらを残し、裾はナデ調整。	色調 乳赤褐色 胎土 良好 焼成 硬質
	高 杯	124 脚部である。	外面はハケ調整。 他は磨滅が激しく不明である。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 やや硬質
SB   4	壺	102 体部はそろばん玉状である。 最大腹部は中央よりやや下。 底部は中心が少し凹む。	外面体部、最大腹径のところに横方向のヘラミガキ調整。 それ以下に縦方向のヘラミガキ調整。	色調 外面明褐色 内面黒褐色 胎土 1mm位の長石、石英等を含む。 焼成 軟質
		103 そろばん玉状の体部より口縁はやや外方に直線的に伸びる。 底部にはわずかながら底が形成されている。	110に同じ。	色調 外面明赤褐色 内面黒褐色 胎土 1mm位の長石を含む。概ね良好。 焼成 硬質
		104 いったん外方に伸びた後大きく内弯する。 口縁は小さくラッパ状に開き端部は丸く	下部外面に平行叩きを施す。 内面は全て横ナデ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5mm位の砂粒を

			おさめる。 肥厚している。	上部は磨滅のため不明。	多く含む。 焼成 軟質
弥	壺	105	ソロバン玉状の体部である。 左右の形はゆがみが著しい。	外面上方は、縦を中心とする不定方向のハケ調整。 下位は横、縦、横、縦の粗いヘラミガキ調整。 体部内面上位はナデ調整。 下位は横方向のハケ調整。	色調 明赤褐色 胎土 0.3～0.5 mm位の長石を全体に含む。 焼成 硬質
生	手 培 り ?	125	扁球形の体部をもち、底部はほぼ水平な面をわずかに突出させる形をなす。 体部上半は欠損する。 体部最大径直下にスス状の物質が付着する。	外面体部最大径付近は横方向、それ以下は縦方向から斜め方向のハケ調整。 内面体部最大径付近はナデを施し、一部ハケ調整。 内面底部付近は、不定方向のヘラミガキ調整。	色調 外面暗褐色 内面明褐色 胎土 長石粒、金雲母を含む。 焼成 硬質
式	甕	126	体部は卵型を呈し、最大径は中位よりやや上有る。 底部中央はやや凹む。 口縁は、体部よりなだらかに外反しながら伸び、口端に至りやや内弯し、端部を肥厚させ丸くおさめる。	底部内面は、ハケ状工具で調整する。外面はナデ調整。 体部内面は、目の粗いハケで調整。口縁の内面はハケ調整を平行に施す。 体部外面は、粗いハケ調整、外面の体部と口縁の境付近は、クシ状工具で平行線状に施す。 その後、体部上位に4回以上にわたり不整の波状文を施す。	色調 明赤褐色、下位外面にスス付着。 胎土 良好 焼成 堅緻
SB   4	土 甕	127	外反した頸部が頸をつくり、内弯気味に立ち上がり端部になる。 端部上面に狭い面をつくる。	ナデ調整。 口縁部外面下半に退化したクシ猫列点文が刻まれる。 列点文は一部頸にかかる。	色調 黄褐色 胎土 良好 焼成 良好
	器 甕	128	口縁部のみ。 端部がやや外方へ屈曲しつつある状態はS字状口縁の前段階と思われる。	110に同じ。	色調 淡褐色 胎土 1～2 mmの石英、長石、赤褐色軟石、雲母片を多く含む。 焼成 軟質
	壺	129	平らな底部から外上方に伸びる。	全面未調整。	色調 黄褐色 胎土 石英、長石、雲母を内側に多く含む。 焼成 硬質
		130	体部は平らな底部より外方に大きく開く。 底部中央はやや凹む。	調整は磨滅のため不明確だがナデ調整のようである。	色調 暗乳灰褐色 胎土 1 mm位の長石を少し含む。 焼成 硬質
	甕	113	器厚は薄く、やや内弯気味に外上方に伸びる。 明瞭に底部をつくり、その中央はやや凹む。	外面はきわめて粗い右上りの叩き目で調整。 内面及び外面底部はナデ調整。	色調 外面 明赤褐色 内底 淡黒褐色 胎土 0.3 mm位の長石を多く含む。 焼成 硬質

		114	壺の底部と思われる。	内外面に指圧痕が多数見られ、調整痕は見られない。	色調 淡黄褐色 胎土 1~2mmの石英、長石等を多く含む。 焼成 やや軟質
弥生	壺	116	壺の底部である。	内外面にハケ目状の痕跡が見られる。	色調 外面 暗赤褐色 内面 暗黄褐色 胎土 5mm位の長石、赤褐色石粒を少しつゝ、1mm位の石英、長石、雲母片を多く含む。 焼成 やや硬質
		131	扁平な底部で台上で作られたと思われる。	体部外面に右下がり、縦方向のハケ目が施される。 内面及び底部外面は未調整。 外面に黒斑が見られる。	色調 外面 乳褐色 内面 暗褐色 胎土 2~3mmの石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 やや硬質
		117	脚部は円錐形をなしゆるく広がる。 杯部は大きく深い。 東海地方欠山式土器に類似。 3方にスカシを穿つ。	杯身内面、外面上部(横)下部(縦)及び底部にヘラミガキ調整。 脚外面(不明)内面上部にしづり、下部にナデ調整。	色調 褐色 胎土 石英、長石を多く含む。 焼成 軟質
SB 式 4	高 土 器 杯	132	高杯の筒部のみの残存である。	剥落がひどく調整手法は不明である。	色調 淡赤褐色 胎土 1~2mm位の石英、長石等を多く含む。 焼成 軟質
		133	脚部は短い、3方にスカシを穿つ。 器厚は均一でなくムラがある。	外面は縦方向を中心とするヘラミガキ調整。 所々不定方向が加わる。 内部にしづり目を有す。	色調 乳褐色 胎土 精良 焼成 硬質
		118	脚部は高く、直線的に下方に伸びる。 受部も直線的に外方に伸び、いずれも端部は丸くおさめる。 スカシは3方で外から内に穿つ。	受部内面、および外面全体にヘラミガキを施しているが、部分的に磨滅して観察不能の部分がある。 脚部内面は横ナデ調整。	色調 乳褐色 胎土 精良 焼成 硬質
小型 器 台		119	受部はほぼ直線的に外上方へ伸び、端部を肥厚、垂下させる。 端面には三条一組の棒状浮文を推定六ヶ所に付す。 脚部は、外下方へ弯曲しながら伸びるがスカシ以下は欠損している。 スカシを3方に穿つ。	受部内外面は磨滅のため調整不明。 端部の肥厚部分付近は横ナデ調整。 脚部外面は磨滅しているが縦方向のヘラミガキを施すと思われる。 内面は上半部に横方向のヘラケズリが見られる。	色調 明褐色とくに口縁部は淡赤褐色 胎土 径1mm前後の石英粒、長石粒をやや多く含む。金ウンモを少し含む。黒い微砂粒を含む。 焼成 やや軟質
		121	脚部は直線的に外下方に伸び、端部は丸くおさめる。 口縁端部は平坦でここで接地する。 円形2段スカシを4方に穿つ。	全面ナデ調整。	色調 明赤褐色 胎土 雲母、石英を含む。 焼成 軟質

SB   4		134	高杯あるいは器台の脚部。 外下方に「ハ」の字状に開く。 端面に1条の凹線を付す。	調整不明（あるいはナデ調整か）	色調 乳褐色 胎土 0.5 mm程の長石粒を含む。 焼成 軟質
弥 生 式 土 器 甕	無 頸 壺	135	口縁部のみ残存。 口縁は内弯し、端部は水平面をもつが全体に丸い。 外部に2条の凹線がめぐる。また、2個1組の孔が2対以上穿たれる。（外から内）	外面の凹線内部以外はヘラミガキ調整。 他はナデ調整。	色調 明乳灰色 胎土 0.5 mm程の長石を多く含む。 焼成 硬質
		136	S字状の口縁を呈す。端部は丸くおさめる。	頸部外面に細かいハケ目、同内面には粗いハケ目を施す。 口縁部内外面にはナデ調整。	色調 明赤褐色 胎土 0.3 mm程の長石を少し含む。 焼成 堅緻
		137	口縁部のみ残存。いわゆるS字状口縁、端部には平坦面を有す。	屈曲部に連点文、頸部には縦方向のハケ目調整を施す。その下部に横方向の一条以上の沈線を施す。	色調 乳褐色 胎土 0.5 mm程の砂粒を含む。 焼成 堅緻
	SB   5	138	S字状口縁で端部は外方につまみ出し気味である。	体部外面、ハケ目の後連点文、口縁屈曲部は刺突文を施す。 体部内面、ハケ目（横方向）、他はナデ調整。	色調 明乳褐色 胎土 0.3 ~ 0.5 mm程の長石粒を含む。 焼成 堅緻
	土	139	口縁部、水平に外反し、頸をつくって斜め外上方へ立ち上がる。端部は丸くおさめる。	全面ヨコナデ調整と思われるが、磨滅して剥離も多く、詳細は不明。	色調 淡黄灰褐色 胎土 2 mm以下の長石を含む。空気を含んでおり、気孔がある。きわめて粗い。 焼成 軟質
	甕	140	底部。平底に浅い凹線をめぐらす。 体部は直線的に外方に伸びる。	内外面はハケで調整。	色調 暗灰褐色 胎土 1 mm程の長石を含む。 焼成 硬質
		141	底部。中央はやや凹む。 体部は外弯気味に立ち上がる。 底部と体部の境はシャープである。	全面ナデ調整。	色調 明灰褐色 胎土 1 mm程の長石を含む。 焼成 硬質
		142	口縁部。水平に外反し、頸の付近でやや下がる。 頸より外上方に立ち上がり、端部は内傾する面を持つ。	外面に5列の刺突列点文、内外面はハケで調整している。 頸から上は内外面とも横ナデ調整。	色調 黄褐色、内面一部淡黒色が露呈、断面内側淡黒色。 胎土 時に1~2 mmの石英、長石を含むも、微細な石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 やや硬質
			杯部のみ残存。	口縁部外面は縦方向の細かいヘラミガキ	色調 淡橙褐色

	高 杯	143	杯部の底部は外上方に伸び「く」の字状に上方へ屈曲し伸びる。 端部はやや外面に水平につまみ出される感がある。	が施され、一部黒斑が見られる。 口縁部内面及び底部内外面は器面荒れのため調整不明。	胎土 1 mm位の石英、長石粒等を含む。 焼成 軟質
SB + 7	弥 生 式 甕	144	壺の口縁と考えられるが磨滅が著しく不明。	口縁部に刻み状の刺突文が見られる。	色調 淡黄褐色 胎土 1 mm位の石英、長石等を多く含む。 焼成 やや軟質
	器 高 杯	145	外反する頸部は、つまみ出されるように上方へ立ち上がる。 端部内面は、内傾する面をなす。 口縁部外面は、垂直な面をつくる。	残部全てに左方向の横ナデ調整。	色調 淡黄褐色 胎土 2 mm以下の長石、微細な雲母を多く含む。 粗い。 焼成 硬質
	高 杯	146	杯部は丸底の底部のみで、それ以上は欠損している。 脚部は筒部のみ残存し、上下2段のスカシ孔が穿たれるが、破片であるため詳細は不明である。 スカシ孔は外より内側に焼成前にあけられる。 筒部と杯部の接合部分はヘソをつくらず筒部を円筒状にして杯部にはり合わせる。	杯部外面にヘラミガキが見られるが、杯部内面は磨滅が著しく不明である。 脚部は、外面は不明、内面は未調整である。	色調 淡黄褐色 胎土 1 mm位の石英、長石、雲母等を多く含む。 焼成 やや軟質
	壺	147	体部は内湾し、口縁は直立する。体部は1条以上の凹線がめぐる。 口縁外面上に3条凹線がめぐる。 外面に1.8×1.8 cmの孔が3方に穿たれる。この孔と孔の間に5×5 mmの孔が1対ずつ計3対穿たれる。 小孔は外面より穿たれる。	内面及び口縁内外面は横ナデを施す。 肩の部分の外面は縦方向のヘラミガキ調整。 以下は横方向のヘラミガキを施す。	色調 明赤褐色 胎土 0.3 mm位の砂粒を多く含む。 焼成 やや軟質
	弥 生 式 甕	148	口縁は直立し、端部に水平な面を有する。 口縁外面上に2条凹線を施す。 口縁上部は比較的厚いが下方に至り、内弯するにつれ器厚を減ずる。	141に同じ。	色調 乳褐色 胎土 0.5 mm位の長石を多く含む。 焼成 軟質
	土 器 甕	149	体型は下ぶくれで最大径は中央より下位にある。 頸部は大きく外反し、口縁をほぼ垂直に上方につまみ上げる。 端部はやや内傾する面を有する。	口縁外面上は斜方向の2重のヘラ状工具による刻みを入れる。頸部は縦方向の粗いハケ調整。 体部上位は3本1組の沈線を3組施し、その前後に斜方向の刺突文を施す。下位は粗いハケ調整。 内面口縁及び頸部は横方向。粗いハケ調整。 口縁端部下に、刺突文による鋸歯文をめぐらす。それ以下はナデ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5 mm位の砂粒を全体に含む。 焼成 硬質
			底部は平底である。 体部最大径は、ほぼ中央にあり卵型に近	上半に文様帶を施す。下位は縦及び斜方向のハケ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5～1 mm位の砂

SB I 8	壺	150	い体型を示す。 頸部下位に3条のはり付突帯をめぐらす。 口縁は1度大きく外方に開くと思われる。	最上部は列点文、以下クシ描文帯とゆるやかな波状文帯を交互に5条ずつ施す。 内面は全体をハケ調整。 全体に表面の剥離が激しくハケ目の残存度は低い。	粒を多く含む。 焼成 やや軟質
		151	扁平な底部は台の使用が考えられる。 体部残部の $\frac{1}{2}$ の所で粘土を継ぎ足した可能性がある。	体部外面は縦方向のハケ目調整。 体部内面の残部上半は磨滅が著しいが、わずかに横方向右下がりのハケ目らしき痕跡がある。 体部内面下半は、上半分が横方向右下がりのハケ調整。それ以下は未調整。 底部外面はハケ調整、内面は未調整である。	色調 淡黄褐色 胎土 2mm位の石英、長石、石粒を多く含む。 焼成 やや軟質
		152	やや下ぶくれの体部より口縁は大きく外方に開き、端部を内上方につまみ上げる。	口縁部外面には縦の粗いハケ目を施す。 体部外面にはクシ描文とクシによる半円形文を交互に施す。施紋順序は半円の後平行クシ描である。 内面全体と口縁の端部外面にナデを施す。 全体に赤色顔料を施す。	色調 明赤褐色 胎土 0.5mm位の長石を全体に含む。 焼成 硬質
弥 生 式 器	土 甕	153	体部は球形に近い。 口縁は短く「く」の字状に曲り、端部を上方につまみ上げる。 外面下位に炭化物付着。	外面の上位は粗いハケ目、下位は細かいハケ目を施す。 内面の上位は細かいハケ目、下位はハケの上からヘラケズリを施す。	色調 明褐色 胎土 0.5～1mm位の長石を含む。 焼成 硬質
		154	口縁は外方に伸びた後、上方につまみ上げ端面は水平におさめる。	内面の頸部は横方向の粗いハケ調整、屈曲部に1対ずつの列点文をめぐらす。 外面は全面にナデを施す。	色調 乳灰色 胎土 0.5mm位の長石を多く含む。 焼成 硬質
		155	体部は内弯気味に伸びる。 頸部は大きく外反する。 口縁は上内方につまみ上げ、端部は丸くおさめる。	内面はナデ調整。 外面口縁部は斜方向の刺突文を施す。頸部は縦方向の粗いハケ調整。下部は2個1対の刺突文を施す。 体部上部は刺突文を施す。体部上位にヘラ描沈線をめぐらす。沈線の下方にヘラ状工具による斜格子、中位には斜格子の上から刺突文、下位は細かな縦方向のハケ目、その上から波状文風の粗い山形文を施す。	色調 明褐色 胎土 精良 焼成 硬質
SB I 107	甕	156	口縁は外方に伸びた後、上方につまみ上げ、端部は丸くおさめる。	口縁外面は連弧文風波状文を施す。 口縁内面は列点文を施す。 他の部分はナデ調整と思われる。	色調 暗褐色 胎土 0.5～1mm位の砂粒を多く含む。 焼成 硬質
		157	底部外面は中央がやや凹む。 体部は底部より直線的に外方に伸びる。 底部を除いて外面にススが付着する。	体部外面は縦斜方向のハケ目を施す。 底部外面は未調整。 体部内面は未調整。	色調 外面淡褐色 内面暗灰色 胎土 2～3mmの石英、長石、雲母等を多く含む

			む。 焼成 やや硬質
--	--	--	---------------

包含層 出土遺物観察表

遺 器 構 形	土 番 器号	形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	備 考
A 包含層	弥甕 187	外弯する口縁部をもつ。端部に近くなるほど外弯の度合はきつくなり、口縁部は水平に近くなる。 端部を上方につまみ上げる。	外面、口縁部は横ナデ、頸部は縦方向のハケ調整。 内面、口縁部に横ナデ、頸部は器面磨滅のため調整不明。 口縁内面、頸部との境に刺突文を付す。	色調 明褐色 胎土 長石、石英、金雲母を含む。 焼成 軟質
	式土包器壺 188	扁平な底部から体部がゆるやかに上方に伸びる。	磨滅のため不明。	色調 外面、明黄褐色 内面、淡黄灰褐色 胎土 不良、5mm以下の長石を多く含む。微細な雲母を含む。粗い。 焼成 軟質
	杯土身 189	扁平な底部からやや内弯気味に立ち上がる。 端部は丸くおさめる。 高台が付くが外方にはり出し、しっかりしている。	外面はナデ調整。 内面は磨滅のため不明。	色調 淡赤褐色 胎土 1mm以下の長石、雲母、赤褐色軟石を少し含む。 焼成 やや軟質
	杯身 190	ほぼ垂直に伸びるしっかりした貼り付け高台をもつ。 体部はやや内弯し、口縁部付近でまっすぐ伸びる。 端部は丸くおさめる。	磨滅が著しく上部の一部分のみナデ調整。	色調 淡赤褐色 胎土 1mm以下の石英、微細雲母を少し含むが精良である。 焼成 やや軟質
	壺器 191	体部はほぼ球型をなし、最大径は中央よりわずかに下位にある。 口縁は短く、斜め上方に屈曲する。 外面に剥落が多く見られる。	体部外面は縦方向のハケ調整の後、縦方向のヘラケズリ調整。 内面は横方向のハケ調整。 口縁はナデ調整。	色調 明褐色 胎土 0.5mm程の長石を多く含む。 焼成 硬質
	甕 193	底部のみ残存する。 底部は扁平で丸くおさめる。	外面はハケ目に叩きを施す。 内面はヘラケズリ調整。	色調 暗赤褐色 胎土 1~2mm位の石英、長石、他を多く含む。 焼成 やや硬質
	弥甕式土包層 194	壺の底部と思われ、平底である。 外面の残部の約1/3に黒斑が見られる。	内面はハケ調整（約1/3に明確）	色調 淡黄褐色 胎土 1~2mmの石英、長石、雲母、他も多く含む。 焼成 やや硬質
	甕 195			色調 内面 黄褐色 外面 灰褐色 胎土 石英、雲母を多く

				含む。 焼成 硬質
D 弥 生 式 包 含 土 層 器	壺	196	底部のみ残存する。	色調 外面 淡黄赤褐色 内面 暗灰色 胎土 1 mm前後の石英、長石他を多く含む。 焼成 硬質
		197	壺の底部と思われる。 底部は比較的平たいが内面は凹凸が著しい。	ほとんど未調整。 色調 内面 淡黄褐色 外面 淡赤褐色 胎土 1～2 mm位の石英、長石他を多く含む。 焼成 やや硬質
甕	甕	198	平底の底部より体部は直線的に斜外方に伸びる。 器壁は薄い。 底部の中央より、はずれて下方に向って1孔を穿つ。	体部外面は縦方向の粗いハケ調整、他はナデ調整。 色調 明褐色 胎土 0.5 mm程の長石を含む。 焼成 硬質
		199	外面口縁部と頸部下方に刺突列点文がめぐる。 外面口縁部下端にススが付着する。 外面頸部に波紋状の文様が2～3条めぐる。	内側はハケ調整。 外側は刺突列点文がめぐる。 他はナデ調整。 色調 内面 黄褐色 外面 淡褐色 胎土 1 mm位の石英、長石他を少し含む。 焼成 硬質
甕	甕	200	外面口縁下部から頸部にかけてススが付着する。 口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部は水平に面取りを行なっている。	内外面はハケ調整。 色調 内外面口縁、淡黄褐色、外面 淡乳褐色 胎土 2 mm前後の石英、長石他を多く含む。 焼成 硬質
		201	口縁部のみである。 S字状に弯曲し、端部は水平方向に面をもつ。	ほとんどナデ調整。 頸部はハケ調整。 色調 淡赤褐色 胎土 1 mm位の石英、長石他を多く含む。 焼成 やや硬質
甕	甕	202	あまり細くない頸部から外方へ二重口縁状に伸びる。 端部は外方へ少しつまみ出している。 口縁部外面にススが付着する。	外面頸部はクシ描直線文を施す。 他はナデ調整。 色調 淡黄褐色 胎土 1～2 mm位の石英、長石微細雲母をやや含む。 焼成 やや軟質
		203	S字状に曲がる甕の口縁である。 外面に5個1列の刺突列点文がめぐる。	内、外面ともナデ調整。 色調 淡黄褐色、断面は黒褐色 胎土 1 mm位の石英、長石、他を多く含む。 焼成 やや軟質
土 師 器	甕	204	2重口縁の甕であり、端部が外反し、水平方向に面をもつ。 1段目と2段目の境、外面に2条の沈線がめぐる。	外面と内面半分はナデ調整。 他はハケ調整。 内面白口縁部から頸部にかけて横方向にハケ目らしきものが見られる。 色調 外面1段目黄褐色 2段目1/2は暗灰褐色 内面、暗黄灰褐色 胎土 2 mm位の石英、長

D 包 土 含 器 層	弥 生 甕	205	二重口縁状に外方へひろがる。 外面の1段目下方にススが付着する。	調整不明。	石、雲母他を多く含む。 焼成 やや軟質
		206	外面口縁部は外側につまみ上げている。 内面はかなり表層が剝離する。	未調整。	色調 淡褐色 胎土 石英、長石他を非常に多く含む。 焼成 軟質
	高 杯 土 師 器	207	裾部は円筒状の脚柱より急に広く外方にひろがる。 端部は丸くおさめる。 4方に1段のスカシを穿つ。	外面は不定方向へのヘラミガキ調整。	色調 明赤褐色 胎土 砂粒(0.5mm)を少量含む。 焼成 やや軟質
		208	高杯の脚部のみであり、スカシ孔は3～4個と思われる。	内外面全面ハケ調整。	色調 淡黄褐色 胎土 1～2mmの石英、長石、微細雲母を少し含む。 焼成 硬質
	A 包 惠 含 器 層	441	端部が少し内に入っている。	外面天井部にヘラ切りを施す。 内面と外面途中より口縁部にかけて横ナデ調整。	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬質
		442	平坦な天井部より丸味を帯びつつ下方に伸びるが天井部と口縁の境は不明瞭。 口縁端部は丸くおさめる。 口縁は著しくゆがんでいるため直径は必ずしも正確とは言えない。	天井部の2/3はヘラケズリ調整。	色調 明灰色 胎土 1mm程の長石を全体に含む。 焼成 硬質
		443	受部はやや上向きに短く伸び立ち上がりは内傾しつつ外反し、端部は丸くおさめる。	ほとんどナデ調整。	色調 淡青灰色(鉄分付着) 胎土 1mm位の長石他を少し含む。黒色の砂粒を少し含む。 焼成 硬質
		444	底部がかなり厚く、口縁部に至るにしたがって細くなる。 立ち上がりはかなり高く、端部は丸くおさめる。	全体にナデ調整。底部は未調整。 成形はろくろ回転。	色調 青灰色 胎土 2～3mmの石英、長石他を多く含む。 焼成 硬質
		445	口縁部は内傾し端部は丸くおさめる。 受部は水平に伸びる、端部は丸くおさめる。 底部はやや狭い。	回転は内から外側に向って数回に分けて削っているが、削り方は粗い。	色調 青灰色 胎土 2～3mm大の石英、長石他を含む。 焼成 硬質
	皿	446	扁平な底部から口縁部が外反気味に上方へ伸びる。 口縁端部は丸くおさめる。	底部内面、口縁内外面は横ナデ調整。 底部は未調整。 全体に磨滅している。	色調 淡灰色、口縁端部付近、暗灰色 胎土 0.5mm以下の長石、

			浅い皿である。		微細な雲母を多数含む。 焼成 やや軟質
A 包 含 層	甕	447	端部付近で外側へ肥厚し、端部は丸くおさめる。	内、外面ともナデ調整。	色調 外面、茶灰褐色 内面（自然釉）暗茶褐色 胎土 1mm位の石英、長石他を少し含む。 焼成 堅緻
			脚部上部は外反しながら外下方へ伸び、底部との境に1条の凸線をめぐらす。底部は内傾し、端部は丸くおさめる。脚部に自然釉がかかる。	内面と外面上方ナデ調整。	色調 暗灰色（暗茶褐色） 胎土 径0.5mm程度の長石粒を少し含む。 焼成 硬質
D 須 惠 器	杯 蓋	449	天井部と口縁部との境に沈線をもち垂直に近く下がる。 端部はやや外反気味となり内面に段をもつ。	内、外面とも横ナデ調整。	色調 青灰色 胎土 1~2mmの石英、長石他を含む。 焼成 堅緻
			貼り付け高台のある杯身である。 高台は短かいが外方へふんばるように付けられている。 底部に糸切りはみられない。	内面、外面ともナデ調整。	色調 明白色 胎土 0.5mm位の長石を含む。 焼成 軟質
C 含 層	杯 身	450	貼り付け高台のある杯身である。 高台は短かいが外方へふんばるように付けられている。	内面、外面ともナデ調整。 成形はろくろ。	色調 淡青灰色 胎土 1mm以下の石英、長石他を少し含む。 精良。 焼成 堅緻
			貼り付け高台のある杯身である。 高台は短かいが外方へふんばるように付けられている。	内面上部の同心円叩き 内面同心円叩きの後ナデ調整。 外面格子状叩きの後ナデ調整。	色調 外面 淡青灰色 胎土 0.5~4mmほどの長石、石英他を少し含む。 焼成 やや軟質
A 包 含 層	陶 灯 明 器 皿	512	内面に断面三角形の突帯がめぐる。端部は尖り気味におさめる。	内面底部から突帯にかけては全て、突帯より上部は残存部分の約1/2に施釉が見られる。	色調 外面 暗乳褐色 釉は乳黄褐色 胎土 精良 焼成 硬質
D 包 含	綠 釉 陶 器	513	扁平な底部からゆるやかに口縁部が立ち上がっている。 高台は底部と口縁部の境界につき、外方へふんばっている。	ナデ調整の後、緑釉らしきものが施釉されているが、全体は灰色に褪色していて部分的に残っているだけである。	色調 外面 灰色、内面 濃緑色 断面青灰色 釉は淡緑色 胎土 良好、微細な雲母を含む。 焼成 硬質
C 含 層	陶 灯 明 器 皿	514	平らな底部より内弯する口縁部が立ち上がる。 端部は丸くおさめる。	外面体部の下方1/2にヘラケズリを施す。 内面から外面口縁部にかけて施釉。 外面口縁部の約1/6にスス付着。	色調 暗灰褐色 釉は暗白灰色 断面 白灰色 胎土 良好

D 包 含 層		陶 灯 明 器 皿			焼成 硬質
A 瓦 包 質 土 包 含 層	515	内面のみに釉を施す小型の皿である。 底部はかくし高台をもつ。 外面口縁部のはば全面に、スヌ状物質が付着。	外面口縁部のはば全域（残約 1/2）にわたって、スヌ状物質が付着する。 内面から外面口縁部にかけて施釉。	色調 淡黄褐色、施釉部分もほぼ同じ。 胎土 精良 焼成 堅緻	
		立ち上がりの一部を欠いて灯芯の置き場所にしているようである。	外面を4回以上に分けてヘラケズリを施す。 成形はろくろ。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 堅緻	
C 釉 包 陶 含 器 層	562	球形に近い体部は、内弯して端部に至る。 端部より下方2cm前後の所に、断面三角形のツバがつけられる。 ツバの下より3方向に断面円形の脚が付く。 口縁の先端は丸くおさめる。	内面器面磨滅のため調整不明。 脚を貼りつける部と接合部付近はナデ調整。 外面器面磨滅のため調整不明。 口縁部器面磨滅のため調整不明。	色調 淡黒褐色 胎土 0.5mm以下の石英、長石粒等を含む。 焼成 軟質	
		口縁から体部にかけてほとんど変化なく内弯する。口縁下2.5cm付近にツバを付す。 脚はやや内弯しながらふんばる。三脚と推定される。 内外面ともにスヌが付着する。 口縁端部は比較的おとなしくまとめる。	口縁部はとりわけ磨滅が著しい。 口縁部からつばにかけてナデ調整。 体部は横方向のハケ目を全体に施す。 7条/cm	色調 淡褐色 胎土 1mm位の石英、長石粒、金雲母片を含む。 焼成 軟質	
C 包 含 器 層	517	灯明皿の一種と思われる。 口縁内部の一部を欠いて灯芯置きにしたと考えられる。	内面及び端部に施釉が見られる。	色調 淡灰褐色 胎土 精良 焼成 硬質	
	518	口縁内部の一部を欠いて灯芯を置くようしている。	外面底部及び体部はヘラケズリ調整。 内面、底部、体部及び口縁部に施釉が見られる。	色調 暗黄褐色 胎土 良好 焼成 硬質	
	519	退化した須恵器の杯身を思わせる形態である。	外面体部及び底部はヘラケズリ調整。 内面底部、体部、及び口縁屈曲部に施釉が見られる。	色調 淡灰白色 施釉部分、暗茶褐色 胎土 精良 焼成 堅緻	
	520	平らな底部からほぼ垂直に立ち上り、途中で外下方へまっすぐに屈曲する。 その先端は平坦である。	ろくろによる外面底部及び体部はヘラケズリ調整。 内面及び口縁部は横ナデを施す。 施釉面は釉が沸騰したようで、気泡が無数に見られる。	色調 暗茶褐色 胎土 良好 焼成 硬質	
C 包 含 層	209	底部は扁平である。 体部はやや内弯気味に外上方に開く。 内面の底部に炭化物らしきものが付着する。	体部外面にハケ目の痕跡が見られる。	色調 淡褐色 胎土 1~2mmの長石を多く含む。 焼成 硬質	
	210	底部は平坦。 体部はやや内弯気味に外上方に開く。	体部外面に縦方向のハケ目を施す。 体部下端部に斜方向のハケ目を施す。	色調 淡黄褐色 胎土 1mm位の長石、石英粒を多く含む。 焼成 やや硬質	
		底部は扁平で端の方はやや持ち上がって	底部内面、口縁内外面は横ナデを施す。	色調 淡灰褐色	

C 土 包 含 師皿 層 器			211	いる。 口縁部は短く、外反気味に立ち上がり、端部は上方につまみ出されている。 端部断面は丸い。 全体にいびつにゆがんでおり、粗いつくり。	底部外面は未調整。 成形は手づくね。	胎土 0.5 mm以下の長石、微細雲母を含む。 焼成 硬質
			212	持ち上がり気味の底部から、口縁が立ち上がり、急に屈曲して外反する。 このため内面には、鈍い稜がつき外面には段ができる。 口縁端部は狭い面をつくり、口縁端部上部をややつまみ出している。 その際、端部中央部に爪あとによる深い沈線がつく。	口縁内外面とも横ナデを施す。 底部外面は未調整。 底部内面は横ナデを施す。 成形は手づくね。	色調 淡黄褐色 胎土 1 mm以下の長石、微細雲母を含む。 焼成 硬質
			213	残部から推定すると、底部は中心部に近くにつれて隆起するものと推定される。口縁部は底部から、外反気味に上方へ伸び、すぐ屈曲し、内弯気味に端部に至る。 端部は上方へややつまみ出す。 全体にゆがんでいる。	底部外面は未調整。 底部内面、口縁部内外面はナデ調整。 全体に磨滅している。 成形は手づくね。	色調 淡黄褐色 胎土 不良、0.5 mm以下の長石、雲母片を多く含む。 焼成 軟質
			214	底部から端部にかけてゆるく内弯する。 端部はやや丸くつまみ上げる。 底部に比べて口縁部は、若干肥大気味である。	口縁部内外面はナデ調整。 他は未調整と思われるが、磨滅が激しく断定できない。 内外面のところどころに指圧痕が見られる。 成形は手づくね。	色調 淡褐色 胎土 1 mm以下の長石、雲母片を多く含む。 焼成 やや軟質
			215	やや立ち上がり気味な底部から、口縁はゆるやかに内弯気味に上方に伸びる。 端部は丸くおさめる。	口縁内外面、底部内面ともナデ調整。 底部外面は未調整。 底部外面に指圧痕がある。 成形は手づくね。	色調 淡灰褐色 胎土 精良、微細な雲母を含む。 焼成 硬質
			216	口縁部は内弯しながら伸び、端部は丸くおさめる。	全面ナデ調整。 端部付近に再度ナデが見られる。	色調 淡黄灰色 胎土 1 mm位の長石、石英粒を少し含む。 焼成 硬質
			217	口縁は直線的に上方へ伸び、端部近くに至ってやや内弯する。 端部断面は丸くおさめる。	底部外面は未調整。 口縁部内外面及び底部内面はナデ調整。 端部直下にナデによる狭い面ができる。	色調 淡茶灰色 胎土 微細な長石、雲母クリスタルを多く含む。 焼成 軟質
			218	底部からなだらかに、外反気味に立ち上がり、端部は外方につまみ出す。 端部よりやや内方に狭い面をつくる。	口縁外面はナデの跡が明瞭である。 内面もナデ調整。	色調 白黄褐色 胎土 微細な長石、雲母を含む。 焼成 軟質
			219	やや内弯気味に立ち上がり、端部は外方につまみ出す。	内外面にナデの跡が明瞭である。 内面ではナデが口縁端部へ向って消えてゆくものがある。	色調 淡黄灰色 胎土 3 mm位の長石、微細な雲母を含む。

			外面では口縁端部をつまみ出すときにナデ調整が、口縁端部直下の部分に及んでいる。 ナデは全体にかなり強く施され、ナデとナデとの境界と未調整部分との境界はかなり強く残る。	焼成 硬質
土皿	220	口縁部に2本の凹線を有す。 体部はやや内弯しながら伸びる。 口縁部内面に内傾する平面をつくる。 先端部は丸くおさめる。	内面及び外面上部 $\frac{1}{3}$ にナデ調整。	色調 淡黄褐色 胎土 0.5～1 mm位のクサリ礫を少し含む。 焼成 やや硬質
		ほぼ扁平な底部から直線的に口縁が伸びる。 端部は外方につまみ出される。	底部外面は未調整。 底部内面、口縁内外面はナデ調整。 特に口縁外面はナデのあとが明瞭である。 成形は手づくね。	色調 淡黄褐色 胎土 微細な長石、雲母を多く含む。 焼成 軟質
C包器	222	内傾する体部及び口縁部は、端部に至って2面をもつ。 鍔は端部付近に付けられ、断面は山形台形を呈する。 内面にススが付着する。	ナデ調整。	色調 淡褐色 胎土 2 mm位の石英、長石粒を多く含む。 焼成 硬質
		受部内面に接合面としての沈線が1条めぐる。	外面底部はヘラケズリが粗いためにケズリ面が断続する。 外面体部及び内面はナデ調整。	色調 淡灰色、外面 $\frac{1}{3}$ に自然釉 胎土 2～3 mmの石英、長石等を多く含む。 焼成 やや軟質
層	453	立ち上りは長くやや外反気味に内傾し、端部は丸くおさめる。 受部は水平で端部は丸くおさめる。	外面下部 $\frac{3}{4}$ はヘラケズリ調整。 残りの外面及び内面はナデ調整。	色調 黒灰色 胎土 1 mm位の長石を少し含む。 焼成 硬質
		扁平な底部より屈曲して内弯気味に外上方に伸びる。 高台は接地面中央に沈線がある。 断面は台形で底部外周いっぱいに付ける。	全体にナデ調整。	色調 暗灰色 胎土 1 mm以下の長石、微細な雲母を多く含む。 焼成 硬質
須恵器	455	扁平な底部に外方へふんばった高台が付く。 高台の断面は平行四辺形で、接地面は中央部が凹んでいる。	底部内外面、高台ともナデ調整。 内面にはミズビキの跡が残る。	色調 内面 灰色、外面 淡灰色、断面 黄灰色 胎土 2 mm以下の長石、3 mm以下のチャート等を含む。粗い。 焼成 硬質
		平らな底部より外上方へ内弯しつつ伸びる。 高台は底部の外周よりやや内側にまっすぐ付けられる。高台断面は鼓型を呈し、平面で接地する。	内外面ともナデで仕上げる。	色調 灰色 胎土 1 mm以下の長石、微細な雲母、0.5 mm以下の黒色の粒子を含む。 焼成 硬質
	458	ほぼ扁平な底部にやや外側へふんばった高台が付く。高台断面は五角形を呈する。	全面、ていねいなナデ調整。	色調 外面 明灰色 内面 灰色

		杯	口縁は若干内弯しながらも、直線的に外方へ伸びる。		胎土 0.5 mm以下の長石と微細な雲母を含む。 焼成 硬質
須 惠 C 器 壺	459	身	高台はていねいに付けられている。体部は内弯気味に上方に伸びる。	内外面ともナデ調整。	色調 暗青灰色 胎土 1 mm以下の雲母、長石、石英を多く含む。 焼成 硬質
		460	扁平な底部にやや内弯気味に上方へ伸びる胴部が付く。	底部外面には糸切り痕が残る。胴部内外面、底部内面にはミズビキの跡が残る。	色調 淡灰色 胎土 微細な長石、雲母を含む。 焼成 硬質
包 含 C 器 壺	461	鉢	厚い平底の底部の外周よりやや内側から体部が直線的に外方に伸びる。	ナデ調整と思われるが磨滅のため不明。	色調 明褐色 胎土 0.5 mm程の長石粒を含む。 焼成 軟質
		521	底部は欠損する。体部は内弯し、口縁部の先端で外方へ肥厚する（断面三角形）。端部は丸くおさめる。	全面に施釉する。	色調 断面は淡灰色 施釉はやや緑色を帶びる。 胎土 精良、石粒を少し含む。 焼成 堅緻
白 層 白 碗 磁			扁平な底部から内弯気味に上方へ体部が伸びる。高台は不正な四角形で、底部の縁辺に付く。	外面はすべてナデ調整。内面は炭素を吸着させるが磨滅が著しいため、ヘラミガキの跡は不明瞭。	色調 外面、淡黄褐色 内面、淡黒色 胎土 1 mm以下の長石、微細な雲母片を含む。 焼成 軟質
黒 色 土 器	564	碗			

## 第7章 その他の遺物

### 1. 石製品

#### 1) 石匙 (図版40・73)

石匙は横長のもの701と縦長のもの702の2点が出土している。

701はII B 21の包含層からの出土である。剥離手法はフリーを主とするが、ステップもわずかに混じる<sup>①</sup>。刃部の剥離はていねいで、刃縁部は鋭い鎬をなす、縦幅3.6cm、横幅4.75cm、厚さ0.9cm、重量8.95gを測る。

702はI C 37の包含層からの出土で、先端部および刃辺のコーナーが欠損している。剥離手法はフリーを主体とするが、ステップの部分も多くみられる。剥離方向は一定せず、雑な観がある。片面に大剥離面を留める。縦幅残存長6.2cm、横幅2.4cm、厚さ0.7cm、残存部重量9.87gを測る。

石質は両者共にサヌカイトである<sup>②</sup>。

#### 2) 叩石 (図版73)

703はS D 6からの出土で、全体の2/3が欠損している。球形に近い自然石の側面を荒く磨き形を整える。下部に使用痕とみられる敲打痕が認められる。法量は縦幅は9.7cm、横幅は残存部で6.5cm、厚さは残存部で4.9cm、重量は残存部で396gを測る。石質は砂岩である。

#### 3) 石鏃 (図版40・73)

今回の調査において計16点の石鏃の出土をみた。その内訳は、打製石鏃11点、磨製石鏃5点である。打製石鏃はその形状から凹基無茎式（I型式）、平基無茎式（II型式）、凸基有茎式（III型式）、尖基式（IV型式）の4つの型式に分類される。また時代的には縄文時代、弥生時代相方のものが出土している。

〔縄文時代〕 縄文時代の遺構面および包含層は検出されていないため、層位的に縄文時代に比定されるものはないが、形状から縄文時代的要素を多分に有するものが数点みられる。704、705、706いずれもI型式に属し、小形である。法量は横幅1.2~1.5cm、縦幅1.35~1.5cm、重量は0.15

$g \sim 0.4 g$  を測る。704・705は先端部は鋭く、側辺は直線的かやや外反気味に伸びる。基辺はいったん水平な面を作った後、大きく凹む。706は、S D 6 からの出土であるが、剥離面は比較的大きく、一部に大剥離面を残す。側辺は左右非対称であり、基辺の凹みはそれほど大きくない。

〔弥生時代〕 弥生時代に比定される打製石鏃は707～712の6点が出土している。712はS B 4 から、711はS B 9 から、707・708はS D 6 から、709はS K 129 から、712は包含層からの出土である。弥生時代の遺構および包含層から出土したものは、709・710・711の3点だけであるが、他の3点はその形状より弥生時代のものであると判断した。I～IVの型式すべてがみられ、総じて大形の形状を示す。

a) I型式 I型式は707・708の2点がある。側辺は707は直線的で708はやや外反する。基辺は707は大きく凹むが、708はゆるやかに凹む。708は、剥離の回数が少なく、雑な観がある。

b) II型式 II型式に属するのは、710・711の2点であり、いずれも弥生時代の住居跡（710はS B 4、711はS B 9）からの出土である。710は、先端部がやや鋭く、側辺は直線的であるがやや外反し、基辺がわずかに凹むのに対して、711は、先端は丸みを帯び、側辺は内彎し、基辺は水平である。711には大剥離面を残す。

c) III型式 III型式に属るのは、709 1点だけである。これは大形の石鏃で、先端は鋭く、側辺は直線的に伸び、逆刺は鋭いが、位置は左右ずれている。鏃身と茎の境は明確でない。剥離面にはフリーとステップが混在する。一部に大剥離面をとどめる。

d) IV型式 IV型式は712 1点だけである。これもきわめて大形で、復原長5cm以上になると思われる。先端および基端が欠損しているため全容は不明である。

e) その他 層位的にも型式的にも時代が不明確なものが2点出土している。

磨製石鏃は5点出土しており、形態的に凸基有茎式（III型式）、円基式（V型式）の2型式に分類される。

III型式 III型式に属すものは、715と716の2点がある。716は、S D 6 からの出土で、茎部端が欠損している。側辺部に細かな凹凸がみられるが、意図的なものなのか、後の破損によるもののかは不明である。茎の抉りは浅く、茎側辺に面を作る。逆刺の位置は左右で異なる。全体に研磨痕が明瞭に残る。

715はS B 5 からの出土で、鏃身の上半が欠損している。茎の抉りは浅く、茎の側面に面を作る。鏃身には弱い鎬が走る。全体に研磨痕が明瞭に残る。

V型式 V型式は717 1点が出土している。717は、II A 93の整地層からの出土である。全形は柳葉形を示す。原材を荒割りした跡が観察できることから、かなり雑な研磨整形である。鏃

表7 石鎚計測表

番号	出土地点	型式	法量				剝離量	調整	石質	備考
			縦	巾	横	重 量				
704	II B-70	凹基無茎式	1.35cm	1.2 cm	0.2 cm	0.15g	フリードにステップ混在 大剝離面をわずかに残す	サヌカイト	逆刺 若干磨滅	縄文時代
705	SK-109	凹基無茎式	1.5 cm	1.5 cm	0.2 cm	0.32g	フリードにステップ混在	"		縄文時代
706	SD-6	凹基無茎式	1.7 cm	1.5 cm	0.3 cm	0.4 g	フリードにステップ混在 大剝離面を残す	"	左右非対称	縄文時代
707	SD-6	凹基無茎式	2.5 cm	2.1 cm	0.4 cm	1.1 g	フリードにステップ混在 大剝離面を大きく残す	"		弥生時代
708	SD-6	凹基無茎式	残2.15cm	1.85cm	0.3 cm	残0.82g	フリード	"	先端部欠損	弥生時代
709	SK-129	凸基有茎式	3.9 cm	2.3 cm	0.6 cm	3.85g	フリードにステップ混在 大剝離面を残す	"	大型である	弥生時代
710	SB-4	平基無茎式	1.7 cm	1.3 cm	0.2 cm	0.57g	側刃のみフリードの剝離 大剝離面を大きく残す	"		弥生時代
711	SB-9	平基無茎式	1.9 cm	1.5 cm	0.3 cm	0.7 g	フリード	"	側刃に鋸歯状の凹凸有り	弥生時代
712	IC-33	尖基式	残4.6 cm	1.8 cm	0.55cm	残4.2 g	フリードにステップ混在	"	先端基端欠損 大型で復原長5.5~5.7cmを測る	弥生時代
713	III B-1	凹基無茎式	残2.2 cm	1.7 cm	0.4 cm	残1.5 g	フリードにステップ混在	軟玉、ヒスイ系統	先端逆刺欠損	時代不明
714	IC-74	尖基式	残2.7 cm	1.35 cm	0.5 cm	残1.87g	フリードにステップ混在	サヌカイト	左右非対称	時代不明
715	SB-5	凸基有茎式	残2.55cm	1.85 cm	0.4 cm	残2.03g		硬質 岩	鍔身の上半欠損	弥生時代
716	SD-6	凸基有茎式	残3.9 cm	2.3 cm	0.3 cm	残3.25g		"	全面に研磨痕が残る	弥生時代
717	II A-93	円基式	3.1 cm	1.05 cm	0.25cm	0.83g		"	全面に研磨痕を残す 原材の荒削りの跡を残す	弥生時代
718	SK-143	不明	残4.2 cm	1.5 cm	0.3 cm	残2.4 g		"	先端、基端欠損 に残る	研磨痕が明瞭 石鎚の転用
719	SK-130	不明	残4.65cm	1.8 cm	残0.3 cm	残2.93g		"	基部、片面欠損 残る とと思われるタテ方向のキズ有 り	一部研磨痕が 使用痕 石劍の転用かと思われる

身に研磨痕を明瞭に残す。

その他に型式不明のものが2点出土している。718はSK143からの出土で、基端部が欠損しているため型式は不明であるが、平基無茎式か、尖基式のいずれかに属すと考えられる。先端部は鋭く、側辺はやや内彎気味にのび、柳葉形を示す。鎧は比較的明瞭である。鎌身の全面に研磨痕が残る。

719は、SK130からの出土で、基端部が欠損している。先端部は丸みを帯び、側辺はやや内彎気味にのびる。鎌身には明瞭な鎧が走る。一部に研磨痕を留める。718・719共に磨製石剣からの転用であると考えられる。

#### 4) 石斧 (図版41・73・74)

当遺跡より出土した石斧はすべて磨製石斧で総数11点を数える。その内訳は、大型蛤刃石斧1点、柱状片刃石斧1点、扁平片刃石斧4点、形状不明石斧6点である。

**大型蛤刃石斧** 720は、SD21からの出土である。刃部が欠損しているため全容は不明である。両側辺に抉り状の凹みがみられる。基辺には敲打痕が残存している。また基部両面に斜方向の浅い溝が走る。

**柱状片刃石斧** 721は、SD6からの出土であるが、基部が欠損しているため全容は不明である。断面は正方形に近い形を示す。全形は直方体状のものになると思われる。刃先は鋭い。

**扁平片刃石斧** は、722~726の4点が出土している。722は、SB8からの出土である。一部欠損しているが、平面は長方形を、断面は扁平な楕円形を示す。刃面は両面にみられ、完全な片刃石斧ではない。刃縁は鋭く研磨される。全面に研磨痕が明瞭に残る。

723は、SB1からの出土で、基部および刃縁の一部が欠損している。大形で、平面長方形、断面楕円形を示す。両面に刃面を意識しており、完全な片刃石斧ではない。側辺には擦れたような磨滅痕を残す。研磨痕は不明瞭である。

724はSB4からの出土で、基部が欠損している。小形で、平面は細長い長方形を、断面も長方形を呈す。両面に刃面がみられ、完全な片刃石斧ではない。側辺に抉り状の凹みがみられる。刃縁は鋭く研磨される。全面に研磨痕が明瞭に残る。

725はSB4からの出土で、基部が欠損している。平面は長方形を示し厚さはきわめて薄い。刃部は明瞭に砥ぎ出しが、他は荒く研磨するにとどめ、原材からの剥離面をほぼ全面に残す。

その他刃部を欠損するため分類不能の石斧が5点出土している。726~730。

726は、SB3からの出土で、基部・刃部を欠損する。平面は縦長の長方形を示すと思われ、横断面は隅丸の長方形を呈す。

表8 石斧計測表

番号	出土地点	分類	法量				調整	石質	備考
			縦巾	横巾	厚さ	重量			
720	SD-21	大型蛤刃石斧	残9.2 cm	7.3 cm	5.0 cm	残56.5 g	磨製	安山岩	刃部欠損 中砥か?
721	SD-6	柱状片刃石斧	残4.2 cm	2.1 cm	2.1 cm	残29.65g	"	頁岩	基部欠損 弥生時代
722	SB-8	扁平片刃石斧	6.7 cm	4.0 cm	1.3 cm	残61.9 g	研磨痕残	珪質頁岩	ほぼ原型を保つ 弥生時代
723	SB-1	"	残8.5 cm	6.4 cm	1.9 cm	残136.5 g	"	硬質緑色凝灰岩	大型側面に摺れた跡あり 弥生時代
724	SB-4	"	残3.4 cm	1.3 cm	0.4 cm	残3.5 g	"	硬質頁岩	小型両刃の観が強い、抉りあり 弥生時代
725	SB-4	"	残3.75cm	2.7 cm	0.35cm	残37.4 g	"	"	剥離面を大きく残す 弥生時代
726	SB-4	不明	残5.9 cm	3.7 cm	残1.25cm	残6.6 g	"	"	基部のみ残存 弥生時代
727	SD-6	"	残3.9 cm	残存最大巾3.65cm	0.4 cm	残12.5 g	"	粘板岩	基部下部欠損 台形状の形態 大剣面をとどめる 弥生時代
728	II B-7	"	残3.4 cm	3.8 cm	3.5 cm	残16.0 g	"	硬質頁岩	基部下部欠損 大剣面をとどめる 弥生時代
729	II B-67	"	残4.35cm	残2.1 cm	残0.4 cm	残5.75g	"	"	基部および側面の一部のみ残存 弥生時代
730	II C-58	"	残3.7 cm	残3.9 cm	残0.9 cm	残19.85g	基端面以外未調整	"	半製品であると思われる 弥生時代

727はSD 6からの出土で、刃部を欠損する。平面は刃部の広がる台形状を示すと思われる。厚さは薄く、断面は長方形を呈す。研磨痕は不明瞭である。片面の約 $\frac{1}{2}$ に原材からの剥離面を残す。

728はII B 7の包含層からの出土で、刃部を欠損する。平面は長方形を示すと思われる。横断面はやや彎曲した長方形を呈す。ていねいな研磨が施されるが、原材からの剥離面も留めている。

729はII B 67の包含層からの出土で、基端および側辺の一部を残すのみである。研磨痕が明瞭にみられる。

730はII C 58の包含層からの出土である。基端に両面より凹線状の溝がみられる。これは原材から切り離すために刻まれたものであると考えられる。他の部分は未調整であり、原材から切り離した段階で何らかの理由により製作が中止されたものであると考えられる。

#### 5) 磨製石剣 (図版41・74)

明確な磨製石剣は731 1点だけである。SB 4からの出土で、側面の一部のみ残存するが、基部に近い部分の破片である。両面中央に明瞭な鎬が走る。断面は横菱形を呈す。全面に明瞭に研磨痕が残る。石質は硬質頁岩である。

#### 6) 石庖丁 (図版74)

石庖丁は732~735の4点が出土している。

732はSD 21からの出土で、体部片面のみ残存する。穿孔は両面よりなされていると考えられる。研磨痕が明瞭に残っている。

733はSB 8からの出土で、片面の刃面近くのみ残存している。研磨痕が明瞭に残るが、原材からの剥離面も留めている。なお、733は磨製石剣の可能性がある。

734はSD 6からの出土で、体部片面のみ残存する。穿孔は両面よりなされる。研磨痕は観察されない。

735はII B 45の包含層からの出土で、体部の上部のみ残存する。穿孔は両面よりなされる。

表9 石庖丁計測表

番号	出土地点	法量					石質	備考
		残存部	厚さ	内孔径	外孔径	重量(残)		
732	SD-21	4.1×3.35cm		0.4cm	0.95cm	11.1 g	硬質頁岩	体部片面のみ残存
733	SD-8	5.3×2 cm				3.35g	"	刃面片面のみ残存 石剣の可能性がある
734	SD-6	3.75×3.1cm		推定 0.5cm	推定 0.8cm	7.58g	"	体部片面のみ残存
735	II B-45	6.2×2.9cm	0.7cm	推定 0.4cm	推定 0.7cm	20.52g	"	体部上位のみ残存

## 7) 砥 石 (図版41・75)

砥石は総計7点出土している。石の利用面の形状から平面的に利用するA型式、平面の他に溝を持ついわゆる有溝砥石であるB型式、多面を利用するC型式の3型式に分類される。

a) A型式 A型式は736・737・738の3点が出土している。736はSK-129からの出土で、大半が欠損していると思われる。きめの細かな石質で、中央が使用によりやや凹む。側面の使用については破片のため不明である。

737はSD-21からの出土で下部が欠損している。平面は長方形を、断面は台形を呈する。利用面は上面のみである。

738はSD-6からの出土であるが、破損が著しいため詳細は不明であるが、側面の利用はないようである。

b) B型式 B型式は739・740・741・742の4点が出土している。739はSB-8からの出土である。平面は隅丸の台形、断面は橢円形を呈する。両平面および側面の一部を利用する。平面部には条痕を残す。

740は表面採集によって得られた資料である。平面は橢円形、断面も橢円形を呈する。両面および両側面を利用する。片面に浅い条痕が残る。

741も表面採集によって得られた資料である。平面は隅丸の五角形を、断面は台形状を呈する。両面および側面、端面の一部を利用する。片面に条痕を残す。

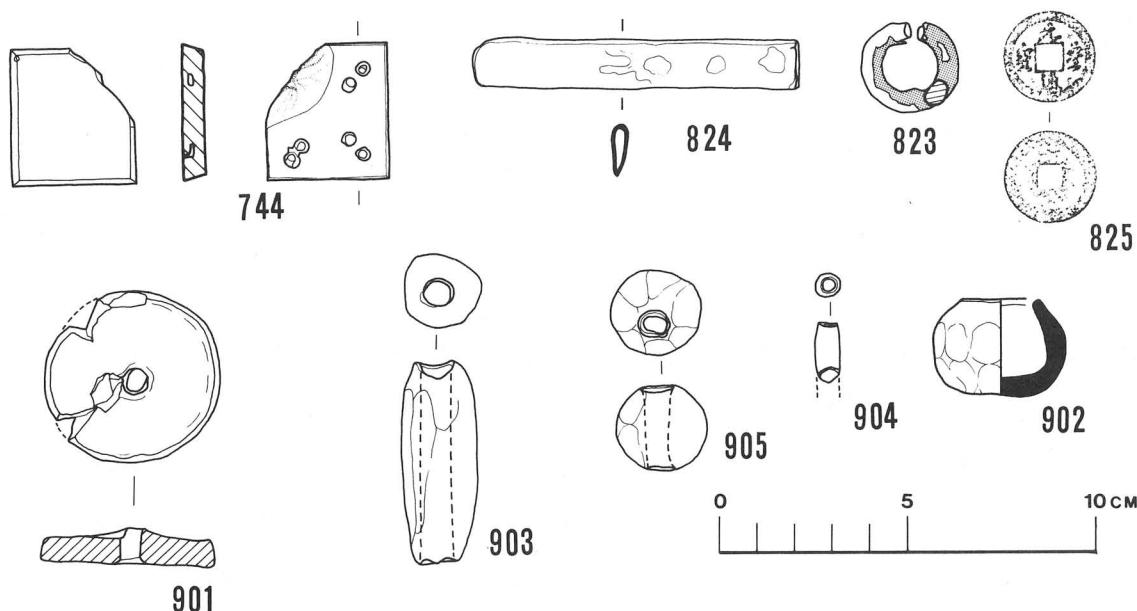
表10 砥石計測表

番号	出土地点	形式	法 量			利 用 面	石 質	備 考
			平 面	厚 さ	重 量			
736	SK-129	A	残 6.6×3.3cm	残 0.6cm	22.12 g	片面の他は不明	砂 岩	片面のみを残す破片
737	SD-21	A	残 9.6×5.7cm	3.45cm	338.0 g	上面のみ	砂 岩	下部欠損、荒砥
738	SD-6	A	残 8.1×5.5cm	残 2.1cm	128.5 g	片面の他は不明	砂 岩 or 玄武岩	破損が著しい
739	SB-8	B	6.5×5.35cm	2.5cm	126.2 g	両平面および側面 の一部	砂 岩	両平面に条痕を残す
740	表 採	B	4.9×2.9cm	1.4cm	27.17 g	両平面および両側 面	砂 岩	片面に条痕を残す
741	表 採	B	9.5×5.9cm	4.5cm	342.0 g	両平面および側面 および端面の一部	アルコース 砂 岩	両平面に条痕を残す
742	II B-9	B	11.5×5.6cm	3.9cm	308.0 g	片面のみ	砂 岩	条痕を残す
743	SD-21	C	残 4.8×5.8cm		141.5 g		砂 岩	一方をえぐるように加工 し、細めて研磨する。こ の部分に一ヶ所抉り状の きざみあり。断面は円形 を呈す。あるいは石錐か。

742はII B 9の包含層からの出土である。平面は台形に近い三角形を、断面は不定形である。

片面のみを利用し、溝を持つ。

c) C型式 C型式は743 1点だけでS D 21からの出土である。一部欠損するため全容は不明である。残存部はキノコ状を呈し、断面は円形である。側面を多面的に利用する。細まった部分に1箇所抉り状の刻みがみられる。743は石錘である可能性がある。



挿図9 石製品・金属製品・土製品実測図

### 8) 石 鎏 帯 (744)

I C 18の包含層からの出土である。いわゆる巡方の石鎔帯で、平面は矩形を、断面は台形状を呈す。各面とも平滑に磨かれている。孔は2個1対で計4対穿たれ、各々の1対の孔は連結する潜り孔である。上面には使用時についたと思われる傷が不定方向にみられる。大きさは長辺3.6cm、短辺3.1cm、厚さ0.71cmを測る。石質は頁岩である。

## 2. 金 属 製 品

### 1) 銀 環 (823)

II B 31の包含層から出土したものである。青銅の軸に鍍銀したもので、断面は橢円形を呈し、長径2.6cm、短径1.5cm、重量9.85gを測る。遺存状態は不良で、特に鍍銀部分の剥落が激しい。

## 2) 金銅製刀子鞘 (824)

I A 75の包含層からの出土である。銅板打ち物手法で成形した後、鍍金する。鞘内に刀子が残存していると思われるが、腐蝕のため確認できない。縦幅8.7cm、横幅1.35cm、厚さ0.4cm、重量18.95gを測る。

## 3) 銅 錢 (825)

元豊通宝（初鑄1078年・宋）S D 7からの出土で、4.13gを測る。遺存度は良好である。

## 3. 土 製 品

### 1) 土 錘 土錘は3点出土している。

903はI B 98の包含層からの出土である。中型の細長いタイプで、胎土には0.2mm程の長石粒を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈す。長さ5.3cm、最大径2cm、孔径0.8cm、重量19.25gを測る。

903は孔の部分が左右とも欠損している。この欠損部は使用時に生じた可能性がある。また体部においては孔の欠損部に対してほぼ90度の部分が磨滅し平坦な面を形成している。以上のことからこの土錘は、湖底に接して移動するタイプの網である曳網系の網に用いられた可能性がある。

904はI B 89の包含層からの出土である。約½を欠損し、残存部で縦幅1.6cm、最大径0.65cm、孔径0.35cm、重量4.0gを測る。胎土は精良である。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈す。

905はI B 89の包含層からの出土である。形状は球形を呈し、縦幅2.3cm、最大径2.4cm、孔径0.8cm、重量10.85gを測る。胎土は精良である。焼成は良好で、色調は明灰色を呈す。

905は孔の付近および、体部表面のいずれにも使用痕および磨滅は認められない。このことから、この土錘は、使用時に磨擦をほとんど生じないタイプの網に用いられた可能性があり、刺網系の網に用いられた可能性がある。

### 2) 土製紡錘車 (901)

S B 9からの出土である。円盤状の形態を示す。両面とも欠損部分が多い。直径4.65cm、厚さ0.95cm、孔径0.6cm、重量16.95gを測る。胎土は精良であるが、焼成はやや不良で脆く、色調は暗褐色を呈す。穿孔は焼成前に下より上に向ってなされる。

そのほかに小型手づくね土器902が包含層より出土している。

## 4. 土 馬 (図版42~44・76・77)

当遺跡からは総計11点の土馬の出土をみた。いずれもD地区の旧大伴神社跡からの出土である

が、遺構に伴うものはない。また、層位的にも大伴神社の移転に伴う搅乱・整地を受け不明なものが多い。そのため、他の共伴遺物との比較や、層位的な比較は一部をのぞいて不適格と考えられるので、土馬の形態による分類を中心とした。なお、当遺跡からは完形の土馬は1点も出土していない。また、首より上部、尾部の出土もみられなかった。

出土した土馬は、その形態および成形技法により大きく3型式に分類できる。

**I型式** 大形で、体部横断面はアーチ状を呈する。鞍をはじめとする馬具を粘土紐および竹管文で表現し、調整法はハケ目調整とナデ調整を併用する。重量感のある写実性の強い土馬である。

**II型式** 各個体間に細部において差異がみられることから使用年代に幅があると考えられるが、基本的な製作技法が同じであるためにII型式としてまとめた。

中形からやや大形のものまである。体部横断面はアーチ状を呈する。鞍部のみ粘土板および粘土紐で表現する。体部はハケ目調整の後ナデにより仕上げるが、脚は縦方向のヘラケズリにより整形する。胎土はいずれもやや荒めで長石粒を多く含む。

**III型式** この型式も各個体間に若干の差異が認められることからやはり使用年代に幅があると考えられるが、製作技法が同じであるためにIII型式としてまとめた。

中形の裸馬であり、胴部横断面は中実の楕円形を示す。残存する胴部および脚部の調整は、ハケおよびヘラは用いず、すべてていねいなナデによる。胎土は精良である。

以下、型式別に出土した土馬の概要を述べてみたい。

**I型式** I型式の土馬は905 1点だけである。包含層からの出土で、首および尾が欠損している。残存部で長さ20.8cm、横幅10cm、高さ13.5cmを測る大形の装鞍馬である。胴部は1枚の粘土板を曲げて作られており、内面に指頭痕が明瞭に残り、横断面は逆U字形を示し、端部を少し内側に折り曲げる。特に鞍の下部は胴部のほかの部分より強く内側に折り曲げられており、泥障を意識した造作であると思われる。胴部の内側に円柱状の四脚を接合した後、不定方向のハケ目調整を施す。このとき、同時に首および尾も接合されたと思われる。その後、全体を荒くナデで仕上げた上に、粘土紐により鞍および鐙を、さらに竹管文により胸繫、尻繫等を表現するきわめて写実的な土馬である。色調は明褐色を呈し、焼成はやや不良で軟質である。胎土はやや荒く0.5mm程の長石を全体に含む。

**II型式** II型式に属する土馬は5点出土しているが、さらにその形態上の差異から3型式に細分される。

**II-1型式** 906・909の2点が出土している。906は整地層からの出土である。首、尾、右前脚、左右後脚が欠損している。残存部で長さ16.1cm、横幅6.0cm、高さ11.2cmを測る大形の装鞍馬であ

る。胴部は粘土塊を引き延して断面カマボコ形に作った後、鞍にあたる部分の粘土を薄く下方に引きのばした後内側に曲げ、横断面を中心よりやや下方に空間のある筒状に仕上げる。これは胴の丸みと泥障を同時に表現したものである。その後、脚、首、尾をていねいに接合し、さらに全体をハケで調整する。その後、脚部を縦方向のヘラケズリで整形する。そのため脚部の横断面は多角形を示す。この際、前面中央に突起を削り出すことにより膝を、脚端を前方へ引き出しさらにその背面に縦方向のV字状の刻みを入れることにより蹄を表現する。その後、粘土板により鞍を作り背中にはりつけ、さらに全体をていねいになでて仕上げる。正面胸部、胴部裏面の前脚の付根、尾の付根下部に焼成前に穿孔している。特に尾の付根の孔は肛門を意識したものか $0.8\text{cm} \times 0.5\text{cm}$ の楕円形で、深さは約 $3.5\text{cm}$ 程ある。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には $1\text{mm}$ 前後の長石粒を多く含む。

909はII B 2の包含層からの出土で、後脚の大腿部のみ残存している。残存部で $10.2\text{cm} \times 5.2\text{cm}$ を測り、かなり大形の土馬である。製作技法は、まず粘土塊を引きのばして成形した後、縦方向のヘラケズリで整形し、さらに外から見える部分をていねいになでて仕上げる。製作技法は906に似るが、より大形の様相を呈する。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には $0.5\sim 1\text{mm}$ 角程の雲母、長石が多量に含まれる。なお、同地点より須恵器甕434が出土している。

II-2型式 この型式、II-1型式に比べ大きさが小形化し始め調整法などが簡略化する傾向にあるもので、907・910の2点が出土している。

907は前脚はII A 86、左胴部はII B 13、右胴部はII B 43、左後脚はII A区東北隅からの出土で、首、尾、右後脚が欠損している。残存部で長さ $12.2\text{cm}$ 、横幅 $5.3\text{cm}$ 、高さ $10.4\text{cm}$ を測る中形の装鞍馬である。胴部は粘土板を曲げ横断面逆U字形を作る。端部はやや薄く丸くおさめ、906に見られた泥障の表現はなくなっている。胴部内面の四隅に脚を接合する。接合法は905に類似する。このときに首および尾も接合されたものと思われる。その後、各々の脚を縦方向のヘラケズリで整形し横断面は906同様多角形を示す。この時、脚前面に突起を削り出すことにより膝を表現することは906と同様であるが、突起は小さく表現はやや退化している。また、前脚の接地面の前後に浅い沈線を走らすことにより蹄を表現するが、これも906よりもやや退化した表現である。さらに胴および脚上部をハケで調整した後、粘土板で鞍を作りはりつけ、胴部をなでて仕上げる。

鞍の部分の粘土板が破損し、胴部が露出した右側外面に5本前後の突起を持つ幅 $1\text{cm}$ 程のU字形の道具で刺突したと思われる痕跡が14個以上重なっているのが観察される。この痕跡は焼成後に付けられたもので、土馬を破壊する際につけられた傷跡の可能性がある。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には $0.5\text{mm}$ 角程の長石を多量に含む。

910はII B 22の整地層からの出土で、後脚の大腿部のみが残存している。残存部で5.5×3.8cm測り、中形の土馬である。断面は三角形状を呈する。製作技法は、粘土塊を引きのばして成形した後、ハケで全体を調整し、さらに外から見える部分をヘラケズリで整形する。製作技法はヘラケズリ整形の後ナデにより仕上げないことなど907に類似するが、それよりもやや大形であると思われる。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土には0.5~1mm角程の長石粒が多く含まれる。

II-3型式 この型式はII-1・2型式よりも一層簡略化の進んだ型式であるが、基本的な製作技法は同一で908 1点だけの出土である。

908はII A 93の包含層からの出土で、胴部のみを残している。残存部で長さ9.9cm、横幅5.1cmを測る中形の装鞍馬である。胴部は粘土板を曲げ、横断面逆U字形を作るが、尾に近い部分をすぼめて断面半円状の細い溝を作る。尾はこの溝の中に装着されたものであると考えられる。鞍は粘土紐で表現している。全体に剥落が激しく、調整法は不明である。色調は明褐色を呈し、焼成は不良で軟質である。胎土には0.5mm程の長石が多量に含まれる。

胴部を粘土板を折り曲げ、断面逆U字形を作る点でII-1・2型式に類似するが、鞍の表現が粘土紐によってなされている点で、より簡略化しているといえる。

III型式 III型式に属する土馬は5点出土しているが、その形態上の差異によりさらに2つの型式に細分される。

III-1型式 この型式は装鞍馬と裸馬の中間的な形態で911 1点だけの出土である。

911は、胴部はII A 92から、脚部はII B 2からの出土で、胴の一部と前脚のみ残存している。残存部で長さ5.5cm、横幅5.2cm、高さ10.2cmを測る中形の裸馬である。全体を粘土塊を引きのばして成形した後、全体をていねいになでて仕上げる。胴部横断面は中実の楕円形を、脚部の断面は円形を呈する。胴部上面の背と首の境付近にあたる部分を指で強くなでつけることにより、浅い溝と前方に弱い高まりをめぐらせることにより、鞍を意識したような表現をする。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精良である。なお、911の脚部と同じ層から須恵器の杯蓋435が出土している。

III-2型式 この型式に含まれる土馬は完全な裸馬の形態をとり、912 1点だけの出土である。

912はII A 92の整地層からの出土で、胴部のみ残存している。残存部で長さ12.0cm、横幅6.7cmを測る中形の裸馬で、胴部断面は中実の楕円形を呈する。製作技法は、まず全体を粘土塊から作り出した後、ていねいになでて整形する。胴部は比較的細く、脚は左右にややふんばった形になると思われる。911にみられたような鞍を意識した造作はみられない。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精良である。

III型式その他 913・914・915はいずれも脚部のみの出土で、III型式に属するがそれ以上の細分類は不可能と思われる。

913はII A 92の包含層から、914はII A 92の整地層から、915はII B 21の整地層からの出土である。法量は、913は高さ5.6cm、直径1.7cm、914は高さ8.0cm、直径2.0cmを、915は高さ6.5cm、直径2.0cmを測る。製作技法はいずれも粘土塊を引きのばして成形した後、全体をなでて調整する。色調は明赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は精良である。

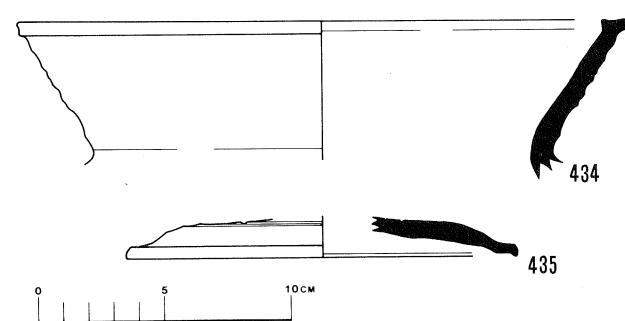
本遺跡より出土した11点の土馬は、いずれも共伴関係が不明確であることから、その形態上の差異から使用年代を考えてみたい。しかし、土馬の形態には地域色が強く出ていると考えられるため、一概に他の遺跡出土の土馬との比較はでき難いが、基本的成形法、装飾法等の比較および当遺跡出土の土馬にみられる形態上の差異により年代を推定してみたい。

I型式に属する905は、鞍、鐙、泥障を粘土で作り、その他の馬具を竹管文であらわす非常に写実的なものであり、小笠原好彦氏の分類による第1段階A型式に併行すると考えられ、7世紀後半、もしくはそれよりややさかのぼる年代が推定される。<sup>③</sup>

II型式の土馬は体部、特に脚の整形にヘラケズリを用いることが特徴となっているが、細部に差異が認められ、さらに3型式に細分される。

II-1型式・906は鞍および泥障を粘土で作るほかに、脚の造作が非常に写実的であり、膝、蹄の他に肛門を意識したと思われる穿孔を持つことなど、装飾は少ないが、かなり生馬を意識して作られたことがうかがわれる。また、調整もいったんヘラケズリで整形した後にナデにより仕上げるという非常にていねいな手法をとっている。また、909は大脚部のみの出土であるが、調整法が906に類似することのほかに、大形の土馬であることが予想されることから、906と併行するもの

と考えられ、両者とも小笠原分類I B型式に併行し、7世紀末～8世紀初頭の年代が考えられる。また、909と同じ包含層から出土した須恵器甕434は、榎木原IV類2段階、陶邑IV型式2段階に相当し、7世紀末～8世紀初めの年代が与えられる。<sup>④</sup>  
<sup>⑤</sup>



挿図10 土馬共伴土器実測図

II-2型式・907は各部の造作が906に比して簡略化する傾向にあり、906より少し時代が降ると思われ、小笠原分類第1段階C型式に併行し、8世紀初めの年代が考えられる。また、910も907に併行する時期のものと考えられる。

II-3型式・908は鞍の造作が粘土板を用いる表現から粘土紐を用いる表現に変化するなど、一層の簡略化が進んでおり、小笠原分類I C型式の土馬と併行すると考えられ、8世紀初めの年代が考えられる。

III型式は、すべて手ヅクネとナデにより成形・調整される裸馬であるが、細部の違いからさらに2型式に分類される。

III-1型式・911は、背の部分に鞍を意識したと思われる造作がみられることから、装鞍馬であるII型式と、裸馬であるIII型式の中間的な形態と考えられ、小笠原分類II D、もしくはII E型式の土馬に併行すると考えられ、8世紀前葉の年代が考えられる。また、911と同じ包含層から出土した須恵器杯蓋435は檜木原IV類2段階と3段階の中間的な形態、陶邑IV段階2型式と3型式の中間的な形態を示し、8世紀前半のものと推定される。

III-2型式・912は、911にみられた鞍部の表現がなくなり完全な裸馬となっているが、まだ中形の形態をもっていることから小笠原分類II D型式に併行すると考えられ、8世紀前葉から中葉にかけての年代が考えられる。913~915は、脚部のみの出土であるため細かな型式分類はできないが、いずれもIII型式に属し、小笠原分類II D型式、もしくはII E型式に併行するものと考えられる。

すでに、多くの研究者が指摘するように、土馬は祭祀に用いられた祭祀遺物と理解され、土馬を用いた祭祀には、墓前祭祀、峠神祭祀、井戸祭祀、河川祭祀、祈雨祭祀等が考えられる<sup>⑥</sup>。

馬と水神の関係は、柳田国男、石田英一郎により明らかにされたように、きわめて密接な関係にある。文献にも、「日本書紀」皇極元年七月廿五日条に、

群臣相語之日、隨村々祝部所教、或殺牛馬、祭諸社神、或頻移市、或祈河伯、  
とあるように祈雨に用いられた例や、「肥前国風土記」佐嘉郡条によれば、

一云、郡西有川。名曰佐嘉川（中略）此川上有荒神、往来之人、生半殺半、（中略）二女子  
云、取下田村之土、作人形、馬形、祭祀此神、必有応和云々。

とあるように、荒ぶる川の神を鎮めるために土製の馬を用いたりする例や、丹生川上神社と貴船神社に対して行なわれた祈雨または止雨祈願のために奉獻された神馬の例がある。この神馬の奉獻は文武2年~仁和3年に至る190年間に37回にもおよんでいるが、「類聚符宣抄」天暦二年五月七日には、

右大臣宣。奉勅。為祈雨丹生川上。貴布禰。黒馬二疋。仰左右馬寮。各一疋。以今月九日可  
牽進。但無繫飼。以板立御馬進者

とあり、さらにこれを受けて、同年六月十一日には、

中納言藤原朝臣在衡宣。奉勅。丹川上。貴布禰社祈。仰左右馬寮。宣今牽進板立黒毛御馬寮

別一疋者。

とあるように、生馬が獻ぜられない時は、代用品で替えることも行われていたことを示している。この代用品は板立の馬であることから絵馬状のものかと思われるが、同様な理由により、生馬の代用品として土馬が用いられた可能性は強いと思われる。

また、民俗例においても、現在でこそ馬を殺して水神に祈るという風習は絶えてしまったが、近年まで広く行われていた。この馬を用いる水神への祈願の方法には、馬を実際に殺し、滝、川の深みなどの水神の住むとされている所に投入するパターンと、馬の骨をやはり投入するパターン、生馬の代用である絵馬等を用いるパターンなどがある。<sup>⑨</sup>

このように馬は水神を祀るためにきわめて重要な役割をはたしており、本遺跡出土土馬もこのような関係の中に位置付けられるものと考えられる。

## 5. 伏見人形（図版77）

旧大伴神社跡の整地層より大量の伏見人形が出土した。ほとんどが土製の狐であり、他に布袋人形が1点、天神人形と思われる破片が1点出土している。いずれも人為的に破壊された形跡のある破片であり、大伴神社移転の際に廃棄されたものである。

a) 狐 大、小いくつかの種類があるが、いずれも型を用い前後もしくは左右2面を合わして成形する。大形のもの921は左右に、小形のものは前後に合わす例が多い。小形のもの916には、中実のものもみられ、胴部のみ型で作り、前脚、爪先等は手ツクネで作り、接合しているものもみられる(920)。また、胴部に赤色系の顔料の遺存しているものもみられる。頭部も型で成形するが、口はへラ状のもので刻みを入れた後上下に開き、中に巻物、もしくは珠を入れる(917~919)。台座の形態も多種みられるが、基本的には平面長方形(923~925)もしくは平面小判形を呈する(926)。胎土はいずれも精良であり、表面に銀白色の雲母粉が付着しているものが多い。

大伴神社は、南滋賀の集落の中でも大川より北側にあたる新在家の人々によって祀られている。新在家には「大伴構」「園講」「角出講」の3つの講集団があり、各々が独自に行事を行なっている。中でも初午（2月最初の午の日）には講員の中から選ばれた数人が京都伏見稻荷に代参するが、その折に伏見人形の狐を土産として買って来ることが多かったという。また、稻荷神を信仰する者は、独自に買い求めて自宅に祀ったりすることである。しかし、改築や新しい人形を購入したといった理由により人形が不要になった場合、ただ棄ててのではモッタイナイということで神社に納めることである。

b) 布袋 足先だけの出土である。成形はやはり型によるものである。

布袋人形は1体だけの出土である。この人形はオクドサン（カマド）の近くに荒神と同じく祀られることが多く、やはり伏見人形である。この布袋人形は最初に買い求める時には小さな人形を求め、毎年1段階ずつ大きなものを買い足していく、7体になるまで続ける。7体そろうと幸いが訪れるということである。しかし、その途中に家内に不幸があった場合、それまでそろっていた人形は神社に納め、また新たに最初から買いそろえる。また、狐の人形と同じく、改築などに伴い、置き場所に困った人形が神社に持ち込まれる場合もある。

これら出土した人形類はごく近年のもので、いずれも神社に納められたものであり、神送りの一形態であると考えられる。

(吉谷芳幸)

### 註

- ① 剥離面の状況には、貝殻状剥離面（フリーな状況）と階段状剥離面（ステップ状）とがあるが、大伴遺跡出土の打製石器はいずれもフリーな面が主であり、若干、混在するステップ状の面は、故意につけられたものではなく、フリーフレーキングの際に偶然についたものと考えられる。
- ② 石質の鑑定は、すべて滋賀文教短期大学講師宇野光一氏の肉眼鑑定による。
- ③ 小笠原好彦「土馬考」（『物質文化』25 昭和50年）
- ④ 林博通、葛野泰樹ほか『榎木原遺跡発掘調査報告III』（滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和56年）
- ⑤ 中村浩『陶邑I～V』（大阪府教育委員会 昭和51年～58年）
- ⑥ 大橋信弥「近江出土の土製馬について」（『滋賀考古学論叢』第1集 滋賀考古学論叢刊行会 昭和56年）  
大場磐雄「上代馬形遺物について」（『考古学雑誌』昭和12年）  
大場磐雄「上代馬形遺物再考」（『国学院雑誌』67-1 昭和41年）
- ⑦ 柳田国男「河童駒引」（『定本、柳田国男集』第27巻 山島民譚集 筑摩書房 昭和45年）  
柳田は「河童駒引」というパターンをとりあげ、これを水神に対する馬の供儀の残存形態であるとしている。
- ⑧ 石田英一郎「新版河童駒引考」（『石田英一郎全集』5巻 筑摩書房 昭和45年）  
この中で石田は、「もと農耕社会の豊饒儀礼に占められた牛の中心的役割に始まり、後に馬がこれらの農耕地域に進出してくるようになって、あるいは牛に潜り、あるいは牛とならんで河湖沼の靈怪ともなれば、また水神の供儀獸となったものと解釈する。」と述べている。
- ⑨ 高谷重夫『雨乞習俗の研究』（法政大学出版局 昭和57年）

## 第8章 結語

大伴遺跡は縄文時代から鎌倉時代までの遺構・遺物が検出された複合遺跡である。

調査地区を斜めに横切って東北方向に流れる河川跡 S D 4、S D 6 は、その出土遺物から少な  
くとも弥生時代中期にはここを流れていたと考えられるが、出土遺物の中に縄文時代の石器も含  
まれることから時代はさらにさかのぼる可能性もある。この河川に関しては C 地区の小結でも触  
れたように、現在南滋賀の正興寺と新在家の 2 集落の境を流れる大川の旧流路と考えられる。周  
辺の地形は S D 4～S D 6 を結ぶ延長方向にゆるやかな谷を形成しているのがうかがわれ、旧河  
川はこの現地形に現われている谷筋を流れていたものと考えられ、現在の大川は鎌倉初頭以後に  
は流路がほぼ現在位置に定まったものと考えられる。

このことは、福王子群集墳の 1 号墳、16 号墳は墳丘を大川に削り取られたような位置に立地し  
<sup>①</sup>ておらず、墳丘を川に削られるようなところに古墳を築造することは考え難いため、群集墳の嘗なま  
れた時代以後に川を群集墳内を切る形にかえたために生じたと考えられることからもうなづかれる。  
る。

この大川は遺跡の南側からほぼ東西方向に真直ぐ流下し、300mほど東流したあと向きを少し北  
に振り、滋賀里方面から流れてきた川と合流して際川となり、また東流している。このように、  
大川は人為的に流路が規制された様子がうかがわれるため、この点について少し考えてみたい。

挿図11に示した図は大津市発行の2500分の 1 の南滋賀周辺の地形図である。京阪電鉄石山坂本  
線より東方の水田には大津北郊一帯に認められる「条里遺構」があり、それが志賀小学校の東側  
から北行する南北道 (C C') までは連続していることが認められるが、それより西側は条里には  
あわない特殊な地割となっている<sup>②</sup>。この南滋賀廃寺を中心とする地域の地割をみてみると、廃寺  
の南限を示すとみられる東西の道 (B B') は東へ延長すると条里地割と一致する。また、A A' の  
東西行する道も際川に沿った条里地割と一致しており、A A' と B B' の間に、ある地割があって、  
その距離は条里の 3 町分に相当することがわかる。この距離は約 310m を測る。次に、南北線につ  
いてはその目安として南滋賀廃寺の中軸線、榎木原遺跡の調査で検出された廃寺の西限を示す築  
地堀 (D D')、先述の南北行する道路 (C C') などがあって、南滋賀廃寺の中軸線と築地堀の西



插図11 南滋賀廢寺周辺の地割と河道

側に沿って走る溝の中心線との距離は125.9mを測るが<sup>③</sup>、築地塀との距離は約124mと推定される。D D' と C C' の距離は約310mで、A A' と B B' の距離と等しい値を示している。また、中軸線と D D' の距離を1とすれば、中軸線と C C' との距離は1.5の比率を示す。これは、C C' と D D' の東西間を5等分して3:2の位置に中軸線が置かれていることを表わしている。C C' と D D' の距離310mを5等分すると62mの距離を得る。同様にこの距離で南北線を割り、東西に線を入れると、E E' の東西の道はほぼこの5等分した線上にのることが判明した。

このようにみると、南北行する道C C' より西の南滋賀廃寺を中心とした地域はA A' 、B B' 、C C' 、D D' の線またはその延長線に、方310mの範囲にかこまれた地割が想定される。この地割は南滋賀廃寺に規制されたものと考えられ、あるいは南滋賀廃寺の寺域を示すものかも知れない。南滋賀廃寺は白鳳期の大津宮時代頃の創建で、平安時代末頃まで存在したものと考えられているが、こうした地割は創建当初にさかのぼる可能性がある。

E E' の東西行の道に沿って流れる現大川の設定時期はどうとらえられるだろうか。

大伴遺跡地を流れる河川は鎌倉時代初頭に廃絶しているため、この時期に流路を現大川に変更したと考えるのが最も自然ではある。しかし、遺跡地のA地区の西側の旧河道と考えられる地とその南側の現大川の河床面の高低差は約6mを測り、それ以後そうとう激しい浸食のあったことがうかがわれる。このことは、まだ旧河川が東北行していた時にE E' に沿って分水工事が行われ、この周辺が花崗岩のバイラン土層という水におかされやすい地盤であるため、次第に新しい流路の河床が低下し、旧流路への水の流入が止まってそれが廃される要因となったということも可能性として考慮する必要はある。

東北方に流れる旧大川の流路を考えると、もし、この地割に沿った流路設定を必要とするならばこの地割の北辺に当るA A' に沿う位置に設けるのが自然で、ここより位置的にも高いE E' に沿う位置に設定するのはいかにも不自然で、現大川の設定は南滋賀廃寺の創建時ではないと思われる。したがって、大川の現在地への設定は大津宮時代以降、鎌倉時代初頭以前という時期が考えられる。後述するように、12~13世紀の土塙墓や寺院関係の土塙などは現大川の北側の大伴遺跡では検出されず、その南側で認められることなどから、南滋賀廃寺創建当初の地割規制がある程度緩和され、寺域の縮小された時期あるいは地割規制のなくなった時期に元からあった地割を利用した形に現大川が造られたと考える方が妥当かと思われる。

さらにいえば、この南滋賀の集落は古くはこの大川を境にして北が新在家村、南が正興寺村で、新在家村の氏神として大伴神社があり、正興寺村の氏神として福王子神社が祀られており、現在もこの関係は続いている。また、新在家村の人々の檀那寺としては念佛寺が、正興寺村のそれは

正興寺がそれぞれあって、この大川がこの2つの集落の起源・存続と深くかかわっていることがうかがわれる。このため、大伴神社や福王子神社、念仏寺、正興寺などの起源がわかればある程度その時期も限定されるかも知れない。

大伴神社は享保19年（1734）に作られた『近江輿地志略』によると、「祭る所大伴黒主の靈なり」とあり、補注に天暦元年（947）創祀とあるがその出典は明示されていない。大伴黒主は園城寺の神職で、志賀郡の大領となり従八位上に叙せられた人物で、貞觀年中（859～876）、園城寺を延暦寺の別院とした時その神祠の別当となっている。また、平安時代前期の六歌仙の一人で、仁和・昌泰の大嘗会には風俗歌を献じ、延喜年間に宇多法皇が石山寺御幸の際、国司に代って秀歌を献じ御感に預かったなどの逸話がある。<sup>④</sup>

福王子神社は『近江輿地志略』によれば、紀貫之を祀るとあり、承応6年に再興されたとされる。補注には天慶9年（946）に創祀されたとあるが出典は記されていない。貫之は三十六歌仙の一人で「古今和歌集」の撰進に当り、「土佐日記」「新撰和歌集」を著わして著名である。朱雀8年（930）には土佐守、天慶3年（940）には玄蕃頭、同6年には従五位上、同8年には木工権頭となり、同9年（946）に没している。<sup>⑤</sup>

念仏寺、正興寺については『近江輿地志略』の補注によると、念仏寺は「大宝2年（702）善隆開く」とあり、正興寺は「康平5年（1062）円教開く」とあるが、その真偽については詳らかでない。ただ、正興寺については葛川明王院文書から、明徳4年（1393）には存在していたことは確かである。<sup>⑥</sup>

ともあれ、大伴遺跡の性格はこの旧流路を中心に考える必要がある。

河川を除く遺構の中で最も古いものは、A地区のSB1、C地区のSB2・SK130、B地区とD地区にまたがるSK129、D地区の弥生時代住居群および土塙群であり、河川をはさんで、ほぼ同時代の遺構群が存在していることになる。しかし、遺構の分布の状態および出土遺物から、河川の西側のB・D地区の遺構は後述するように祭祀的な色彩を強く帶びているのに対し、東側にあたるA・C地区の遺構群は、まだ東側に広がると思われ、通常生活跡としての性格を帶びていることが指摘できる。前山の山裾に当るB・D地区は河川東岸の住民の祭場としての役割を持ち、B・D地区において検出された遺構群は、ここで行なわれた祭祀に伴う施設であると考えられる。

古墳時代中期の遺構は検出されなかったが、河川は存在していたと考えられる。6世紀後半にいたり、福王子17号墳とその北側に土塙墓群が営まれる。

福王子17号墳は、小結で触れたように、現地形から判断するならば、大伴群集墳の一部としてらえられるべきものであるが、大川がSD4・SD6を流れていたと考えられるため、福王子

群集墳の一部としてとらえられ、A地区に存在する土塙墓群および榎木原遺跡で検出された土塙墓SK1～5をも含めた墓域の中の一部と考えられる。この中でも古墳時代の土塙は、A地区河川の岸の一群と榎木原遺跡SK1・2があり、ほぼこの墓域全体にわたって分布していることがかがわれるが、榎木原遺跡で検出された12～13世紀にかけての土塙墓（SK3～5）と同時期の土塙墓は、大伴遺跡では検出することができなかった。したがって、古墳時代後期には大伴遺跡A地区まで広がっていた墓域は、以後、縮小化する傾向を示していることが指摘できる。この墓域の縮小化と旧河川のつけ換えとは無関係ではない。すなわち、旧河川によって画されていた墓域の北辺が、つけ換えられた河川、すなわち大川によって画された結果、南側に墓域が縮小したと考えられるのである。

さて、大伴遺跡で時期の判明した土塙は29基である。弥生時代の土塙は、中期（第III様式～第IV様式）のもの3基、後期のもの4基である。古墳時代のものは、6世紀中頃のもの1基、6世紀後半のもの8基、7世紀中頃のもの1基、明確な年代決定要素を欠くが、一応古墳時代後期とみられるもの3基があり、奈良時代の土塙は2基、平安時代の土塙は3基そして鎌倉時代の土塙は2基、南北朝頃の土塙は1基、江戸時代の土塙は1基確認されている。

この中で、土塙墓といえるものはA地区的SK1、SK112、SK113、SK128の4基である。SK1は合せ口甕棺墓であり、他はいずれも楕円形を呈し、礫が含まれる。SK128には焼けた礫が一部含まれているが、いずれも土師器甕が出土していて甕棺墓的要素をもっている。いずれも6世紀後半のものである。

これまでの事例ではこの時期の甕棺墓や土塙墓は集落内で検出される例が多く、横穴式石室墳と同一墓域に営まれる例はあまりない。この大伴遺跡では横穴式石室と隣接して合せ口甕棺墓等がほぼ同時期に営まれており、被葬者に何らかの差のあったことを示している。また、これらに接してあるSK173は、その中央やや北寄りに焼けた支柱石を立て、その周辺には焼土が厚く堆積しており、集落に伴ういわゆる屋外炉に類似しているが、この土塙墓と同一時期のものであり、葬送に伴う何らかの施設と考えたい。

古墳時代後期において河川を境とした東南半部は墓域として利用されたが、河川より西側は後述するように依然として祭場として利用され続けている。

また、奈良時代の遺構はD地区においてわずかに認められるが、この時期も後述のように土馬を伴った祭祀的な場所に供せられたと考えられる。

次に旧河川より西側地域の住居跡群を中心とする遺構群の持つ性格について時代を追って考えてみたい。

表11 土 坂 計 測 表

地区	遺構 番号	形 状	大 き さ (cm)	深 さ (cm)	特 徴	土塙墓の 可能性	時 期
A 下	01	楕円形	82×68	53	合口甕棺墓	◎	6世紀後半
上	101	ほぼ正方形	168×152	22	土師皿(南北朝頃の特徴を有す)		14世紀
上	102	ほぼ正方形	106×86	22.5	陶邑編年IV-2・3の土器を出すが混入と考えられる。		
上	103	楕円形	101×83	31			
上	104	長楕円形	296×79	30			
上	105	ほぼ円形	97×93	19			平安
上	106	円形	65	10			平安
上	107	方形	90	13			
下	108	不整形	122×64	15	SK109の土器と同一個体になるものあり。		6世紀後半
下	109	変形隅丸方形	215×205	19	底面に、まばらに礫あり。		6世紀後半
上	110	ほぼ方形	55×47	10			
上	111	変形隅丸方形	78×70	14			
下	112	楕円形	170×94	28	土塙墓の可能性あり。底面に礫あり。	○	6世紀後半
下	113	楕円形	136×88	10(25)	中央が楕円形に窪む。土塙墓の可能性あり。底面に礫あり。	○	6世紀後半
下	114	ほぼ円形	47×43	12			
下	115	楕円形	68×49	7			
下	116	円形か?	100以上	15	北側がSD12とSK117に切られている。	△	7世紀中頃
下	117	円形	120	5	北側をSD12に切られる。	△	平安
下	118	隅丸台形	56×38	13			古墳
下	119	楕円形	154×80	13			
下	120	長楕円形	197×89	9			
下	121	ほぼ長方形	127×55	12			
下	122	楕円形	93×70	43			
下	123	楕円形	86×64	23			
下	124	菱形	92×58	24			
下	125	不整形	950×460	20	6世紀の提瓶(ほぼ完形)と陶邑II-5の杯身出土。		6世紀中頃
下	126	不整五角形	300×213	27	北東隅にL字状の段をもつ。陶邑II-4の杯身出土。		6世紀後半~末

地区	遺構番号	形 状	大きさ(cm)	深さ(cm)	特 徴	土塙墓の可能性	時 期
A 下	127	楕円形	141×50以上	19	西半分を切られている。	○	6世紀後半
下	128	楕円形	174×130	13	陶邑II-2~4の土器の他、縄文の甕出土。 底面に礫があり、その中に焼けた礫も含まれる。	○	6世紀後半
B・D	129	楕円形	1300×700以上	40	東半分は未掘。 弥生のIII~IV様式の土器出土。		弥 生
C	130	楕円形	374×241	58	III~IV様式。底面に礫あり。		弥 生
C	131	円 形	250	22			
D上	132	正 方 形	80×35以上	20	西半未掘。		
上	133	楕円形か?	200以上×110以上	37	西半未掘。		
上	134	楕円形	255×115	48	多くの段に分かれる。		
上	135	楕円形か?	200以上×200以上	54	南・東側未掘。		
上	136	楕円形	320×220	54			
上	137	楕円形か?	120以上×100	10			
上	138	円 形	128×104	31			
上	139	胴張り三角形	152×117	14			
上	140	楕円形	132×90	32			
上	141	円 形	95×72	35			
上	142	楕円形	94×46	23			
上	143	楕円形	340×154	41	8世紀第3四半期の須恵器壺出土。		8世紀後半
上	144	円 形	80	42			江 戸
上	145	楕円形	274×144	37	須恵器長頸壺及び土師器杯。弥生V様式も伴出。		8世紀中頃 ~後半
上	146	長 方 形	278×40	18	弥生後期の土器を出すが、混入と考えられる。		
上	147	ほぼ円形	60×50	30			古 墳
上	148	楕円形	130×90	30			
上	149	楕円形	82×65	22	古墳時代の土器も伴出。		鎌 倉
上	150	楕円形	156×120	25	古墳時代の土器も伴出。	△	鎌 倉
上	151	瓠 形	147×56	48			
中	152	不整合形	110×82	10			
中	153	長 方 形	255×140	29	底面に小礫あり、V様式。		弥 生

地区	遺構番号	形 状	大 き さ (cm)	深 さ (cm)	特 徴	土塙墓の可能性	時 期
中	154	楕円形	64× 50	20			
中	155	長方形	225× 97	23	V様式		弥 生
中	156	楕円形	68× 52	31			
中	157	楕円形	300×218	35	IV～V様式		弥 生
中	158	不整台形	215×210	30			
中	159	円 形	58× 52	16			
中	160	楕円形	222×102	53	III～IV様式		弥 生
中	161	不整円形	45	14(22)	中に段あり。V様式		弥 生
下	162	隅丸三角形	200×180	30	北隅にピットあり。		
下	163	不 整 形	230× 90	19	L字状にカーブ		
下	164	楕円形	120×100	28			
下	165	円 形	120	55	断面摺鉢形		
下	166	円 形	100	18	東半未掘。		
下	167	円形か?	290	56	東半未掘。 内に半円形の段3、ピット1あり。		
下	168	楕円形	130× 70	49			
下	169	楕円形	168×130	40			
下	170	円 形	98	17			
下	171	円 形	86	21			
下	172	円形か?	94	14	東半分SB13に切られる。		
A下	173	いちじく形	268×232	10	中央北寄りに支柱石と焼土がみられる。 SK112・113と一連のものか。		6世紀

※表中の印は、◎ 土塙墓 ○土塙墓の可能性大いにあり △土塙墓の可能性少しありを示す。

D地区からは、弥生時代中期（畿内第III様式併行期）～古墳時代（庄内式併行期）に相当する住居跡が11棟検出されている。これらの住居跡の間には併存関係は認められず、1棟ずつの住居跡が存在し続けてきた可能性が強い。また、SD6の西側のB地区、西北部のE地区においては住居跡の存在は認められず、D地区の一画にのみ1棟ずつの住居が建て続けられてきたということになり、通常の集落では考え難い状況を呈している。また、これらの住居跡群から出土した土器は、壺、高杯等のいわゆる供献土器の占める割合が高く、通常の生活跡としては若干異質で、祭祀的な性格をうかがわせるものがある。弥生時代の土塙は5基検出されているが、土器の出土傾向はここで検出された住居跡と共通し、供献土器の占める割合が高い。

古墳時代の遺構としては、6世紀代の土塙が2基検出されているが、この土塙と併行する住居跡は検出されておらず、土塙が単独で存在した可能性が高い。また、この土塙から出土した土器は、SK145から出土した器台433に代表されるように、やはり、祭祀的な色彩の強いことが指摘される。

奈良時代の遺構としては、土塙が2基検出されている。これに伴う住居については明確でないが、掘立柱建物SB107はこの時期の可能性はある。また、ここから出土した土器も、壺類をはじめとする供献土器の占める割合が高く、白鳳期から奈良時代にかけては明確な祭祀遺物である土馬を用いた祭祀が行われている。

鎌倉時代の遺構としては、土塙が2基検出されているが、遺物は少なく土塙の持つ性格は不明である。土塙に伴う住居跡等は検出されていない。

B地区からは、SD6につながるSD3およびSK129が検出されている。SK129からは祭祀的な色彩の強い装飾壺24が出土している。

このようにD地区における住居跡群を中心とする遺構群は、いずれも祭祀的な色彩がきわめて強く感じられるのである。この祭祀の対象としては、大伴遺跡の西方にある神奈備型の山容を呈する前山、もしくは、SD3～SD6の旧河川が考えられるが、土馬の出土等から考えると、旧河川に対する祭祀としての性格を持っていたものと考えられる。それでは旧河川と祭祀の関係についてみてみたい。

旧河川からの遺物の出土はC地区の堰跡よりも下流に集中しており、上流にあたるSD3からの出土はきわめて少ない。出土遺物は縄文時代のものから鎌倉時代のものまで、ほぼとぎれなくあり、器種は甕類の出土が少なく、杯、皿類の出土が主である。特に平安、鎌倉時代の遺物は皿類がほとんどであり、生活に伴う廃棄物であるとするならば、出土の予想される大甕・壺類の出土が認められないことが注意される。日常雑器に占める木器類のウェイトを考えたとしても不自

然な出土傾向であるといえる。

これらの出土傾向から類推されることは、やはり祭祀に伴う廃棄物としての性格であろう。遺物の集中して出土している堰より下流の部分は、D地区遺構群の存在する山裾部の真下にあたり、D地区での祭祀に用いられた器物を遺棄するとすれば、当然この遺物集中地付近に棄てられると考えられる。SD6の堆積状況を見ると、平安時代から鎌倉時代にかけては流れはあまりきつくなく、淀んだ流れであったことがうかがわれる。そのため、遺棄された大量の器物が流されずに大量に遺存したものであろうと考えられる。また、出土した土師皿類は、ほとんどが破片であり、完形品はきわめて少なく、祭祀終了後破壊し投棄したかのごとき様相を呈している。

以上のように、SD6もきわめて祭祀的な様相を示しており、D地区における祭祀と密接な関係にあって、その祭祀は河川を対象としたものであることが指摘できそうである。

ここでもう一度D地区の置かれた位置についてみてみたい。大伴遺跡は先にも触れた通り、大川の形成する扇状地の扇頂部にあたる部分に立地し、D地区はその最上部に位置しており、眼下に南滋賀、滋賀里の集落および農地さらにはびわ湖を望見することができる。この遺跡の中を旧河川は、福王子群集墳のある微高地と前山とにはさまれた谷から現大伴神社付近で流路を北東にとり、平野部へと流れ出していく。D地区はまさにこの川の谷頭にあたる所に立地しているといえる。この河川と祭場の関係は『延喜式 神名帳』に記載されている山口神社の位置関係と共通するものがある。山口神社は15社の名が記されているが、そのうち14社までが大和盆地に集中している。山口神社の大和における分布をみると、標高100m前後の山と平地の境の川の近くに位置しており、大伴遺跡旧河川と山地およびD地区との関係にきわめて類似している。山口神社は水神を祀る神社であり、旱りや霖雨に際しては朝廷から奉幣を受け、水神に祈願するための神社であった。このことは、大伴遺跡における旧河川と土馬との関係を考える上でもきわめて興味深い示唆を与えてくれそうである。

また、大伴神社には摂社として祀られているオタドサン（御多度）と呼ばれる多度明神を祀ったと思われる祠がある。大伴神社遷座の際に小祠の中を改めたところ、棟札状の神体が発見された。それには、

丹生大明神、天柱国、柱神、淡海国、百五十五座安鎮座 貴船大明神、祈雨詣神  
とあり、水神を祀り、雨乞いの時に祈願の対象となつた神であることがうかがわれ、水神を祀る伝統がこの小祠に受け継がれているものと考えられる。

次に大伴神社とD地区祭場との関係について考えてみたい。

大伴神社の創建は不明な点が多く、明らかにし難いが、平安時代から鎌倉時代にかけてと思わ

れる。この時期には旧河川はほぼ埋まり、その役目を終えていたと考えられる。そのため、弥生時代以来、連綿として続いてきた河川に対する祭場はその対象を失うことになったが、新たな祭祀の対象として大伴氏の祖先である大伴黒主を祀ることにより、新在家の人々の氏神としての性格を帯びるようになったものと考えられる。<sup>⑦</sup>このように祭場の主たる役割は水神への祭祀から、氏神への祭祀へと変化したが、水神に対する祈願の伝統は摂社へ受け継がれ、後世に多度明神という有名神の神格を勧請することにより受け継がれたものと考えられるが、現在では、その由来すらも不明確になりつつある。

次に問題になるのは祭祀施設の変遷についてである。一般に神を祀る建造物（神社）が成立するのは仏教伝来後のこととされているが<sup>⑧</sup>、それ以前の遺構においても屋内で祭祀を行なったと考えられる遺構は多く検出されている。日本人の神観念としては、神は1年のうち決まった時期に降臨し、去って行くものであり、神を祀る施設はその時のみに使用されるものであり、神の去った後は撤去されるべき性格のものであった。そのため、神を祀る施設が非固定的であることは、現在の神社建築や民俗例等に広く認められるところである。

しかし、水という常に一定性を持たないものを祀る場合、その祭祀を行う時に、規則性はなく、旱り、霖雨等の異常な事態に対してなされるものであったことが予想され、規則性のある行為の繰返しである農耕に伴う神を祀る場合とは、当然、異なる祭祀形態をとっていたものと考えられる。D地区における住居跡群が水を祀るための施設とするならば、長期にわたって1棟ずつの住居が存在していたという形態は、このような非常事態に常に対応することを可能にするためのものであったとはいえないか。

しかし、古墳時代前期に住居跡の伝統はとだえ、この時点において祭祀形態が変化した可能性が強い。

次に土馬の出土状況に関する問題に触れてみたい。小結で触れたように土馬は水に関係する祭祀物としてとらえられており、本遺跡出土の土馬も、旧河川に対しての祭祀もしくは祈雨に用いられたものと考えられるが、ここではその出土状況から土馬を用いた祭祀について触れてみたい。

大伴遺跡出土の土馬はD地区に集中しており、D地区における祭祀に用いられたものであることは疑いないが、1体として完形のものではなく、すべて破片となっての出土であった。しかも、頭部の破片は1点も出土していないことが特徴的である。壊れやすい構造であることを考慮しても不自然な出土状況といわなければならない。また、907にみられるように人為的に破壊したと思われる傷跡が認められることから、ここから出土した土馬は人為的に破壊した後にばらばらに遺棄した状況がうかがわれ、さらに頭部のみはどこかへ持ち去られるか、頭部に対してのみの特殊

な祭祀が存在したことが想像される。馬の頭部に対する特殊な処理の例としては、大阪府茨木市<sup>⑨</sup>郡で発見された馬首のみを葬ったとみられる土塙等の資料が報告され、その事例も増えつつある。<sup>⑩</sup>これらのことから、当遺跡出土土馬に伴う頭部は、調査地区外に持ち去られた後、何らかの処理が加えられた可能性が高い。

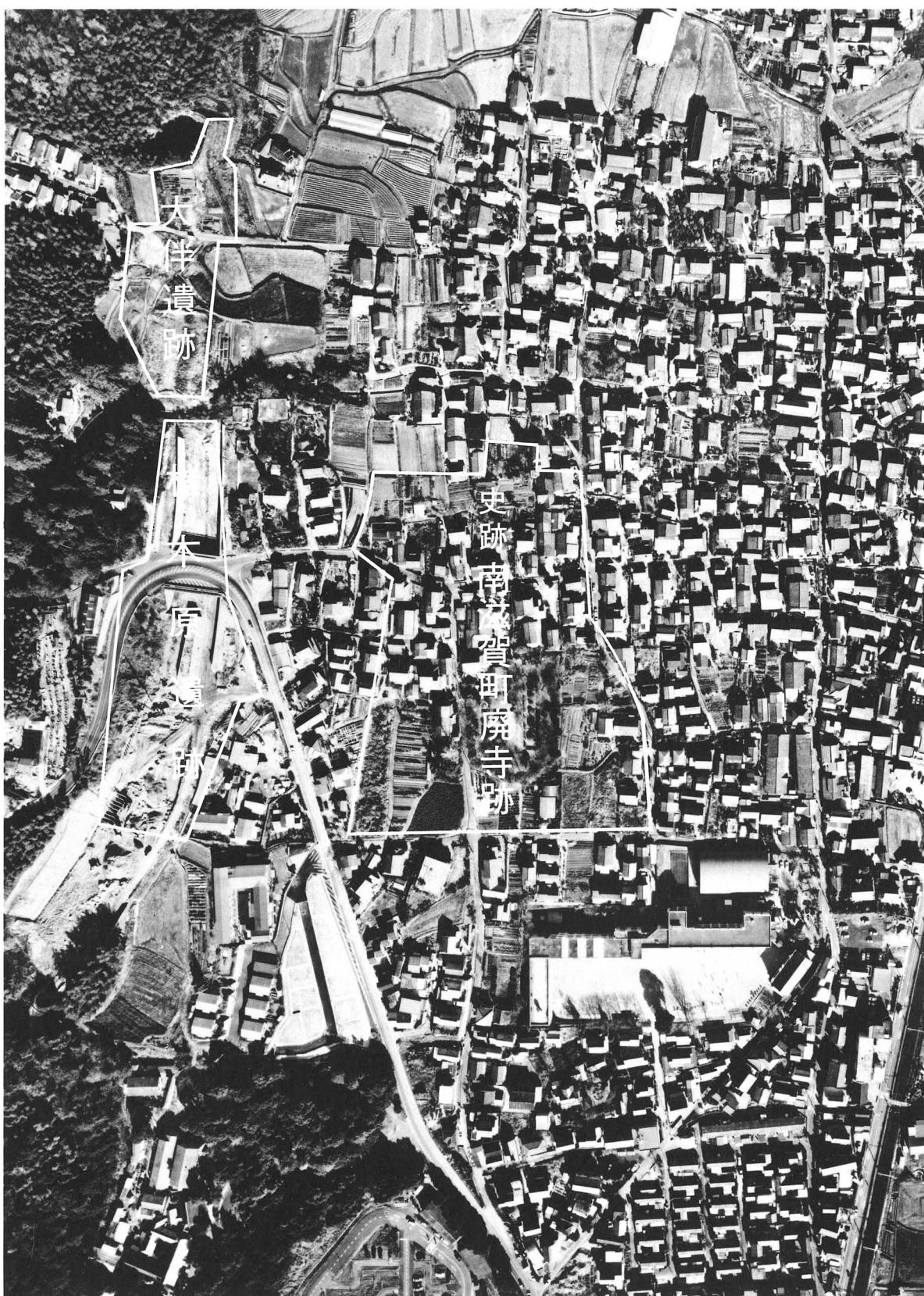
土馬は生馬の形代としての役割を果したものである<sup>⑪</sup>。土馬を人為的に破壊するということは、生馬を殺すという行為と同等の意味であり、供犠獸としての馬の存在を浮び上らせる。神を祀るために獸を用いることは、『古語拾遺』、『延喜式』等にも見え、ひとつの方法として定着していたことを示している。この祭祀の由来が、日本固有のものであるか、あるいは渡來的な要素をもつかについては種々の論考がなされているが、いまだ結論は出されていないようと思われる。ここで、大伴遺跡出土の土馬が生馬犠牲祭祀の残存形態であるとすれば、当遺跡近くにある渡來系の人々の墓地の可能性がうたわれる福王子群集墳や滋賀里百穴群集墳の存在などを考えると、土馬を用いた祭祀は渡來系の人々の手による祭祀とも考えられるかもしれない。

以上のように、D地区・C地区より検出された遺構は河川とそれにまつわる祭祀の存在を想像させるものがあった。しかし、その具体的な祭祀に関しては明確にし得なかった部分が大きい。今後の多方面からの研究の成果を待ちたい。

(林 博通・吉谷芳幸・三宅 弘)

## 註

- ① 林博通・葛野泰樹ほか『榎木原遺跡発掘調査報告III』(滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会昭和56年)
- ② 福尾猛市郎『大津市史』上巻 昭和16年
- ③ 註①、前掲書
- ④ 南波浩「大伴黒主」(『日本歴史大辞典』 河出書房 昭和45年)
- ⑤ 風巻景次郎「紀貫之」(『日本歴史大辞典』 河出書房 昭和45年)
- ⑥ 柴田実「大津京址(上)」(『滋賀県史蹟調査報告』第9冊 昭和15年)
- ⑦ 柳田神学では、多くの農耕にまつわる神格は、祖先神の神格と同一化しているとされる。このように考えればD地区の主たる祭神である「水神」と大伴氏の祖先である大伴黒主とが入れ換ることに関して大きな抵抗はなかったと考えられる。
- ⑧ 稲垣栄三『神社と靈廟』(小学館 昭和46年)
- ⑨ 水野正好「祭礼と儀礼」(『古代史発掘10・都とむらの暮し』 講談社 昭和49年)
- ⑩ 瀬川芳則「稻作農耕の社会と民俗」(『日本民俗文化大系3 稲と鉄』 小学館 昭和57年)
- ⑪ 梅川光隆『大藪遺跡発掘調査報告』(六勝寺研究会 昭和48年)  
ここでは、下層に馬の骨が、上層からは土馬が出土し、その祭祀形態の変化がうかがわれる。
- ⑫ 日本固有のものとするものには、佐伯有精「殺牛祭神と怨靈思想」(『日本古代の政治と社会』吉川弘文館 昭和45年)石田英一郎「新版河童駒引考」(『石田英一郎全集5』筑摩書房、昭和45年)等の論考がある。  
渡來的なものとするものには、肥後和男『日本古代伝承研究』(河出書房 昭和23年)、下出積与『日本古代の神祇と道教』(吉川弘文館 昭和47年)等の論考がある。  
『続日本紀』天平13年2月7日には、「詔曰。馬牛代人。勤労養人。因茲。先有明制。不許屠殺。」  
『続日本紀』延暦10年9月16日には、「斷伊勢、尾張、近江、美濃、若狭、越前、紀伊等国百姓。殺牛用祭漢神。」  
とあり、たびたび犠牲を伴う祭祀を禁じている。朝廷がこの祭祀を禁じ得たのはそれが固有の祭祀として定着してきたものではなく、新しい祭祀として民衆の間に急激に広まったため危機感を覚えたためであると考えられる。



大伴遺跡とその周辺



大伴遺跡遠望、前山を中心にして（東から）



調査前の状況（南から）



調査前の状況 (北から)

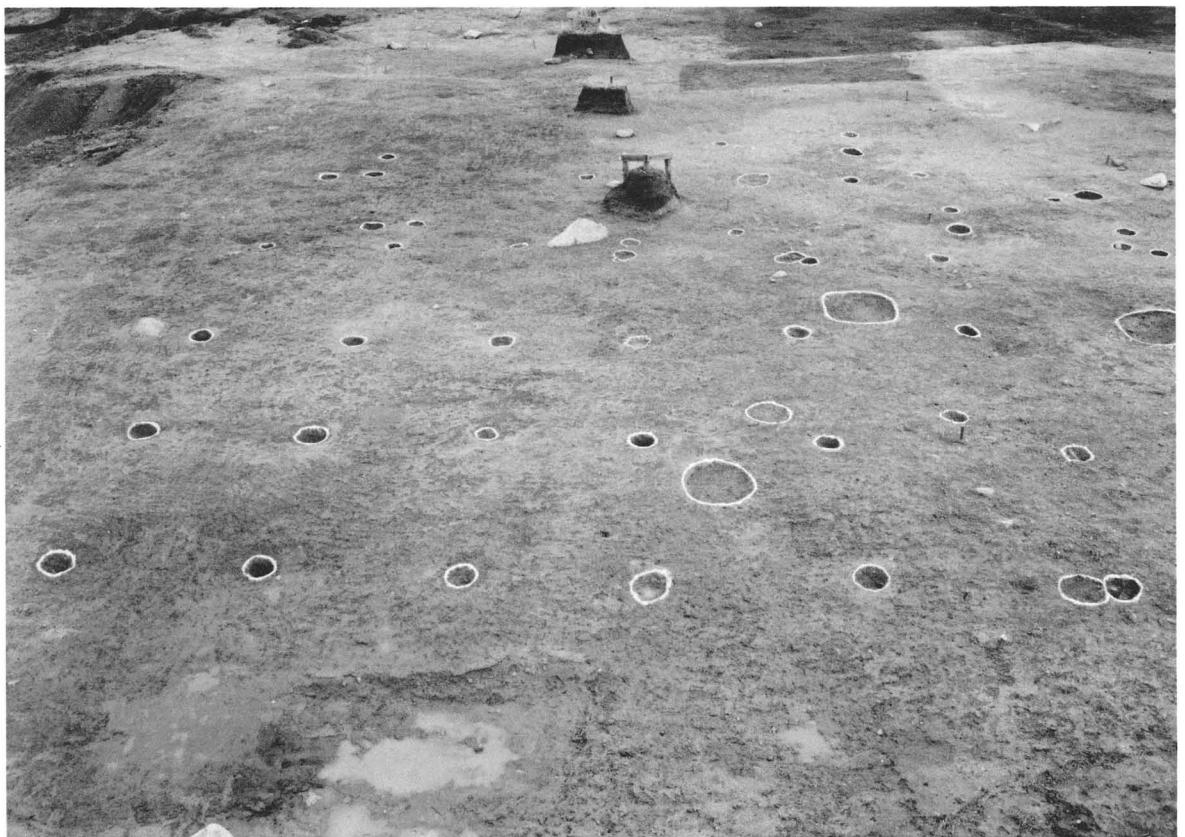


A地区 上層遺構 (西から)

図版  
四 遺構



A地区 上層遺構 (南から)



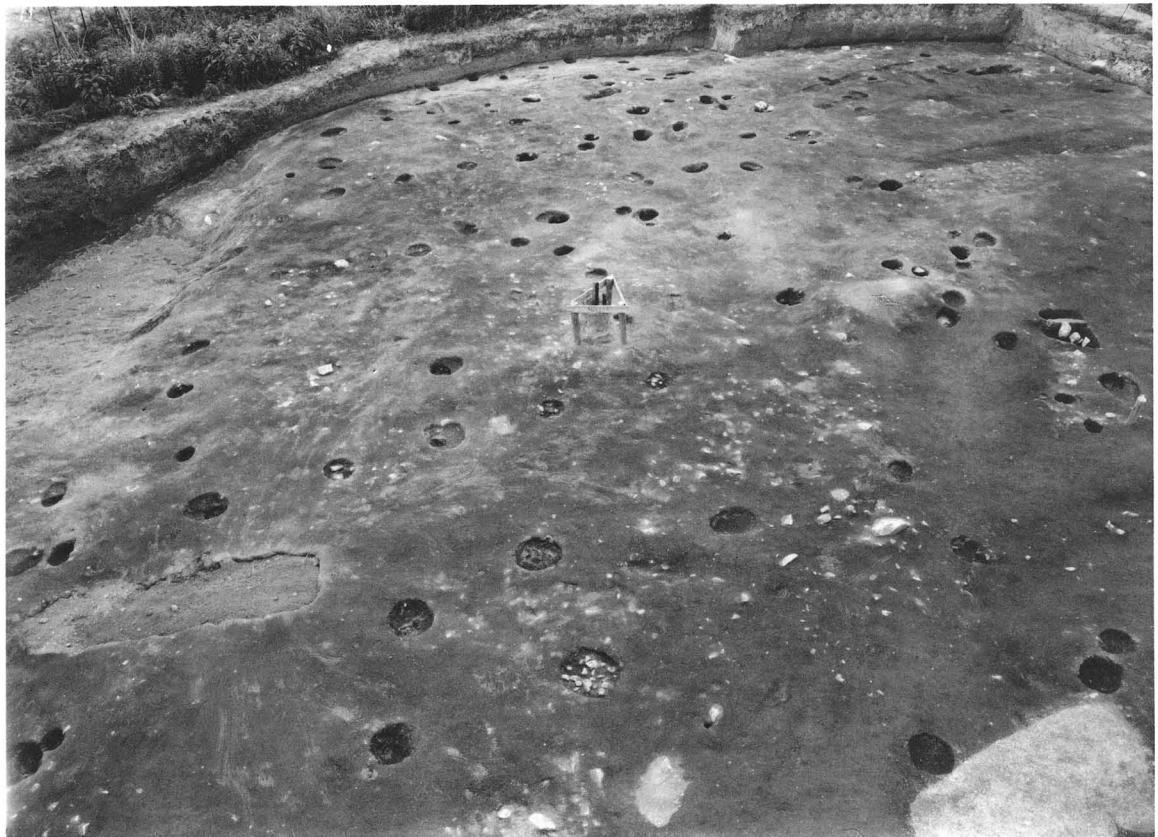
S B 1 0 2



A地区 下層遺構 (北西から)



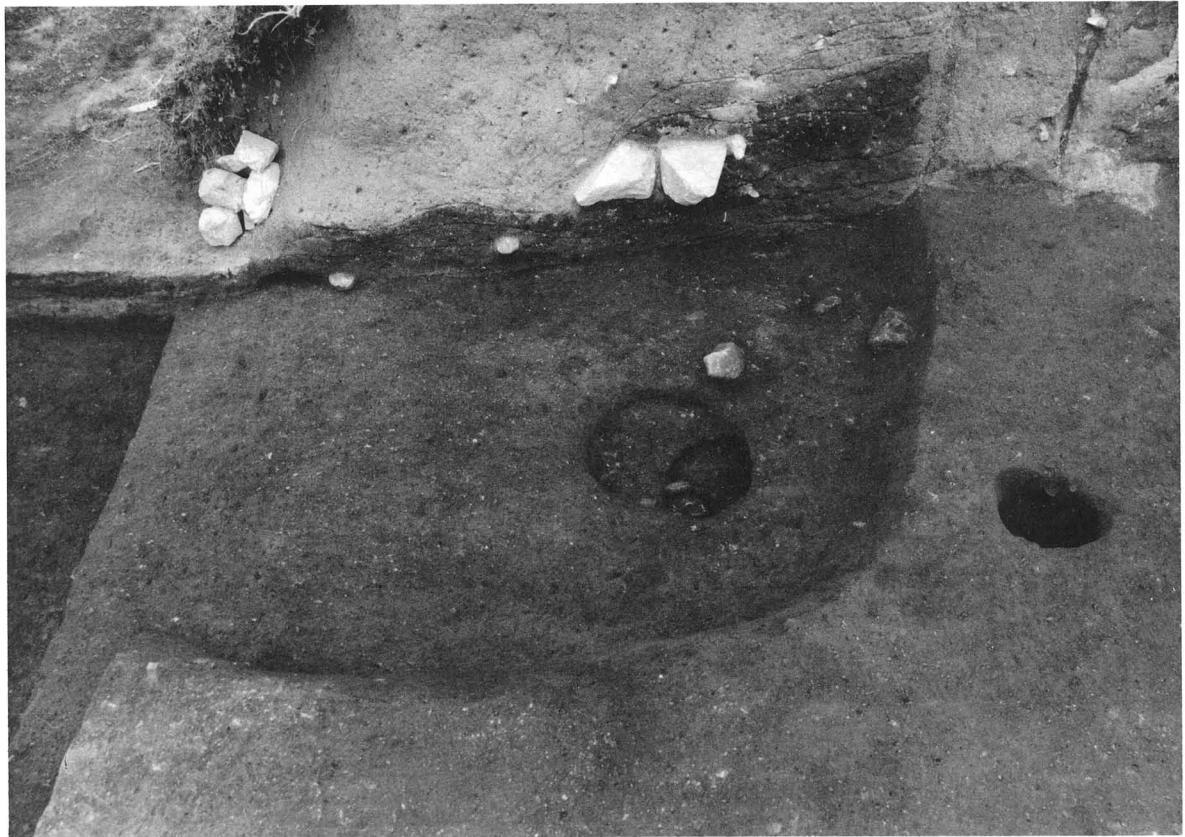
A地区 下層遺構 (南東から)



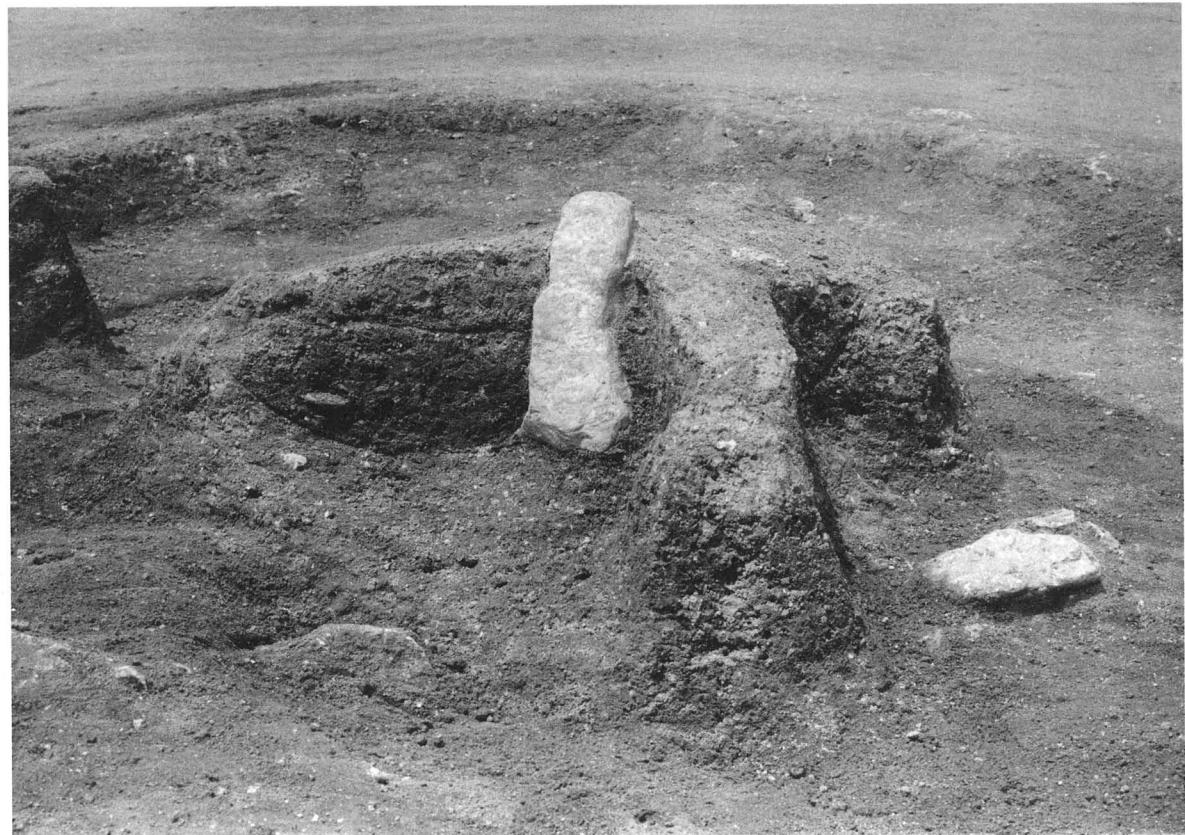
A地区 下層遺構 (北から)



A地区 下層遺構 (西から)



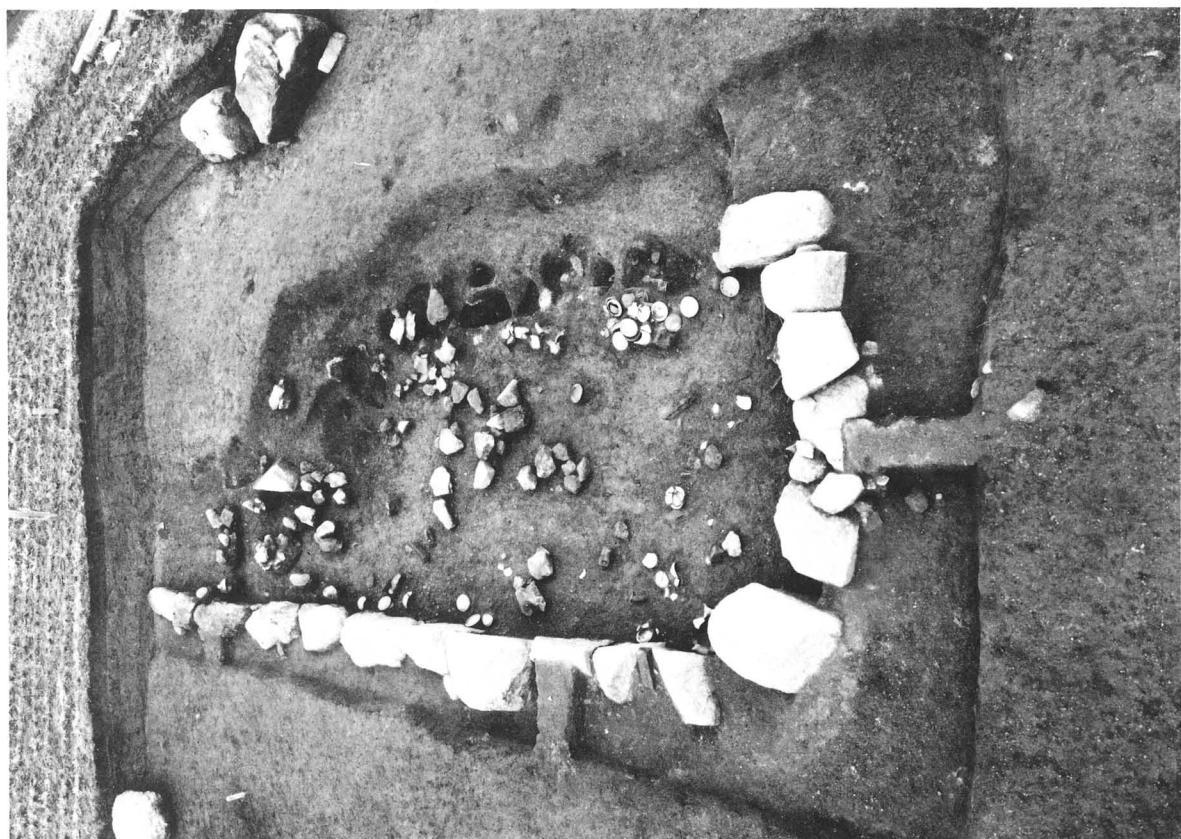
S B 1



SK 173 屋外炉断面



福王子17号墳 遺物出土状況（東から）



福王子17号墳 遺物出土状況（西から）



福王子17号墳 遺物出土状況（南から）



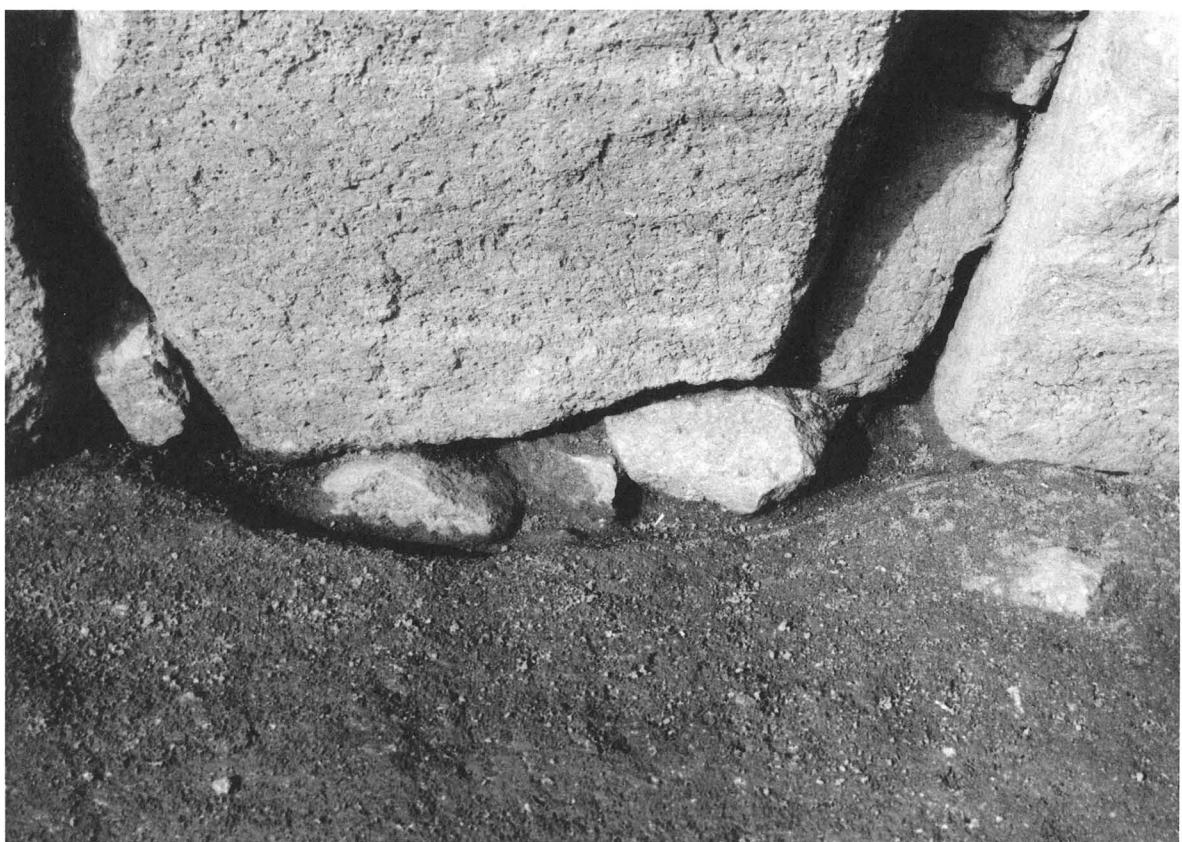
福王子17号墳 遺物出土状況（東から）



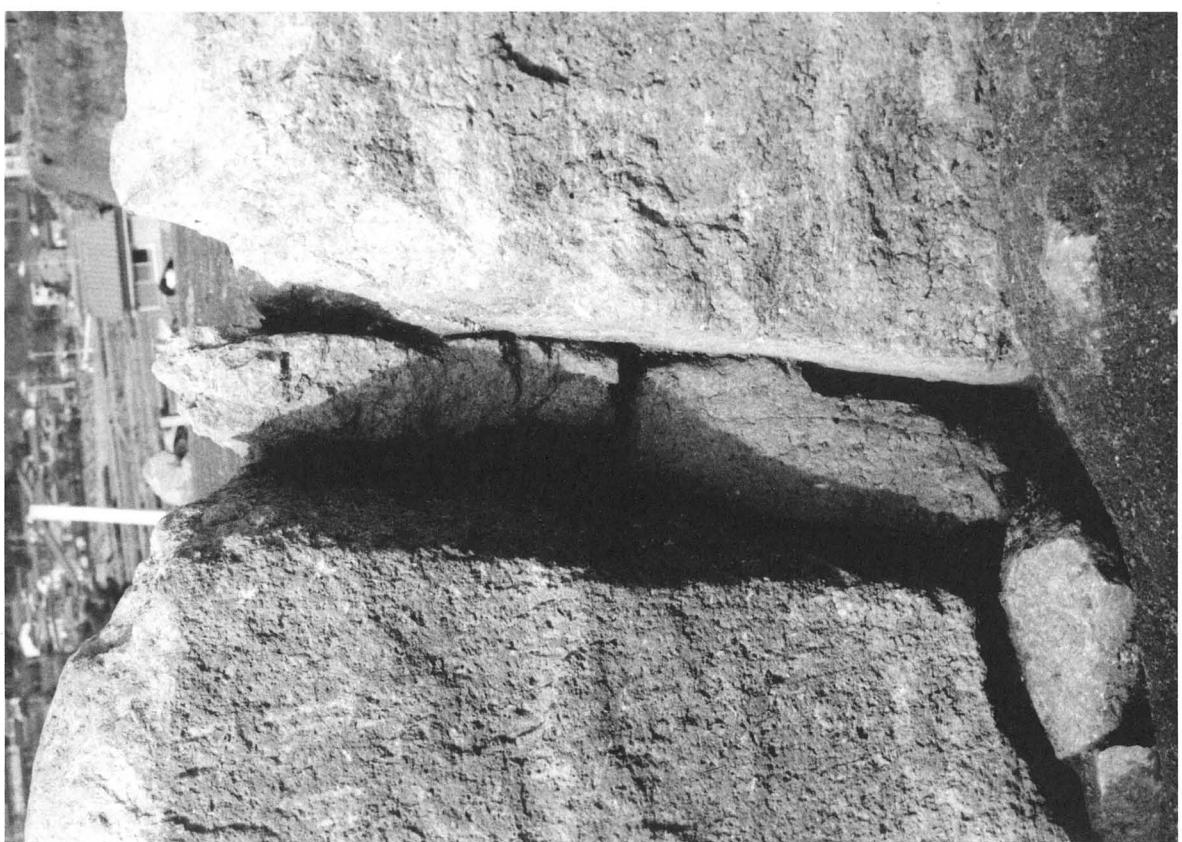
福王子17号墳 床面（東から）



福王子17号墳 床面および北側側壁（南から）



福王子17号墳 側壁 根石



福王子17号墳 側壁の構築状況



福王子17号墳 玄室 杯 出土状況



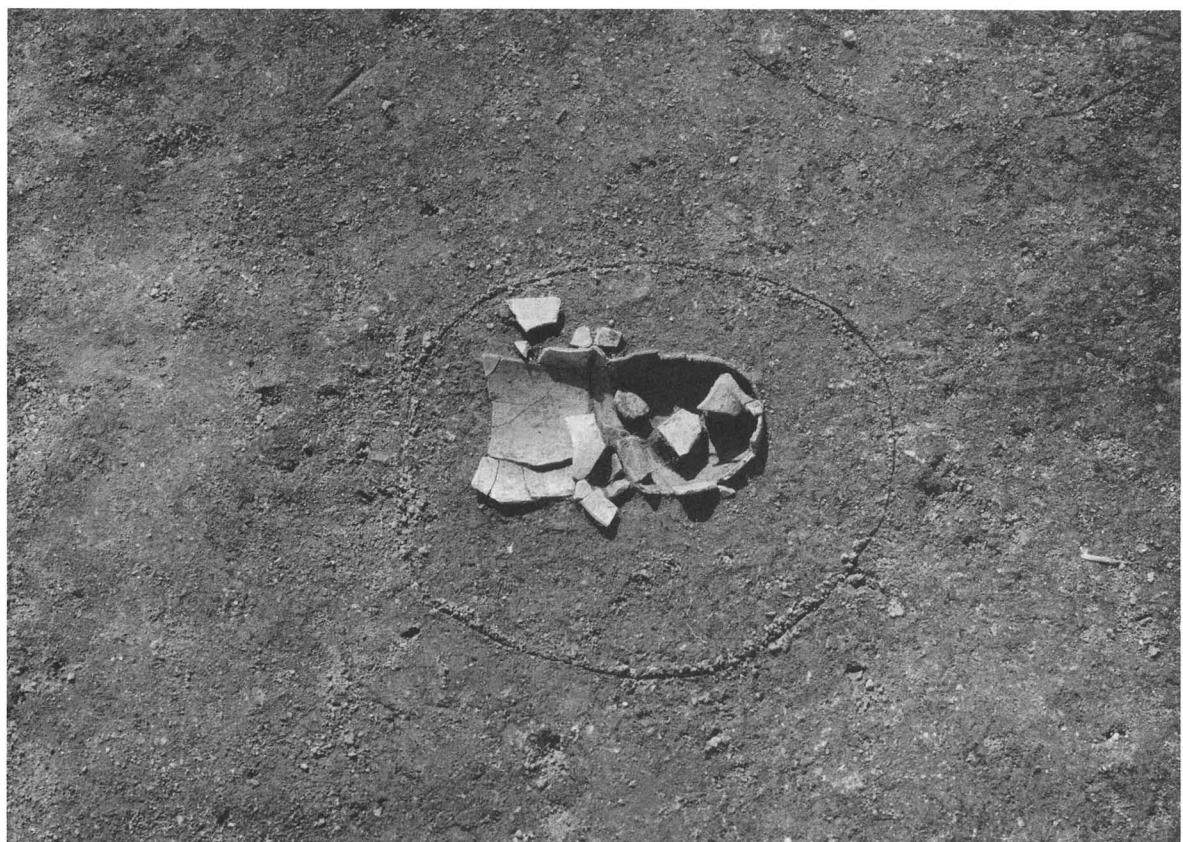
福王子17号墳 玄室 杯 出土状況



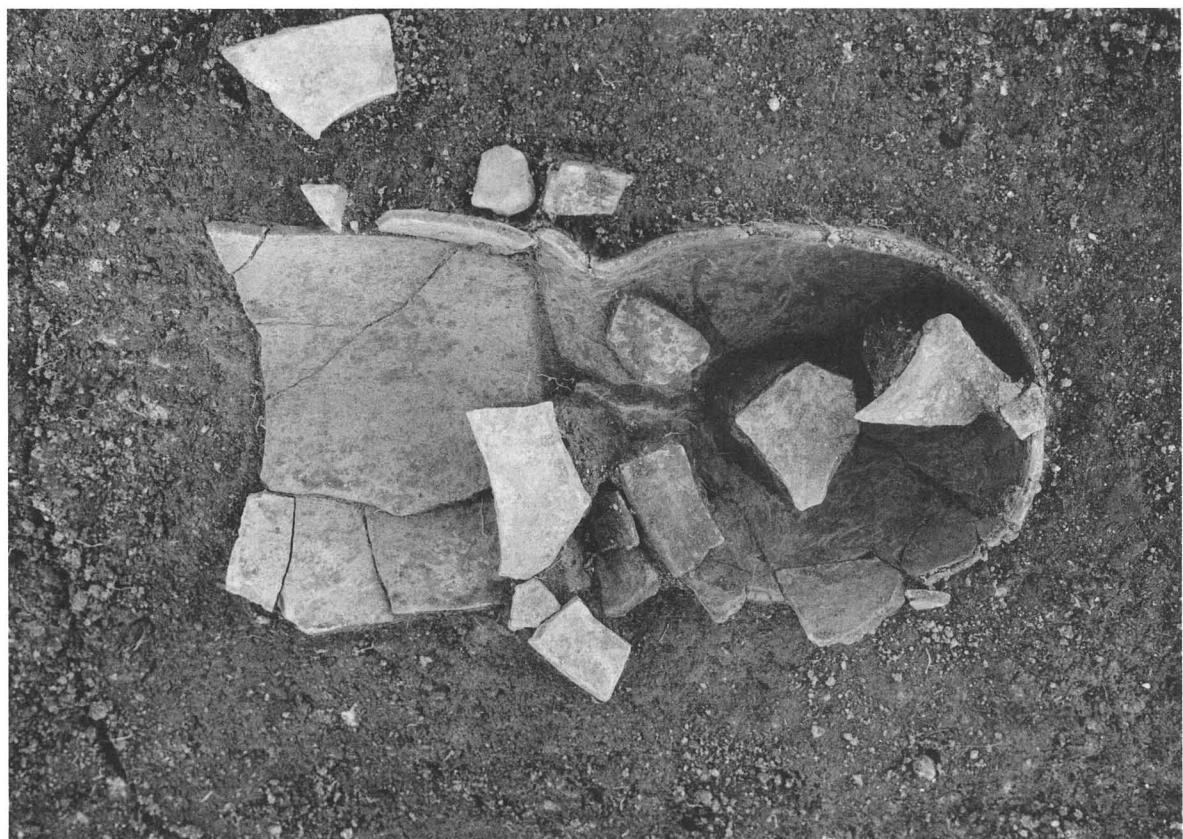
福王子17号墳 玄室 鉄器出土状況



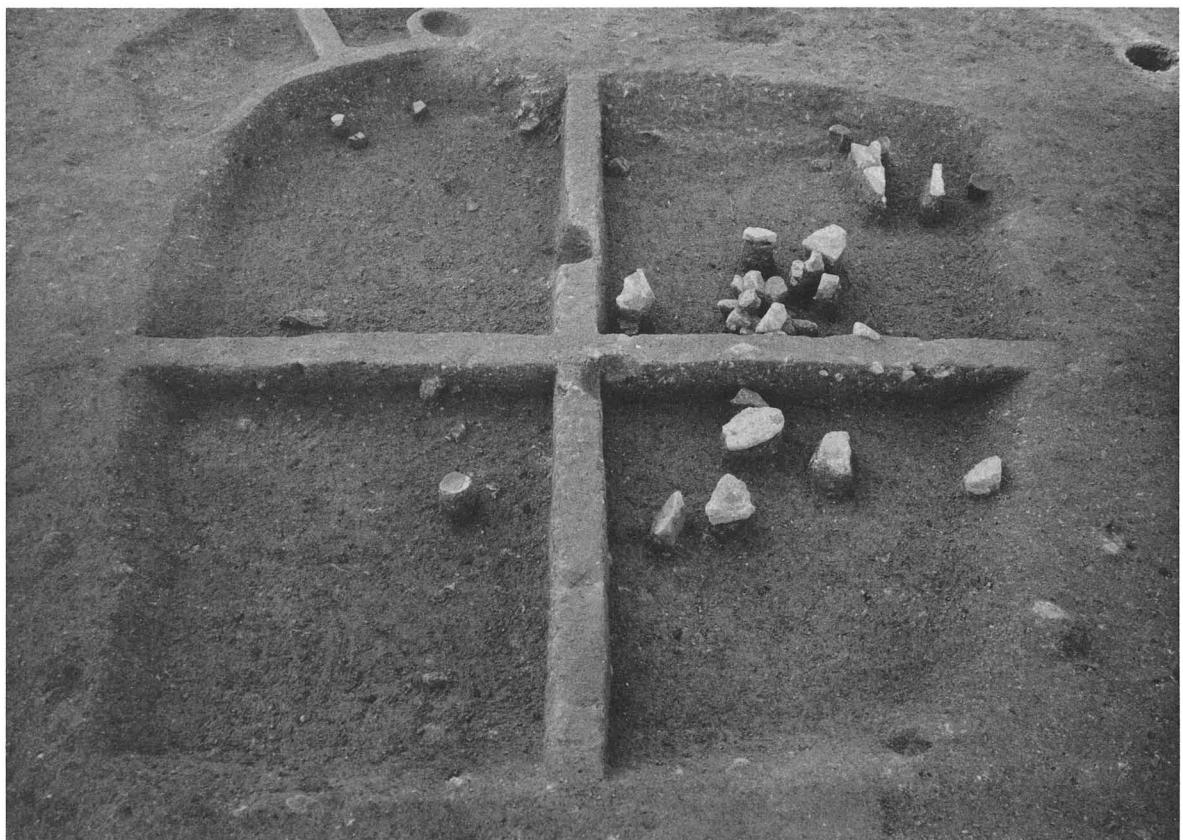
SK113・SK114



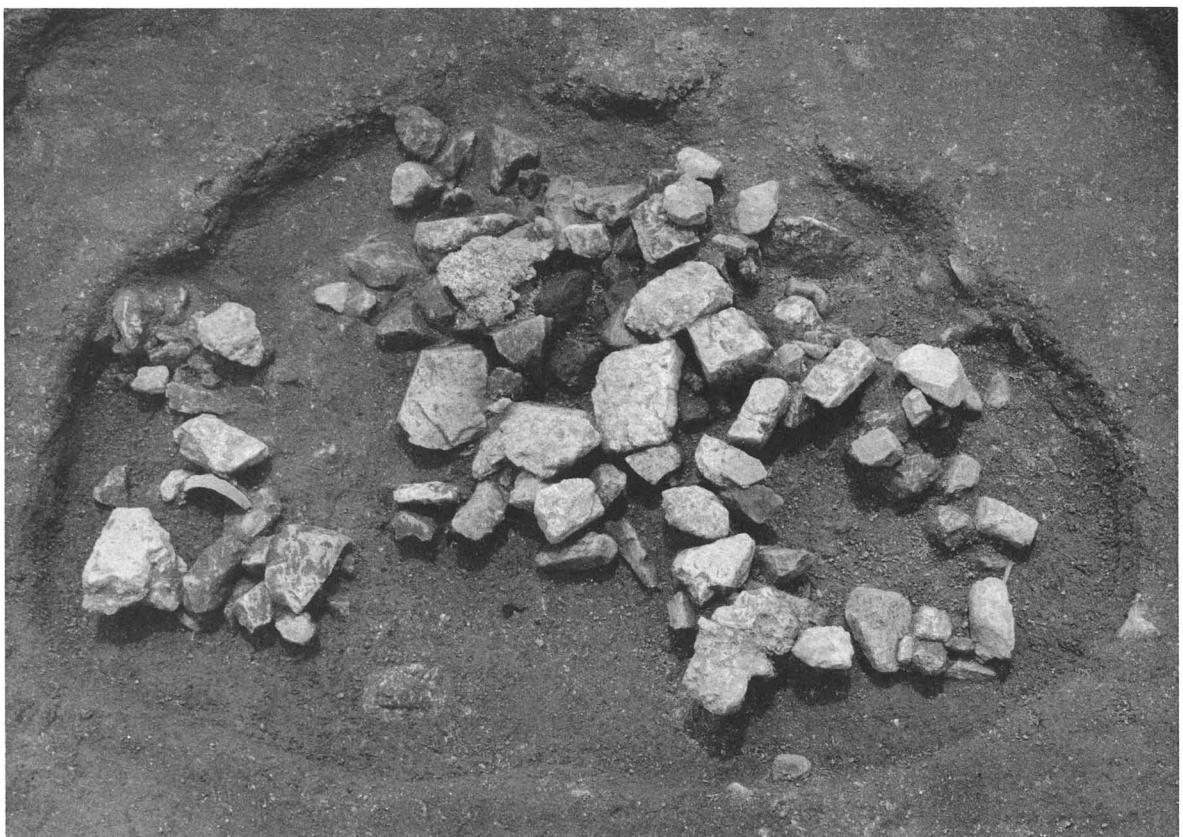
S K 1



S K 1



SK 109

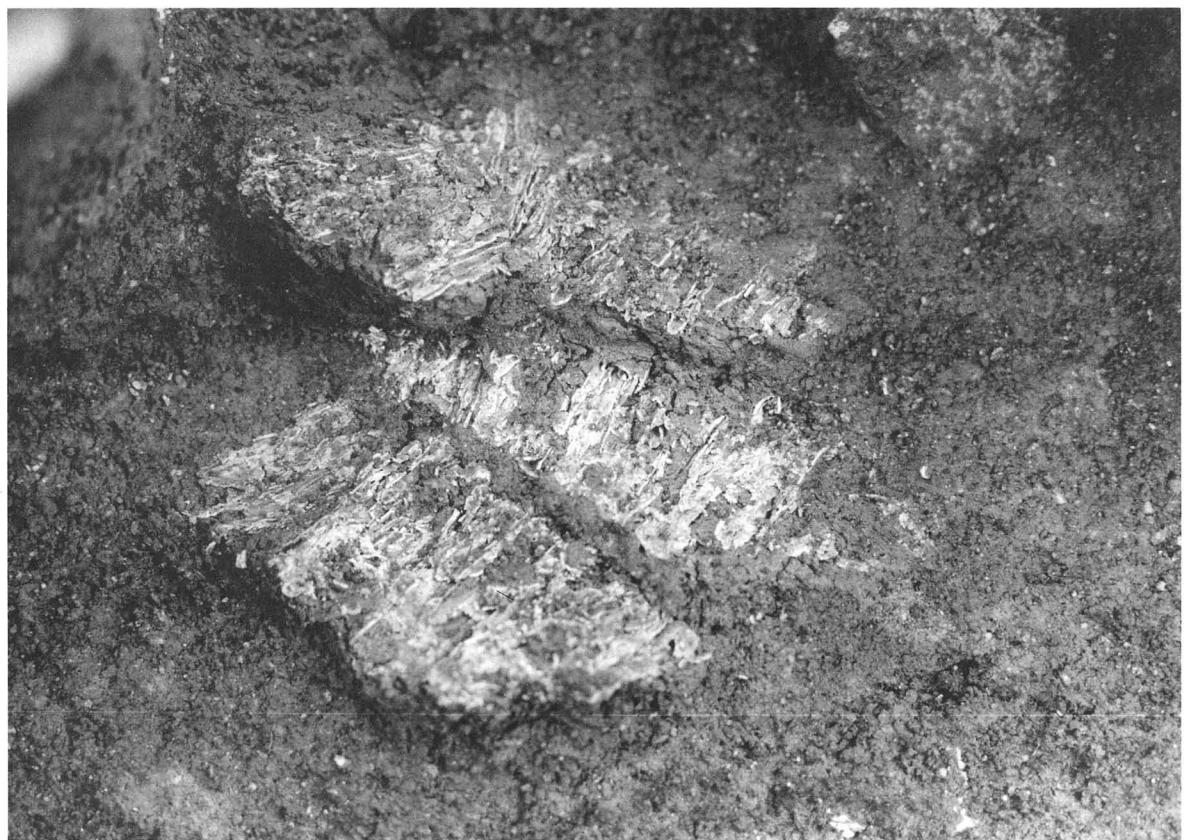


SK 128

図版一六 遺構



S K 112



S K 112 骨出土状況



C地区、SD 6上層・SD 7 (北西から)



C地区 (西から)



C地区 (東南から)



SD6・SD21 (北から)

図版一九 遺構



SD 6 堀・SD 21 (南から)



SD 6 堀 (西から)



S D 2 1 (西から)



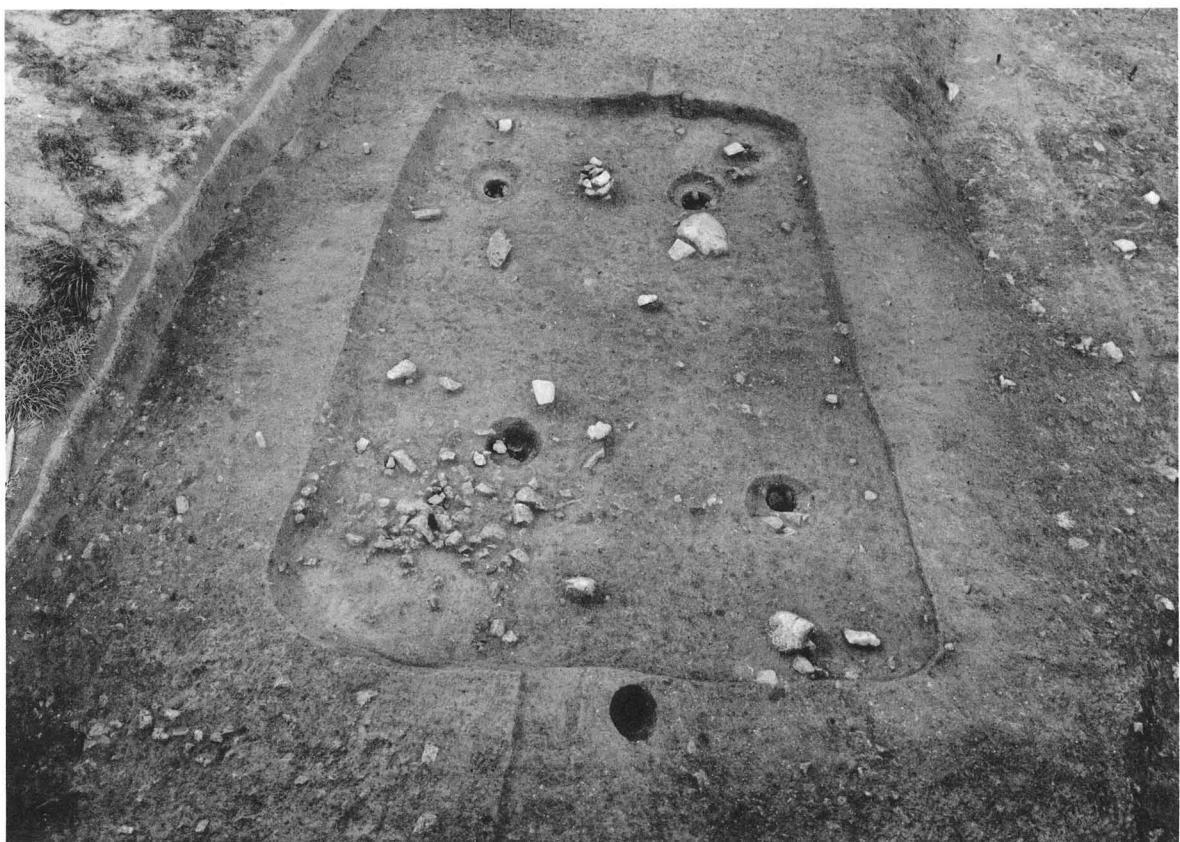
S D 2 1 (西から)



S D 2 1 (東から)



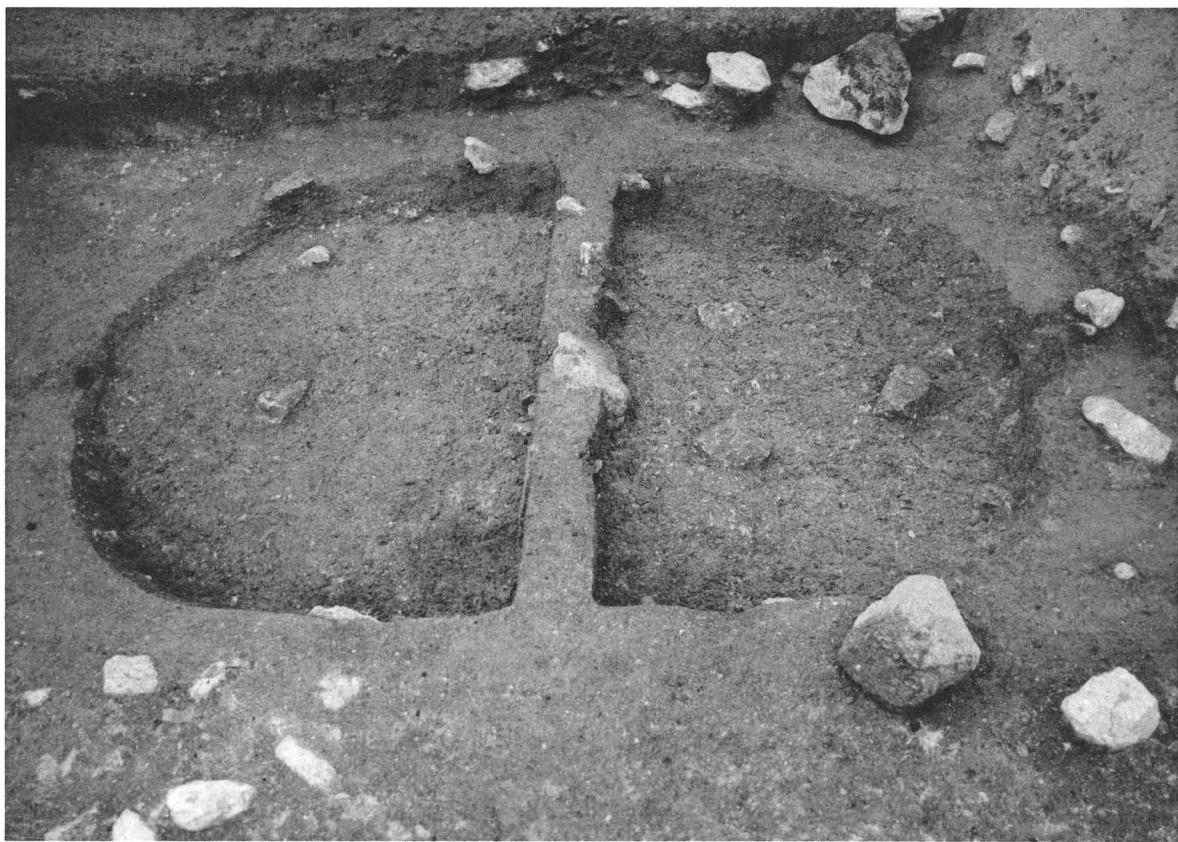
S B 2 (南から)



S B 2 (東から)



S K 130 土器、石 出土状況



SK130 土器、石をとり除いた状況

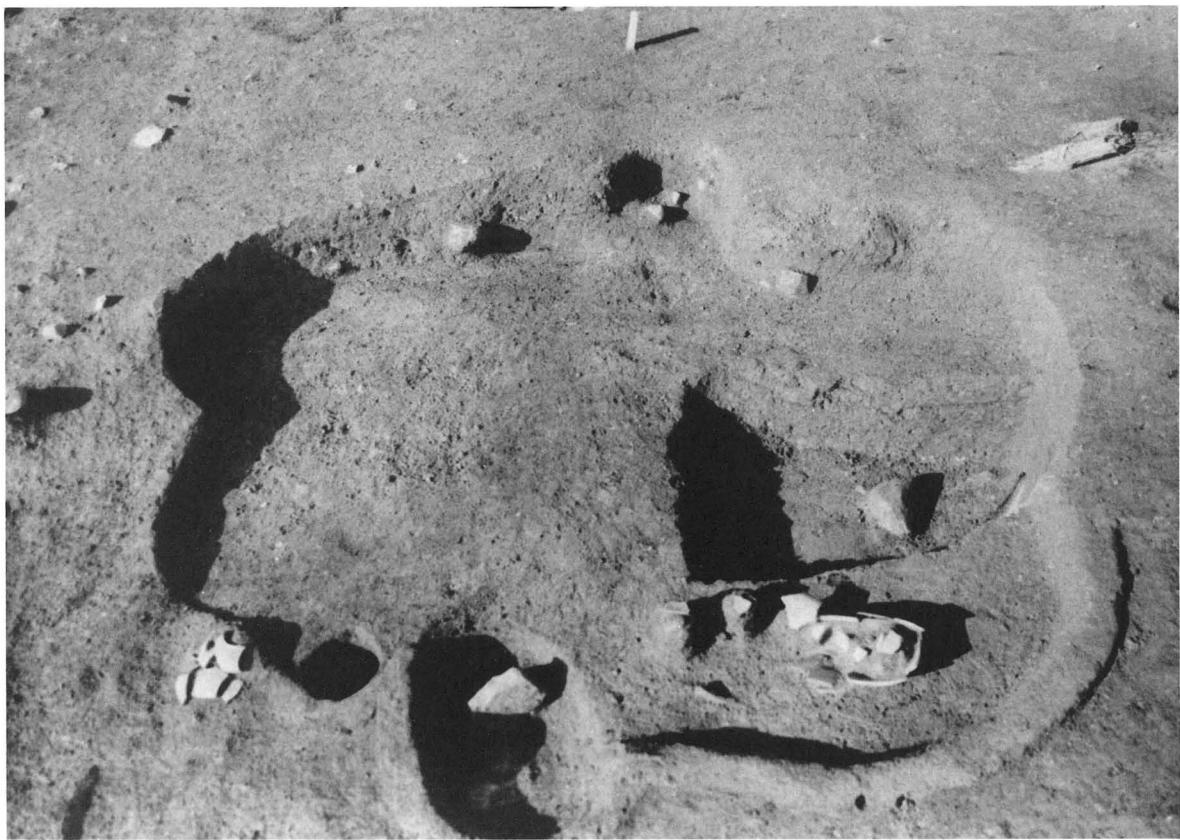


D地区 上層遺構 (東北から)

図版二四 遺構



D地区 上層遺構 (南から)



SK145・SK146



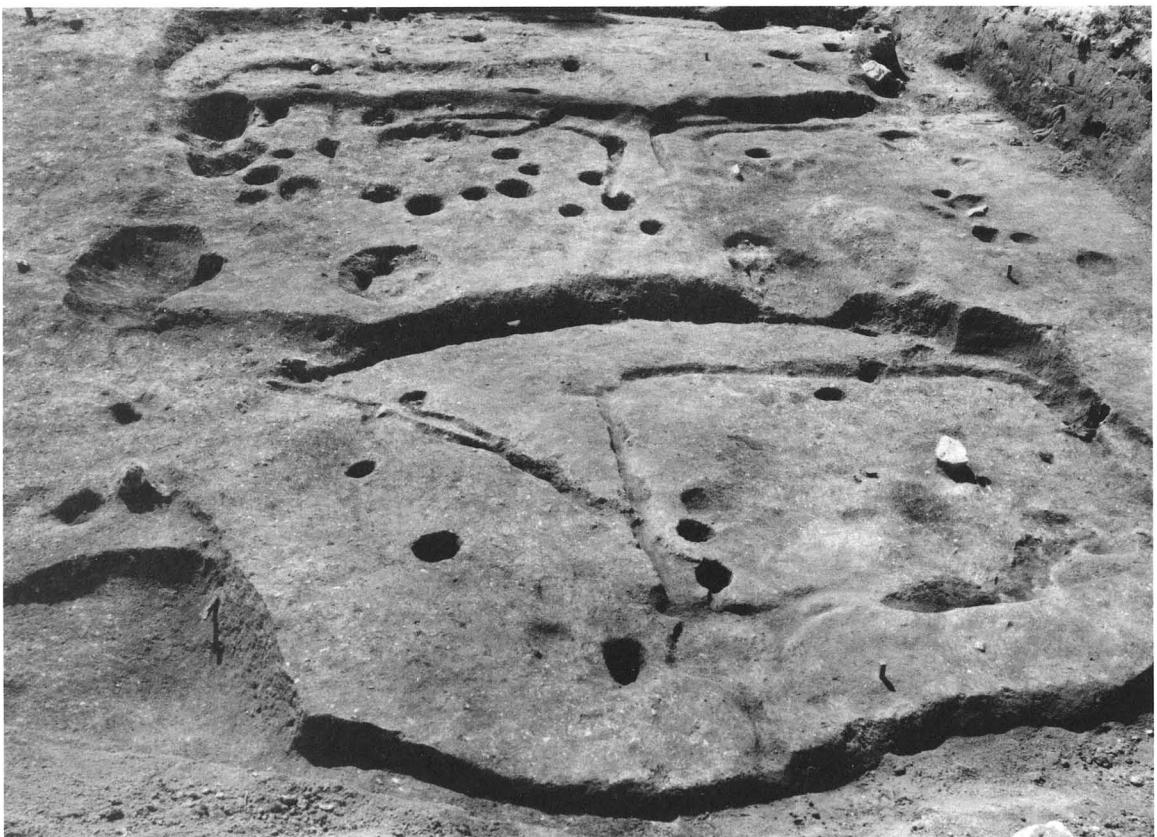
D地区 中層遺構 (東から)



D地区 中層遺構 (東から)



D地区 中層遺構 (北から)



D地区 下層遺構 (東から)



D地区 下層遺構 (北から)



S K 157

図版二八  
遺構



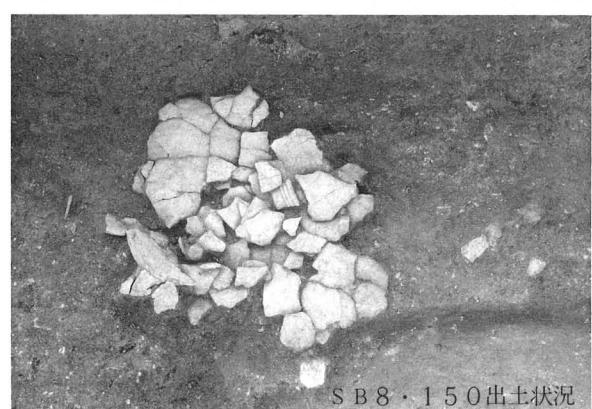
S B 4 遺物出土状況



S B 9・15.5 出土状況



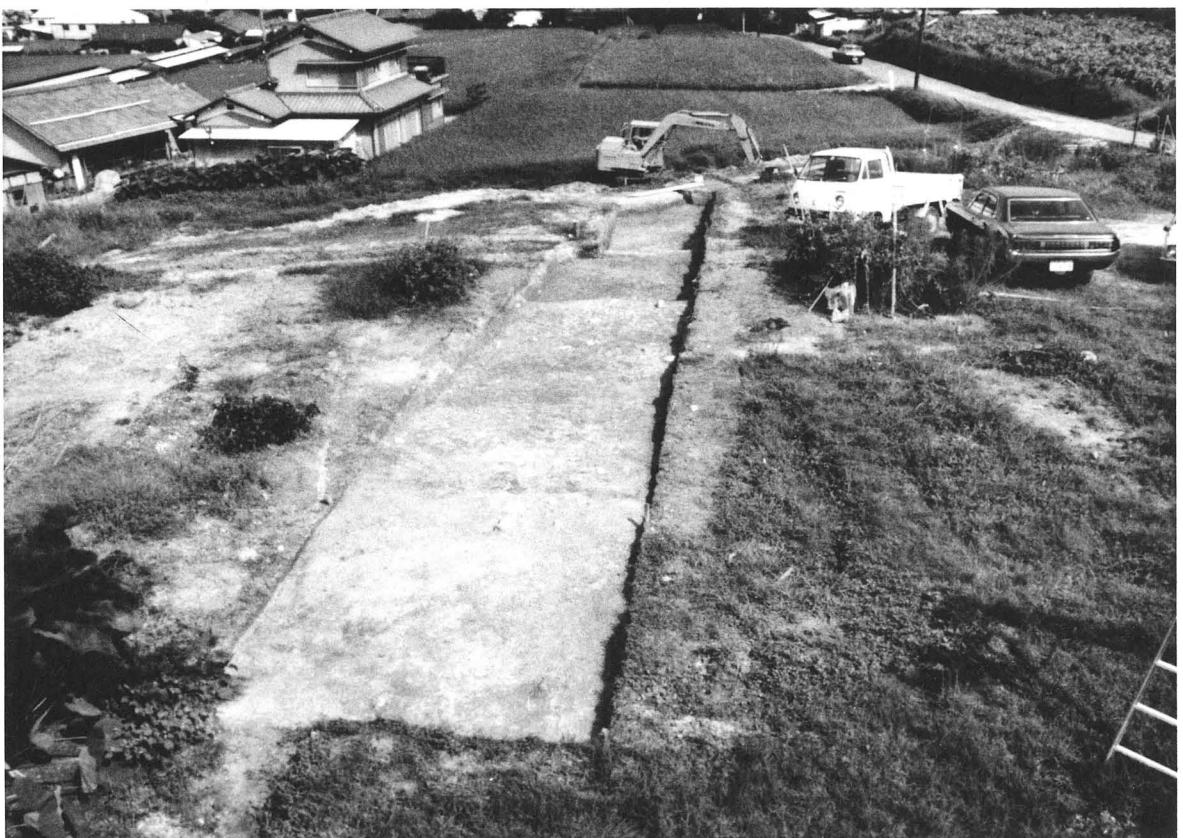
S B 4 遺物出土状況



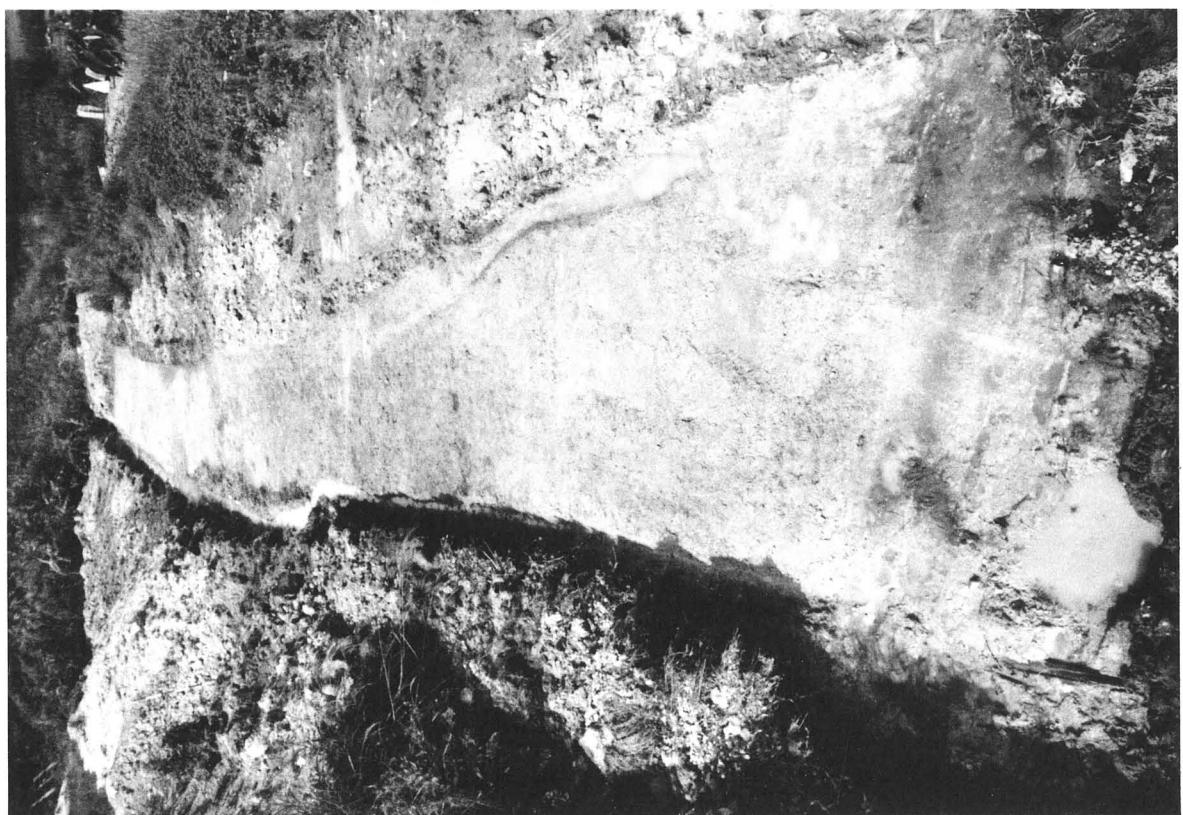
S B 8・15.0 出土状況



B地区 (南西から)



E地区 (西から)



F地区 (南東から)



大伴神社の現状



福王子神社、本殿裏に納められた伏見人形



福王子神社、本殿裏に納められた伏見人形（狐）



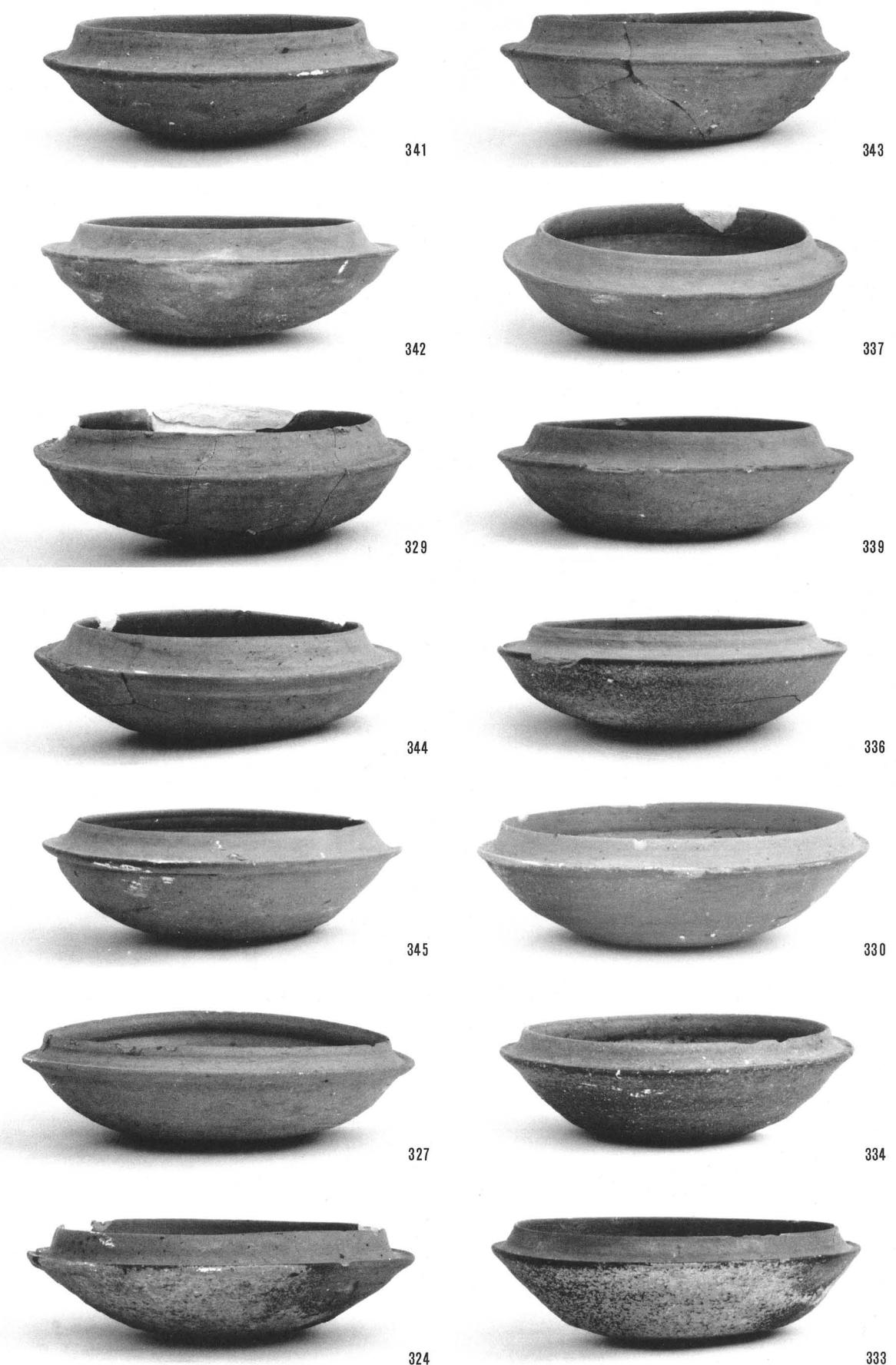
福王子神社、裏に納められた伏見人形（布袋）

図版三一  
遺  
物



福王子17号墳出土遺物

図版三三  
遺  
物

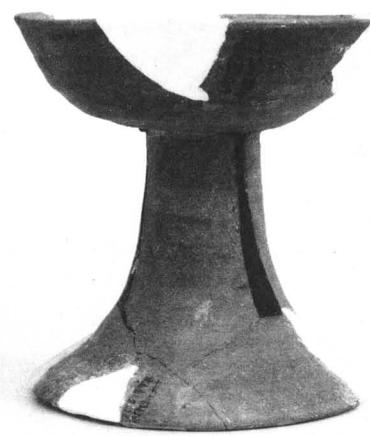


福王子17号墳出土遺物

図版三四  
遺  
物



346



347



348



353



354



362

福王子17号墳出土遺物

図版三五  
遺  
物



355



356

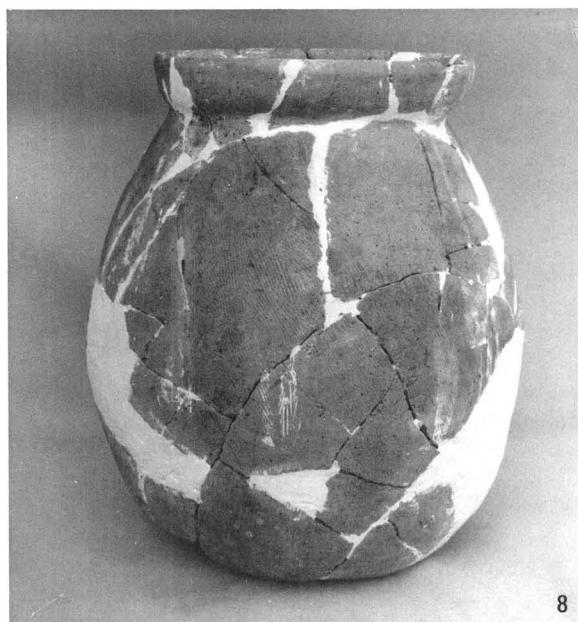


360



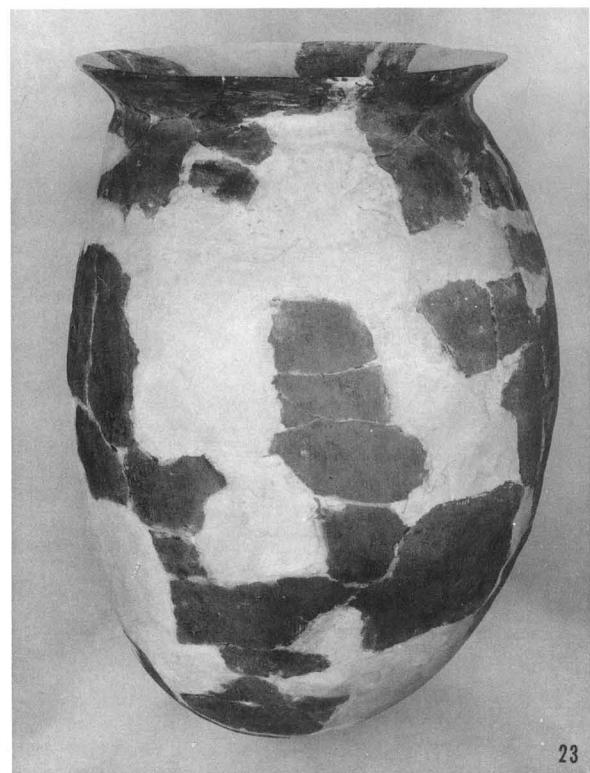
7

閉塞石群中から出土



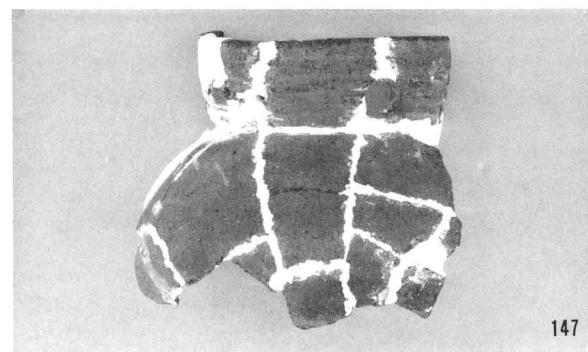
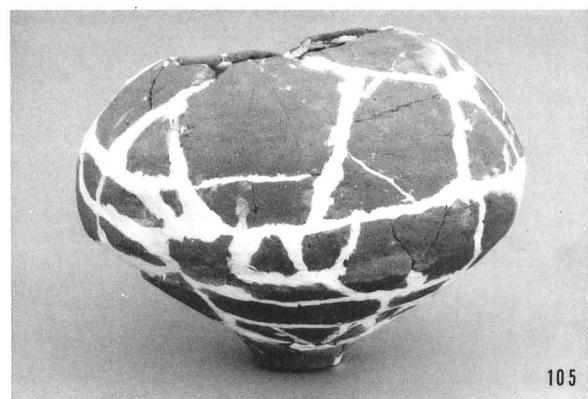
8

福王子17号墳出土遺物 355・356・360・7・8



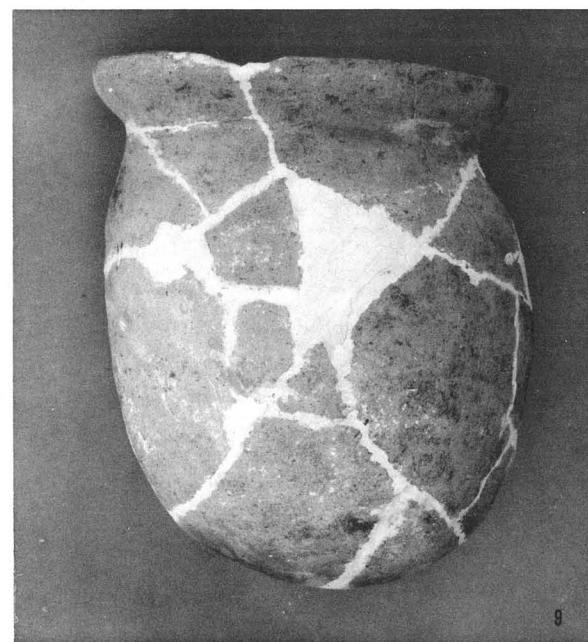
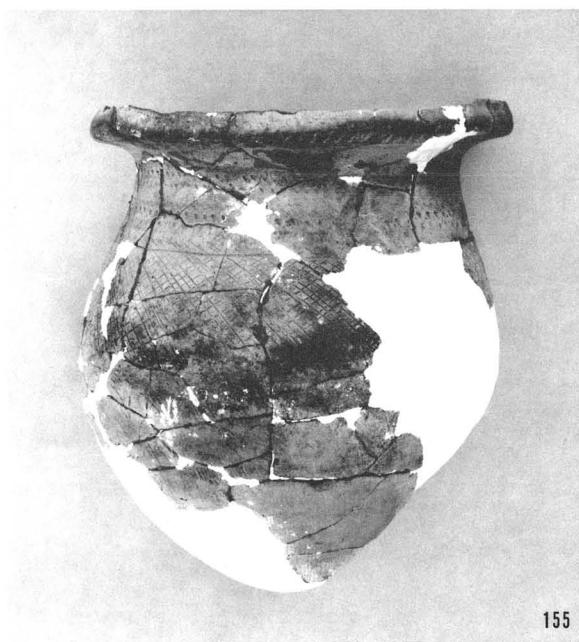
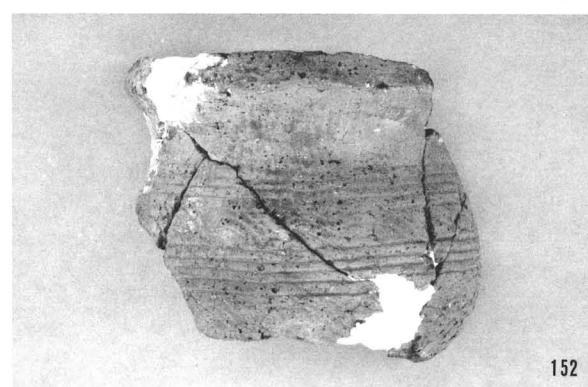
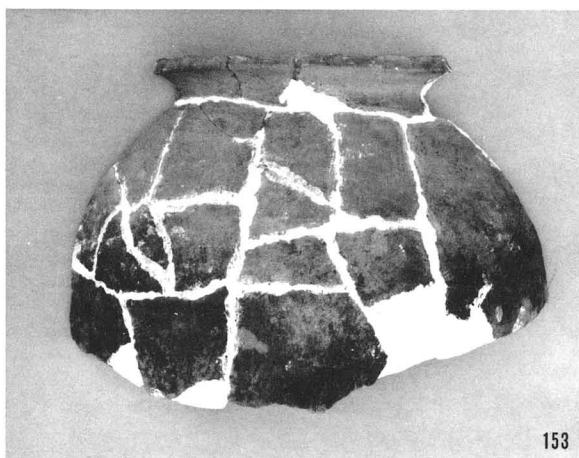
23

S K 128 出土遺物 23



S B 4 出土遺物103、102、104、105、117、118、121

S B 8 出土遺物147

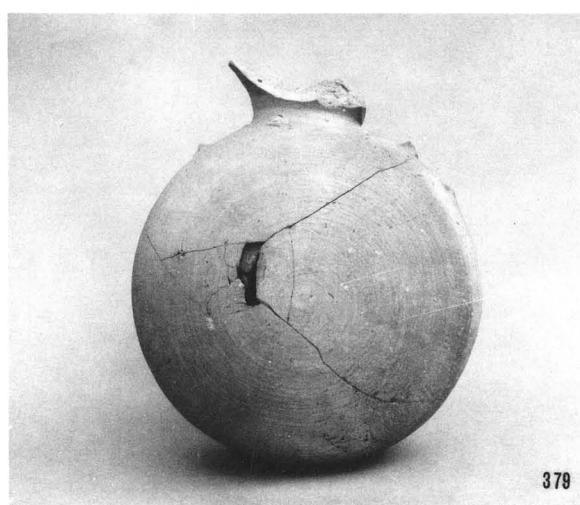
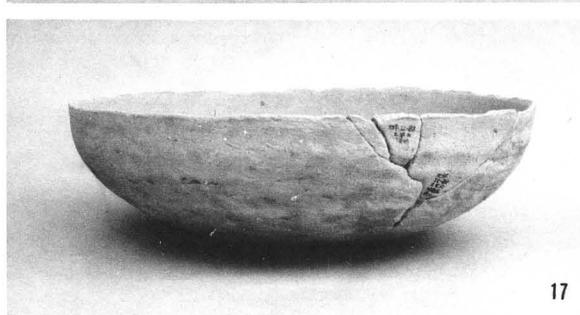
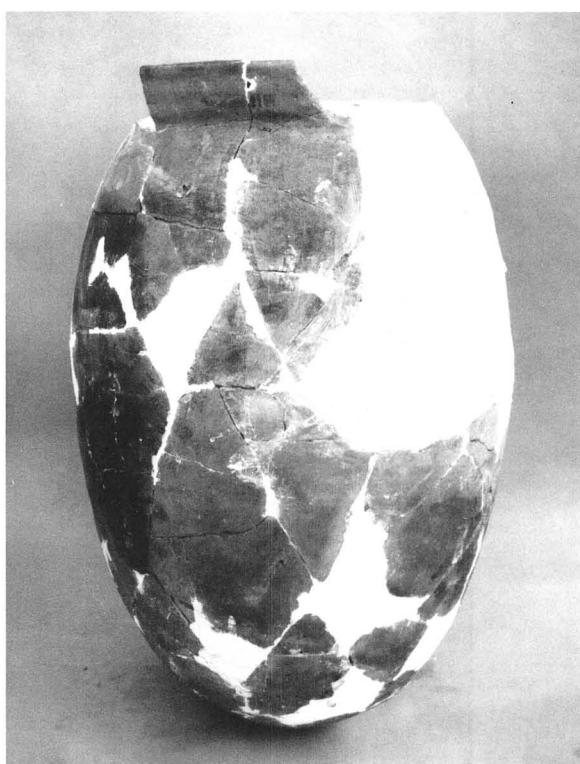


S B 4 出土遺物126

S B 8 出土遺物149、151

S B 9 出土遺物152、153、155

S K 1 出土遺物9



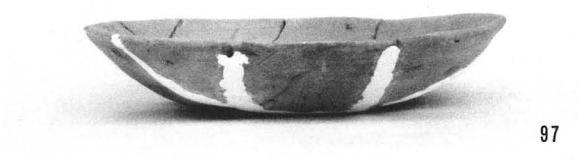
S K 1 出土遺物10 S K 1 16 出土遺物17 S K 1 25 出土遺物379 S K 1 5 7 出土遺物172、169、171



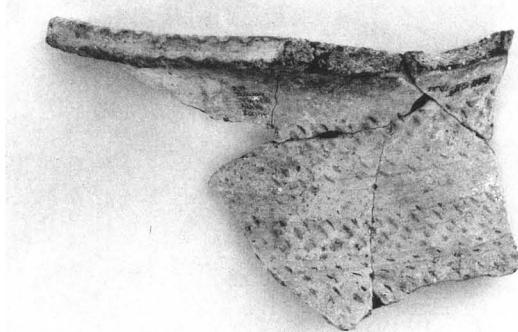
168



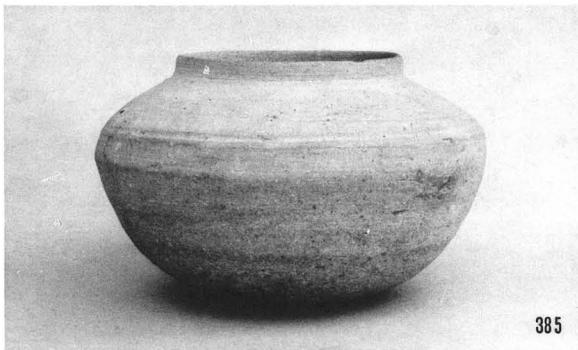
168



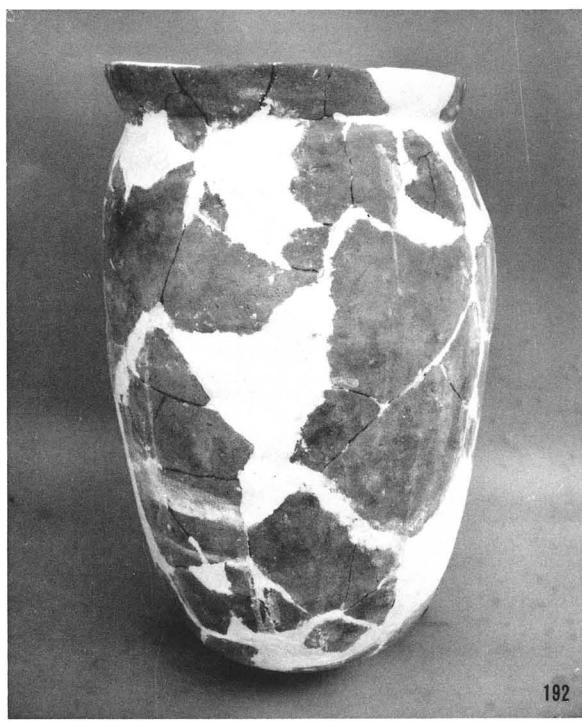
97



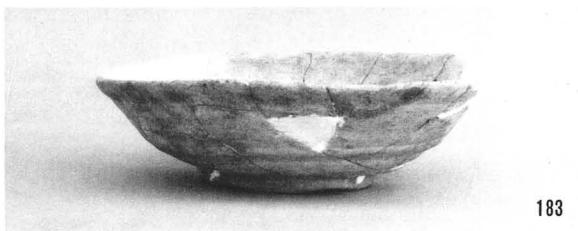
174



385



192



183

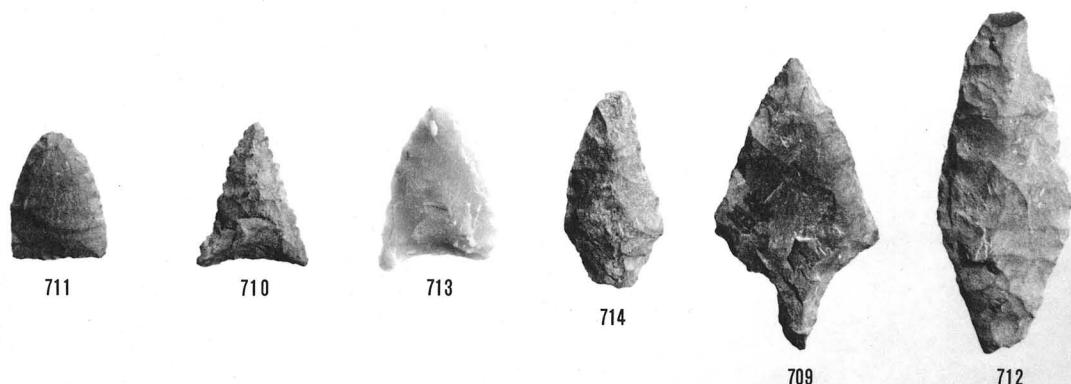
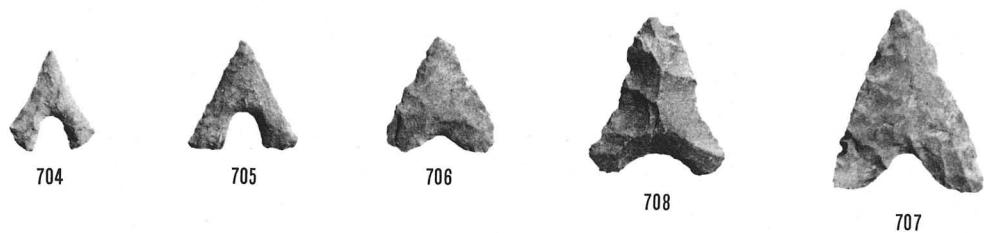


207

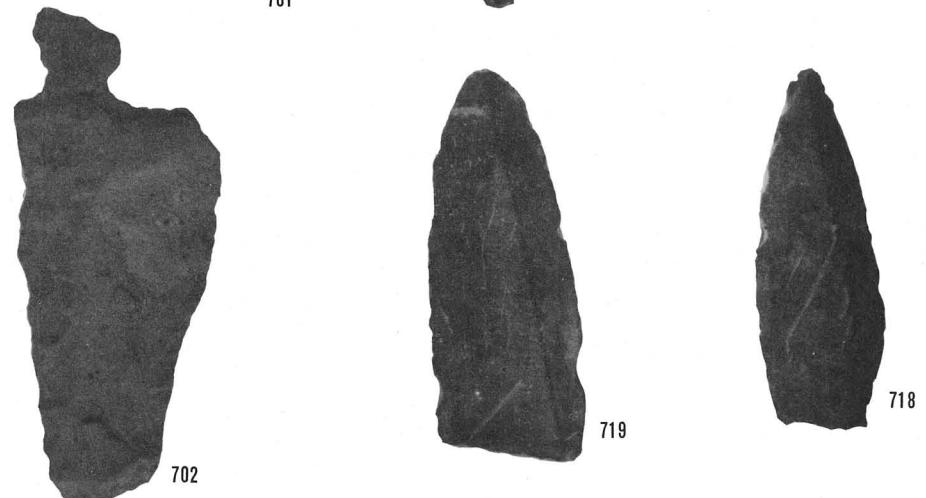
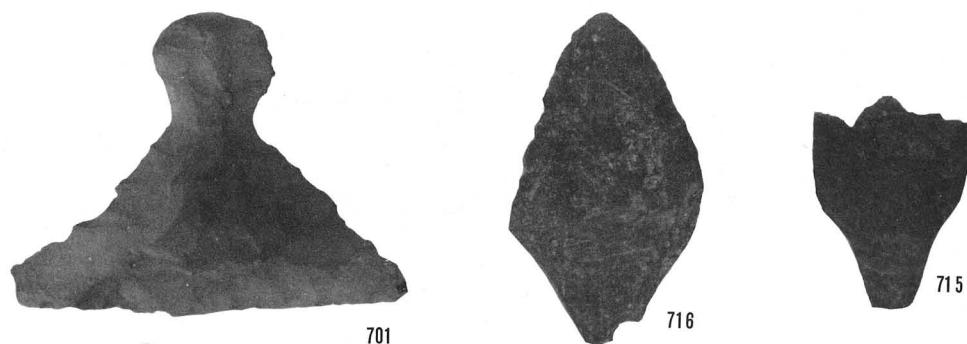


443

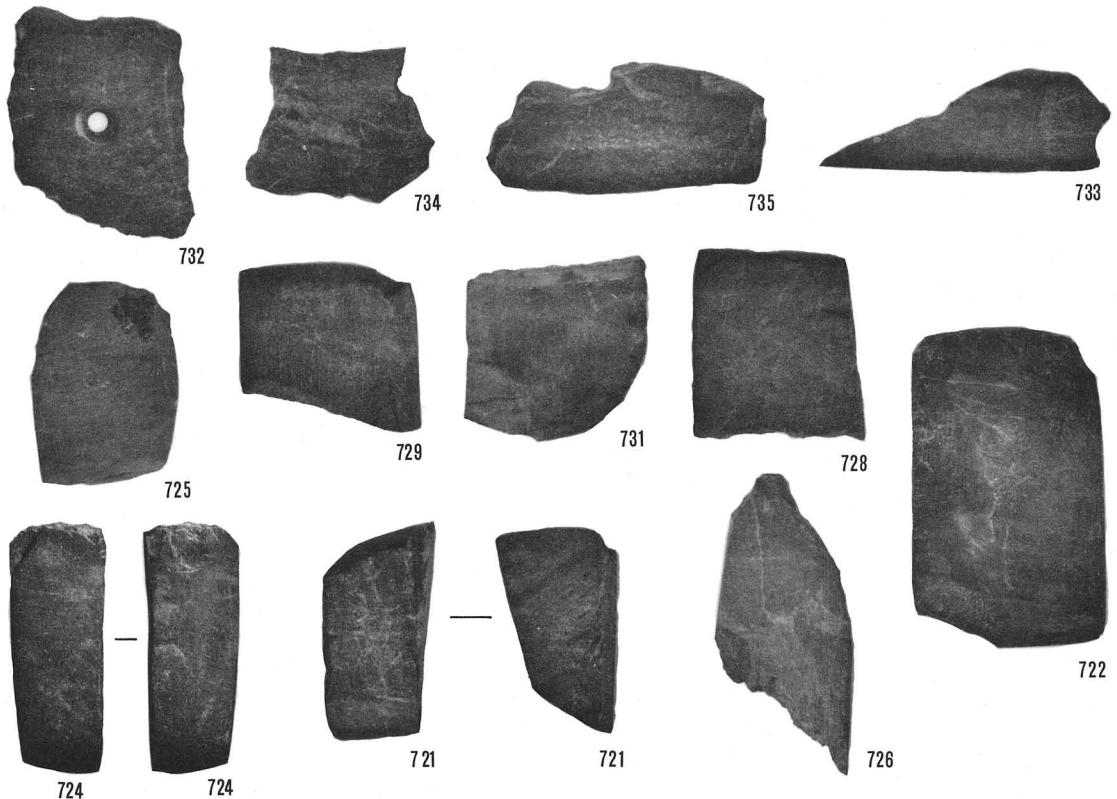
S D 2 出土遺物、385、S D 7 出土遺物、97 S K 1 5 7 出土遺物、168、174 包含層出土遺物、192、183、207、443



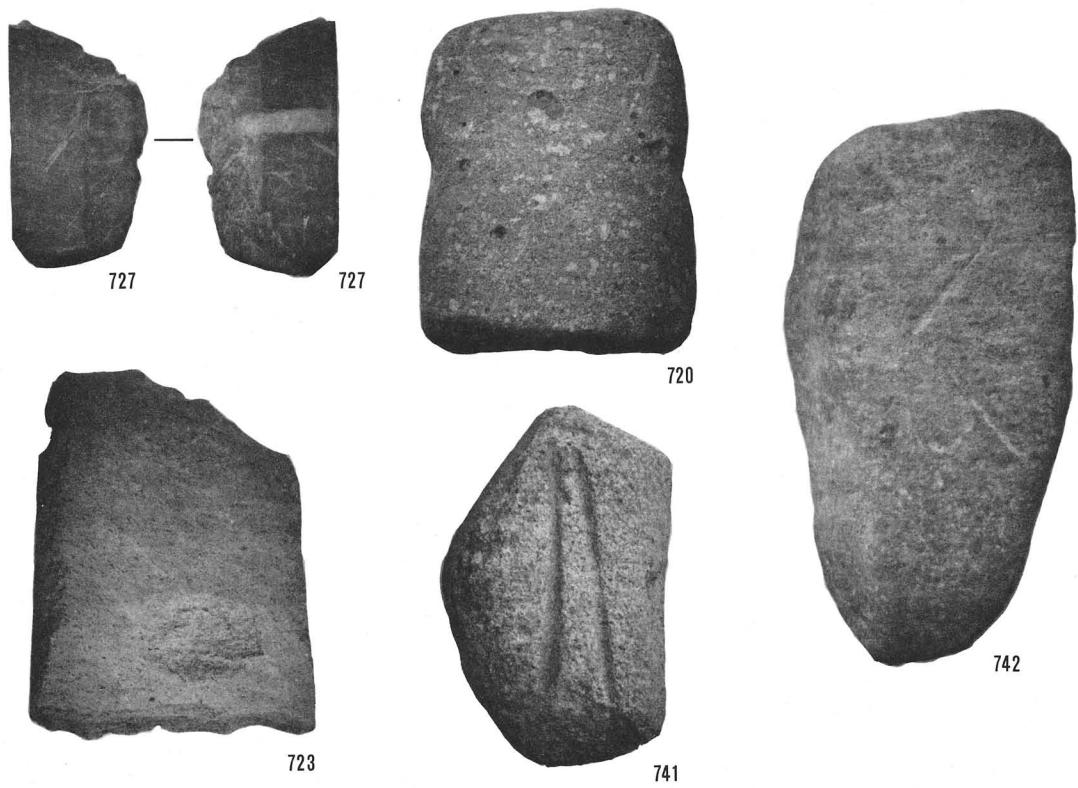
石 鎌



石匙・磨製石鎌

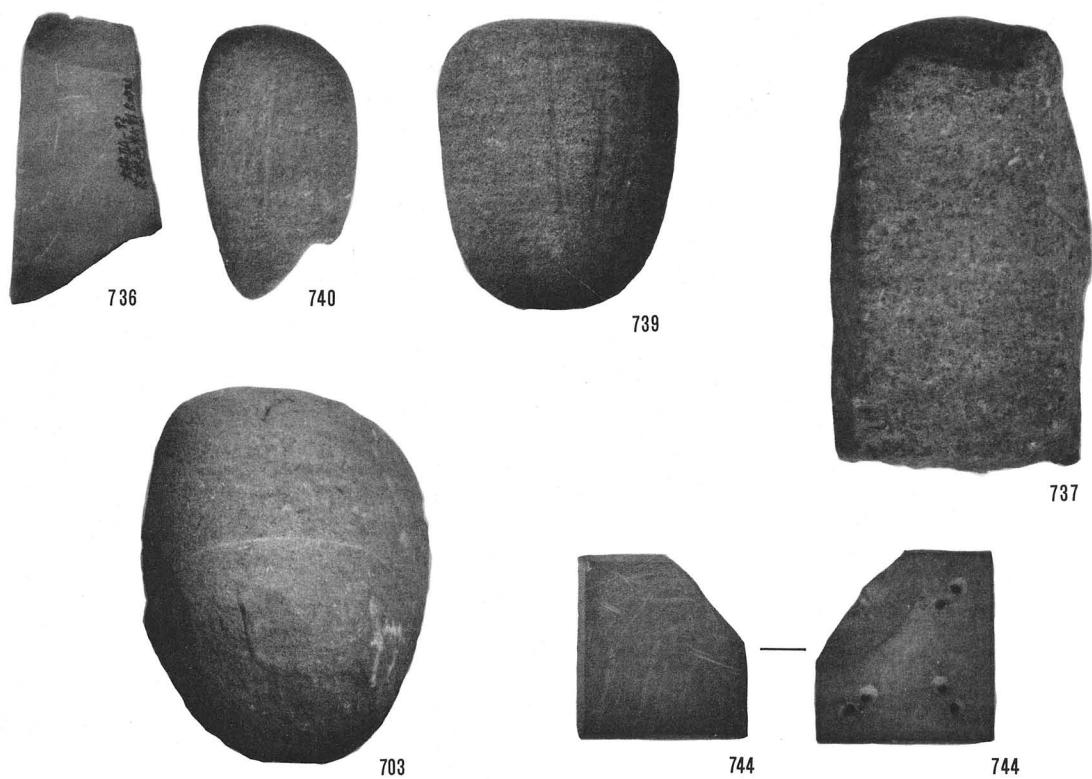


石包丁732~735 石斧721~731

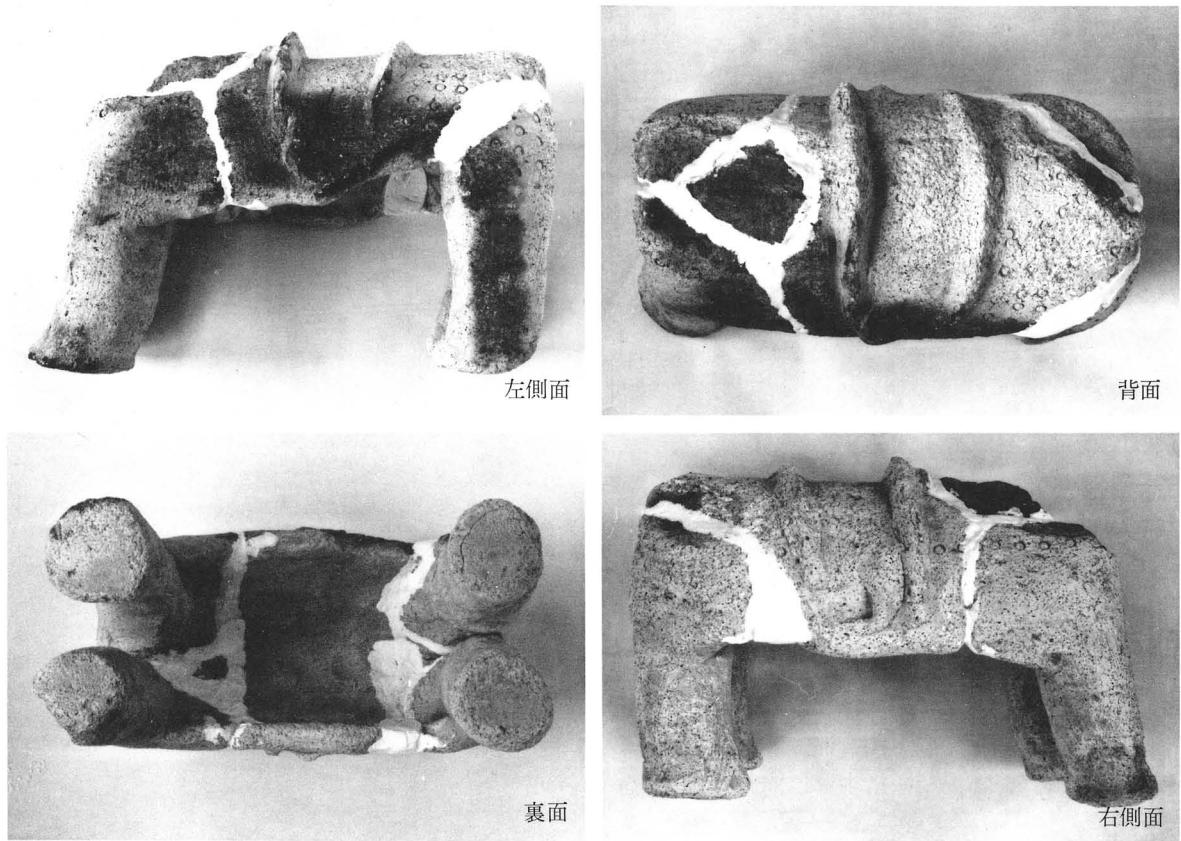


磨製石劍727 石斧720、723 砥石741、742

圖版四一 遺物



砥石736～740 叩石703 石鎧帶744

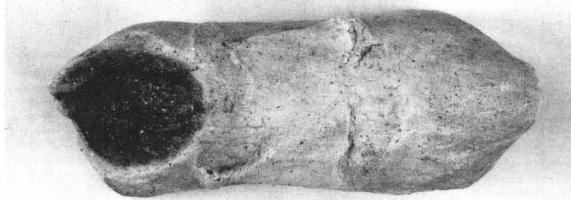


土馬905

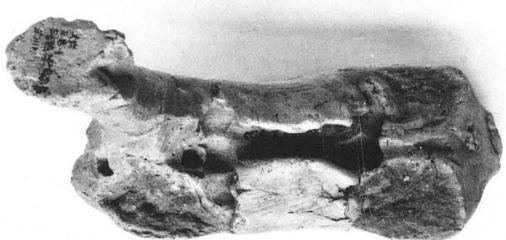
圖版四三 遺物



左側面



背面



裏面穿孔狀況

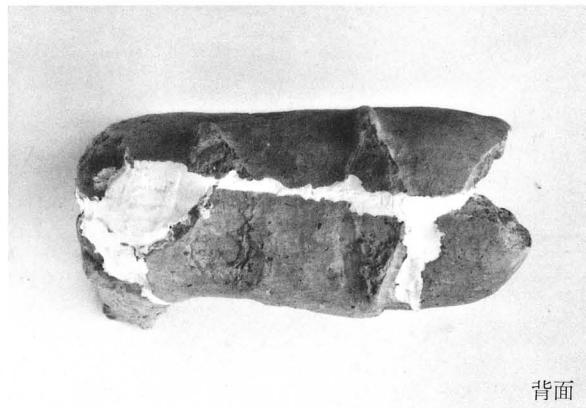


右側面

土 馬906



左側面



背面



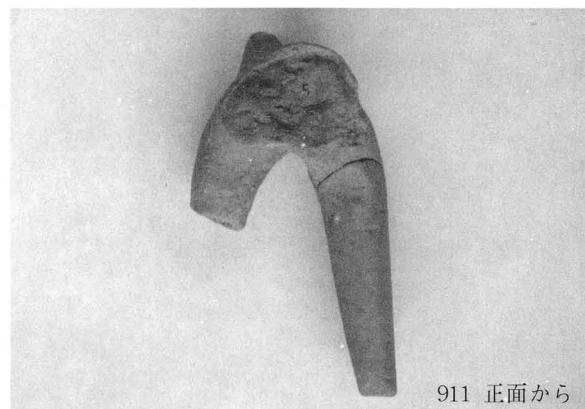
裏面



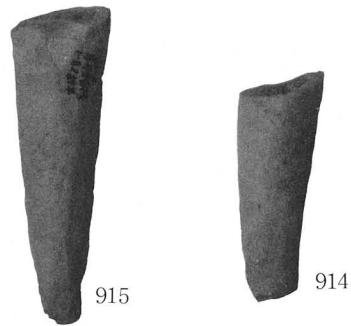
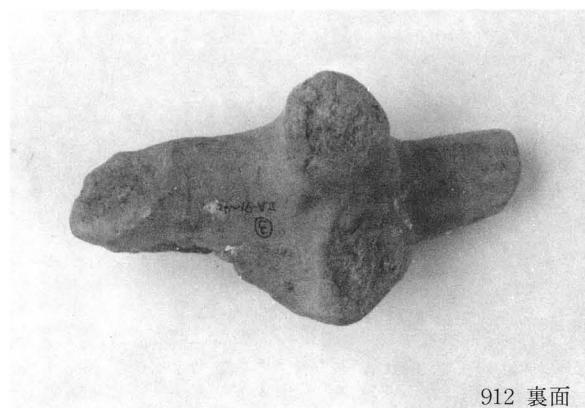
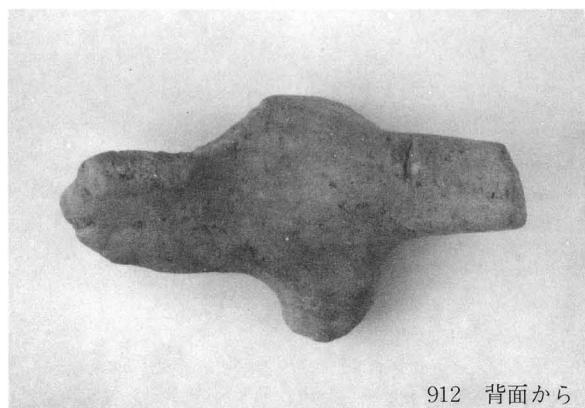
右側面

土 馬907

図版四四  
遺  
物



土馬

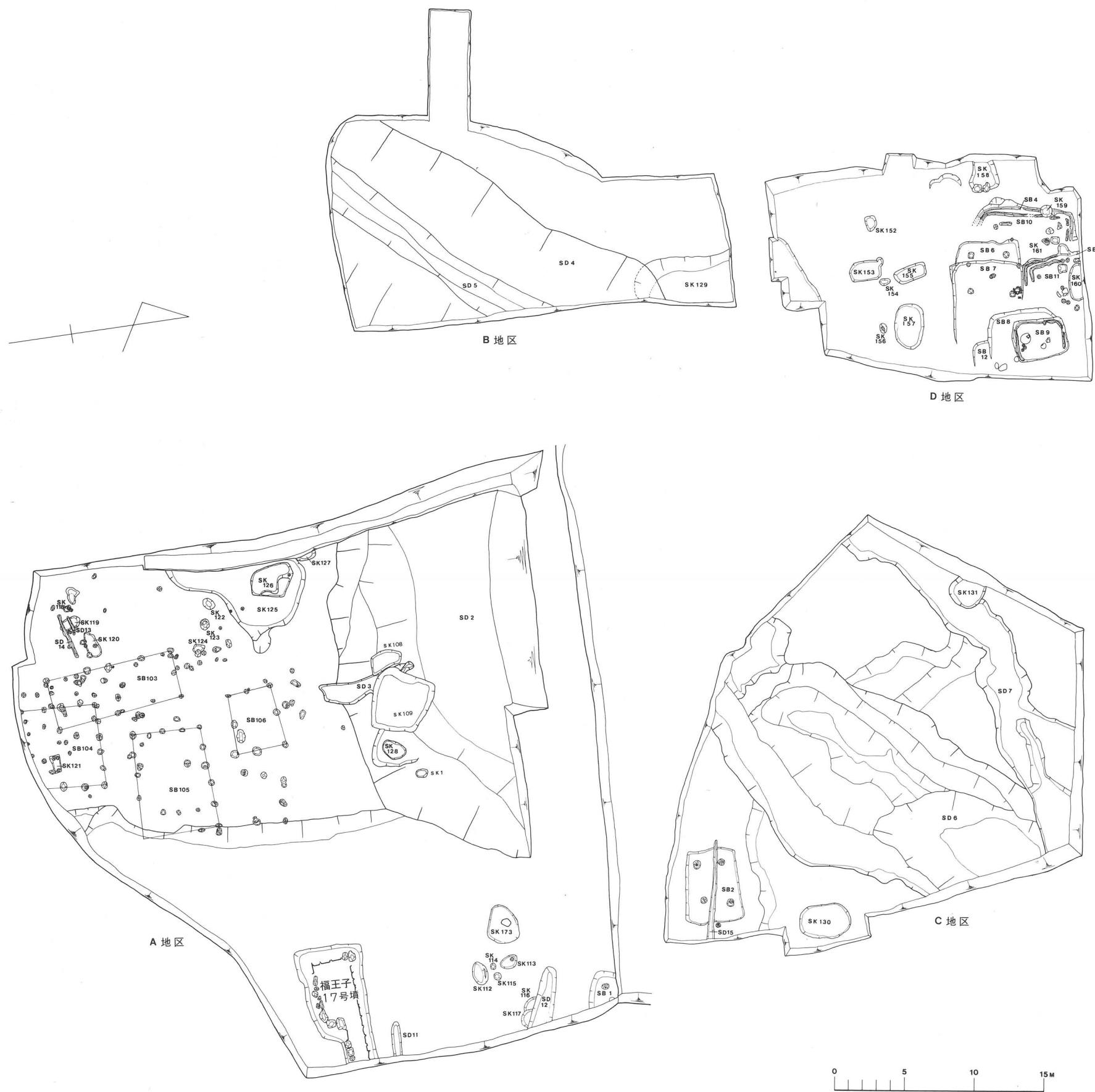


土馬

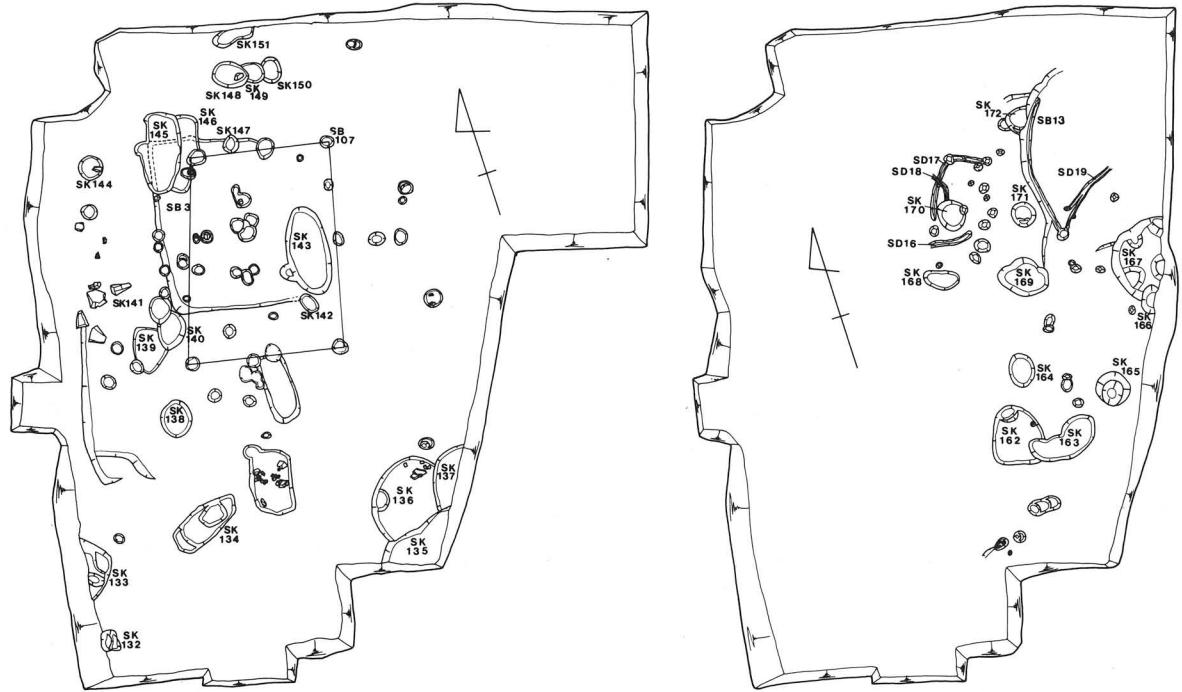


大伴遺跡地形図及び遺構図

図版四六 遺構

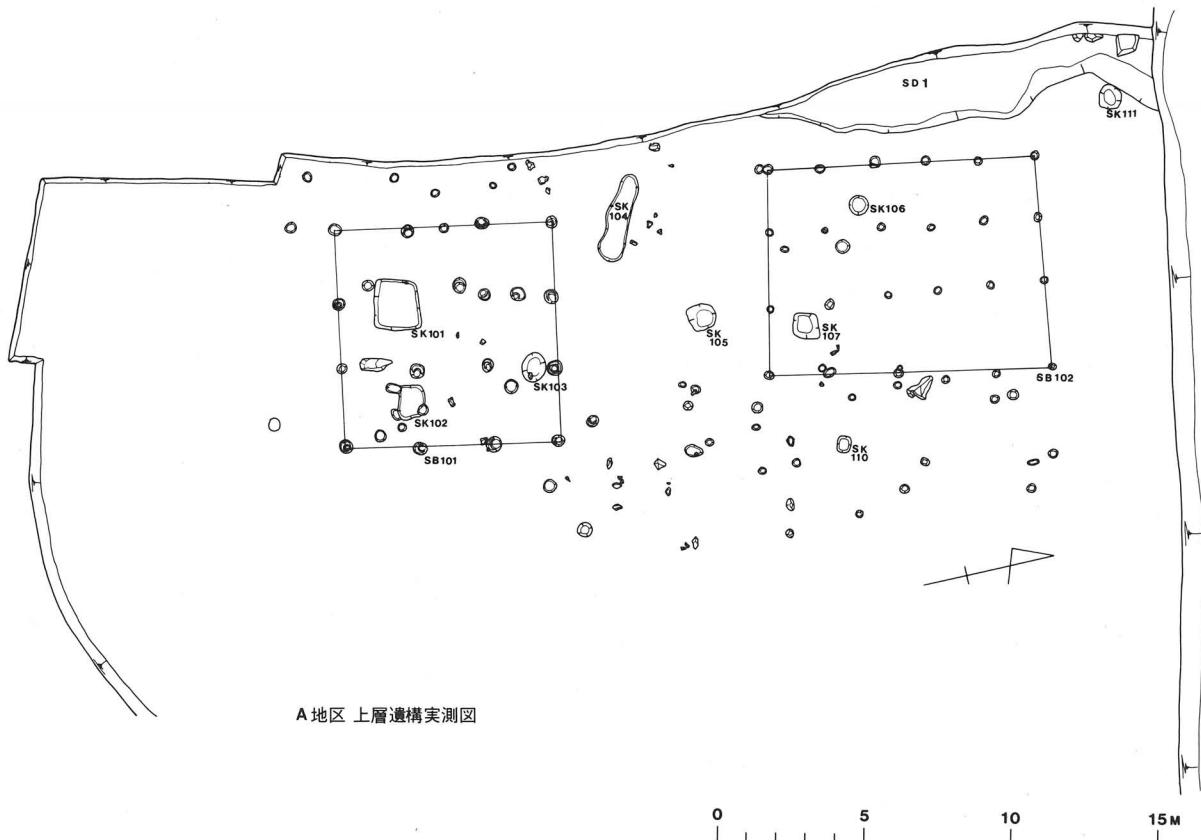


遺構全体図



D地区上層遺構実測図

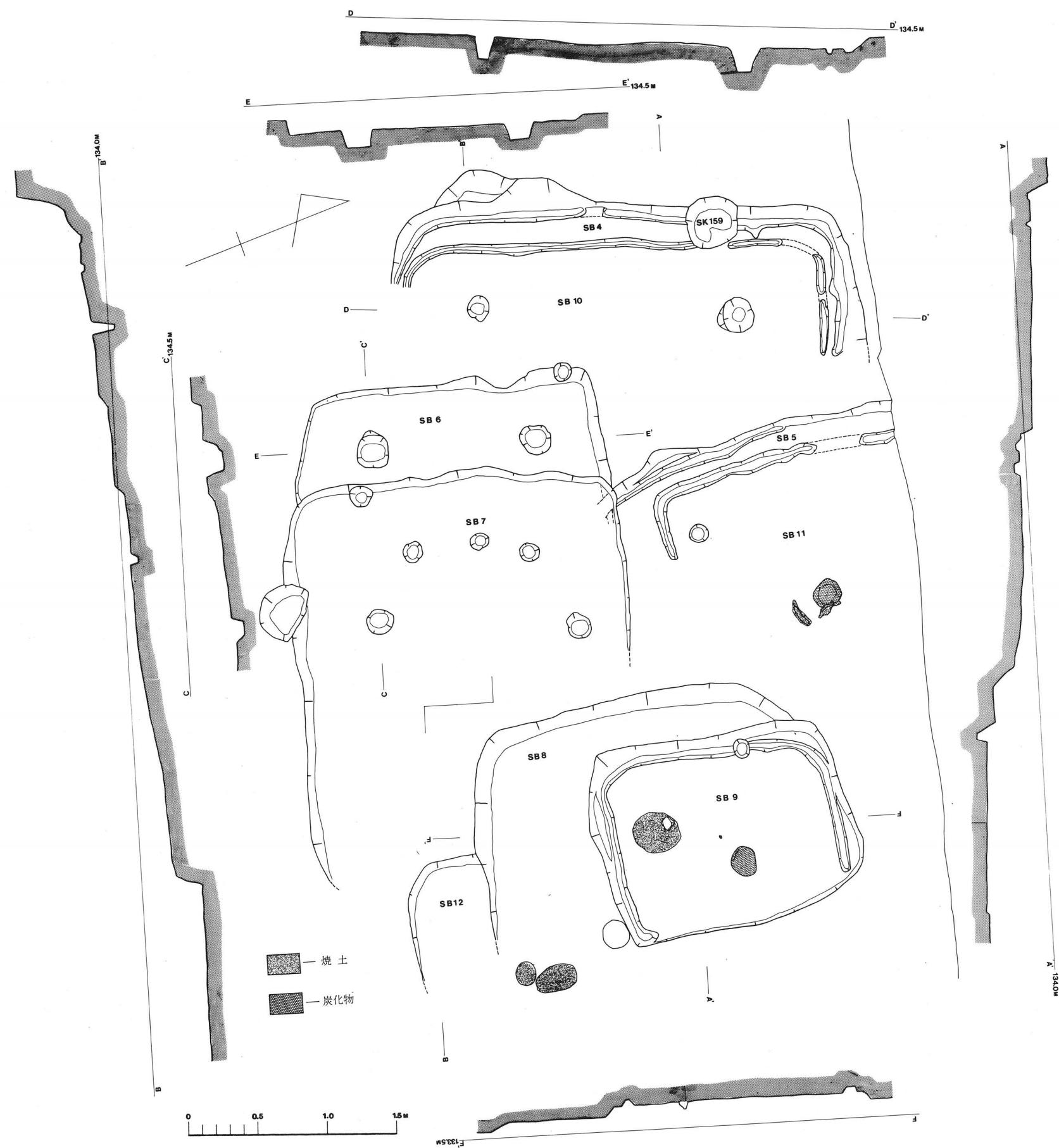
D地区下層遺構実測図



A地区 上層遺構実測図

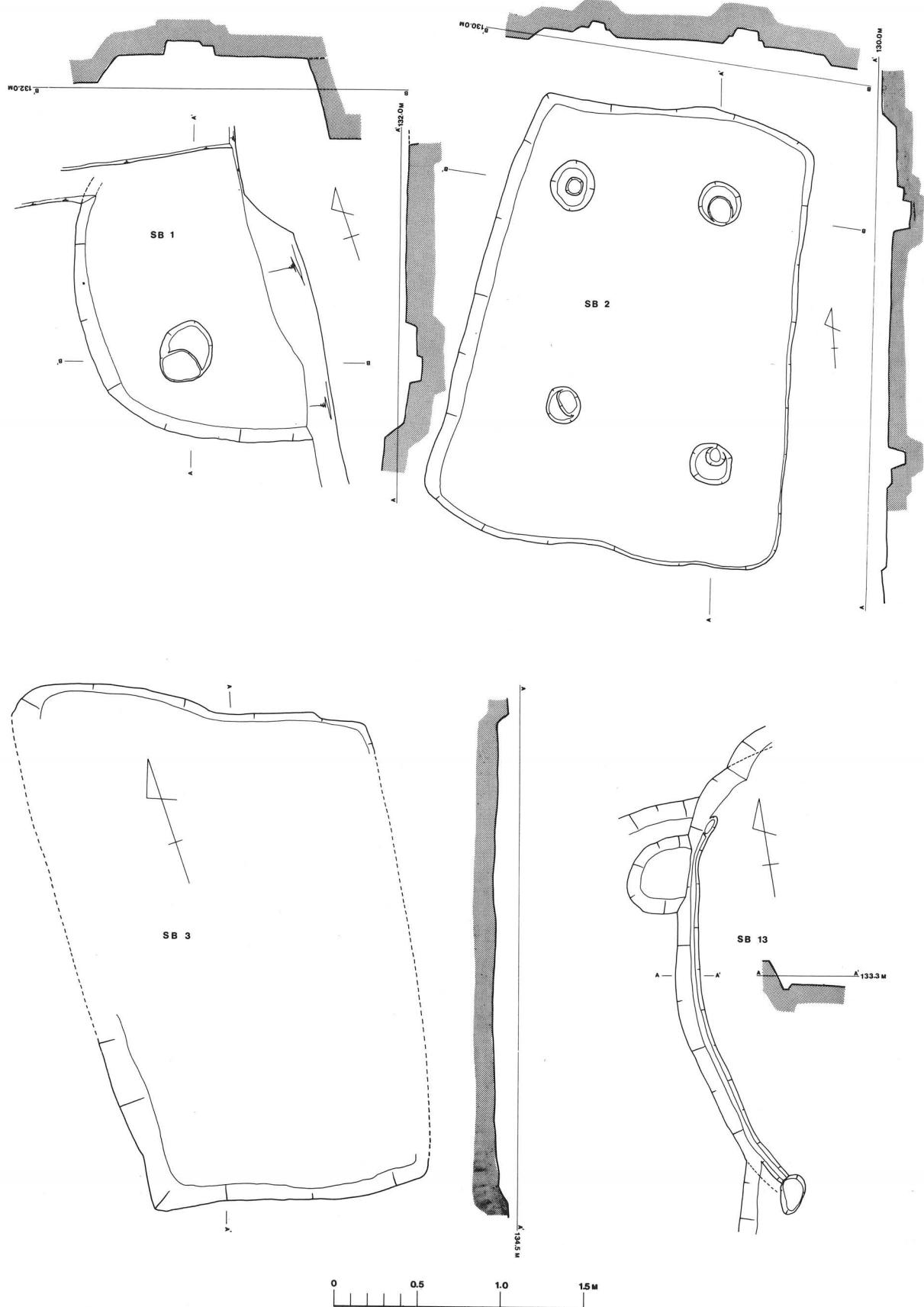
A地区上層・D地区上層・下層実測図

図版四八 遺構

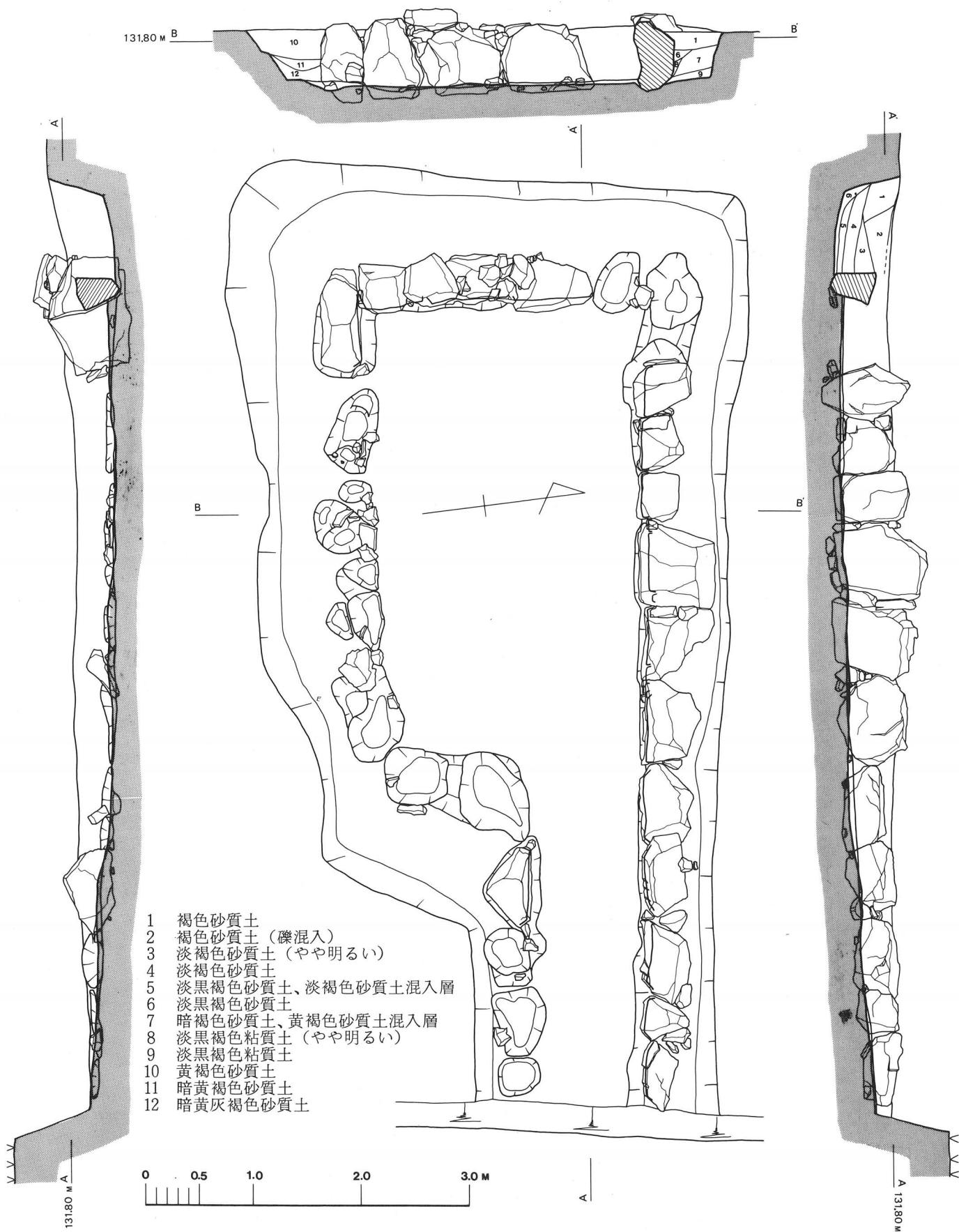


D地区中層住居跡実測図

図版四九  
遺構

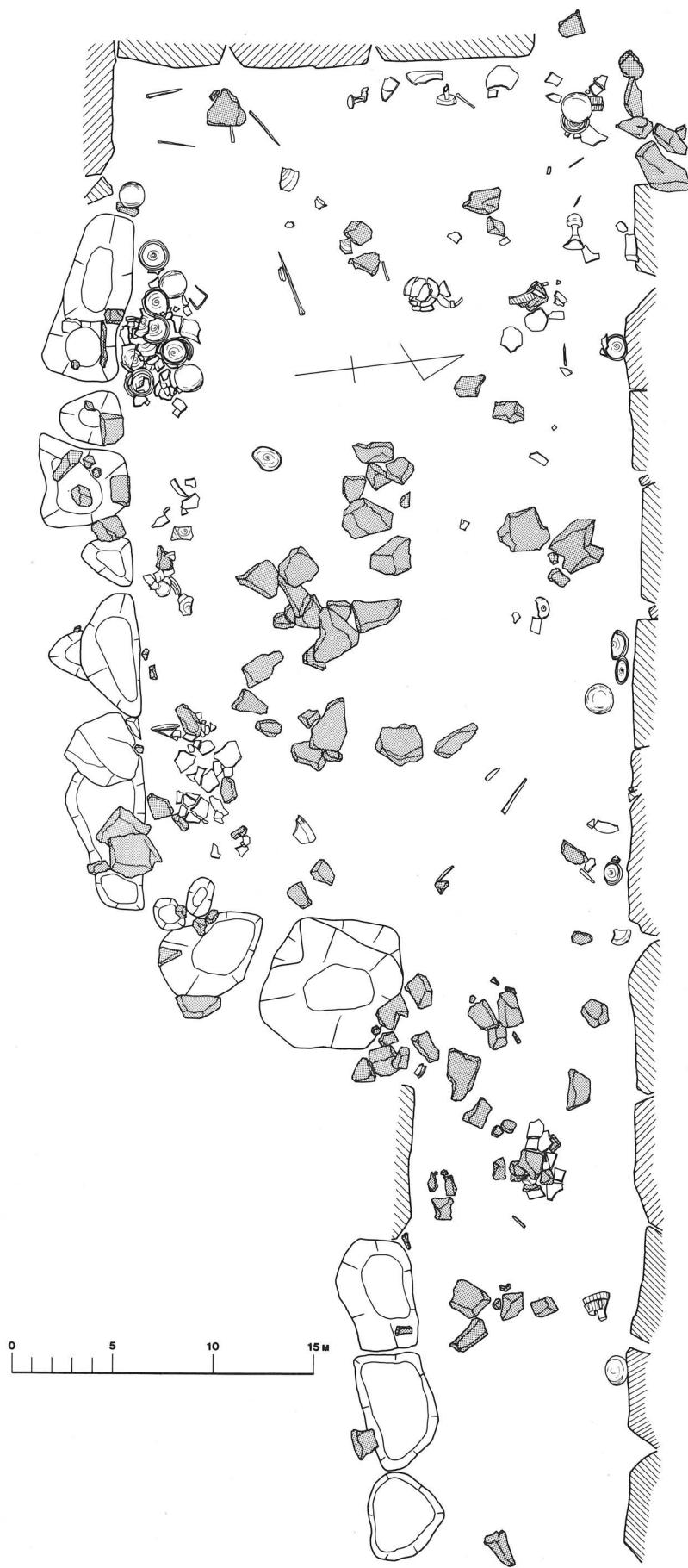


SB 1・SB 3・SB 4・SB 13 実測図



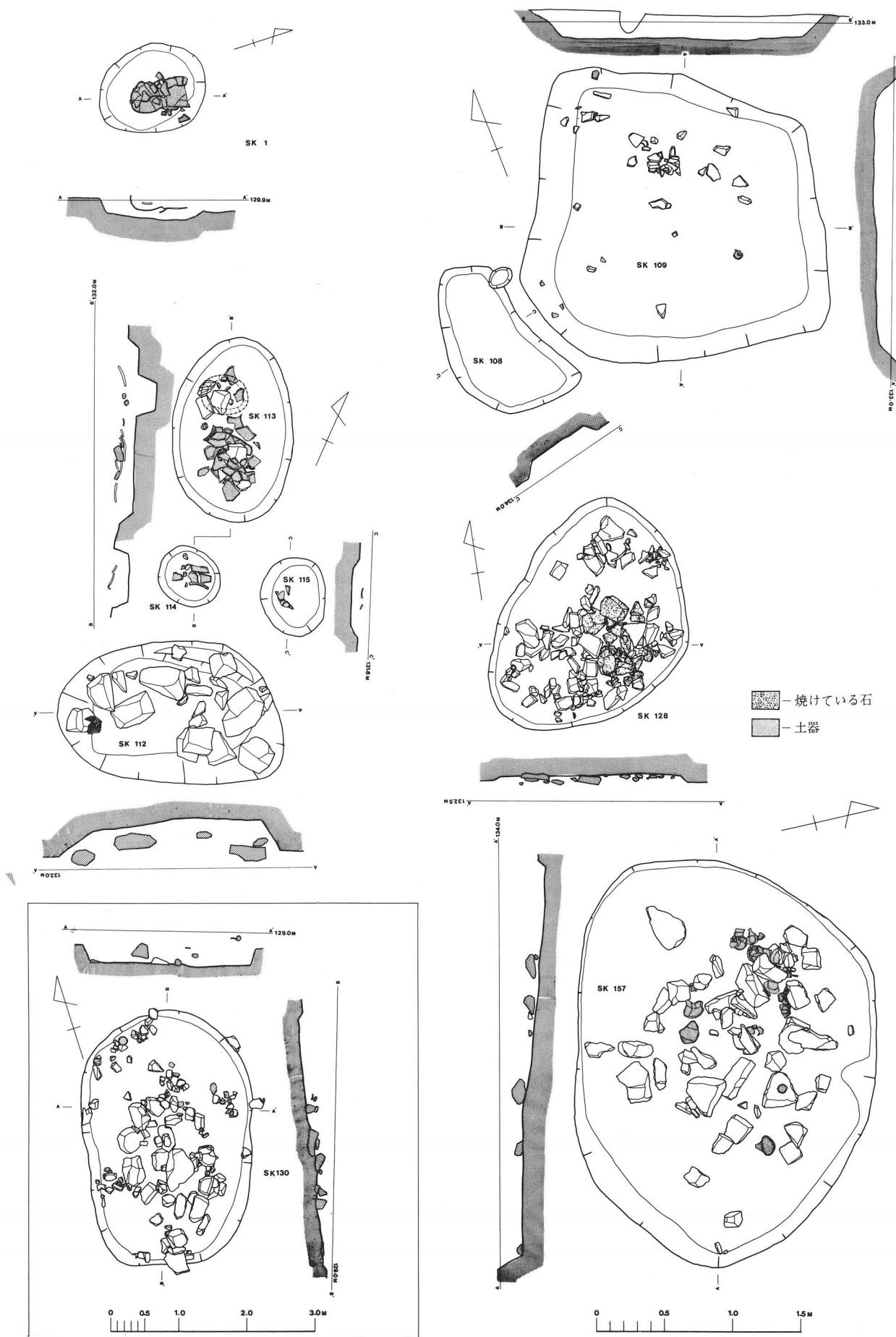
福王子17号 墳実測図

図版五一 遺構



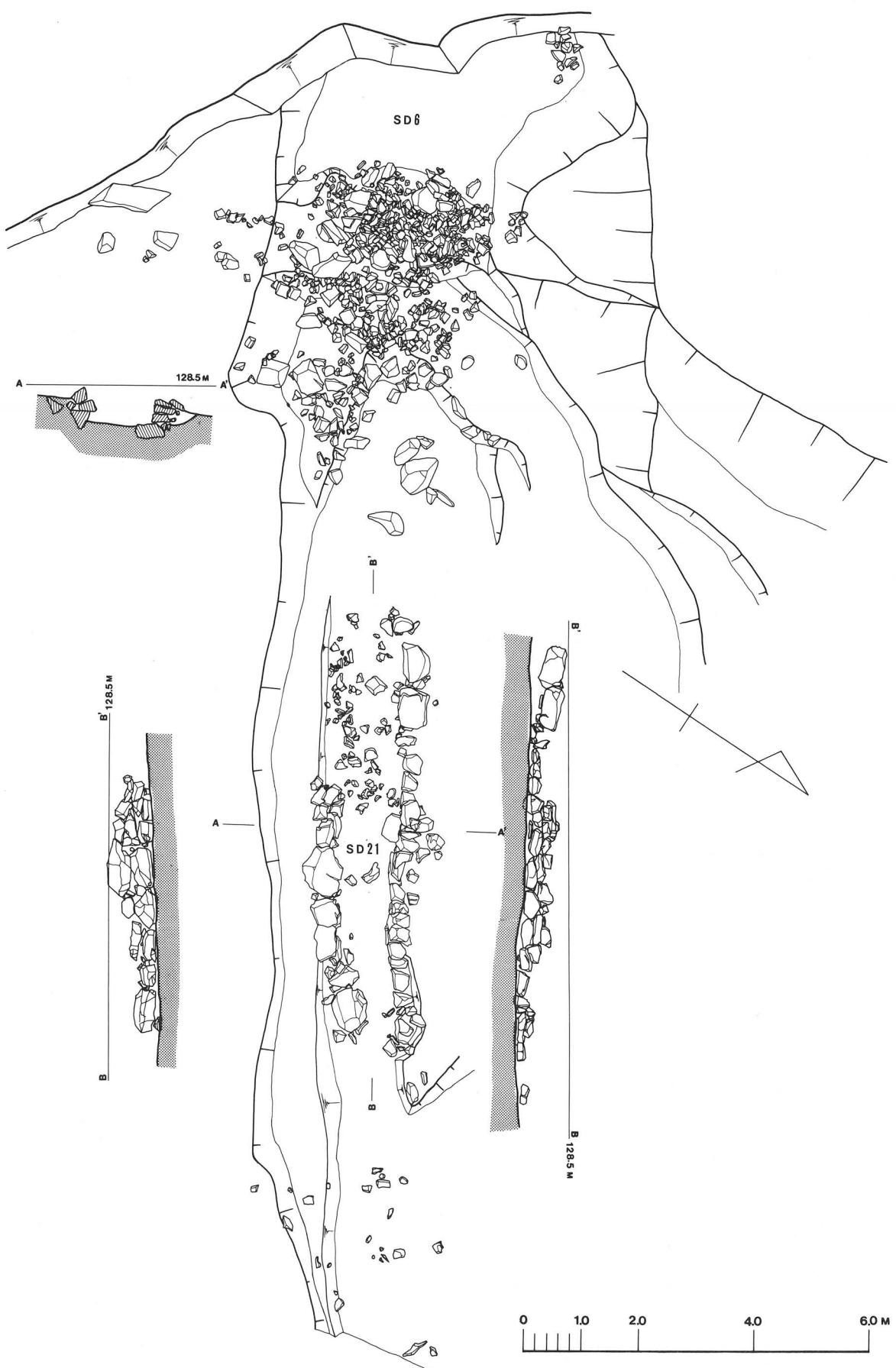
福王子17号墳遺物出土状況実測図

図版五二 遺構



SK 1・SK 108・SK 109・SK 112・SK 113・SK 114・SK 115・SK 128・SK 130・SK 157実測図

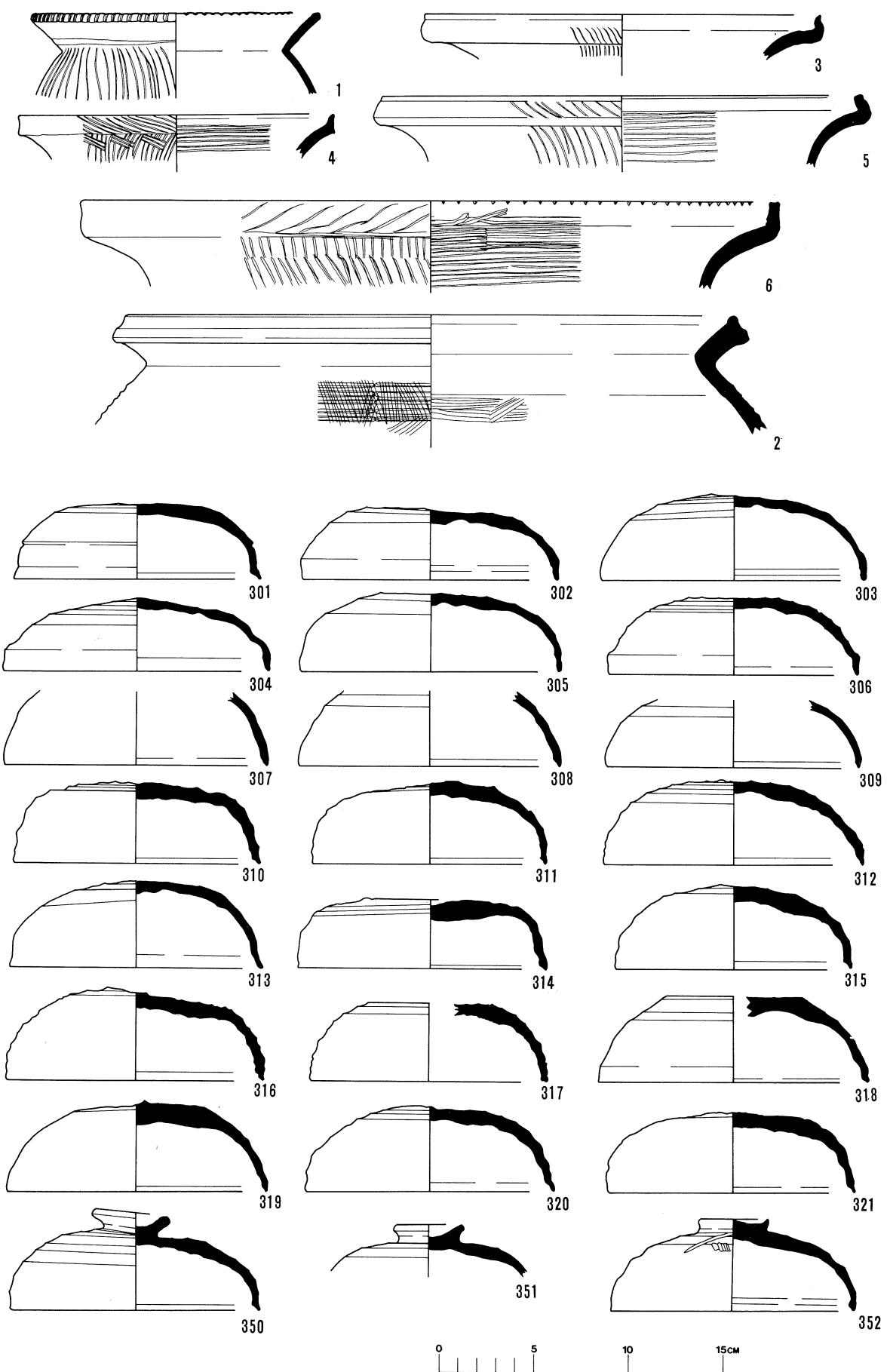
図版五三  
遺構



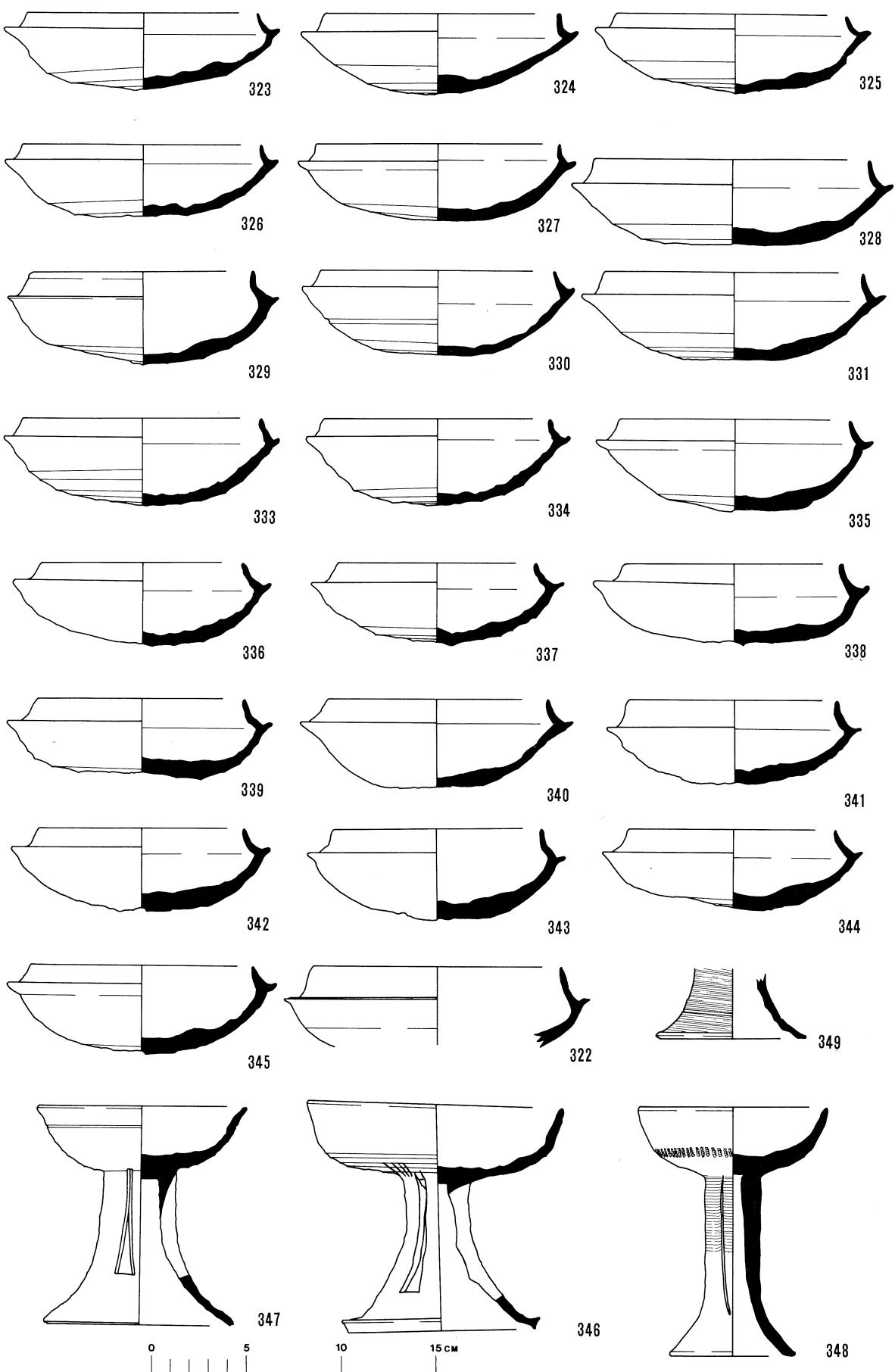
SD6・SD21実測図



SD6 壕跡・SB4・SB8・遺物出土状況実測図

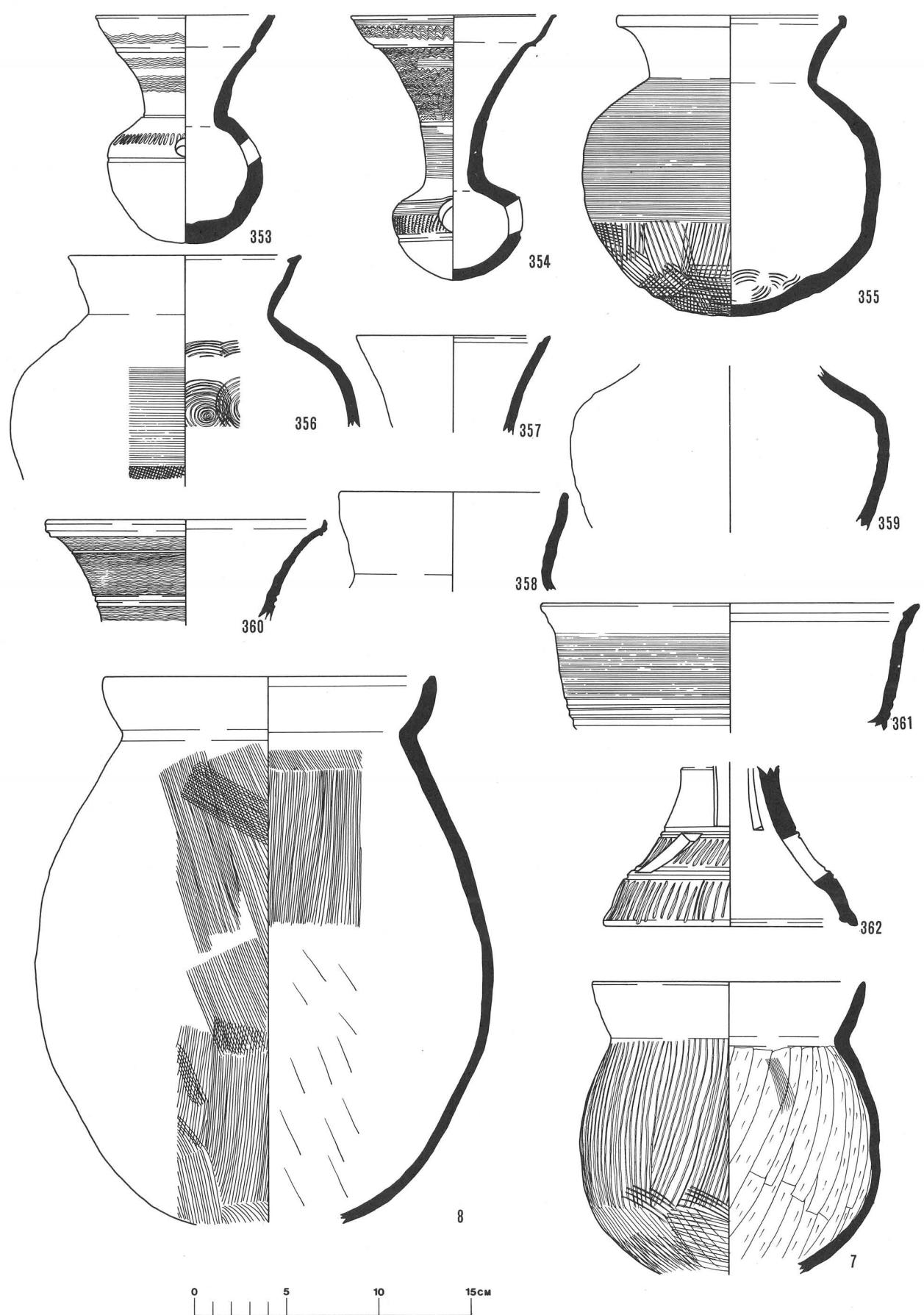


S B 1 (1~6)・福王子17号墳出土遺物



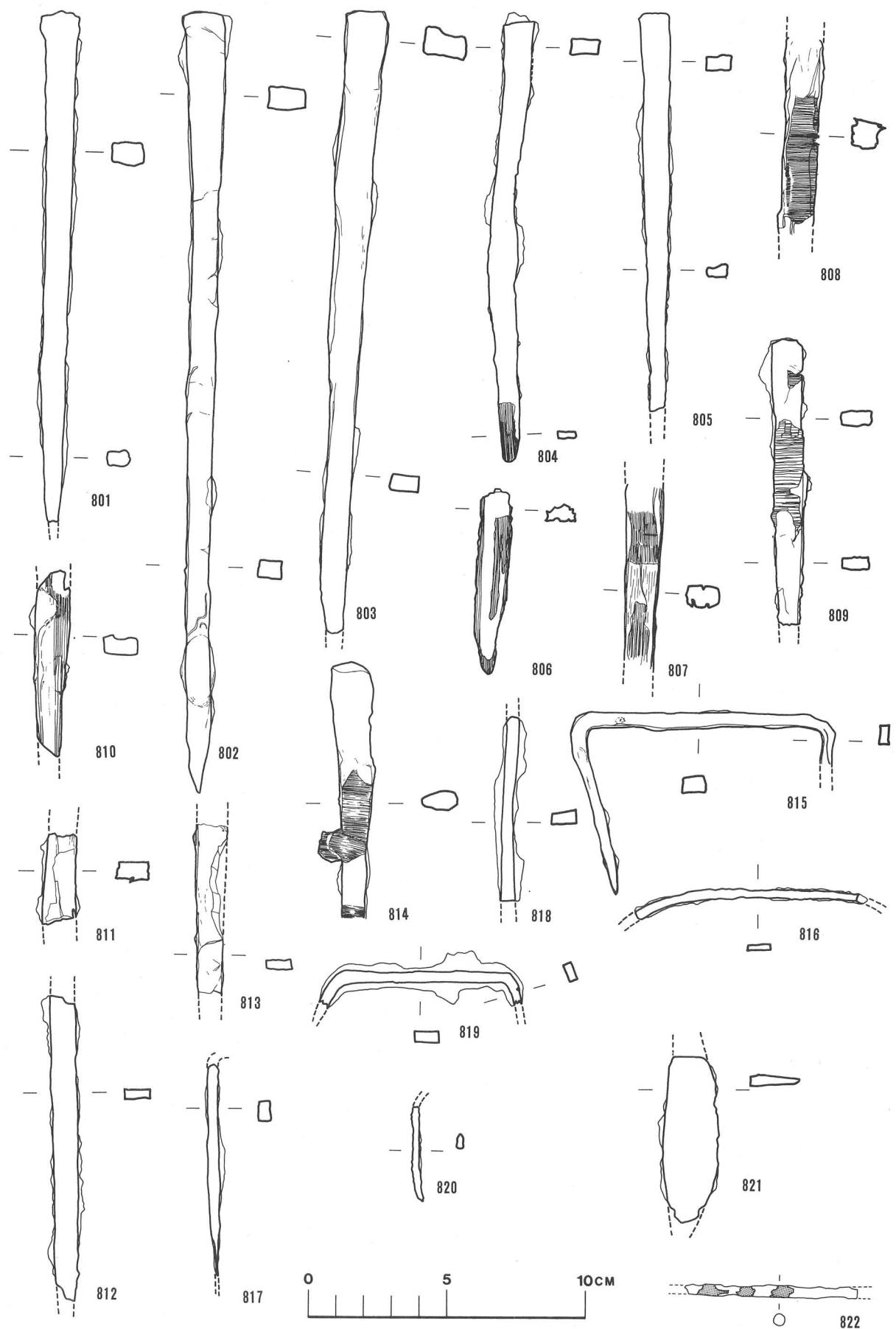
福王子17号墳出土遺物

図版五七 遺物実測図

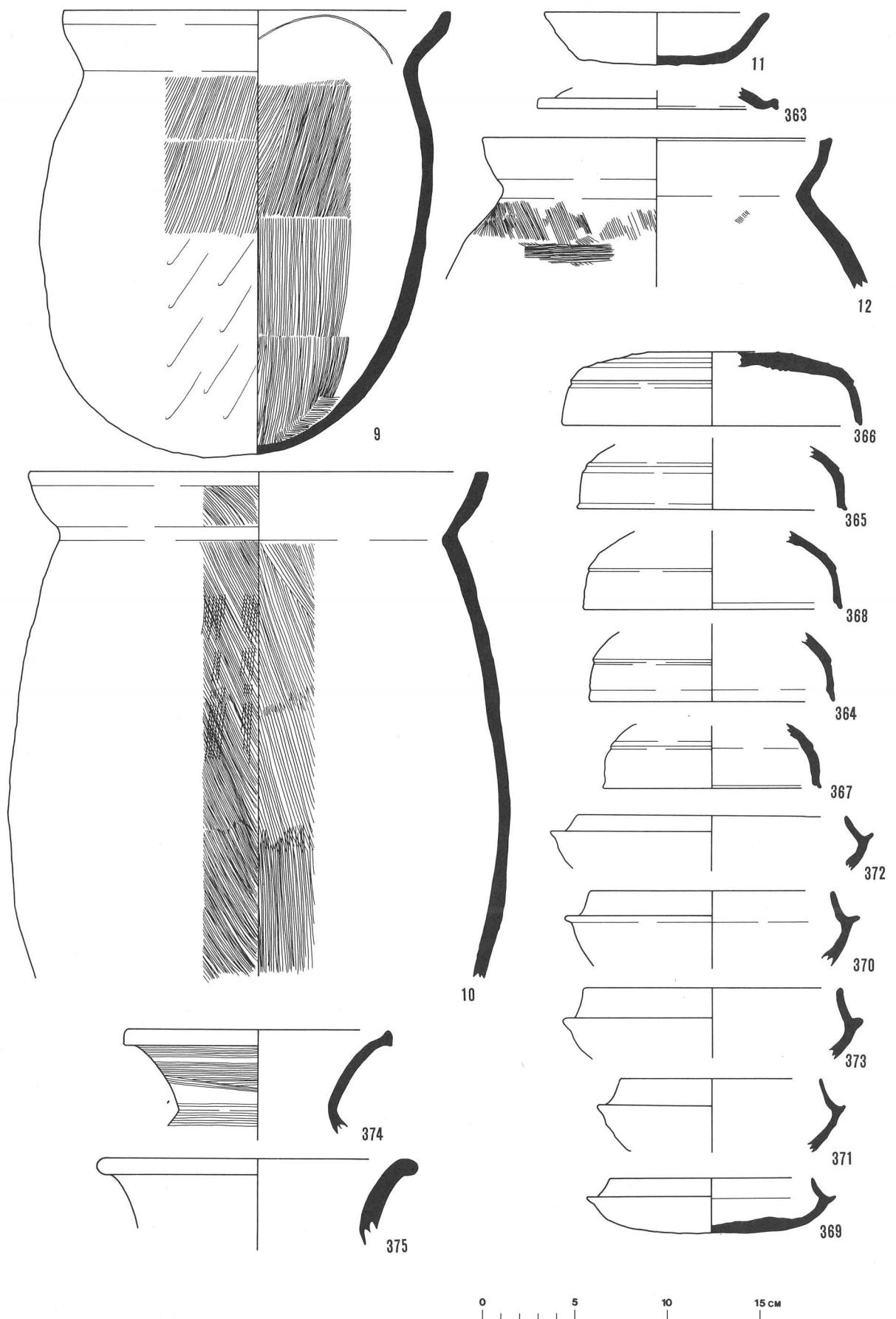


福王子17号 墳出土遺物

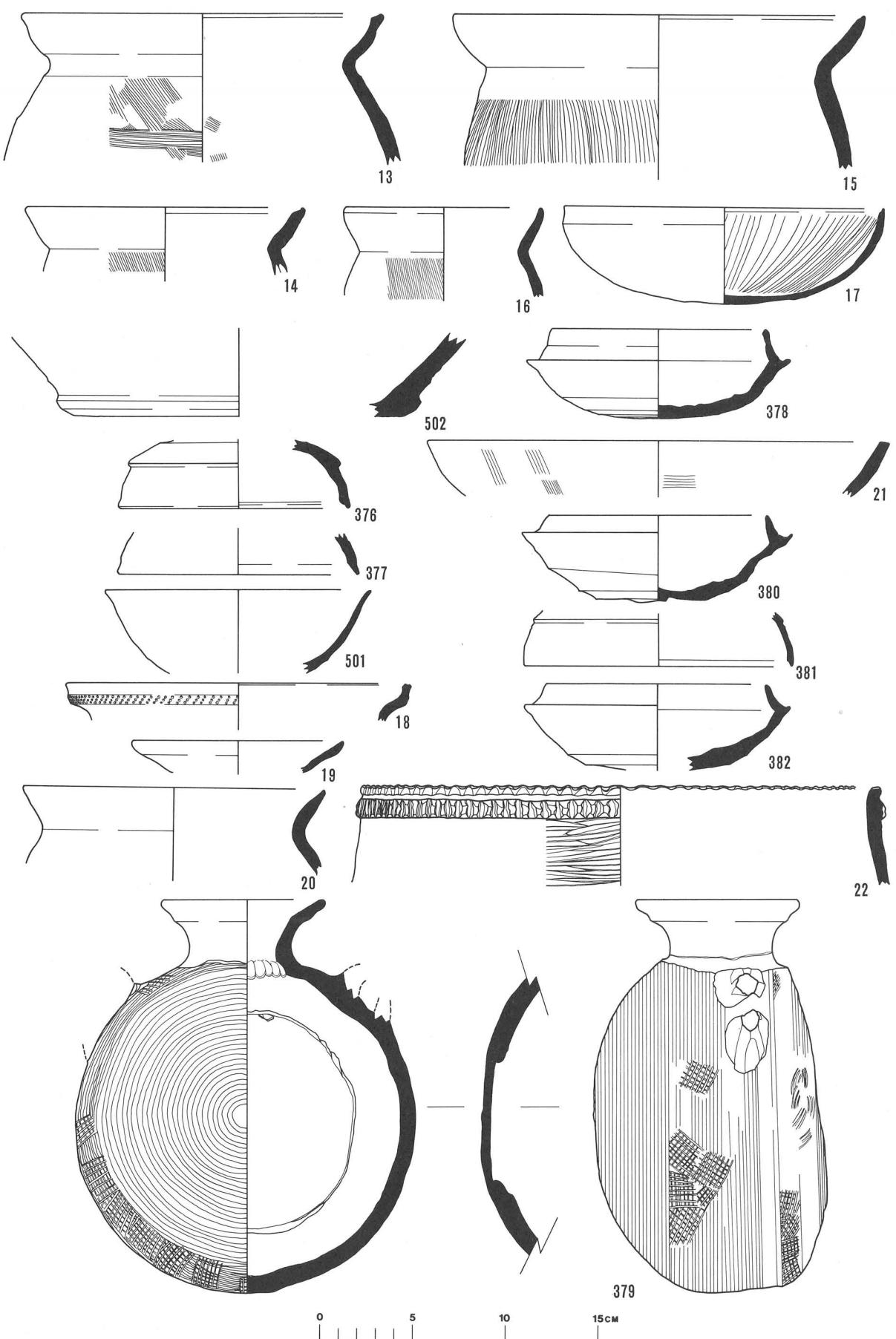
図版五八 遺物実測図



福王子17号墳出土遺物

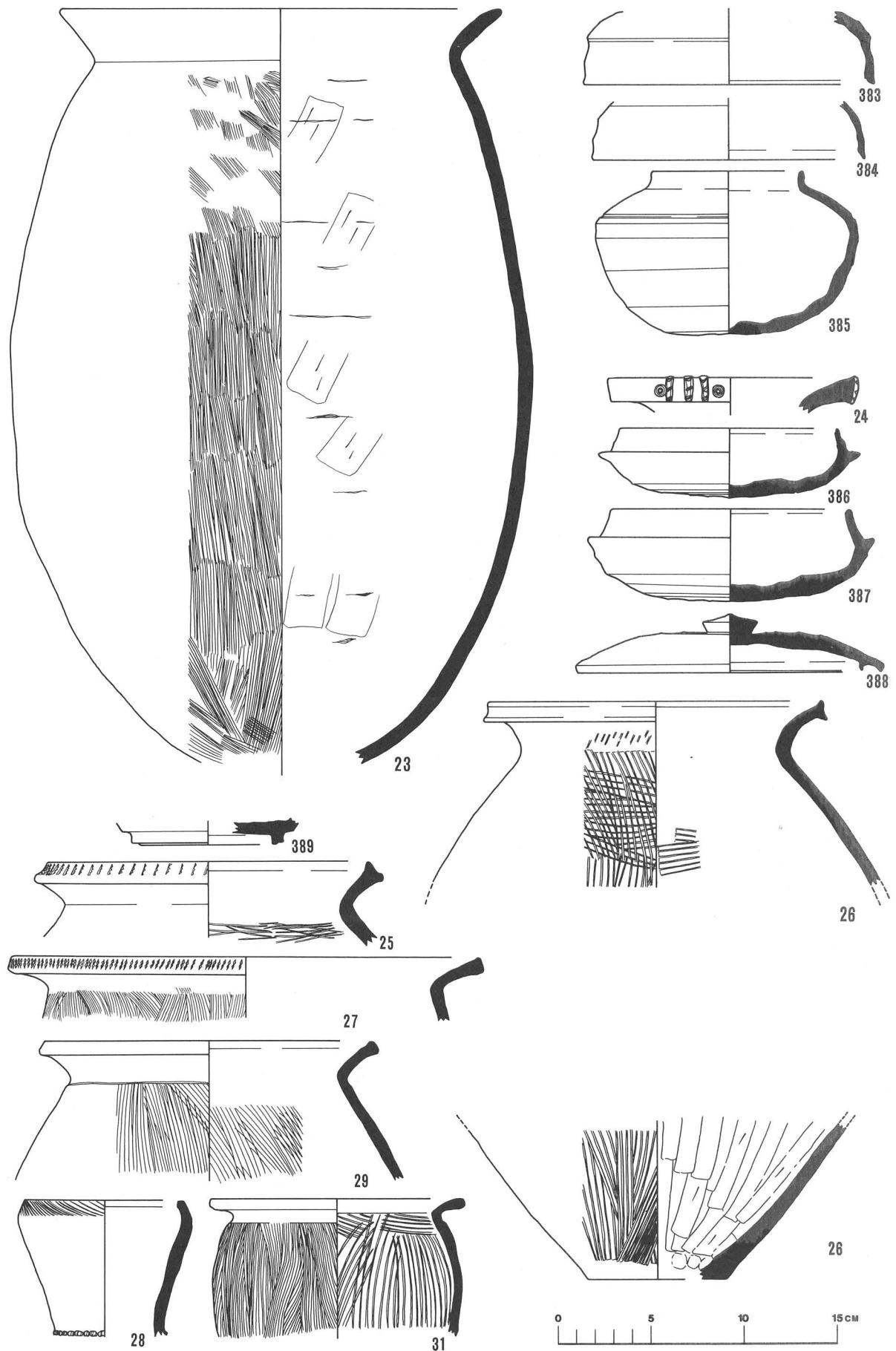


SK1 (9・10) · SK101 (11) · SK102 (363) · SK108 (12) · SK109 (364~375) 出土遺物



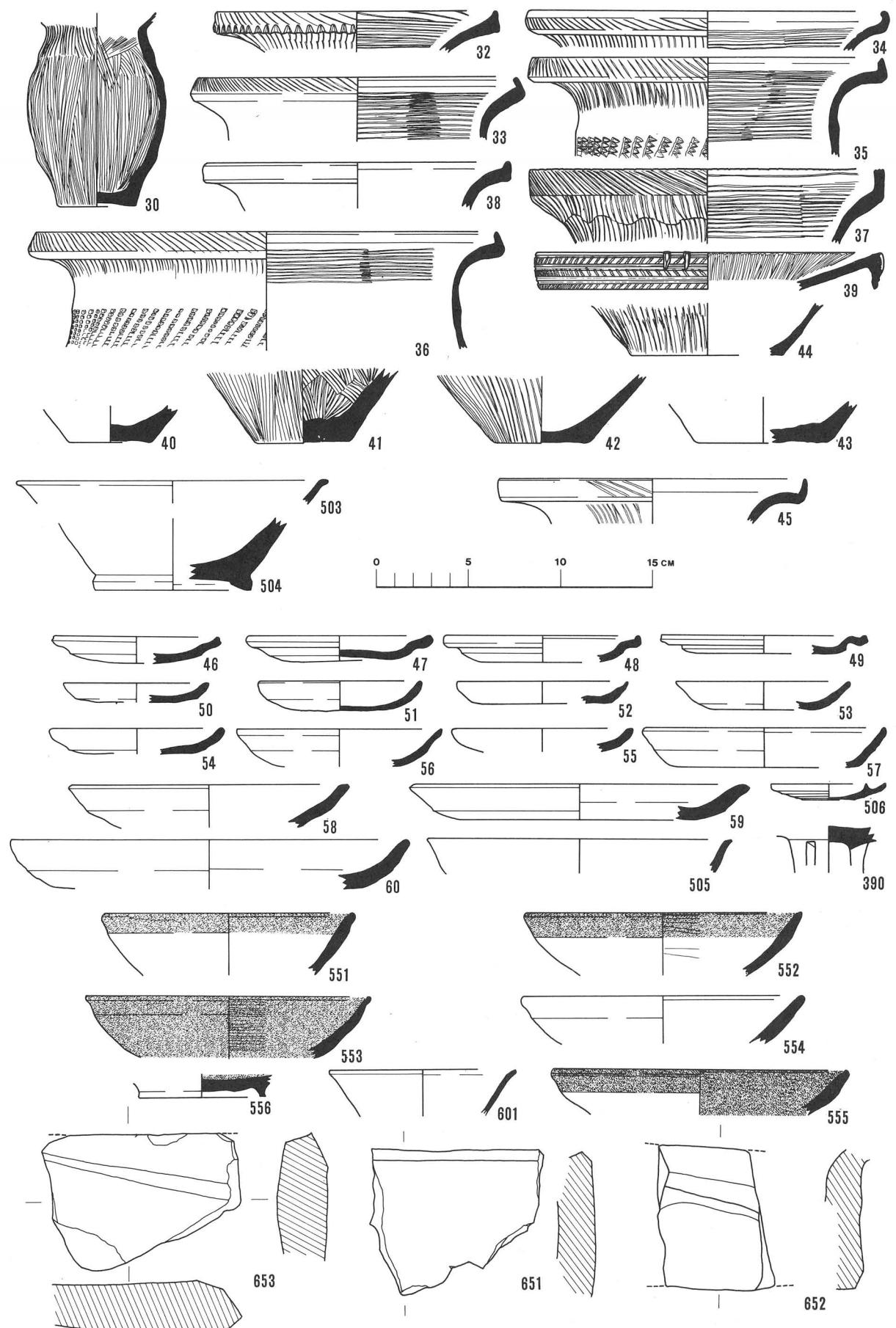
S K 109 (13・14) · S K 112 (15) · S K 113 (16) · S K 116 (17) · S K 125 (379) · S K 126 (380) ·  
S K 128 (381・382・22) · S D 1 (18~20・376・377・501・502) · S D 12 (21・378) 出土遺物

図版六一 遺物実測図

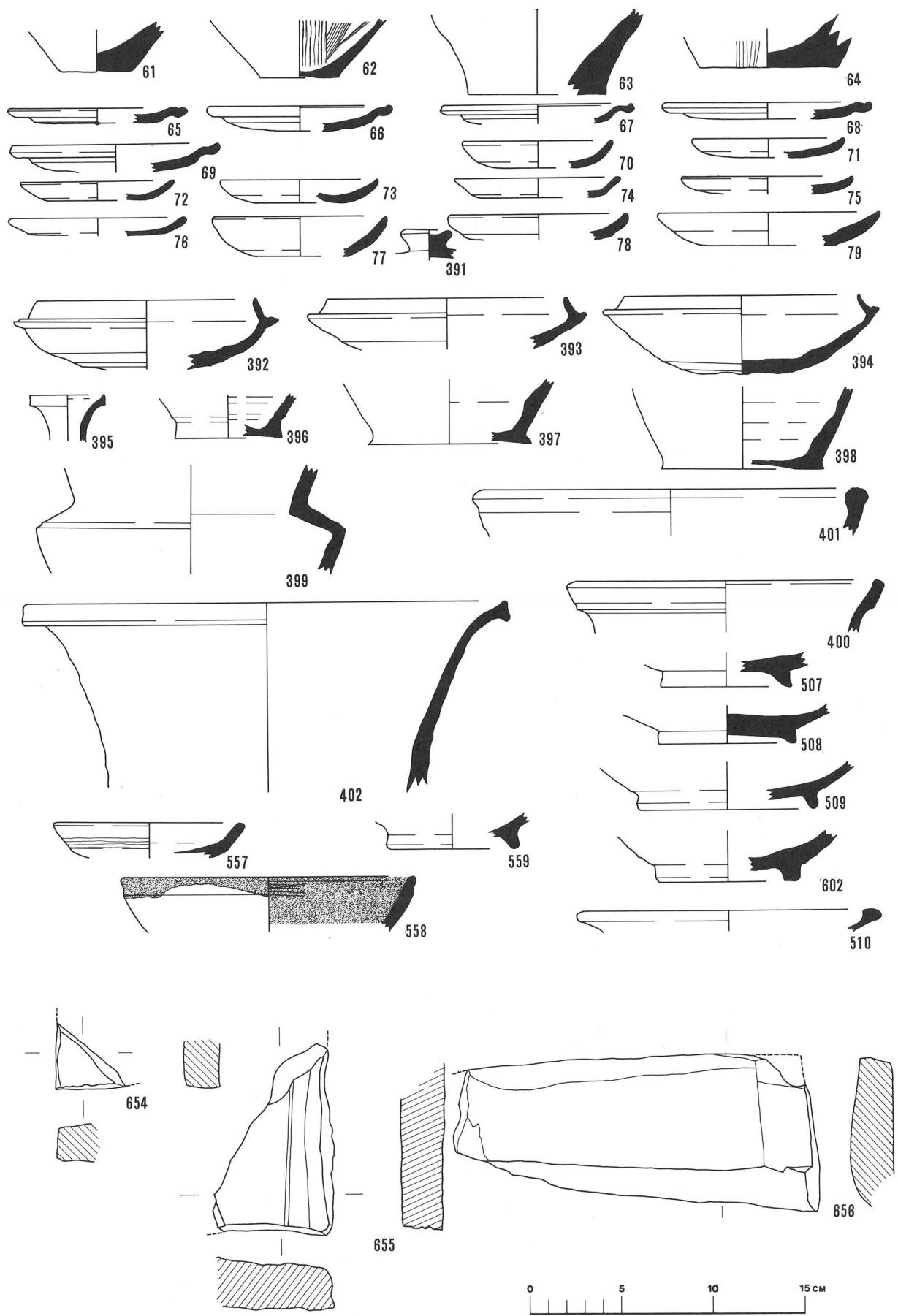


S K128 (23) · S K129 (24) · S D2 (383~385) · S B2 (389) · S K130 (25~29 · 31) · S D4 (386~388) 出土遺物

図版六二 遺物実測図

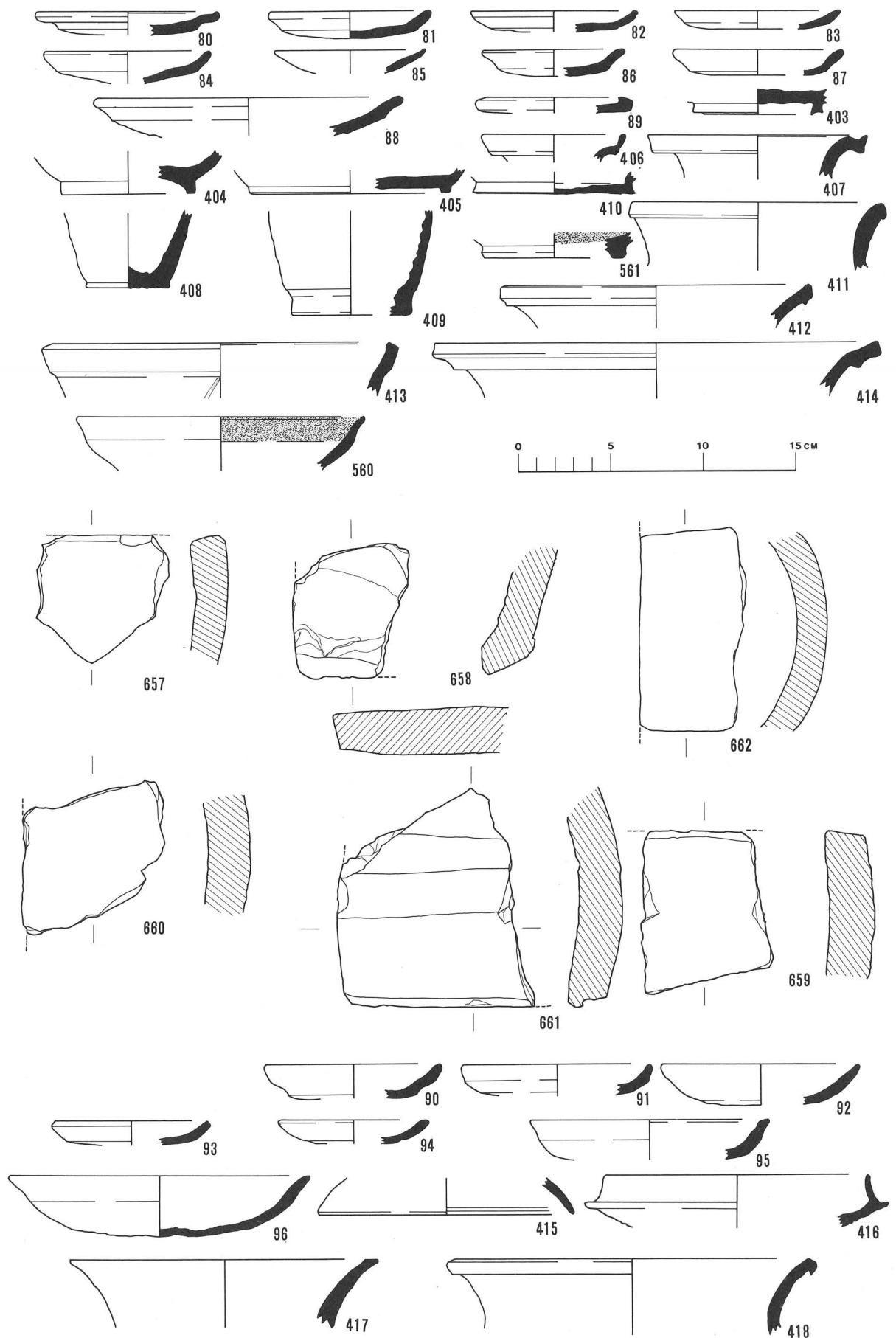


S K 130 (30・32~44)・S D 6 (45~60・390・503~506・551~555・556・601・651~653) 出土遺物

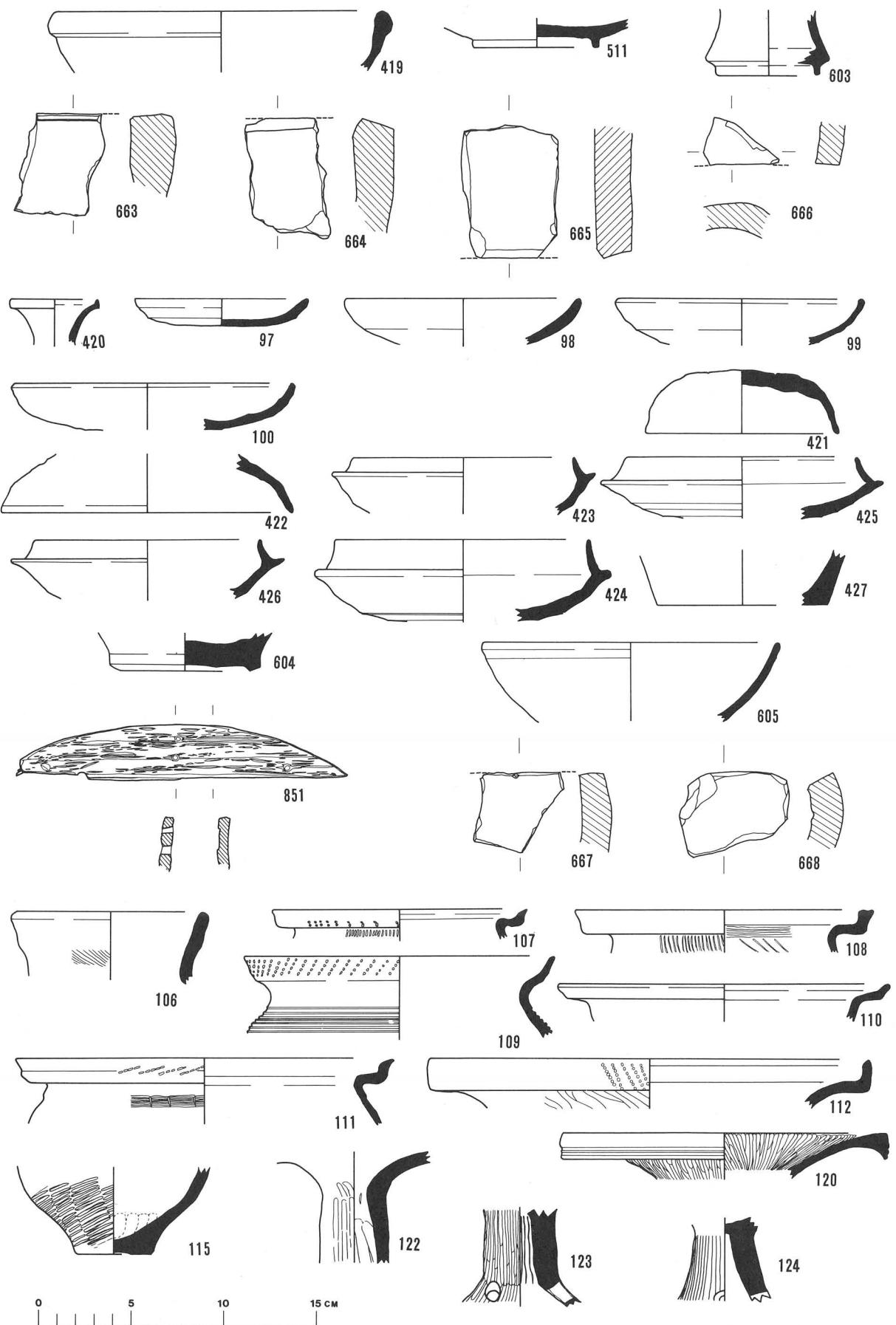


S D6 出土遺物

図版六四 遺物実測

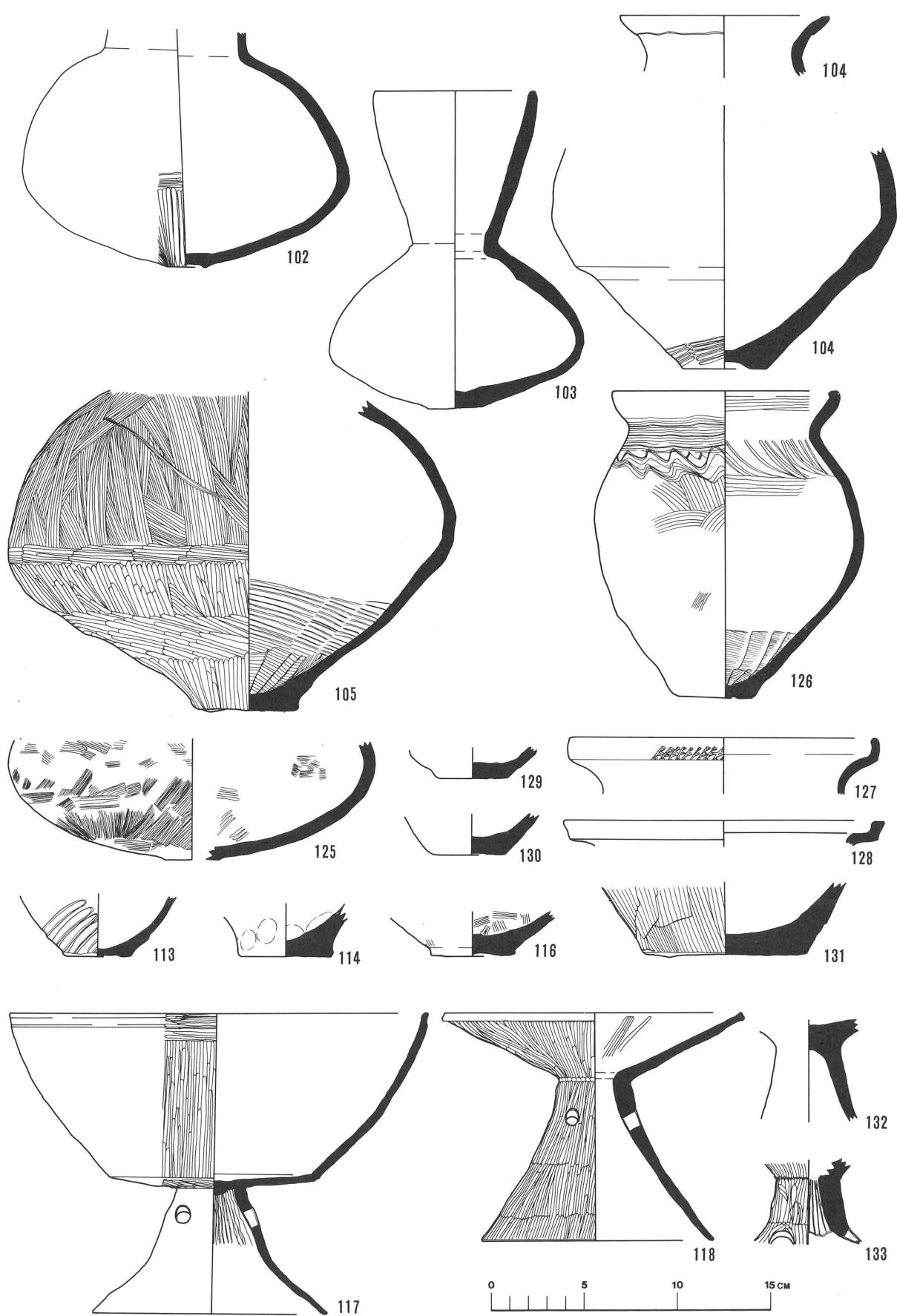


S D6 (80~89, 403~414, 560, 657~662) · S D7 (90~97, 415~418) 出土遺物

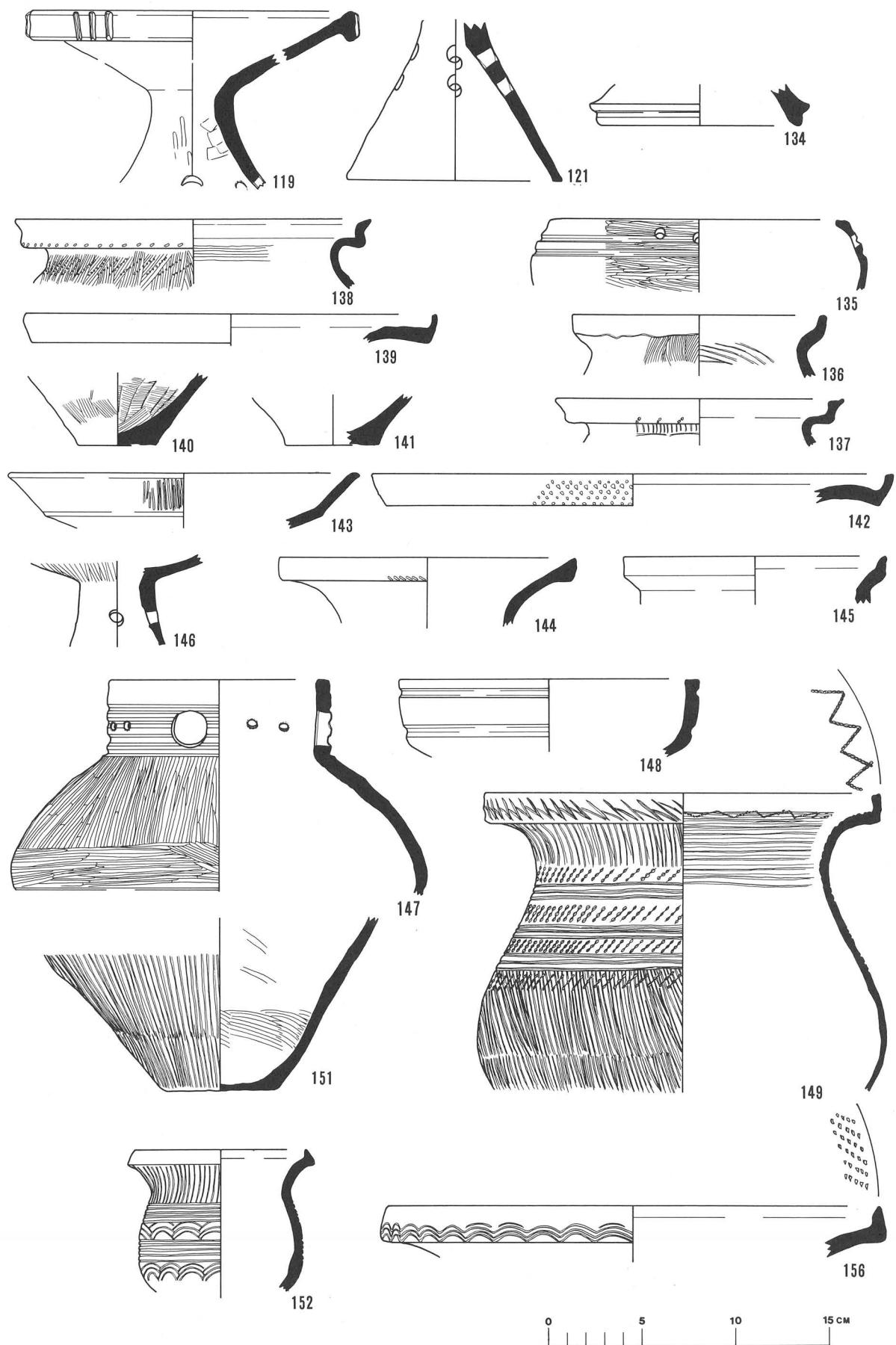


S D 7 (97・(419・511・603・663~666)・S D 15 (420・815)・S D 21 (98~100・421~427・  
604・605・667・668)・S B 3 (106~112・115・120・122~124) 出土遺物

図版六六  
遺物実測図

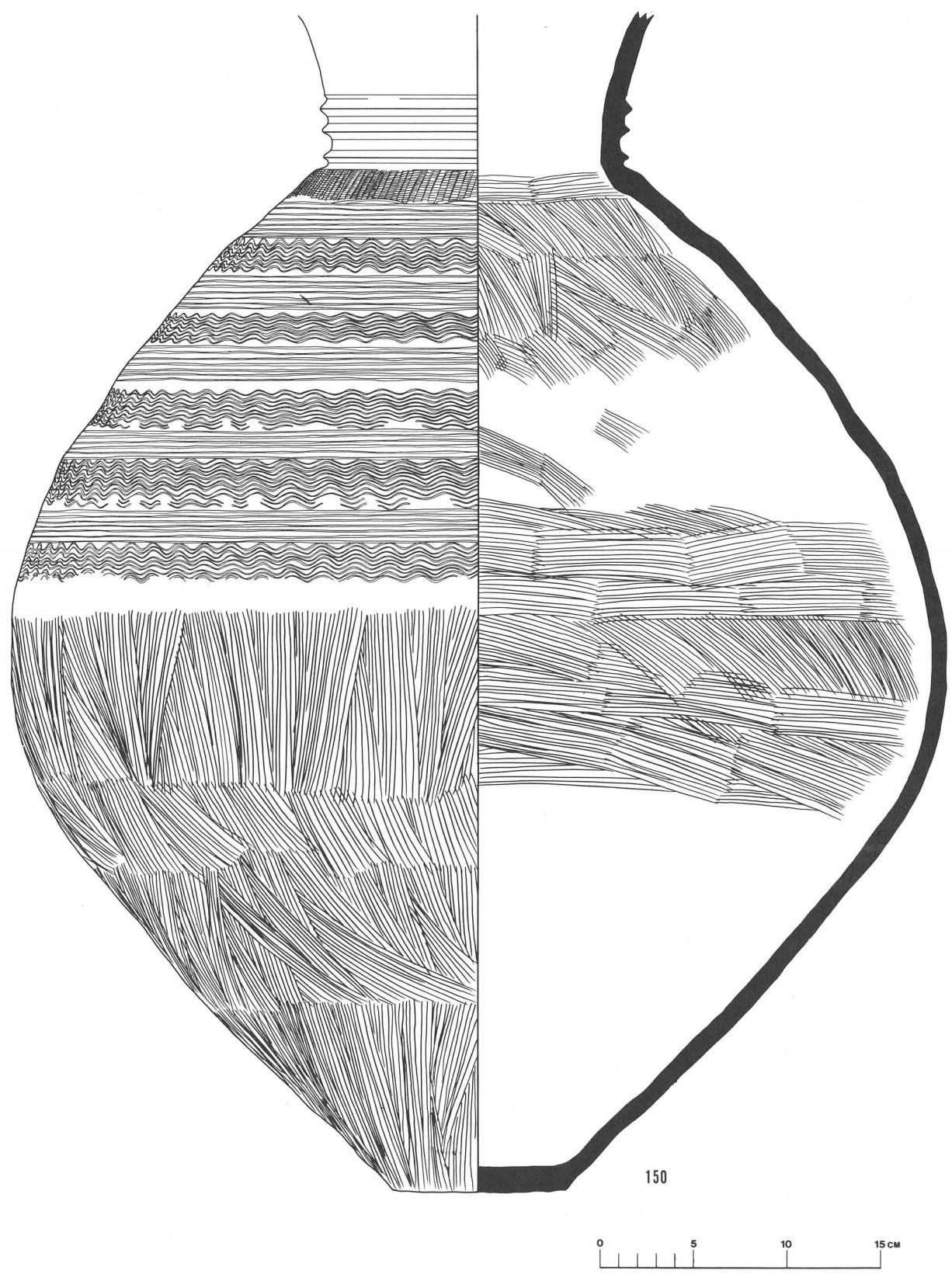


S B4出土遺物



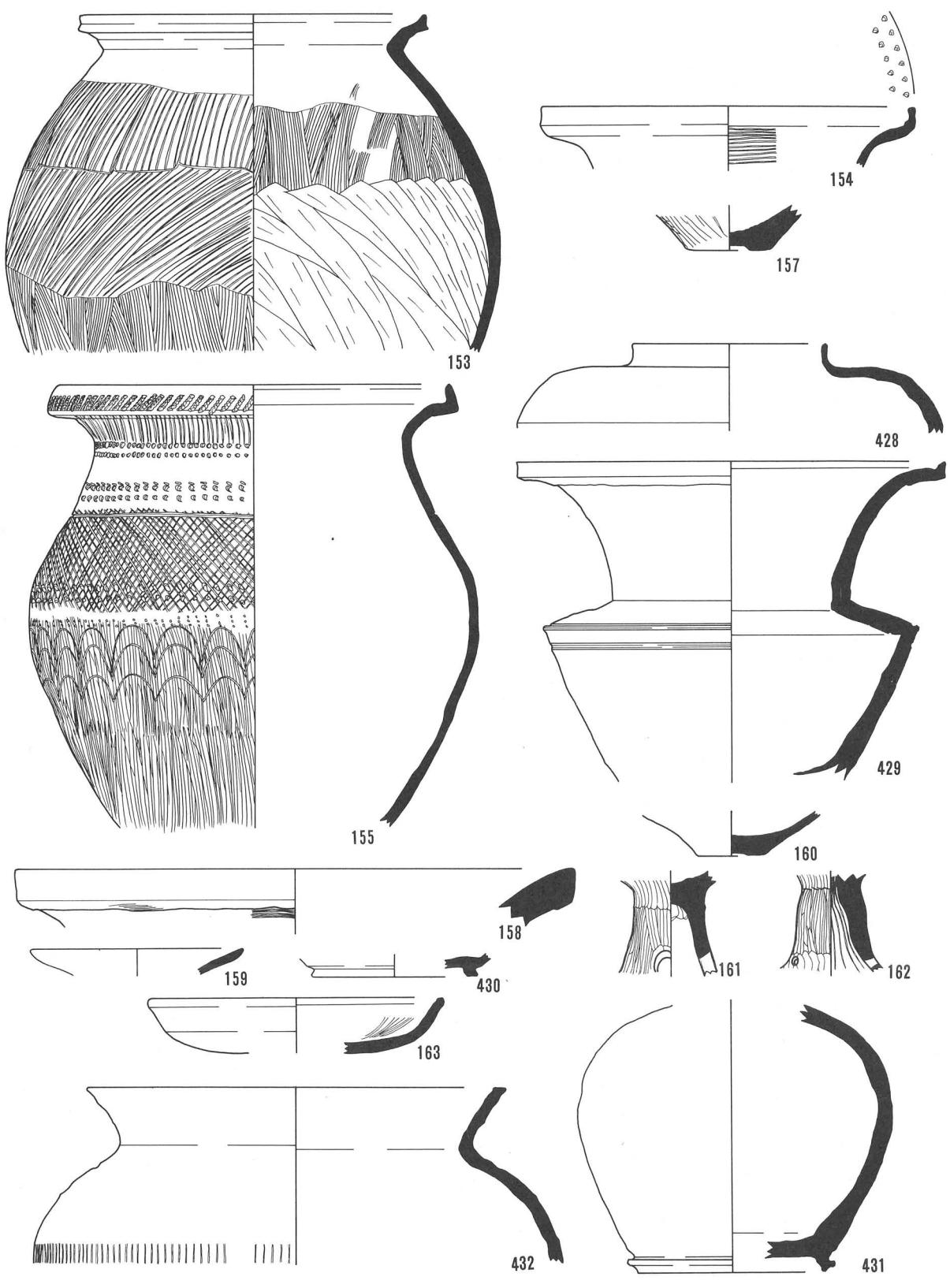
S B4 (119・121・134) · S B5 (135~141) · S B6 (142・143) ·  
S B7 (144~146) · S B8 (147~151) · S B9 (152・156) 出土遺物

図版六八 遺物実測図



S B8出土遺物

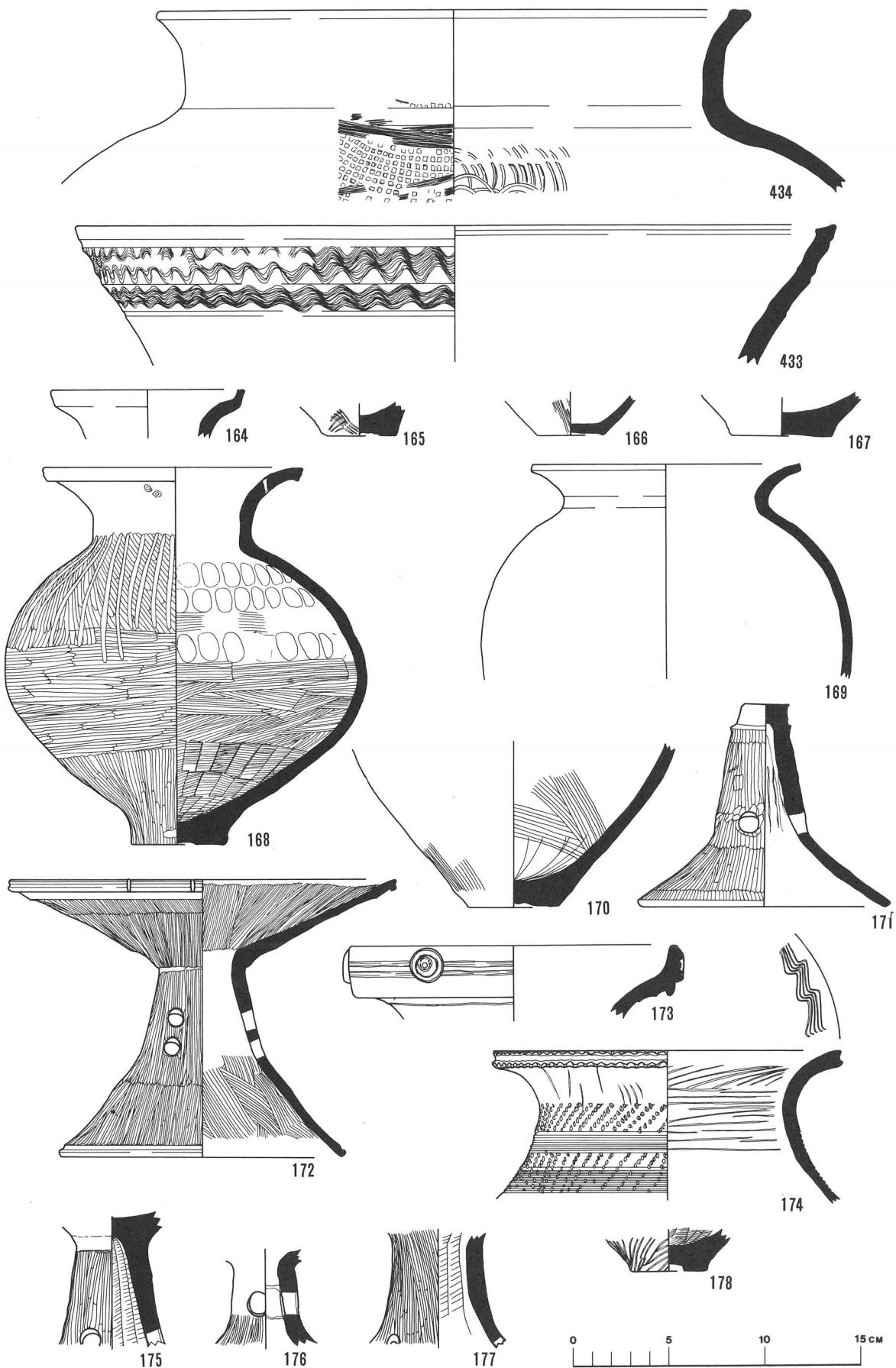
図版六九 遺物実測図



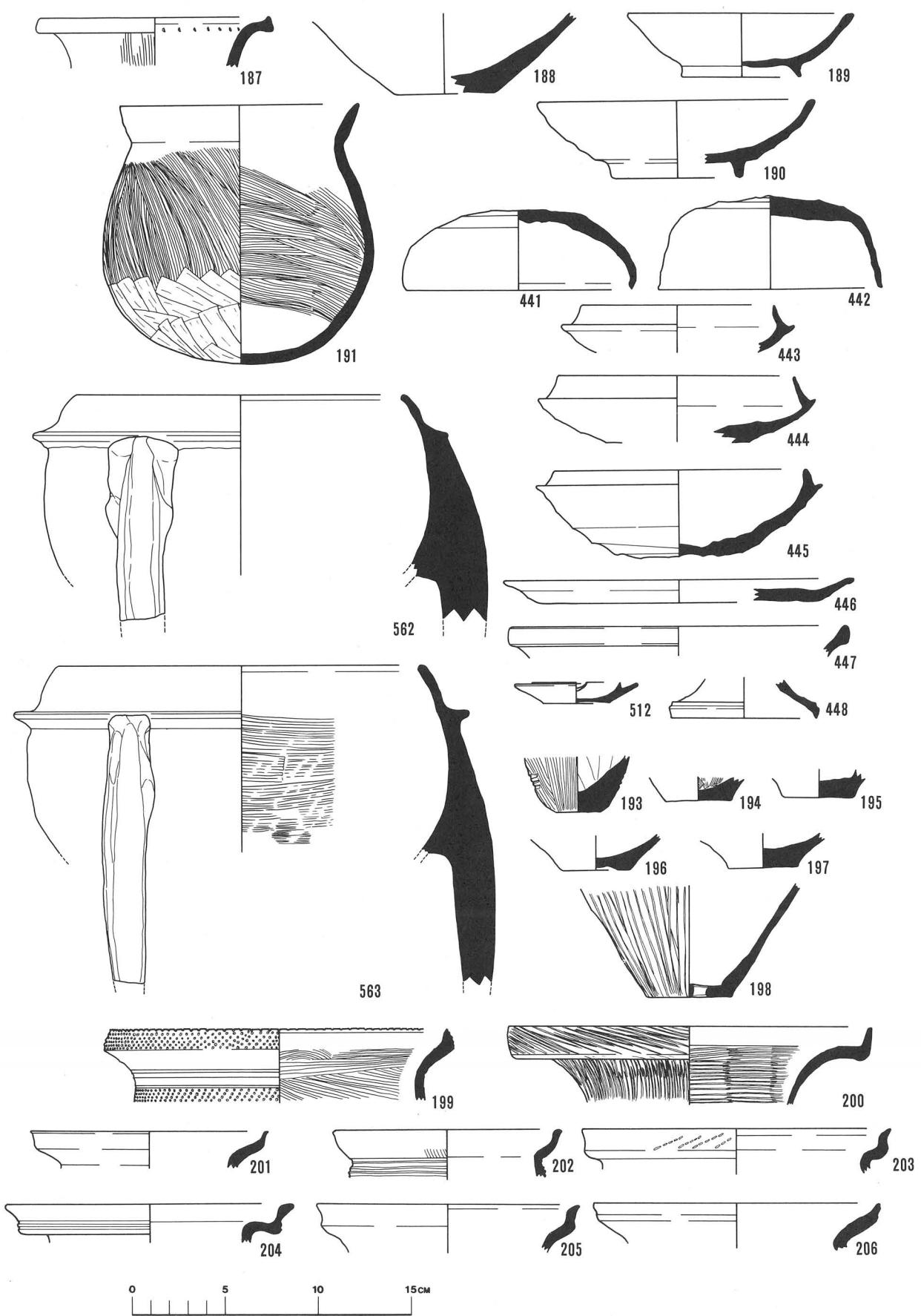
0 5 10 15 CM

S B9 (153~155) · S B107 (157) · S K143 (158·428·429)  
S K144 (159·430) · S K145 (161~163·431·432) 出土遺物

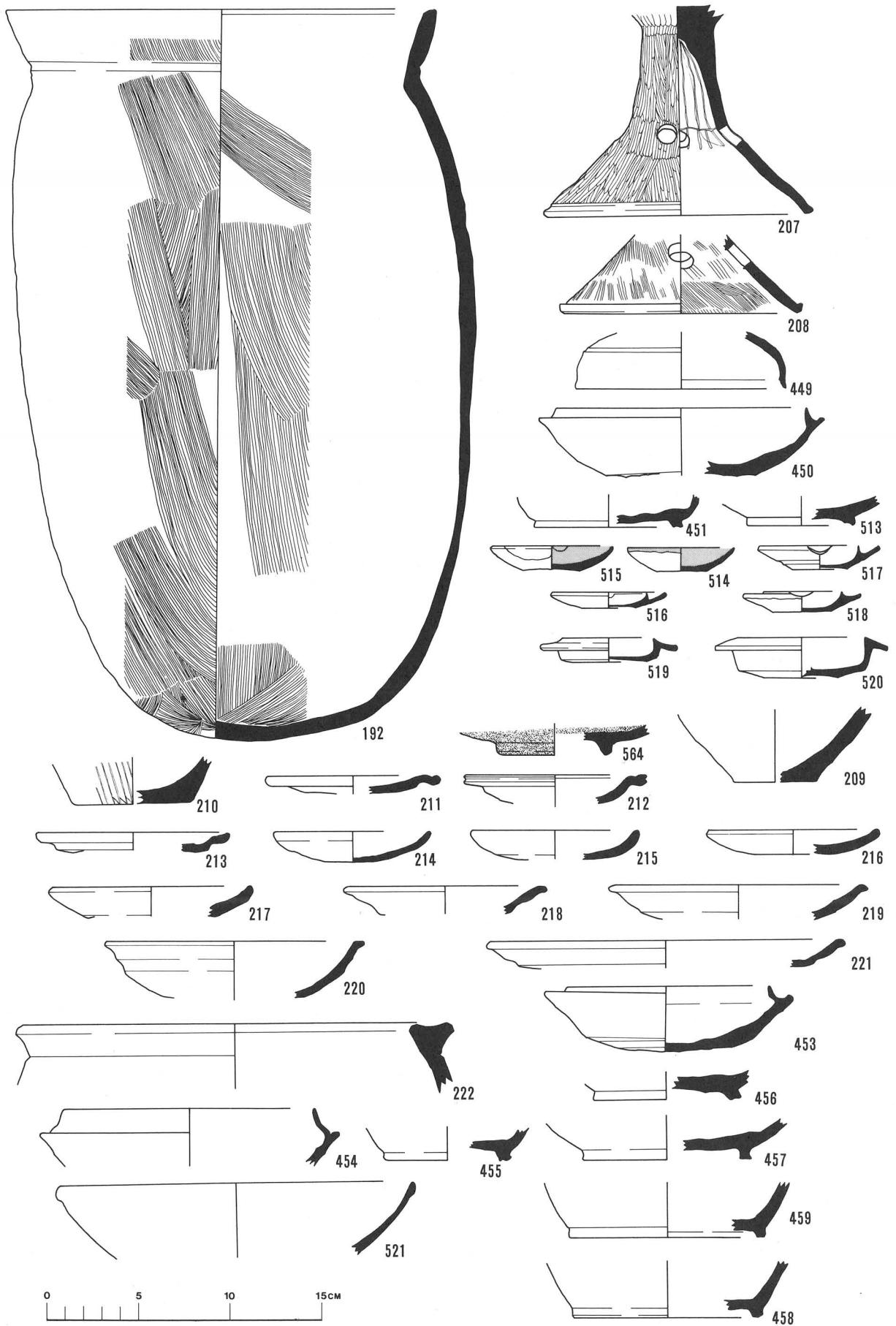
図版七十 遺物実測図



S K 145 (433・434) • S K 146 (164～167) • S K 157 (168～172) • S K 160 (173～177) • S K 161 (178) 出土遺物

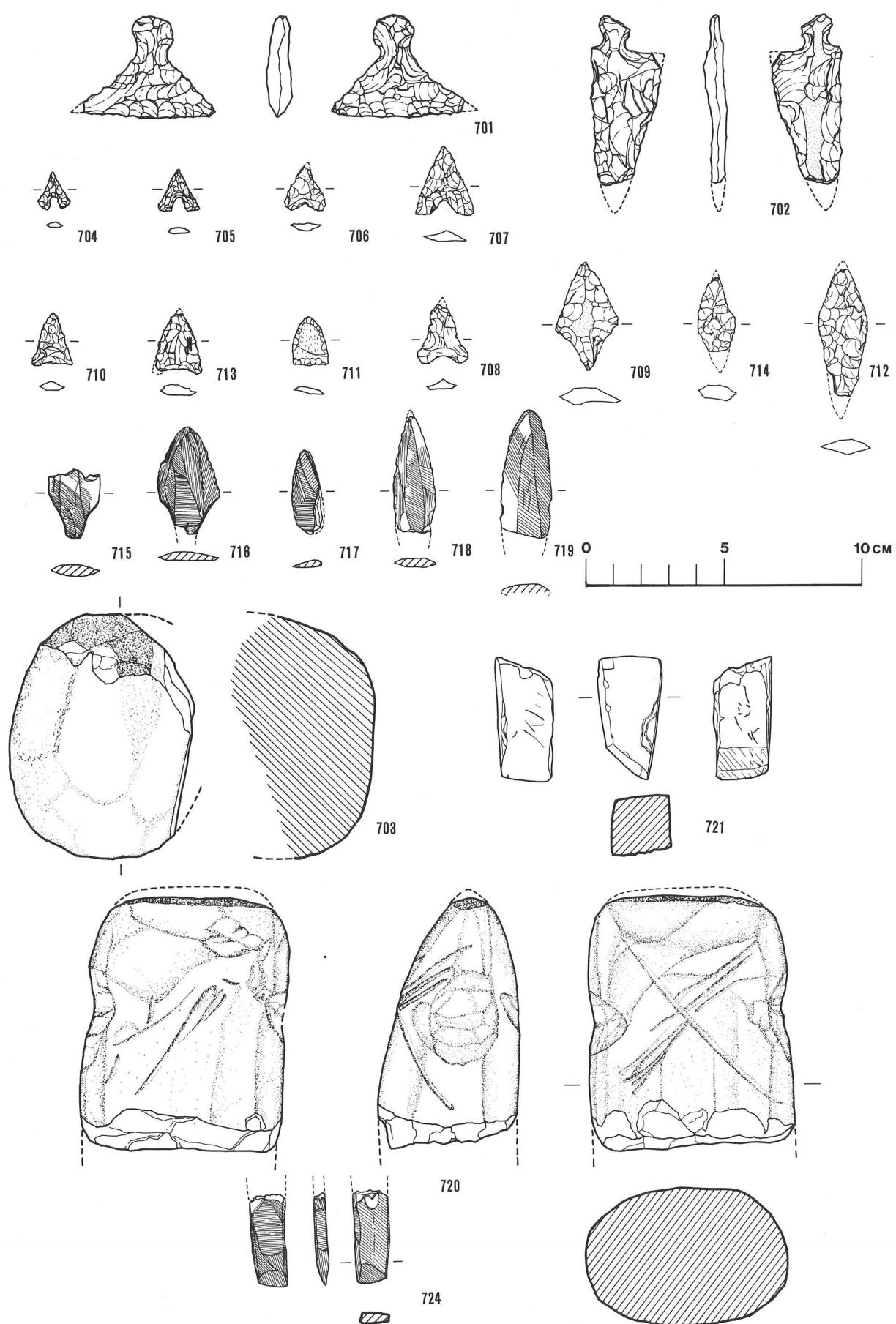


包含層出土遺物



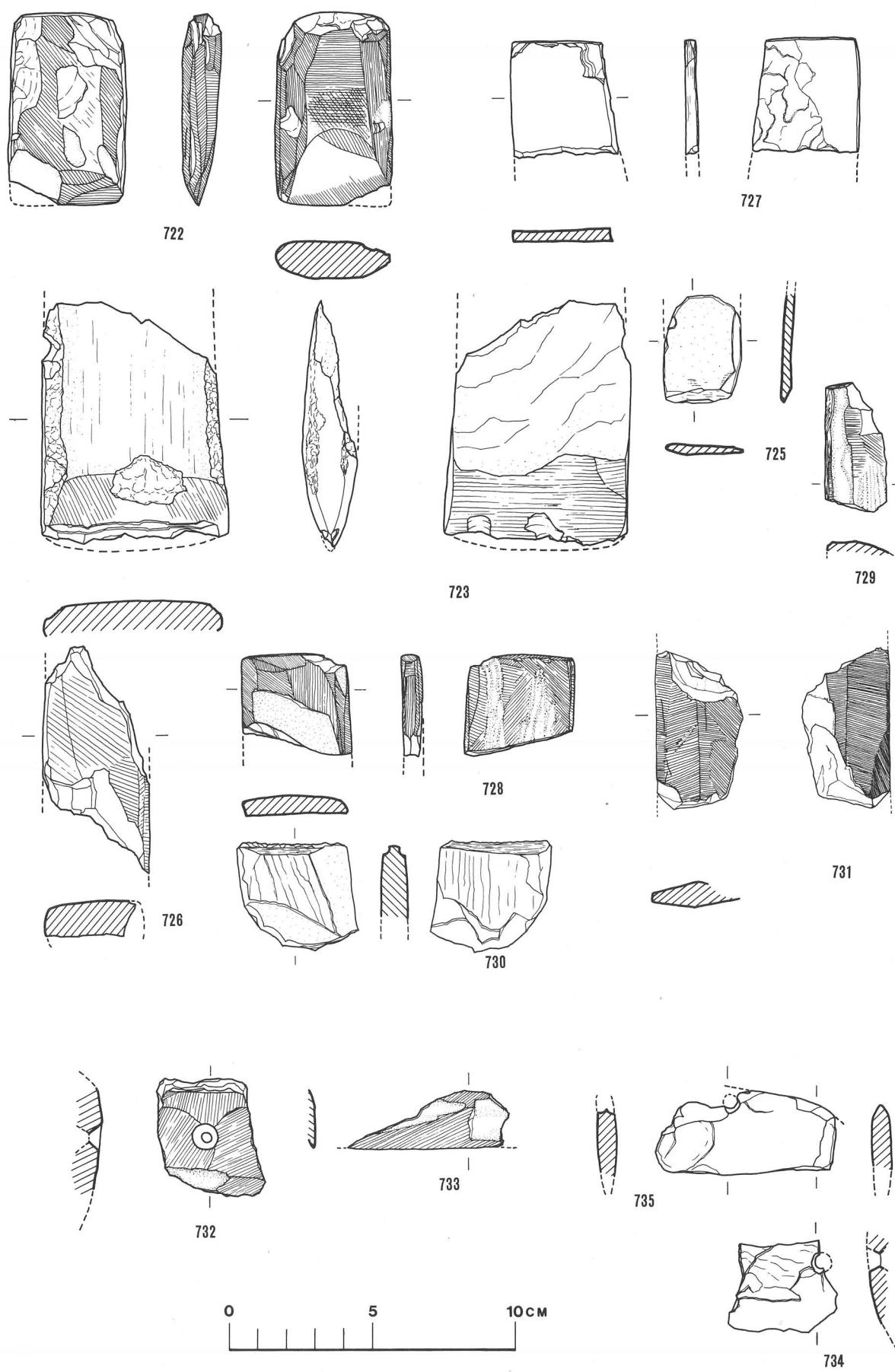
包含層出土遺物

図版七三 遺物実測図

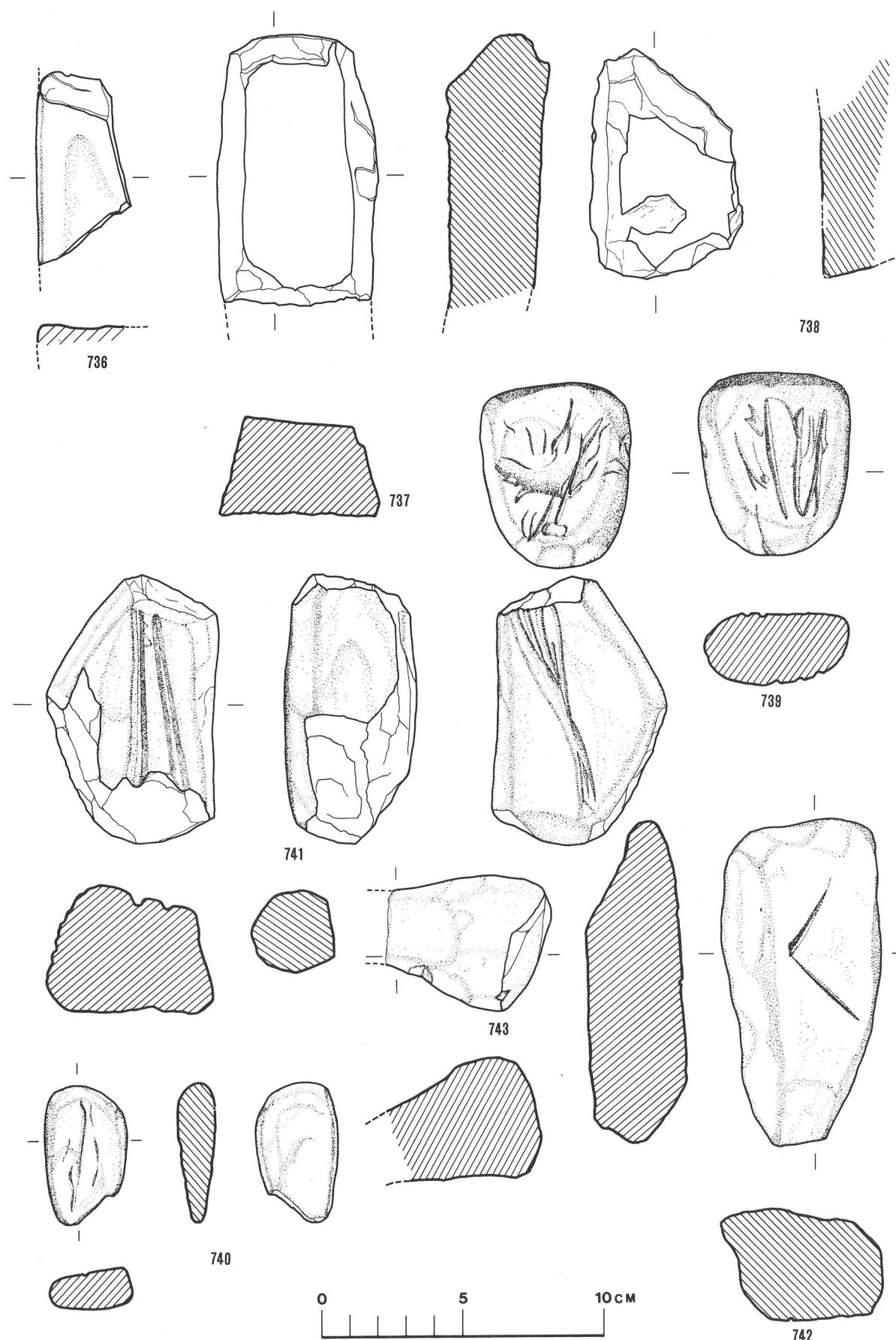


石器（石匙・石鎌・叩石・石斧）

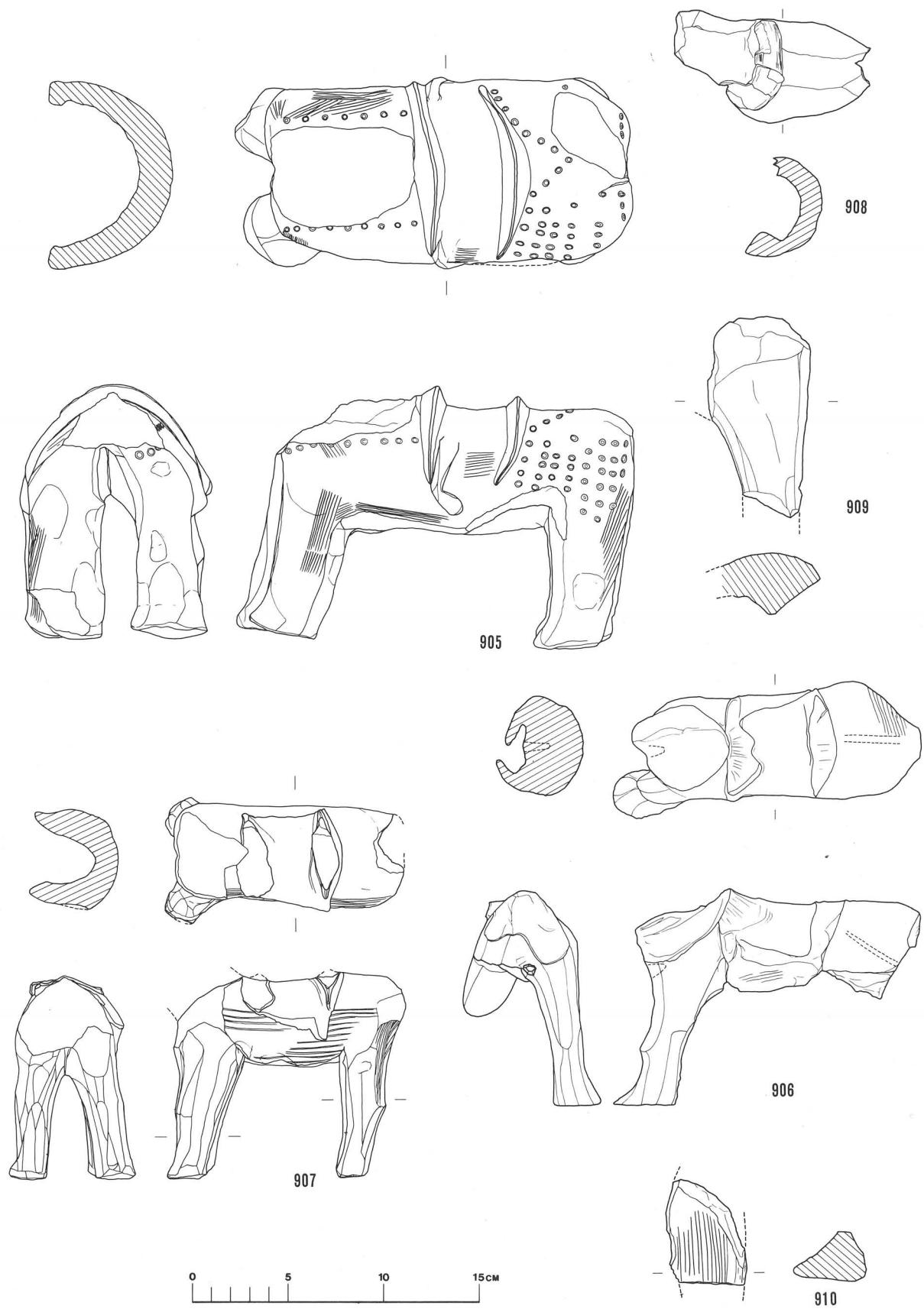
図版七四 遺物実測図



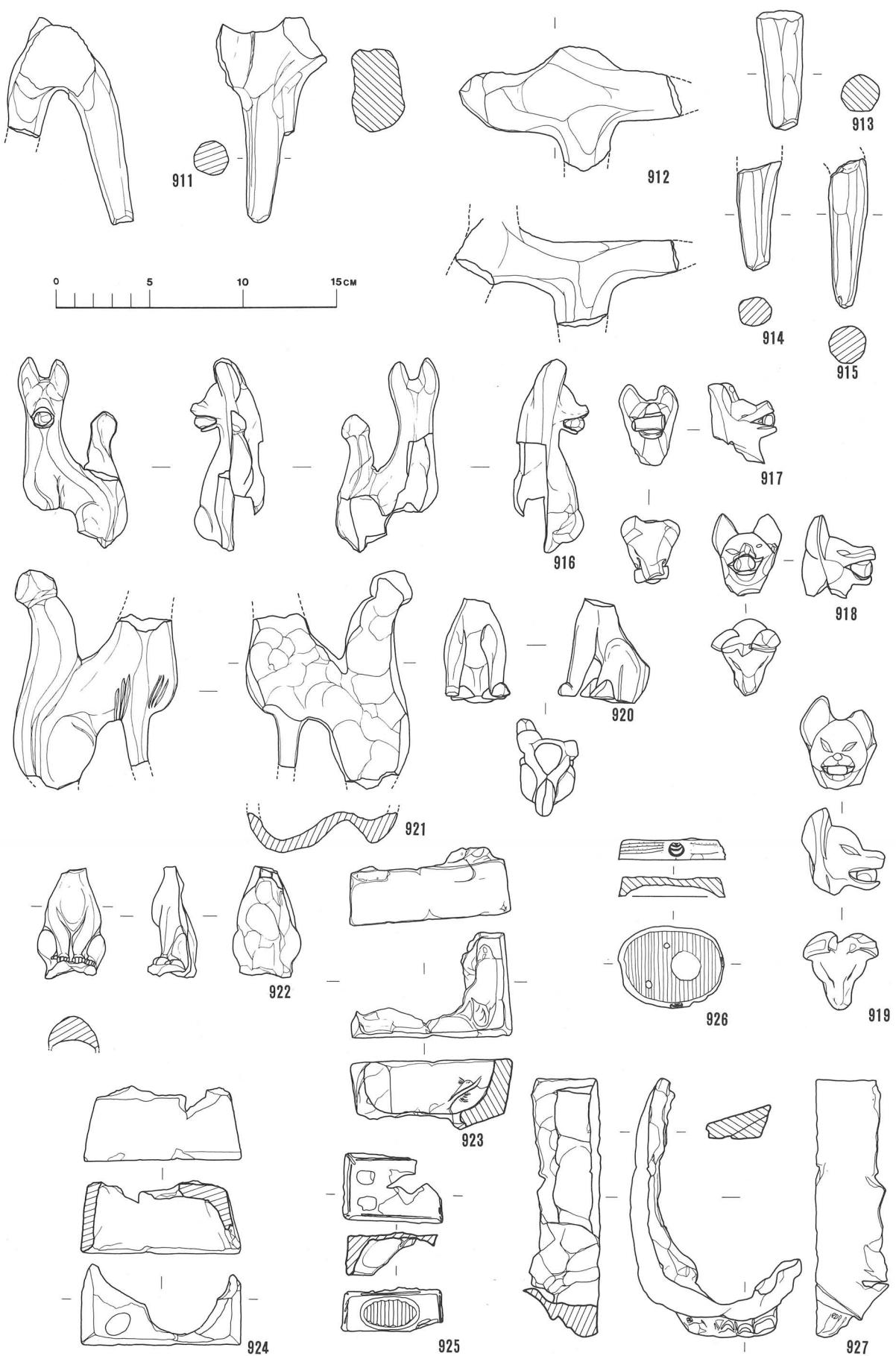
石器（石斧・石剣・石庖丁）



石器（砥石）



図版七七・遺物実測図



土馬・伏見人形

昭和58年3月

大伴遺跡発掘調査報告

編集・発行

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印 刷

富士出版印刷株式会社

3/10